（大町市埋蔵文化財調査報告書第16集）

長野県大町市埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

一　津

――― 内陸における縄文時代玉作り遺跡 ―――

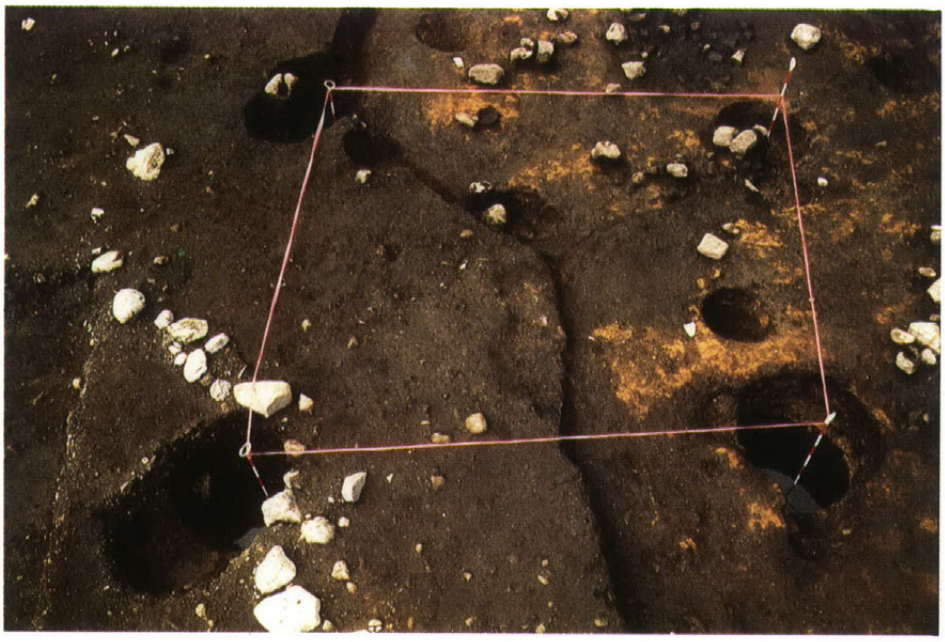
1990

大町市教育委員会

一津遺跡周辺航空写真
（1978 年撮影）

A地区Ⅰ区配石墓 2

A地区Ⅱ区石棺墓・配石



A地区方形柱列

A地区配石墓群配石

A地区Ⅱ区柱根

A地区出土ヒスイ（硬玉）剥片、原石

A地区出土ヒスイ（硬玉）原石

A地区出土原産地において打ち割り採集されたと思われるヒスイ（硬玉）原石

ヒスイ（硬玉）玉製品・未製品

ヒスイ（硬玉）海浜原石

ハンマー、上・下中・ヒスイ（硬玉）、下右左・石英

滑石、軟玉製装飾品（上から３段と４段右から１番目と３番目はＡ地区、他はＢ地区）
（最下段中央は岩偶状装飾品）

A地区出土蛇紋岩・軟玉製磨製石斧　上・小型、中・中型、下・大型

A地区出土無茎石鏃

A地区出土有茎石鏃

A地区上層出土土偶

A地区上～中層出土土偶

A地区出土耳飾

タール状の着柄塗料の残る石鏃

黒ウルシ塗りの石棒

赤色塗彩の土器

破損部分を樹脂（ウルシ？）で補修した土器

（大町市埋蔵文化財調査報告書第16集）

長野県大町市埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

一　津

――― 内陸における縄文時代玉作り遺跡 ―――

1990

大町市教育委員会

序

今回ここに報告する一津遺跡の発掘調査は、平海ノ口の農村基盤総合整備事業に先立って、昭和62・63年二年間の春～夏にかけておこなわれたものであります。当地区の考古学的価値を理解される方々の多大なご尽力によって開始され、ここに報告書をまとめあげることができました。

この調査は短期間、小範囲ではありましたが、全国的に見ても歴史的に極めて意義深い調査結果を得ることができました。そのひとつが、縄文時代の玉作り遺跡であったことで、今までは日本海側の糸魚川周辺でしか見つかっていなかったこの様な遺跡が、内陸のこの地ではじめて発見された意義は多大な成果であります。そして同時に私達大町市の歴史に貴重なる1ページを加えることができたといえます。

調査に関しては、この仕事に直接あたってくださった調査団長や先生方、さらに熱心に作業に身を投じてくださった作業員のみなさんの多大な御尽力によって当初の目的を達することができました。

この調査に当たり、調査団員の方々の、作業員のみなさん、地主及び地元関係各位の多大な御尽力によって、このような成果を得られたことに重ねて感謝を申しあげ、ここに深甚なる敬意を表する次第であります。

平成2年3月

大町市教育委員会
教育長　矢口　格

例　　言

1．本書は昭和62・63、平成1年度に大町市土地改良区理事長と大町市教育委員会教育長との契約に基づいて行なわれた、農村基盤総合整備事業（海ノ口地区）に伴う、緊急発掘調査「一津遺跡」の報告書（概報）である。

2．調査にあたっては、大町市教育委員会が組織した大町市埋蔵文化財調査団により実施された。

3．調査結果については、基本的事項の統一はできる限り図ったが、表現方法等に多少の相違のある点は了解されたい。また、時間的制約等により遺物等すべて提示できず、図版中心の報告書となってしまったことを了解されたい。

4．現場測量・整理作業と原稿執筆は関係者の協議により決定した。

・遺構測量は、荒沢進・関賢司・島田哲男・新井和男・臼井潤・横沢和子・北沢和子が行ない、百瀬長秀・市村勝巳・市川隆之・石上周蔵・野村一寿の応援を得た。トレースは、島田・横沢・北沢・牛越真由美が行った。

・遺跡の地形・地質・環境と植物等の鑑定等については、森義直が行った。

・遺物整理作業は、島田・臼井・清水隆寿・横沢・北沢・牛越・宮野順子・大和芳子・棟友美咲・荒井せつ子・宮田京子・坪井薫が行った。遺物実測は、島田・清水・牛越が行ない、拓本は島田・北沢が行った。トレースは、島田・清水・横沢・北沢・牛越が行った。

・遺物（土器）の晩期後半の土器の整理・実測のほとんどについては、国立民俗博物館・設楽博巳氏の協力で、設楽氏にそのほとんどを行っていただき、玉稿も寄稿していただいた（第Ⅲ章3節）。

・骨類については、信州大学医学部第2解剖学教室の西沢寿晃氏に鑑定していただき、玉稿を寄稿していただいた（第Ⅲ章4節）。

・原稿執筆については、第Ⅰ章1～3節までは事務局で、第Ⅱ章は森が、第Ⅳ章は篠崎が、この他の項目については島田が執筆した。

・遺構写真撮影は島田が主に、臼井が一部行ない、遺物写真撮影は臼井が主に、島田が一部担当した。

6．方位は都市計画図（1：2,500）から求めた座標北を使用し、標高は、一等水準点（766.52m）から移設した標高を使用した。

7．本書の編集は、全員協議のもと事務局で行ない、篠崎健一郎が総括した。

8．本書関係の実測図・記録写真・遺物等は大町教育委員会が保管している。なお、関係資料については、海ノ口一津遺跡A地区、B地区を略して、A地区は「ＵＩＡ」・B地区は「ＵＩＢ」と注記した。

本 文 目 次

巻頭図版1～11
序
例　言
第Ⅰ章　調査の経過 …… 1
第1節　調査の経過 …… 1
1．調査に至るまで …… 1
2．調査計画の変更とその後の経過 …… 1
第2節　調査体制 …… 2
1．調査体制 …… 2
2．調査協力者 …… 3
第3節　調査日誌 …… 4
第4節　調査方法 …… 8
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境 …… 13
1．地形及び地質 …… 13
2．当時の環境 …… 13
第Ⅲ章　遺構と遺物 …… 17
第1節　遺　構 …… 17
1．遺跡の時代別土層 …… 17
2．住居跡 …… 17
3．方形柱列 …… 17
4．石棺墓・配石墓 …… 17
5．埋　甕 …… 18
6．配　石 …… 18
7．柱　根 …… 18
8．木の根 …… 18
9．焼いた（焼けた）貼床 …… 18
第2節　遺　物 …… 72
1．土　器 …… 72
2．石器・土製品・石製品 …… 73
第3節　上層の土器群について（国立歴史民俗博物館・設楽博巳） …… 111
第4節　一津遺跡出土の骨類について（信州大学医学部第2解剖学教室　西沢寿晃） …… 117
第Ⅳ章　結　語 …… 119
写真1～40

図　目　次

図1　一津遺跡付近ほ場整備事業施行計画図（1：500）…… 9

図2　一津遺跡発掘区割図（1：2,500）…… 11

図3　A地区グリット配置図（1：400）…… 10

図4　A地区　土層柱状図 …… 14

図5　A・B地区土層柱状図 …… 15

図6　木崎湖周辺の遺跡（1：20,000）…… 16

図7　A地区　1号住居跡（実測図・遺物出土状況図―1：60・炉―1：30）
（柱穴内数字は　床面よりの深さ）…… 19

図8　A地区2・3・4号住居跡（1：60）2号居跡炉（1：30）
（柱穴内数字は床面よりの深さ）…… 20

図9　A地区　5・6・7号住居跡（1：60）（柱穴内数字は床面よりの深さ）…… 21

図10　A地区　7号住居跡炉（1：30）8・9号住居跡（1：60）…… 22

図11　10－12号住居跡（1：60）10・11号住居装炉（1：30）…… 23

図12　11号住居跡埋甕（1：30）12号住居跡炉（1：30）10・11号住居跡遺物出土状況（1：60）
（柱穴内数字は床面よりの深さ）…… 24

図13　A地区中～下層方形柱列（土坑2～5）柱痕（土坑6～8）（1：60）…… 25

図14　A地区Ⅰ区中央東側項層配石・集石全体図（1：60）…… 27

図15　A地区Ⅰ区中央東側上～中層配石・集石全体図（1：60）…… 29

図16　A地区Ⅰ区北側上～中層配石・集石全体図（1：60）…… 31

図17　A地区Ⅱ区配石・集石全体図（1：60）…… 33

図18　A地区Ⅰ区中央西側上～中層～中層配石・集石全体図（1：60）…… 26

図19　A地区Ⅰ区中央上～中層下部～中層配石全体図（1：60）…… 35

図20　A地区Ⅰ区南側中～中下層配石・集石全体図（1：60）…… 35

図21　A地区Ⅰ区南側中～下層配石・集石実測図（1：60）…… 37

図22　A地区埋甕(1)（1：30）…… 38

図23　A地区埋甕(2)（1：30）…… 39

図24　A地区石棺墓1・6・17、配石6（1：40）…… 40

図25　A地区配石墓2・4・15、配石9（1：40）…… 41

図26　A地区配石墓3、配石1・3・5（1：40）…… 42

図27　A地区上層配石墓5～14（1：60）（上は上部配石面・下は下部土壙）
（土壙内数字は配石下部よりの深さ）…… 43

図28　A地区Ⅰ区　K・L～17・18上～中層下部～中層、円形配石（1：40）…… 44

図29　B地区Ⅳ区101号住居跡実測図（上）炭化物・遺物出土状況（下）（1：60）…… 45

図30　B地区Ⅳ区102号住居跡（1：60）（番号は遺物番号）…… 46
図31　B地区Ⅳ区103号住居跡（1：60）…… 47
図32　B地区Ⅳ区104号住居跡（1：60）（番号は遺物番号）…… 48
図33　B地区Ⅳ区105-107号住居跡（1：60）（上）105号住居跡カマド（1：30）（下）…… 49
図34　B地区Ⅳ区106住（1：60）B地区Ⅳ区縄文時代早期後半・前期末集石（1：80）…… 48
図35　B地区Ⅳ区土壙3（平安時代土壙）（1：30）…… 46
図36　B地区Ⅰ区礫出土状況（1：80）…… 51
図37　B地区Ⅰ区縄文時代早期（押型文期）集石（1：30）…… 52
図38　B地区Ⅱ区土坑1、土坑2（1：40）…… 52
図39　B地区Ⅱ区全体図（1：150）…… 53
図40　B地区Ⅳ区縄文時代早期後半・前期末集石（1：80）…… 54
図41　B地区Ⅳ区縄文時代早期（押型文期）焼土（1：60）…… 54
図42　B地区Ⅳ区ロームマウンド（1：60）…… 55
図43　A地区石鏃分布図（1：600）…… 56
図44　A地区石錐分布図（1：600）…… 57
図45　B地区石匙・スクレイパー分布図（1：600）…… 58
図46　ピエス・エスキーユ（楔形石器）分布図（1：600）…… 59
図47　A地区打製石斧分布図（1：600）…… 60
図48　A地区磨製石斧分布図（1：600）…… 61
図49　A地区磨石・凹石分布図（1：600）…… 62
図50　A地区玉製品（ヒスイ・滑石）分布図（1：600）…… 63
図51　B地区ヒスイ（硬玉）・滑石・玉未製品分布図（1：600）…… 64
図52　A地区砥石分布図（黒丸　擦　切り用砥石出土位置）（1：600）…… 65
図53　A地区玉砥石・球状土製品・ハンマー・敲打器分布図（1：600）…… 66
図54　A地区ヒスイ（硬玉）剝片原石分布図（1：600）…… 67
図55　A地区滑石剝片原石分布図（1：600）…… 68
図56　A地区磨製石斧原石剝片（蛇文岩・軟玉）分布図（1：600）…… 69
図57　A地区海浜石分布図（1：600）…… 70
図58　A地区土偶、石棒・石剣分布図（1：600）…… 71
図59　B地区出土縄文時代早期押型文期土器拓影図(1)（1：3）…… 74
図60　B地区出土縄文時代早期押型文期土器拓影図(2)（1：3）…… 75
図61　A地区縄文時代後期土器実測図（1：4）……
図62　A地区縄文時代後期後半土器実測図・晩期前半土器実測図(1)（1：4）…… 76
図63　A地区縄文時代晩期前半土器実測図(2)（4～6・1：4、7～9・1：3）
（6は埋甕8に接続していた注口土器注口部）…… 77

図64　A地区縄文時代晩期前半土器実測図(3)（1：3）赤は赤色塗彩）<大洞系土器> …… 78
図65　A地区縄文時代晩期前半土器実測図(4)（1：4）赤は赤色塗彩。黒は黒色塗彩） …… 79
図66　A地区縄文時代晩期前半土器実測図(5)（1：4）（赤は赤色塗彩） …… 80
図67　A地区縄文時代晩期前半土器実測図(6)（1：3）（赤は赤色塗彩。黒は黒色塗彩） …… 81
図68　A地区縄文時代晩期前半土器実測図(7)（1：4）（赤は赤色塗彩。黒は黒色塗彩） …… 82
図69　A地区縄文時代晩期前半土器実測図(8)（1：4）（赤は赤色塗彩。黒は黒色塗彩） …… 83
図70　A地区縄文時代晩期前半土器実測図(9)（1：3）（赤は赤色塗彩。黒は黒色塗彩） …… 84
図71　A地区縄文時代晩期前半土器実測図(10)（1：4） …… 85
図72　A地区縄文時代晩期後半土器拓影図(1)（1：3）（赤は赤色塗彩） …… 86
図73　A地区縄文時代晩期後半土器拓影図(2)（1：3） …… 87
図74　A地区縄文時代晩期後半土器実測図(1)（1：4）
（赤は赤色塗彩、黒は黒色塗彩、○は大洞系） …… 88
図75　A地区縄文時代晩期後半土器実測図(2)（1：4）
（赤は赤色塗彩、黒は黒色塗彩、○は大洞系） …… 89
図76　A地区縄文時代晩期後半土器実測図(3)（1：4）（赤は赤色塗彩、黒は黒色塗彩） …… 90
図77　A地区縄文時代晩期後半土器実測図(4)（1：4）（赤は赤色塗彩、黒は黒色塗彩） …… 91
図78　A地区縄文時代晩期後半土器実測図(5)（1：3）（赤は赤色塗彩、黒は黒色塗彩） …… 92
図79　A地区縄文時代晩期後半土器実測図(6)（1：4）（赤は赤色塗彩、黒は黒色塗彩） …… 93
図80　A地区縄文時代晩期後半土器実測図(7)（1：4）（赤は赤色塗彩、黒は黒色塗彩） …… 94
図81　A地区縄文時代晩期後半土器実測図(8)（1：4）
（赤は赤色塗彩、黒は黒色塗彩、Hは北陸系） …… 95
図82　BⅣ区平安時代土器実測図（1：4）（スクリーントーンは黒色土器、Kは灰釉陶器） …… 96
図83　B地区出土磨製石斧実測図(1)（1：2）（未製品4・21～24・その他は製品、
上層1～5・16・25・26、上～中層6～15・17～24） …… 97
図84　A地区出土磨製石斧実測図(2)（1：2）（未製品42～44・46・その他は製品、
上～中層44・45、中層27～30・32～36・43、中－下層38・39、
下層41・46、31号住、37配石墓、9土壙内、40・41・46・11住、42　住床面） …… 98
図85　A地区磨製石斧実測図（1：3） …… 99
図86　A地区擦り切り用砥石（1：2） …… 99
図87　B地区Ⅰ・Ⅱ区出土滑石、軟玉、硬玉製装飾品（1：2）
（1は岩偶垂飾、Hは硬玉、Nは軟玉を示す。1・11はⅠ区、他はⅡ区） …… 100
図88　B地区Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ区出土滑石・軟玉・硬玉製装飾品（1：2）
（44・47はⅠ区、48はⅢ区、49はⅥ区、50～52はⅣ区、他はⅡ区） …… 101
図89　A地区出土土製耳飾（1：2）（上層7、上～中層1～6、8・9・11・16～19、
21～24、26、28、中層25、27、配石墓9、10、埋甕5内20、1住12～15） …… 102

図90　A・B地区出土砥石（1：4）（A地区1～10、B地区11・12、I区上層1・7、
上～中層2～6・10、中～下層8・9、I区11、II区12）…… 103
図91　A地区出土球状土製品、スタンプ状土製品（1：2）
（10中層、1～9・11、13、14、16上～中層、12・15中層）…… 104
図92　A地区出土土製円板（1：3）（1～5・17～40上層・6～8、42～51、
53～57上～中層、9～11、52、58・59中層、12、60～62中～下層、
13・14配石墓4内、15・16配石墓5内、41埋甕7内）…… 105
図93　A地区土器片錘、土錘、石錘、石浮、石冠（1～7、18、19、1：2、8～16、17 1：3）
（1－6土器片錘、7土錘、8－11石錘、12－16石浮き、17－19石冠）
（19は磨製石斧の刃部を再利用したもの）…… 106
図94　A地区出土石棒石剣実測図(1)（1：2）…… 107
図95　A地出土、石棒石剣実測図(2)（11、18上層・1、2、5～9、12～16、19～21、
24上～中層、3、17中層、4、26、5　2区、10、10土坑内、22、14
土坑内、23、9土坑内石棺墓、25表採、27・28A地区II区）
（20～23 1：2、24～26 1：3、27、28 1：6）
（1～23 1：2、24～26 1：3、27、28 1：6）…… 108
図96　B地区IV区鉄器、土製品、砥石実測図（1：2）…… 109
図97　一津遺跡における浮線網状文の分類 …… 110

写　真　目　次

巻頭図版１　一津遺跡周辺航空写真

巻頭図版２　Ａ地区Ⅰ区配石墓２　Ａ地区Ⅱ区石棺墓・配石

巻頭図版３　Ａ地区Ⅰ区中～下層方形柱列　Ａ地区Ⅰ区上層配石墓配石
Ａ地区Ⅱ区柱根

巻頭図版４　Ａ地区出土ヒスイ（硬玉）剝片、原石　Ａ地区出土ヒスイ（硬玉）原石

巻頭図版５　Ａ地区出土原産地においては打ち割り採集されたと思われるヒスイ（硬玉）原石
ヒスイ（硬玉）玉製品・未製品

巻頭図版６　ヒスイ（硬玉）海浜原石　ハンマー、上・下中・ヒスイ（硬玉）、下右左・石英

巻頭図版７　滑石・軟玉製装飾品（上から３段と４段右から１番目と３番目はＡ地区、他はＢ地区）
（最下段中央は岩偶状装飾品）

巻頭図版８　Ａ地区出土蛇紋岩・軟玉製磨石斧、上・小型、中・中型、下・大型

巻頭図版９　Ａ地区出土無茎石鏃　Ａ地区出土有茎石鏃

巻頭図版10　Ａ地区上層出土土偶　Ａ地区上～中層出土土偶
Ａ地区出土耳飾

巻頭図版11　タール状の着柄塗料の残る石鏃　ウルシ塗りの石棒　赤色塗彩の土器　破損部分を
樹脂（ウルシ？）で補修した土器。

写真１　１．遠景　２．Ａ地区遠景　３．Ａ地区近景

写真２　１．１号住居跡検出状況　２．１号住居跡　３．１号・５号住居跡

写真３　１．１号住居跡炉　２．１号住居跡　３．２・４号住居跡検出状況　４．２号住居
跡

写真４　１～４．２号住居跡　１．炉　２．奥壁付近敷石　３・４．磨製石斧出土状況
５．４号住居跡

写真５　１．５号住居跡　２～４．５号住居跡出土遺物　２・４．砥石　３．打製石斧・
磨製石斧　５．７号住居跡炉

写真６　１．６・７号住居跡　２．７号住居跡　３．８号住居跡

写真７　１．８号住居跡南壁上の集石　２．９号住居跡炉　３．９号住居跡　４．９号住居
跡

写真８　１．10、11、12号住居跡方形柱列　２．10号住居跡　３．11、12号住居跡

写真９　１・２・３．10号住居跡　１．伏甕　２．石柱、伏甕　３．炉　４・５．11居
住居跡　４．炉　５．埋甕　６．12号住居跡炉　７．10・11号住居跡上の集石

写真10　１．14号住居跡　２．方形柱列　３・４．方形柱列の土坑　３．土坑　４．土
坑

写真11　１・２・３．埋甕１　４・５．埋甕２　６・７．埋甕３　８．埋甕４

写真12　1．埋甕4　2・3．埋甕5　4・5．埋甕6　6・7・8．埋甕7

写真13　1～8．埋甕8　1．上部配石　2．検出状況　3・4．埋設状況　4～6．注口部検出状況　8．断面

写真14　1．A地区Ⅰ地区中央東側上層集石面　2．A地区Ⅰ区上層配石墓5～14配石　3．A地区Ⅰ区上層配石墓5～14配石

写真15　1・2．A地区Ⅰ区上層配石墓5～14配石　3・4．A地区Ⅰ区上層配石墓5～14下部土壙

写真16　1～8．A地区Ⅰ区上層遺物出土状況

写真17　1・2．A地区Ⅰ区北側上～中層集石面

写真18　1．A地区Ⅰ区北側上～下層集石面　2．A地区Ⅰ区北側上～中層集石面敷石　3．A地区Ⅰ区北側上～中層集石面に残った立木の根　4．A地区Ⅰ区北側上～中層集石面遺物出土状況

写真19　1～8．A地区Ⅰ区上～中層遺物出土状況

写真20　1．A地区Ⅰ区中央北側上～中層下部～中層集石面　2．同上．円形配石　3．同上．立石復元写真

写真21　1．A地区Ⅰ区南側中～下層・下層集石面　2．同上．立石を伴なう配石　3．釣手土器が出土した集石　4・5．同上．遺物出土状況

写真22　1．A地区Ⅱ区全景　2．A地区Ⅱ区上～中層～中層集石面　3．A地区Ⅱ区上～中層～中層集石面

写真23　1．A地区Ⅱ区石棺墓16・17配石7　2．A地区Ⅱ区集石　3．A地区Ⅱ区石棒復元状況

写真24　1．A地区Ⅱ区石棺墓17　2．A地区Ⅱ区配石7　3．A地区Ⅱ区配石3　4．A地区Ⅱ区配石4　5．A地区Ⅱ区配石5　6．A地区Ⅱ区集石内石棒出土状況　7．A地区Ⅱ区集石内大磨石出土状況　8．A地区Ⅱ区柱根

写真25　1・2．A地区Ⅱ区柱根　3～5．A地区Ⅱ区遺物出土状況　3．石棒　4．玉砥石　5．石皿　6．13住甕　7．A地区Ⅰ区石棺墓1　8．A地区Ⅰ区配石墓2

写真26　1．A地区配石墓2（上～中層面）土壙部掘り下げ状況　2．A地区配石墓2配石下垂飾出土状況　3．A地区配石墓4（上～中層面）　4．配石墓4土壙部掘り下げ状況　5．A地区配石墓18（上～中層面）　6．A地区配石墓3（上～中層面）　7．A地区配石1（中～下層面）　8．A地区配石2（中～下層面）

写真27　1．地区5トレンチ（湖畔低湿地部）　2．B地区Ⅰ～Ⅲ区・Ⅵ区近景　3．B地区Ⅰ・Ⅱ・Ⅵ区近景

写真28　1．B地区Ⅰ区早期後半・中期初頭遺物検出面　2．B地区Ⅰ区早期前半（押型文期）礫出土状況　3．B地区Ⅰ区の地形

写真29　1・2　B地区Ⅱ全景　3．B地区Ⅱ区土坑1・2

写真30　1．B地区Ⅲ区全景　2．B区Ⅳ・Ⅴ区近景　3．B地区Ⅴ近景

写真31　1．B地区Ⅳ区全景　2．B地区Ⅳ区東側縄文時代早期後半・前期末礫群（集石）検出状況　3．B地区Ⅳ区縄文時代早期前半（押型文期）焼土検出状況

写真32　1．B地区Ⅳ区101号住居跡炭化物．遺物出土状況　2．B地区Ⅳ区101号住居跡　3．B地区Ⅳ区102号住居跡

写真33　1．A地区103居住居炭化物・焼土出土状況　2．B地区103居住居跡　3．B地区Ⅳ区104号住居跡

写真34　1．B地区Ⅳ区106号住居跡　2．B地区Ⅳ区105・107号住居跡　3．B地区Ⅳ区105号住居跡

写真35　A地区出土無茎石鏃

写真36　A地区出土有茎石鏃

写真37　A地区出土石錐

写真38　1．A地区出土球状土製品　2．石鏃着柄痕　3．A地区5トレンチ1区出土板状の木材　4・5　籾状圧痕　6．磨製石斧未製品

写真39　1．A地区5トレンチ1区出土クルミ核　2．A地区5トレンチ1区出土トチノキ種子　3．A地区5トレンチ1区出土種子類　1・2　クリ果実　3・4　イヌガヤ種子　5　ナラガシワ殻斗　6　ブナ殻斗

写真40　スナップ写真　1．トレンチ掘削　2．調査後の埋め込し保存　3．A地区作業風景　4．市長見学　5．現地説明会　6．B地区作業風景　7．A地区作業員記念写真　8．B地区作業員念写真

第Ⅰ章　調査の経過

第1節　経過概要

1．調査に至るまでの経過

昭和58年、大町市大字平海の口地区に、昭和59年度から農村基盤総合整備事業を施工する計画が持ち上がった。当初からこの地区には遺跡があることが知られていたため、昭和58年9月21日、長野県教育委員会・大町市農林水産課・大町市教育委員会の3者により保護協議が持たれ、工事に先立って発掘調査を実施する方針を打ち出した。

同事業は、大町市土地改良区が開発主体となり、昭和59年度から着手された。当初、発掘調査も昭和59年度から実施する予定であったが、開発側の年度別予算配分の変更により、発掘調査実施予定地区に工事が入るのが何度か延期され、発掘調査実施予定年度もその都度先送りされた。

また、昭和60年度から大町市教育委員会が実施していた市内の遺跡詳細分布調査により、当初予想した遺跡範囲がさらに広がり、発掘調査を必要とする地区が増えたこともあった。

これらの諸状況の変化に伴い、数次にわたり保護協議を持ってきたが、ようやく昭和62年度・昭和63年度の2ケ年で調査を実施することとなった。

2．調査計画の変更とその後の経過

昭和62年度に行なわれた第1次発掘調査では、縄文中期から晩期にかけての遺構・遺物が出土したが、これらは当初の予想をはるかに上回る量であった。特に遺物の量は、整理箱（60×45×15cm）150箱分にも及んだため、整理作業の難行が予想された。

このため、同年8月31日、再度保護協議をもち、下記のとおり調査計画を変更することとした。

	〔変更前〕		〔変更後〕	
作業内容	昭和62年度	発掘作業完了（第1次調査） 整理作業の一部	昭和62年度	発掘作業完了（第1次調査） 整理作業の一部
	昭和63年度	発掘作業完了（第2次調査） 整理作業完了 報告書刊行	昭和63年度	発掘作業完了（第2次調査） 整理作業の一部
			平成元年度	整理作業完了 報告書刊行
調査経費	昭和62年度	3,000,000 円	昭和62年度	3,000,000 円
	昭和63年度	4,000,000 円	昭和63年度	2,800,000 円
			平成元年度	2,039,000 円

第1次調査は、4月13日に始まり9月14日に終了した。この間、雨天による中止を除くと117日の発掘作業を実施している。調査面積は約1,000㎡であったが、時代区分ごとの各層累積、計算では約5,000㎡に及んだ。

また、昭和63年度の第2次調査は、5月6日に始まり、8月25日に終了した。この間、56日を費やした。2次調査は調査区が6区に分かれたが、全区の合計調査面積は約980㎡となった。

整理作業及び報告書作成作業は、発掘作業と並行して実施したほか、現場作業終了後、事務室において集中的に実施し、本報告に至った。

第２節　調査体制

１．調査体制

(1)　大町市教育委員会（文化財担当）

ア．昭和62年度

教育長　一志開平　社会教育課長　降旗　正　社会教育係長　石原　学
同係主事　新井和男　同係主事補　島田哲男　同係臨時職員　横沢和子

イ．昭和63年度

教育長　一志開平　社会教育課長　伊東四郎　社会教育係長　石原　学
同係主事　新井和男　同係主事補　島田哲男　同係嘱託職員　臼井　潤
同係臨時職員　横沢和子、北沢和子

ウ．平成元年度

教育長　矢口　格　社会教育課長　降幡　忠　文化財係長兼課長補佐　降旗正光
同係主事　新井和男、島田哲男　同係嘱託職員　臼井　潤
同係臨時職員　清水隆寿、横沢和子、北沢和子、大和芳子

(2)　大町市埋蔵文化財調査団（市教委が組織）

ア．昭和62年度

団　長　篠崎健一郎　副団長　原田　昿　調査主任　島田哲男
調査員　荒井和比古、荒沢　進、臼井　潤、関　賢司、幅　具義、森　義直
調査補助員　伊藤真治、太田哲夫、国村ゆかり

イ．昭和63年度

昭和62年度と同じ

ウ．平成元年度

調査員に清水隆寿が加わり、調査補助員から太田哲夫と国村ゆかりが抜ける。

(3)　骨類特別調査依頼者

西沢寿晃（信州大学医学部助手）

(4)　作業員（発掘作業並びに整理作業）

ア．昭和62年度

薄井志げ子、北沢和子、北沢　茂、金原隆子、坂井良子、武居陽子、中村志津代、西沢国子、西沢智恵子、降籏くに子、降籏芳人、宮野順子、横沢力門

イ．昭和63年度

薄井志げ子、北沢和子、北沢　茂、中村志津代、西沢国子、西沢智恵子、西沢百合子、降籏くに子、降籏芳人、宮野順子、横沢力門

ウ．平成元年度

北沢和子

2．調査協力者

調査にあたって、多くの方にご指導、ご協力を賜りました。以下、ご芳名を記し、御礼に替えさせていただきます。

(1)　指導者・協力者

設楽博己／樋口昇一／武藤雄六／小林公明／樋口誠司／百瀬長秀／市川隆之／石上周蔵／市村勝己／野村一寿／竹内　稔／原　明芳／神沢昌二郎／直井雅尚／竹原　学／山田真一／山下泰永／小林康男／笹沢　浩／小林秀夫／森島　稔／岩崎卓也／戸沢充則／永峯光一／森　浩一／春成秀爾／神村　透／土屋　積／金井正三／青木和明／三上徹也／宮下健司／矢口忠良／矢島宏雄／佐藤信之／山口　明／臼田武正／高村博文／田中正治郎／堤　　隆／花岡　弘／福島邦男／青沼博之／桐原　健／関沢　聡／平林　彰／百瀬新治／山岸洋一／山田瑞穂／大沢　哲／会田　進／岩崎孝治／折井　敦／平出一治／守矢昌文／高見俊樹／五味一郎／赤羽義洋／小池　孝／小平和夫／福沢幸一／宮沢恒之／宮城孝之／末木　健／前田清彦／石川日出志／寺崎裕助／川村浩司／田中　靖／北村　亮／泉　拓良／増子康真／三好博喜／渡辺　誠／石黒立人／秋山道生／橋本裕行／荻中正和／飯塚　誠／後藤信祐／小杉　康／長崎元広／市沢英利／家根祥多／高橋龍三郎／町田勝則／中沢道彦／木村隆一

(2)　地権者

ア．昭和62年度調査地区

郷津　薫、郷津邦久、郷津定巳、郷津　純、郷津忠昭、郷津正志、郷津安雄、西沢　高、西沢徳市、西沢毅夫、西沢直一、西沢英生、西沢　宏、西沢幸雄、西沢　渡

イ．昭和63年度調査地区

荒山幸久、郷津勝市、郷津定巳、郷津忠昭、郷津安雄、西沢勝嘉、西沢治郎、西沢武一、西沢徳市、西沢毅夫、西沢直一、西沢英生、西沢藤雄、西沢幸雄、西沢　渡、松沢　勉、松沢光久

第3節　調査日誌（現場作業のみ）

昭和62年度

4月13日（月）　晴時々曇　　試掘。グリット1～4を設定。グリット3・4から縄文後期と思われる土器片・石器片等が出土。

4月14日（火）　晴　　試掘。グリット5～9を設定。グリット8から縄文後期と思われる土器片出土。グリット7からはピート層が確認された。全面発掘区は700㎡に及ぶものと推定される。

4月18日（土）　晴　　山光測舎による水準測量及びトラバース杭の設置。伝刀組と表土剝ぎの打ち合わせ。

4月24日（金）　晴　　山光測舎による地形測量。

5月7日（木）　晴　　発掘調査開始式。トレンチ1～4掘削。機材搬入。テント設置。全面発掘区北側の遺構検出面まで浅い部分を手掘りで表土剝ぎ開始。縄文後・晩期の遺物出土。

5月8日（金）　晴　　トレンチ5掘削。地表下180～200cmのピート層から縄文後期包含層検出。手掘りでの表土剝ぎ続行。森・関調査員土層・包含層を調査。

5月9日（土）　晴　　トレンチ6掘削。トレンチ5排水。

5月10日（日）　晴　　トレンチ5出水激しく排水。トレンチ5包含層一部調査。

5月11日（月）　晴のち曇　　重機による表土除去。残土整理。遺構・遺物検出。

5月12日（火）　曇時々雨　　重機による表土除去。残土整理。遺構・遺物検出。北部（トレンチ6付近）出水激しく排水。発掘区南端から炉跡検出。

5月13日（水）　雨　　集合したがすぐに雨。中止とする。

5月14日（木）　雨　　中止。

5月15日（金）　曇時々晴　　残土整理。遺構・遺物検出。

5月16日（土）　晴　　包含層調査。調査区内出水の排水。

5月17日（日）　曇のち雨　　包含層調査。排水作業。

5月18日（月）　曇のち晴　　残土整理。遺構・遺物検出。排水作業。山光測舎による基準杭設置及びトレンチ設置位置測量。

5月19日（火）　晴　　残土整理。遺構・遺物検出。排水作業。5mメッシュの基準を4分割し、遺物取り上げの基準とする。

5月20日（水）　晴　　残土整理。遺構・遺物検出。排水作業。5月21日（木）　晴　　残土整理。遺構・遺物検出。排水作業。5月22日（金）　晴のち曇　　残土整理。遺構・遺物検出。

5月23日（土）　雨　　中止。

5月24日（日）　曇のち晴　　昨夜の雨により調査区の一部が水没（特に北側がひどい）。排水作業。

5月25日（月）　晴　　残土整理。遺構・遺物検出。排水作業。
5月26日（火）　曇のち雨　　残土整理。遺構・遺物検出。排水作業。埋甕1検出。午後雨により中止。
5月27日（水）　曇　　残土整理。遺構・遺物検出。排水作業。調査区南端の炉跡を1住とし、掘り下げる。
5月28日（木）　晴　　残土整理。遺構・遺物検出。排水作業。埋甕2検出。1住掘り下げ、壁・床精査。
5月29日（金）　晴　　残土整理ほぼ終了。遺構・遺物検出。埋甕3検出。1住精査、遺物出土状態写真撮影。N－15及びO－14・15遺物出土状態写真撮影、実測、取り上げ。
5月30日（土）　晴　休み。
5月31日（日）　休み。
6月1日（月）　晴　　遺構・遺物検出。K－14～17・L－12～16・M－12～16縄文後期層（加曽利Bを主体とし、堀ノ内をわずかに含む）の集石精査、写真撮影、実測。
6月2日（火）　晴のち曇　　遺構・遺物検出。後期集石実測。
6月3日（水）　曇のち雨　　遺構・遺物検出。O～Q－11～16間より縄文晩期（氷及び佐野Ⅱ）の集石検出。後期集石実測。糸魚川市教委見学。同市職員の教示により、ヒスイ加工場的性格を持つ遺跡である可能性が高まる。午後雨天中止。
6月4日（木）　晴　　O～Q－11～16間の縄文晩期集石検出。後期集石実測、レベル計測。
6月5日（木）　晴　　O～Q－11～16間の縄文晩期集石検出。後期集石実測、レベル計測。
6月6日（土）　晴　　1住検出状態実測。
6月7日（日）　晴　　1住検出状態実測。
6月8日（月）　晴のち曇　　O～Q－11～16間の縄文晩期集石検出、精査。
6月9日（火）　雨　　中止。
6月10日（水）　曇　　昨日の雨により土がべたつき晩期集石の精査清掃できず。K～N－17～20間の集石検出を行う。この地区の集石は晩期（佐野層）と後期（加曽利B層）が重複している。埋甕2精査、実測。埋甕3精査、写真撮影、実測、取り上げ。
6月11日（木）　晴　　O～R－11～16間の晩期集石精査、写真撮影。埋甕1実測。J～M－19～21間の晩期（佐野層）集石の遺物検出。
6月12日（金）　晴のち曇　　晩期（佐野層）集石検出。I～M－19～23間の遺構・遺物検出。O～R－11～16間の縄文晩期集石実測開始。埋甕2写真撮影。
6月13日（土）　曇　　I～L－19～23間の縄文晩期（佐野層）集石及び他の遺構と遺物検出。O～R－11～16間の集石実測。
6月14日（日）　曇　　O～R－11～16間の集石実測。石棺墓実測。

6月15日（月）　曇時々雨　　I～L－19～23間の集石等の遺構と遺物の検出。O～R－11～16間の集石実測。午後雨により中止。
6月16日（火）　晴　　I～L－16～21間の集石等の遺構と遺物の検出。部分的に中層（加曽利B層）まで掘り下げる。O～R－11～16間の集石実測。
6月17日（水）　晴　　昨日までに検出された晩期前半集石の精査。一部は検出継続。O～R－11～16間の集石実測。
6月18日（木）　晴　　I～L－19～23間の集石精査、遺構・遺物検出継続。O～R－11～16間の集石実測。I～L－19～23間の2ケ所で敷石検出。
6月19日（金）　晴のち曇　　I～L－19～23間の集石精査。O～R－11～16間の集石実測。
6月20日（土）　雨　　中止。午後調査団会議。
6月21日（日）　曇のち雨　　I～L－19～23間の集石精査。集石中のいくつかは石棺墓的な遺構であると考えられる。石棺墓2を検出。午後雨により中止。
6月22日（月）　晴　　一昨日からの雨により一部が水没。水没しない部分もぬかるむ。このため、I～L－20～23間の集石精査は、今週中は中止とする。L・M－18・19及びO～R－8～10の遺構・遺物検出。石棺墓3～6検出。O～R－11～16間の集石実測。
6月23日（火）　晴　　O～R－6～10及びM－18の遺構・遺物検出。石棺墓3～6上面精査、写真撮影。O～R－11～16間の集石実測。
6月24日（水）　晴　　O～R－6～10の遺構・遺物検出。埋甕1断面作成。石棺墓3～6実測準備。石棺墓4・5実測。調査主任が奈文研研修で不在のため午後は土器洗いを実施。
6月25日（木）　晴　　石棺墓6実測。石棺墓3及びその周辺実測。土器洗浄。
6月26日（金）　晴　　埋甕2断面作成。J～L－16～18円形集石一部清掃、実測に入る。O～R－11～16一部加筆。土器洗浄。
6月27日（土）　晴　　J～L－16～18円形集石実測。土器洗浄。
6月28日（日）　曇　　調査主任が研修から帰ったため、6月24～27日間に実施した作業の確認と今後の日程について打合わせ。
6月29日（月）　雨のち曇　　中止。
6月30日（火）　晴時々曇　　P～T－7～10（中層～下層）遺構・遺物検出。J～L－16～19集石（配石・石棺墓状遺構含む）実測。
7月1日（水）　晴のち曇　　P－9・10間の敷石が住居跡であることが判明し、2住とする。また、昨日S－9・10の端に入れたサブトレにより判明した住居跡を3住とする。それぞれ検出。2住は後期、3住は中期後半。O～T－5～8（中層及び下層）遺構・遺物検出。J～L－16～19集石（配石）実測。
7月2日（木）　晴のち曇　　J－22遺物実測、レベル計測、取り上げ。J－22周辺集石精査。L～N－14～18（中層）遺構・遺物検出。J～L－16～19集石（配石）実測。
7月3日（金）　雨のち曇　　中止。
7月4日（土）　曇時々晴　　I～N－18～23間の晩期前半集石精査。L～N－12～18（中層）遺構・遺物検出。J～L－16～19集石（配石）実測。
7月5日（日）　曇のち晴　　午前現場説明会。午後調査団会議。
7月6日（月）　曇のち雨　　I～N－18～23間の集石精査、清掃、写真撮影。L～O－11～18（中層）遺構・遺物検出。午後雨天中止。
7月7日（火）　晴　　1～3住精査。L～N－16～19（中層）遺構・遺物検出。埋甕4実測、断ち割り。
7月8日（水）　晴　　1住・2住精査、清掃、写真撮影。1住北側の焼土及び集石を4住、2住と3住間にある敷石を5住とし、それぞれ検出、精査。4住写真撮影。P－15、M・N－17・18（中層）遺構・遺物検出。C～F－26～30遺構・遺物検出（本日より北側発掘区に入る）。I～L－18～23集石実測。
7月9日（木）　晴　　4住精査。N－13～15（中層）遺構・遺物検出。C～F－25～30遺構・遺物検出。I～L－18～23集石実測。
7月10日（金）　晴　　N－14～16・O－12～15・P－12及びQ－11・12（上層下部～中層）の遺構・遺物検出。B～F－25～30遺構・遺物検出。I～L－18～23集石実測。
7月11日（土）　晴　　N～P－13～18（上層下部・上～中層）遺構・遺物検出。B～F－25～30遺構・遺物検出。I～L－18～23集

石実測。森調査員土層調査。

7月12日（日）　雨時々曇　北側発掘区排水作業。1住柱穴等実測。

7月13日（月）　曇時々雨　T－5～7（一部4住、中～下層）遺構・遺物検出。N～P－13～17（上層下部・上～中層）遺構・遺物検出。I～L－18～23集石実測。

7月14日（火）　晴のち雨　2・3・5住清掃、写真撮影。O・P－14～17（上～中層）遺構・遺物検出。B～F－25～30遺構・遺物検出。I～L－18～23集石実測。

7月15日（水）　曇のち雨　S－5・6（中～下層）とQ・R－11（中層）及びN～P－13～18（上～中層・中層）の遺構・遺物検出。I～L－18～23集石実測。

7月16日（木）　曇のち晴　S・T－4～6（中～下層）とN～P－13～18（上～中層・中層）の遺構・遺物検出。I～L－18～23集石実測。

7月17日（金）　曇　1住炉断面作成。I～L－18～23集石とO～R－11～16石棺墓等の断面作成、レベル計測。

7月18日（土）　雨のち曇　中止。

7月19日（日）　雨時々曇　排水作業。

7月20日（月）　雨のち曇　中止。

7月21日（火）　晴時々曇　S・T－4～6（中～下層）とJ～L－20～23（上～中層）の遺構・遺物検出。O・P－15集石実測。P・R－9・10集石実測。

7月22日（水）　曇時々晴　S・T－5・6（中～下層）とM・N－16～18（上～中層・中層）及びI～L－18～23（上～中層下部・中層）の遺構・遺物検出。P～R－9・10の集石・敷石実測。埋甕7検出。

7月23日（木）　晴　L～N－15～20（中層）、I～L－20～23（上～中層下部、及び中層上部）とD・F－25～27（上～中層）の遺構・遺物検出。P～R－9・10の集石・敷石実測。埋甕7断ち割り。

7月24日（金）　晴　石棺墓3を訂正（解除）し、石棺墓4を3とする。また、新たに検出された石棺墓を4とする。石棺墓2・3掘り下げ、精査。石棺墓3写真撮影。石棺墓4掘り下げ。P～R－7～12（中～下層）及びL～N－15～20（中層）の遺構・遺物検出。L～O－14～18集石（中層分）実測。

7月25日（土）　晴時々雨　P～T－8～12（中～下層・下層）とO・P－14～16（中層）・N－17（中層）・M－18（中層）・J－19（中層）の遺構・遺物検出。埋甕2取り上げ。

7月26日（日）　晴時々曇　埋甕4・6断面作成、取り上げ。L～O－14～18集石（中層分）実測。Q～R－9～11集石実測。I～K－20～23集石断面作成。

7月27日（月）　曇時々晴　I～K－20～23とO・P－15及びO～R－12～14の集石断面作成。本日より1週間は、実測を進めるため作業員は休みとする。

7月28日（火）　雨のち曇　中止。

7月29日（水）　晴　I～K－20～23集石断面作成、レベル計測。P～R－11～13集石群断面作成。

7月30日（木）　晴　石棺墓2・4実測。P～R－11～13集石群断面作成。I～K－20～23集石レベル計測。

7月31日（金）　曇時々晴　石棺墓2・4実測。P～R－11～13集石群断面作成。J～L－19～23集石の上部の石のレベル計測。石の下から埋甕8を検出。

8月1日（土）　曇のち晴　埋甕8実測。O～R－11～13集石群断面作成。O～R－11～13集石群は石棺状遺構の集合体と考えられる。

8月2日（日）　晴　O・P－14（上～中層）集石実測。I・J－23（上～中層下部）集石実測。P～R－11～13集石群断面作成。P～R－11～13集石群の下に土壙がいくつかあることが判明。最初に検出されたものを石棺墓（石棺状遺構）5とする。

8月3日（月）　晴　P－13石棺墓5掘り下げ。P－14・15（上～中層下部）とL～O－16～19（上～中層下部）及びI～J－20～23（上～中層下部）の遺構・遺物検出。石棺墓4掘り下げ（上部の配石を取り外し、下部の土壙を検出）。5住実測。P～R－11～13集石群断面作成。

8月4日（火）　曇時々晴　M～O－17～19（上～中層下部及び中層）とI・J－20～22（上～中層下部）及びK・L－21・22（上～中層）の遺構・遺物検出。2・5住実測。P～R－11～13集石群断面作成。

8月5日（水）　曇のち雨　2住実測。P～R－11～13集石群断面作成。K・L－21・22集石レベル測量。午後は雨のため作業中止。

8月6日（木）　雨時々曇　埋甕5・8断面作成。O～R－11～13集石断面作成。2住周辺の集石実測。

8月7日（金）　晴時々曇　8住検出、精査。K－21・22近辺で検出された大型炉を9住とする。B～F－25～32集石検出、精査。

8月8日（土）　晴時々曇　B～F－25～32集石検出、精査。

8月9日（日）　晴時々曇　O～R－11～13集石断面作成。

8月10日（月）　晴のち雨　B～F－25～32集石検出、精査。8月11日（火）　晴のち雨　昨夜の雨により一部水没。排水。B～F－25～32集石検出、精査。2・5住ピット検出、精査。9住精査。

8月12日（水）　晴　テント・機材の一部片付け・撤収。P～T－4～6下層集石精査、清掃。B～F－25～32集石精査、清掃。6・7住実測。8住写真撮影。作業員による現場作業本日にて終了。

8月13日（木）　晴時々曇　前日精査、清掃をした個所の写真撮影。6～8住実測。J～M－18～23集石実測。

8月14日（金）　晴時々曇　O～R－11～13及びB～F－25～31ほかの集石実測（平面及び断面）。8住実測。

8月15日（土）　晴時々曇　教育委員会行事「成人式」手伝いのため休み。

8月16日（日）　晴時々曇　R～T－4～7ほか遺構実測。

8月17日（月）　曇時々晴　P～T－4～7下層・B～F－25～31・O～R－11～14ほか集石実測。8住実測。O～R－11～14の集石を取り外し下部調査を再開。

8月18日（火）　曇のち雨　P～T－4～7集石実測。8住実測。O～R－11～14断面作成、集石を外して下部調査。

8月19日（水）　晴時々曇　10住検出。B～F－25～31ほか集石実測。

8月20日（木）　晴時々曇　10住掘り下げ。B～F－25～31ほか集石実測。

8月21日（金）　曇時々晴　10住精査。11住検出、掘り下げ。B－F－25～31集石・配石実測。

8月22日（土）　雨のち曇　11住検出、掘り下げ。10住内礫実測。

8月23日（日）　晴　P－R－11～13集石下の土壙実測。10住内礫実測。

8月24日（月）　曇時々晴　11住精査。埋甕8取り上げ。P～R－11～13集石下の土壙実測。B～F－25～31ほか集石実測。

8月25日（火）　曇時々晴　12住検出、掘り下げ。10住実測。B～F－25～31ほか集石実測。

8月26日（水）　晴　　10・11・12住精査。B～F－25～31ほか集石実測。
8月27日（木）　晴　　10・11・12住精査。B～F－25～31ほか集石実測。
8月28日（金）　晴　　B～F－25～31ほか集石実測。石棺墓実測。
8月29日（土）　晴　　B～F－25～31ほか集石実測。石棺墓実測。
8月30日（日）　晴　　基本土層図作成。円形集石断面作成。10・11住実測。B～F－25～31ほか集石実測。
8月31日（月）　曇時々雨　　11住精査。円形集石断面作成。B～F－25～31ほか集石実測。
9月1日（火）　曇時々晴　　10・11・12住実測。B～F－25～31ほか集石実測。
9月2日（水）　晴時々曇　　10・11・12住実測。B～F－25～31ほか集石実測。
9月3日（木）　晴時々曇　　10・11・12住実測。B～F－25～31ほか集石実測。
9月4日（金）　晴時々曇　　10・11・12住及び周辺実測。11・12住炉実測。B～F－25～31ほか集石実測。
9月5日（土）　晴　　機材・倉庫の一部片付け。撤収。
9月6日（日）　晴のち曇　　7住炉断面作成。円形集石断面作成。B～F－25～31ほか集石断面作成。柱痕断面作成。柱痕及び石棺取り上げ、運搬。
9月7日（月）　晴時々曇　　土層調査。各集石の断面補足。残りの機材の片付け。
9月8日（火）　晴時々曇　　土層調査。機材最終片付け。本日にて現場作業終了。
9月24日（木）　曇　　本日より西公園体育館横で土器洗い。
9月25日（金）　雨のち曇　　中止。
9月26日（土）　曇のち雨　　休み。
9月27日（日）　曇時々晴　　休み。
9月28日（月）　曇時々晴　　土器洗い。
9月29日（火）　晴　　土器洗い。
9月30日（水）　曇　　土器洗い。
10月1日（木）　曇時々晴　　土器洗い。本日にて終了。
10月2日（金）　晴のち曇　　ほ場整備工事実施に伴い立ち会い（発掘区の埋め戻しと現状保存区の工事立ち会い）。発掘調査が終了して1ケ月たつが、盗掘の跡が目立った。
10月3日（土）　晴のち曇　　ほ場整備工事実施に伴い立ち会い。発掘区の一部を埋め戻す。
10月7日（水）　晴のち曇　　ほ場整備工事実施に伴い立ち会い。発掘区の半分以上を埋め戻す。
10月27日（火）　晴　　ほ場整備工事実施に伴い立ち会い。ＪＲの沿線部分を埋め戻す。本日で立ち会い調査終了。調査によるもの以外、破壊なく工事を終了できた。

昭和63年度

5月6日（金）　晴　　山光測舎水準点移設。
5月7日（土）　曇のち雨　　山光測舎地形測量。
5月8日（日）　曇のち晴　　休み。
5月9日（月）　晴　　道路部分発掘開始。表土除去及び包含層の掘り下げ。玉・玉砥石・縄文早期土器片出土。山光測舎地形測量。
5月10日（火）　雨時々曇　　小雨により発掘作業は中止。山光測舎基準杭設置及び地形測量。
5月11日（水）　雨時々曇　　発掘作業中止。山光測舎地形測量。
5月12日（木）　雨時々曇　　中止。
5月13日（金）　雨　　中止。
5月14日（土）　曇時々晴　　遺構・遺物検出。押型文土器が多く見られる。森調査員地質調査。
5月15日（日）　雨時々曇　　休み。
5月16日（月）　晴　　他事業の現地協議により調査員不在。発掘作業中止とする。
5月17日（火）　晴一時雨　　遺構・遺物検出。
5月18日（水）　晴　　遺構・遺物検出。上部礫出土状態写真撮影、実測、一部取り外し。
5月19日（木）　晴　　遺構・遺物検出。集石1及び小竪穴検出。小竪穴掘り下げ。集石は集石炉と思われる。
5月20日（金）　晴時々曇　　遺構・遺物検出。上部礫実測、取り上げ。集石及び小竪穴精査。
5月21日（土）　曇時々雨　　礫・集石・小竪穴実測。
5月22日（日）　雨　　休み。
5月23日（月）　雨　　中止。
5月24日（火）　曇のち晴　　礫・集石・小竪穴精査、写真撮影。全体写真撮影。小竪穴実測。本日で道路部分の発掘作業は終了。作業員はほ場整備部分の発掘に入るまで休みとする。
5月25日（水）　曇　　休み。
5月26日（木）　晴　　休み。
5月27日（金）　晴　　休み。
5月28日（土）　曇時々晴　　礫・集石実測。
5月29日（日）　曇時々晴　　休み。
5月30日（月）　晴時々曇　　礫・集石実測。
5月31日（火）　晴　　礫実測。最終全体地形測量。
6月1日（水）　曇のち雨　　礫実測。集石断面作成。土層図作成。本日で道路部分の調査終了。ほ場整備部分の調査に入るまで休み。
6月27日（月）　曇のち雨　　調査再開（ほ場整備部分の調査に入る）。重機による表土剝ぎ。
6月28日（火）　曇一時晴　　本日より作業員が入り表土剝ぎ開始。先に調査した道路部分をB－Ⅰ区とし、今回調査する部分をB－Ⅱ及びB－Ⅲ区とする。Ⅱ区・Ⅲ区重機による表土剝ぎ続行。川の水が濁り、下流の住民から注意され、排水溝を作る。
6月29日（水）　曇一時晴　　重機による表土剝ぎ（Ⅲ区）及びトレンチ掘削。トレンチ部分で遺物が出たため拡張することとする。人手による表土剝ぎ及び遺構・遺物検出。
6月30日（木）　雨　　中止。
7月1日（金）　雨のち曇　　中止。
7月2日（土）　曇時々晴　　重機稼動。トレンチ拡張区をB－Ⅳ区とする。
7月3日（日）　晴のち雨　　休み。
7月4日（月）　曇一時晴　　Ⅳ区表土剝ぎ及び遺構・遺物検出。平安時代の住居跡2軒確認。
7月5日（火）　曇　　Ⅳ区遺構・遺物検出。昨年度検出した住居との重複を避けるため、住居番号を101からつけることとし、昨日確認した住居を101住・102住とする。102住検出、掘り下げ。
7月6日（水）　晴時々曇　　Ⅳ区遺構・遺物検出。101住検出、掘り下げ。102住掘り下げ、精査。103住検出、一部掘り下げ。縄文時代包含層の確認、検出。
7月7日（木）　曇のち雨　　Ⅳ区遺構・遺物検出。103住検出、掘り下げ。縄文時代包含層の確認、検出。102住床面精査、清掃、写真撮影。

7月8日（金）　雨のち曇　　中止。
7月9日（土）　曇のち晴　　遺構・遺物検出。104住検出。縄文時代包含層の確認、検出。101・103住精査。テントをⅣ区の近くに設置。
7月10日（日）　曇のち雨　　休み。
7月11日（月）　曇一時雨　　遺構・遺物検出。104住検出、精査。縄文時代包含層の確認、検出。
7月12日（火）　晴時々曇　　遺構・遺物検出。101・104住精査、清掃、写真撮影。103住精査、一部掘り下げ。103住には鍛冶跡が付属しているらしい。縄文時代包含層の確認、検出。
7月13日（水）　晴時々曇　　縄文時代包含層の確認、検出。
7月14日（木）　曇のち雨　　遺構・遺物検出。平安住居と思われる遺構検出。縄文時代包含層の確認、検出。
7月15日（金）　雨時々曇　　中止。
7月16日（土）　曇時々雨　　遺構・遺物検出。縄文時代包含層検出。平安住居と思われる遺構は105住となる。105住検出、掘り下げ。
7月17日（日）　曇一時雨　　休み。
7月18日（月）　曇　　遺構・遺物検出、掘り下げ。105住掘り下げ、精査。103住精査。平安住居と思われる遺構検出。縄文時代包含層検出。103・104住一部実測。
7月19日（火）　曇　　遺構・遺物検出、掘り下げ。103・105住精査、清掃、写真撮影。平安住居と思われる遺構は106住となる。106住検出、掘り下げ。104住実測。103・104住レベル計測。縄文時代包含層検出。
7月20日（水）　雨一時曇　　中止。
7月21日（木）　曇　　遺構・遺物検出。106住精査。103住床面精査、カマド精査、鍛冶跡精査、写真撮影、実測及びレベル計測。縄文包含層検出。山光測舎測量、基準杭設置。
7月22日（金）　晴時々曇　　遺構・遺物検出。106住精査、清掃、写真撮影。縄文包含層検出。
7月23日（土）　曇のち雨　　遺構・遺物検出。縄文前期包含層検出。
7月24日（日）　曇一時雨　　休み。
7月25日（月）　曇のち雨　　遺構・遺物検出。縄文包含層検出。午後雨天中止。
7月26日（火）　曇　　Ⅳ区下側試掘（範囲確認。2×2mグリットを3ケ所掘り、北から1・2・3とする）。グリット1とグリット2間に遺構があると思われたため拡張。101住炭化材等出土状態実測、レベル計測、取り上げ。その下を精査（床面精査含む）。
7月27日（水）　曇のち雨　　Ⅳ区下側グリット拡張（遺構・遺物検出）。101住床面精査、清掃、写真撮影。縄文包含層検出（遺構・遺物検出）。104住カマド実測、断面作成。
7月28日（木）　雨　　中止。
7月29日（金）　曇のち晴　　Ⅳ区下側グリット拡張（遺構・遺物検出）。Ⅳ区のロームマウンド精査、写真撮影、断ち割り。縄文包含層検出。Ⅳ区で住居跡と思われるもの検出。
7月30日（土）　晴　　Ⅳ区下側グリット拡張区精査。Ⅳ区で検出された住居跡と思われるものは107住となる。107住掘り下げ、精査。調査主任の都合により、作業員は午後休みとする。
7月31日（日）　晴　　休み。
8月1日（月）　晴　　縄文包含層集石精査、一部検出。ロームマウンドの断面作成で残した部分掘り下げ。
8月2日（火）　晴　　Ⅱ区遺構・遺物検出。一部地形測量。102住実測。
8月3日（水）　曇時々晴　　Ⅱ区遺構・遺物検出。一部地形測量。Ⅳ区縄文集石実測。
8月4日（木）　曇時々晴　　Ⅱ区遺構・遺物検出。Ⅱ区東側試掘（遺構・遺物検出）。
8月5日（金）　曇一時雨　　Ⅱ区遺構・遺物検出、精査、全体写真撮影。Ⅲ区遺構・遺物検出。Ⅱ区東側試掘（遺構・遺物検出）。
8月6日（土）　晴のち雨　　休み。
8月7日（日）　晴のち雨　　休み。
8月8日（月）　晴のち雨　　昨夜の雷雨でⅡ区一部水没。排水作業。Ⅱ区の一部の地形と溝の測量。Ⅱ区東側試掘（遺構・遺物検出）。Ⅱ区東側試掘区上部の晩期土器出土層の写真撮影。Ⅲ区遺構・遺物検出。Ⅲ区黒土層範囲にトレンチを入れ確認。
8月9日（火）　晴　　昨夜の雷雨でⅡ区・Ⅱ区東側試掘区水没。排水作業。Ⅱ区地形、土壙1（陥し穴）、土壙2ほか実測。Ⅱ区東側試掘坑掘り下げ。前期末土器出土面写真撮影。Ⅲ区遺構・遺物検出（黒土層範囲トレンチ調査）。Ⅳ区縄文包含層集石実測。
8月10日（水）　曇一時雨　　Ⅳ区に戻り101住下層の縄文包含層・ロームマウンド検出、掘り下げ。101・102住レベル計測。107住実測、レベル計測。縄文包含層実測、断面作成。
8月11日（木）　曇一時雨　　Ⅱ区地形ほか測量。河川跡内遺物検出。Ⅳ区101住縄文包含層検出。ロームマウンド精査、写真撮影。縄文集石断面作成、レベル計測、取り外し、下層調査。105・106住実測。
8月12日（金）　曇　　Ⅱ区地形ほか測量。Ⅳ区集石断面作成、レベル計測。106住実測。集石下層調査。ロームマウンド1・2実測。明日から16日まで盆休みとする。
8月13日（土）　晴のち雨　　盆休み。
8月14日（日）　晴のち雨　　盆休み。
8月15日（月）　曇のち雨　　盆休み。
8月16日（火）　曇時々雨　　盆休み。
8月17日（水）　曇のち雨　　Ⅳ区集石下層精査。墓壙と思われる土壙（掘りすぎて4分の1のみ）検出、精査、写真撮影、実測。土壙はロームマウンド3を切る。ロームマウンド3検出。土層図作成。土層写真撮影。105・106住一部実測、レベル計測。Ⅱ区地形ほか実測。河川跡の掘り残し部分掘り下げ。
8月18日（木）　曇のち雨　　昨夜の雷雨でⅡ区水没。排水作業。Ⅱ区地形ほか実測。河川跡・溝の掘り残し部分掘り下げ。Ⅳ区縄文層の焼土周辺精査。ロームマウンド精査。105住カマド・ロームマウンド3実測。
8月19日（金）　曇一時雨　　Ⅱ区河川跡・溝の掘り残し部分掘り下げ。Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区全体測量。テント・機材の片付け。本日で発掘作業終了。
8月20日（土）　雨のち曇　　休み。
8月21日（日）　晴　　休み。
8月22日（月）　晴時々曇　　土器洗い。
8月23日（火）　曇のち雨　　土器洗い。
8月24日（水）　雨　　中止。
8月25日（木）　晴のち曇　　土器洗い。本日で終了。

第４節　調査方法

遺跡が広範囲にひろがることから1987年調査部分をＡ地区、1988年調査部分をＢ地区とした。

Ａ地区調査対象区のうち扇状地傾斜の上部に当たる東側約700㎡については、工事により削り地となることが必至であるため全面発掘区とし、西側の湖岸部については、1.5m幅トレンチによる土層確認後、遺構面が広がるような場合のみ発掘区を広げることとした。

Ａ地区においては、縄文時代中期～晩期が黒色土中において重層となっておりすべては調査できず、調査後、埋め立て保存となった。

Ｂ地区は一津沢右岸の台地上にあり広範囲に渡るが、遺跡自体はこの台地の全面にあるのではなく、所々に点在していることが予想されたため、遺物散分が確実に認められたⅠ～Ⅲ区以外では、トレンチ・グリットをまず掘り、遺構・遺物が確認できた部分のみを重機で広げていくこととした。Ⅴ区・Ⅵ区については調査途中で確認されたため、人力より拡張を行った。

測量については、都市計画図（１：2500）を参考に求めた。座標点に基づいて調査区を10m間隔の方眼に区切って杭を打ち、この杭に基づいて簡易遺形実測により測量した。全体図についてはスタジア測量によった。水準標高については一等水準点766.52mから移設し基準とした。

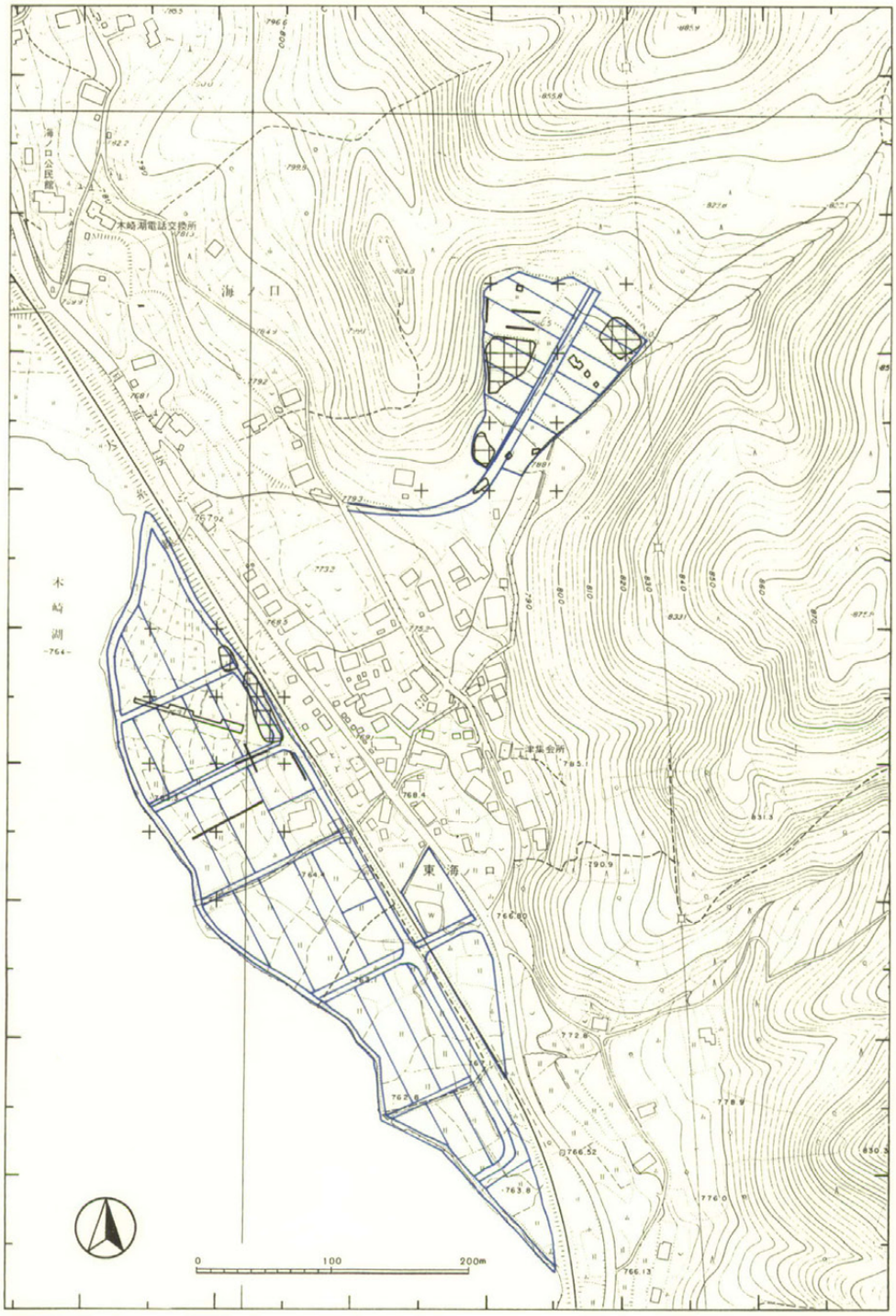


図1　一津遺跡付近ほ場整備事業施行計画図（1：5,000）

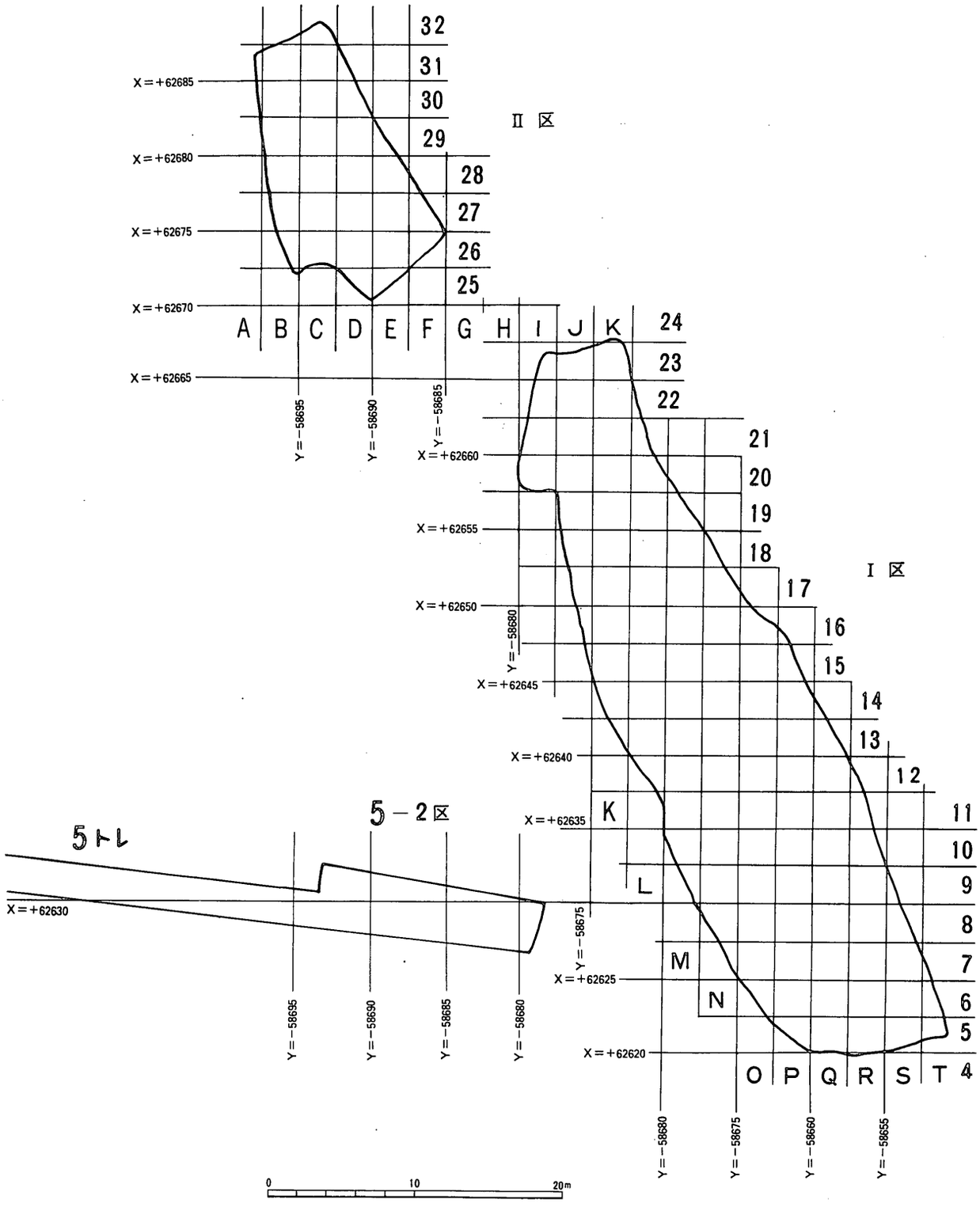


図3　A地区グリット配置図（1：400）

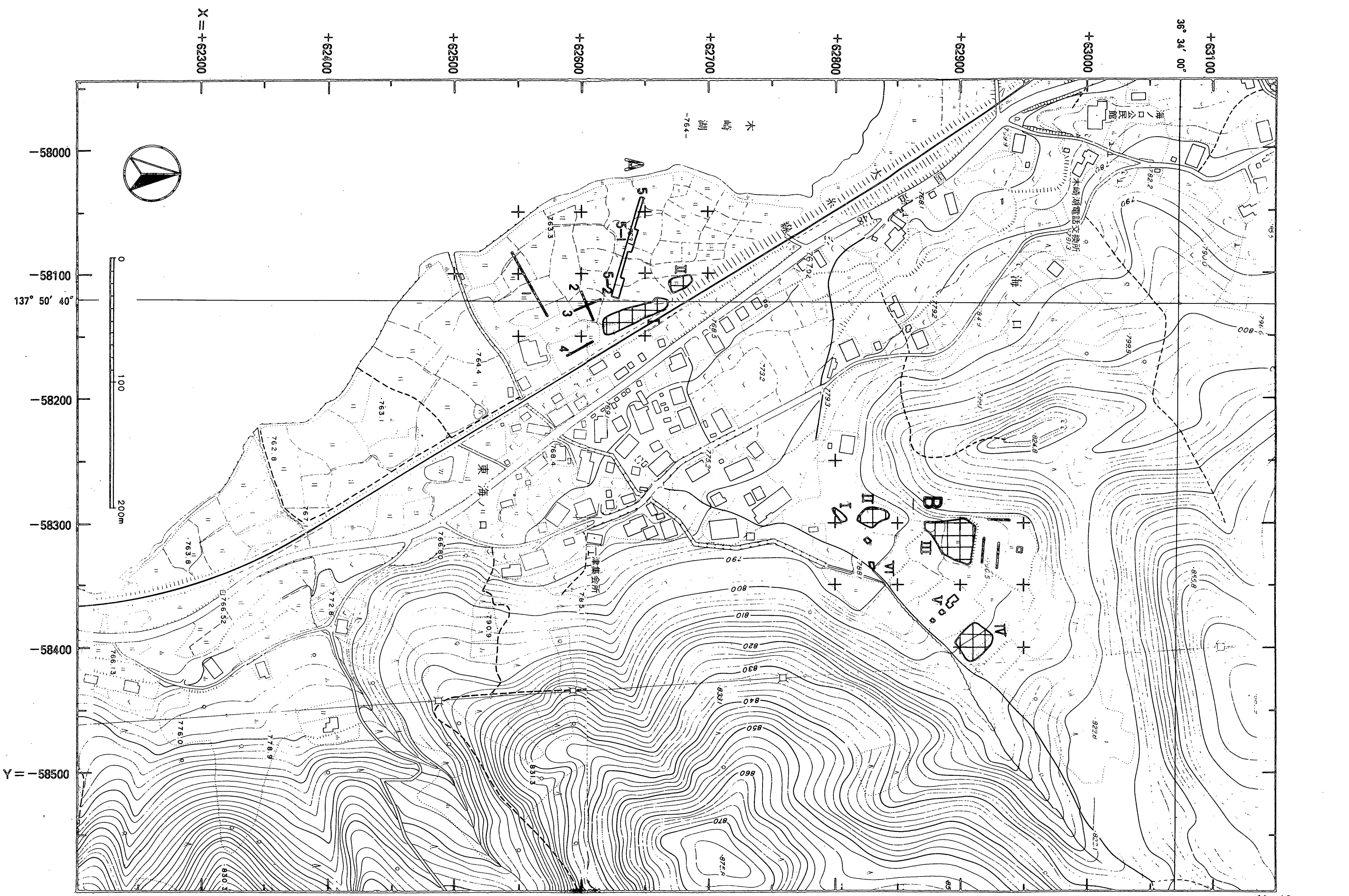


図２　一津遺跡発掘区割図（１：2,500）

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

1．地形及び地質

本遺跡は松本盆地の北端・木崎湖の東岸にあり、東部山地（中山山地）が湖岸まで迫っている。発掘地点は東部山地西側山腹の海抜800mから湖岸の766mまで伸びている。

東部山地は、地質的にはフォッサ・マグナの新第三紀の大峰累層地域で、山腹は礫岩、砂岩よりなり、陵線付近は凝灰岩や安山岩よりなっている。地形的には、陵線がほぼ南北に伸び、遺跡上の陵線のすぐ北には、この付近最高の権現山1,222mがあり、西に険く東に緩やかな非対称の地形となっている。そのため、遺跡のある木崎湖側は谷の発達が悪く、短小の沢ばかりである。遺跡の西側はすぐ木崎湖・海抜763mの断層湖となり、湖の西は仁科山地が湖岸まで迫っている。この仁科山地は、南北およそ15kmの小山地であり、この山地の西は鹿島川渓谷をへだてて後立山連峰となる。仁科山地の地質は、中生層の泥岩や流紋岩～石英斑岩の木崎岩よりなり、この転石の一部は遺構中にもみられる。

発掘地点の地形と地質

発掘地点の地形は二つに大別され、沢の中流から下流の段丘面上に分布するＢ地区と、湖面近くのＡ地区となる。Ｂ地区は、東部山地から南西方向に流下する沢による段丘状堆積物（概念図参照）の上にあり、南西に緩く傾斜している。ロームはこの第４地区のすぐ北側まで乗っているが、Ｂ地区Ⅳ区の発掘地点から下は、堆積当時のロームはなく、ローム混じりの砂礫及び安山岩の風化粘土よりなり、不透水層となっているため、この不透水層上を山腹からの湧水による幾筋もの小流水により、湿地帯及び湿田となっている。したがって、表土は腐植の特に多い黒土である。

Ａ地区は、この沢が木崎湖へ流入する際にできた小扇状地状の押出しの堆積物の上にあり、沢が流入に際して西へ曲ったため堆積物面は西に傾斜している。なお、この沢は前述した地形により河説係が特に大きく、したがって篩分けの悪い堆積物となっており、ローム質や風化粘土の混入により幾層もの小帯水層が存在する。

2．当時の環境

Ｂ地区は南西に開けた沢による小段丘面上にあり、北西風は完全にしゃ断され日当りもよく、湧水や幾筋もの小流水に囲まれた別天地で、排水さえ十分に考慮すれば生活には適地であったと推定される。

Ａ地区は土層柱図(1)、(2)にみられる如く、縄文以後現在までおよそ180cm前後の土砂が堆積しており、当時ヨシの茂った湿地帯は、現在より大部東部山地の山麓にまで広がり、満水時には発掘地点の近くまで湿地帯となったと推定される。

遺構中の岩石について

Ａ地区の遺構中の大礫

(1)　安山岩及び凝灰岩（安山岩質）の大礫 …… 約70%

(2)　流紋岩及び石英斑岩 …… 約20%

(3)　閃緑岩　少

(4)　ひん岩　少

(5)　粘板岩　１ケ

◦安山岩には３つのタイプがある

①　東部山地より流出の塊状のもの（大部分）

②　矢沢石（柱状節理）

③　敷石の平板状のもの

◦木崎岩（流紋岩及び石英斑岩）について

木崎湖誕生以前に旧河川により運ばれた可能性が大であり、これを縄文人が利用し配石きたと推定される。

◦Ｂ地区の遺構中の大礫について

全て安山岩及び凝灰岩（安山岩質）である。

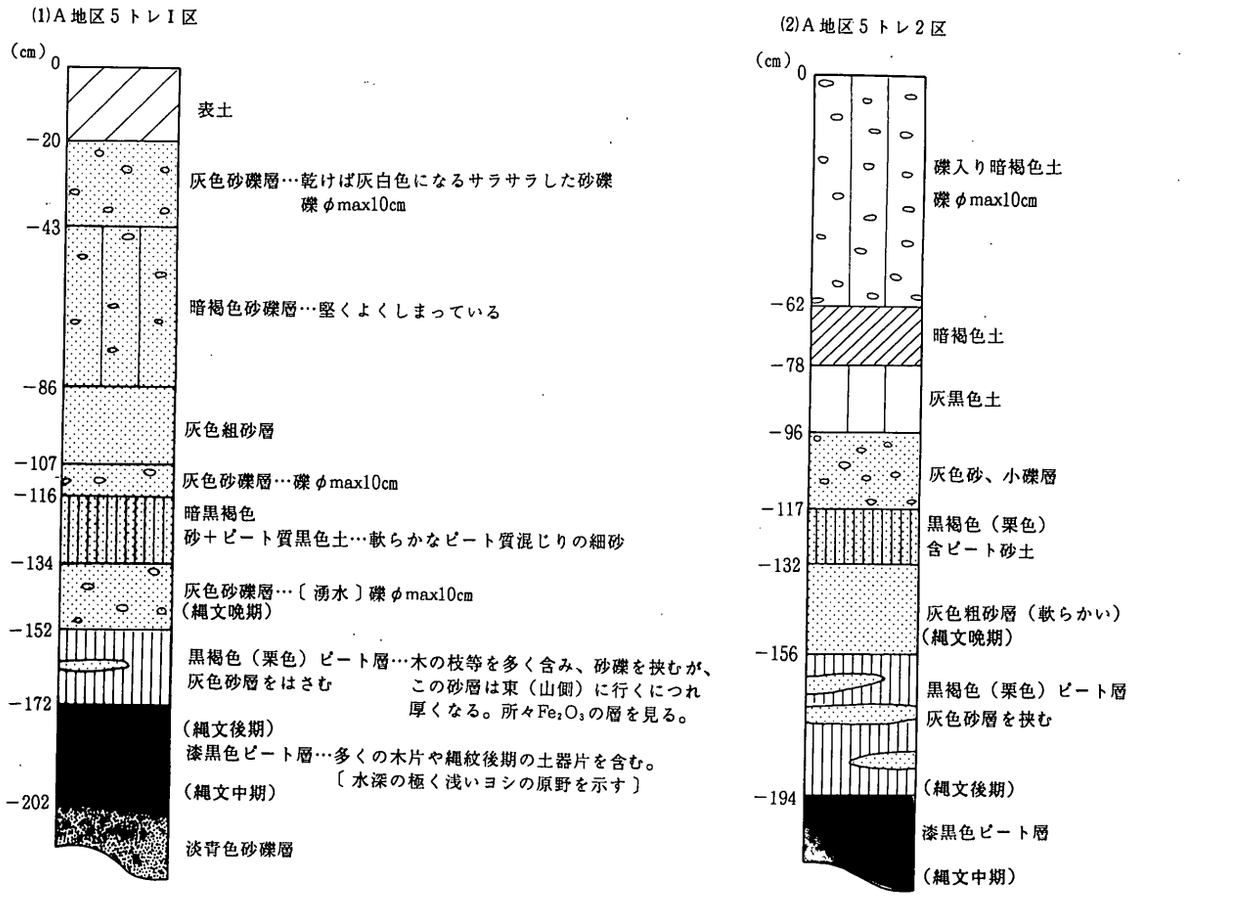
例外として第４地区平安住居の近くから出土した石灰岩は、製鉄用に使用したものと推定される。

木崎湖誕生以前に旧河川により運ばれた可能性が大であり、これを縄文人が利用し配石したと推定される。

◦Ｂ地区の遺構中の大礫について

全て安山岩及び凝灰岩（安山岩質）である。

例外として第４地区平安住居の近くから出土した石灰岩は、製鉄用に使用したものと推定される。



（注）№１より東（山側のため質的には同じであるが節分けが悪い）

図４　Ａ地区５トレ土層柱状図

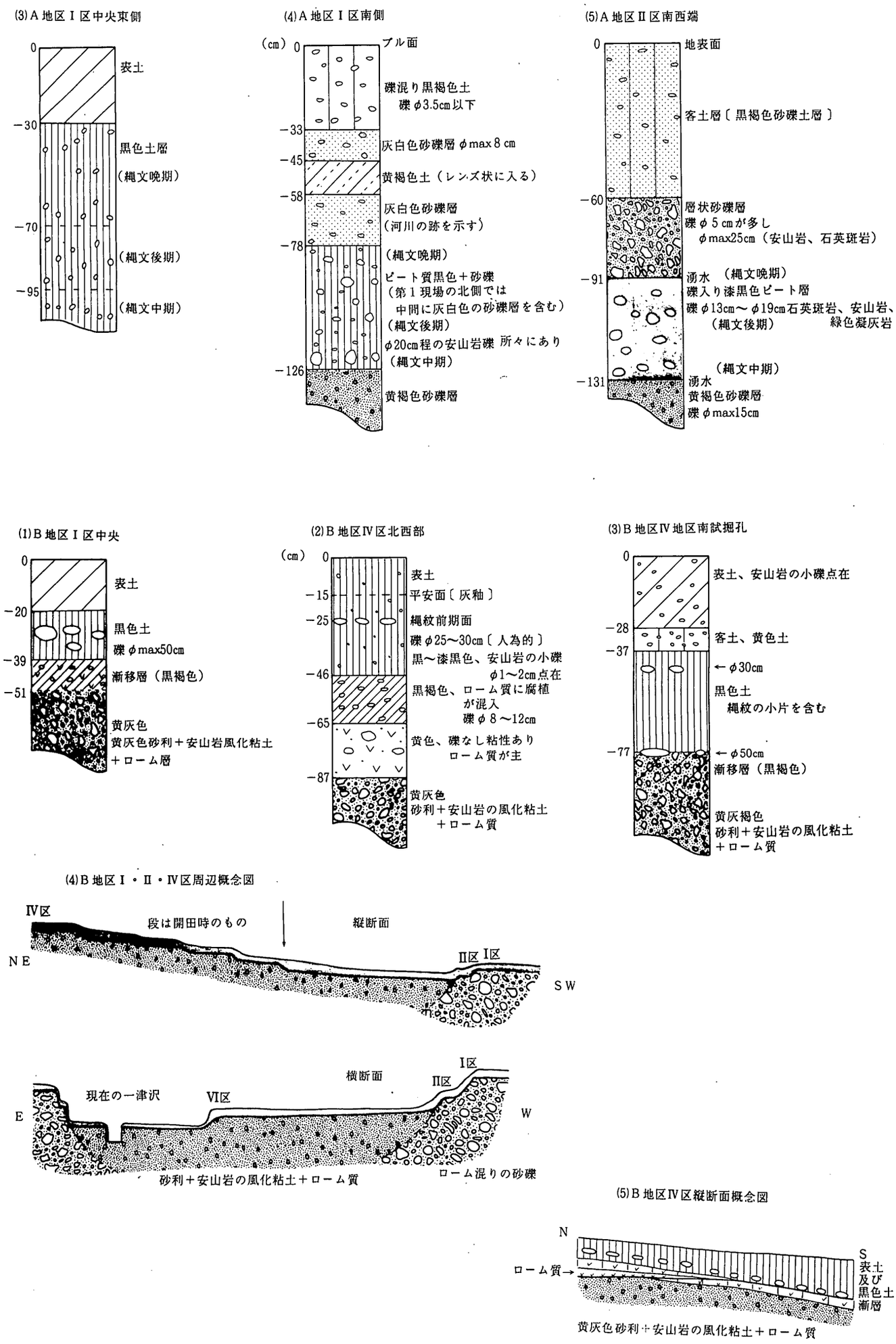
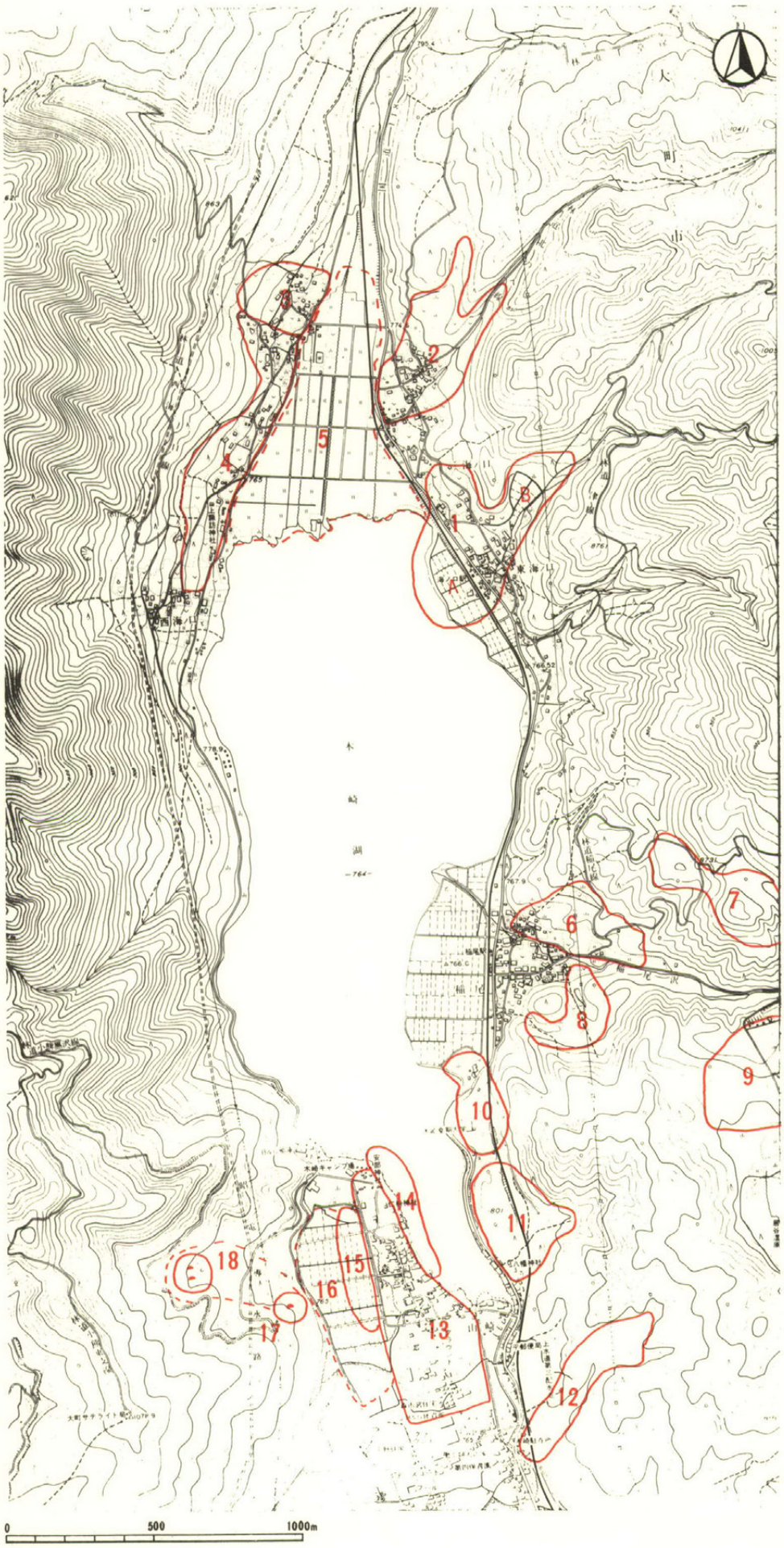


図5　A・B地区土層柱状況図



1．
一津遺跡

2．
南入日向遺跡

3．
中道遺跡

4．
西海の口遺跡

5．
中部農具川三角洲
（推定水田跡地域）

6．
上の山遺跡

7．
下の池遺跡

8．
雨池遺跡

9．
居谷里Ⅲ遺跡

10．
木崎夏期大学遺跡

11．
山崎遺跡

12．
コボレ沢遺跡

13．
森城跡（下畑遺跡）

14．
森湖底遺跡

15．
ガマ遺跡

16．
森西部湿地帯
（推定水田跡地域）

17．
鬼穴遺跡・鬼穴古墳

18．
小熊山東麓古墳群
（狐穴１・２号古墳）

図６　木崎湖周辺の遺跡（１：20,000）

第Ⅲ章　遺構と遺物

第1節　遺　　構

1．遺跡の時代別土層　（図4・5参考）

A・B地区とも縄文時代・平安時代が重複していた。特にA地区においては、それが黒色土中において顕著で、上層～下層まで各時代ごとに捉えられた。しかし、その分層は土器型式を標準とした分層の方法であり、土層的にははっきりと分かれるものではなかった。分層は、黒色土層中の標準土器を見て、その出土位置から決め、上層――縄文時代晩期後半（氷式～氷式の古い部分）、上～中層――縄文時代晩期前半（佐野Ⅰ・Ⅱ式～晩期初頭型式及び後期終末型式）、中層――縄文時代後期後半（後期後半型式～加曽式～加曽利ＢⅠ～Ⅲ式）、中～下層――縄文時代後期前半～中期末（堀ノ内Ⅰ・Ⅱ式～曽利Ⅴ式）、下層――縄文時代中期後半（曽利Ⅱ～Ⅴ式）とした（ＡⅠ区の中央東側の場所の土層を標準としたので、上層がなく上～中層から始まる場所もある）。ＡⅢ区においては、すべての遺物を上～中層の遺物としたが、調査時に配石面レベルが近似しており、ほぼ同一面で検出してしまい、中層まで掘り下げていることにきづかず、上～中層の遺物と中層の遺物が混在してしまった。であるから、ＡⅡ区は上～中層とはしたものの、上～中層～中層の遺物である。

B地区においても、Ⅰ区においては、縄文時代早期末・中期初頭面と縄文時代早期前半（押型文土器期）面と分けることができ、Ⅳ区においても平安時代面と縄文時代期末・縄文時代早期後半面と縄文時代早期前半（押型文期面）を分層することが、ある程度土器出土レベルによりできたが、これも土層はほぼ同色であり、土層そのものによるものではない。

2．住　居　跡

A地区から14軒、B地区から7軒検出された（A地区では1から住居番号をつけ、B地区では、101から番号を付けた）。

A地区の13号住居跡は、ＡⅡ区中央東側で柱根観察時に伏甕と床面が検出されただけのものでその大きさ等は検出していない。時代のみを示しておくと、1・9号住居跡――縄文時代晩期前半、8号住居跡――後期後半型式期、14号住居跡――加曽利ＢⅡ式期、2・5・6・12号住居跡――堀ノ内Ⅱ式期、4号住居跡――堀ノ内Ⅰ式期、7号住居跡――曽利Ⅴ式期、10号住居跡――曽利Ⅴ式期、3・11・13号住居跡――曽利Ⅲ式期、101～107号住居跡――平安時代後半（9世紀末～11世紀初頭）のものである。7号住居跡の炉は北陸地方に良く見られる複式炉であった。

3．方形柱列（図13）

土坑2～5の4ケの土坑からなるもので、土坑2～4の3基で柱痕が検出されたことから方形柱列と呼ぶことにした。

4．石棺墓・配石墓（図24～26）

石棺墓・配石墓は調査時においては石棺墓としてすべて連番で番号を付けてしまい名称が異なっているだ

けで連番となっている。石棺墓は墓の主体の周囲に平石を並べたもので、配石墓は配石の下に墓壙をもつものである。時代については細かい部分までは土器の検討がすんでいないのではっきりとしないが検出層位を示すと、5～14は上層、1～4・15～18は上～中層に属するものである。

5．埋甕（図22・23）

8基検出された。特に特異なのは埋甕8で、埋甕本体に注口土器の注口部を連結させたもので、埋甕を考える上で重要となろう。

6．配石（図24～26）

調査時において埋立て保存となることから、配石部だけを検出したもので、配石の下部は精査してないのではっきりとしないがおそらくは下部に土壙をもち配石墓となるものと考えられる。

7．柱根（図17）

BⅡ区で3本検出された。すべて傾むいて検出され、直立はしていなかったので、どのような形の柱であったか不明である。

8．木の根（図16）

A地区Ⅰ区北側の上～中層面配石、集石間から検出されたもので、当時立木があったことを示すものであろう。

9．焼いた（焼けた）貼床

Ⅱ区中央東側の配石・集石間と7号住居跡で検出されたもので、ロームを焼いたか、ロームが焼けたかしてガリガリとなったもので、表面は赤く、軟い土器状となっている。

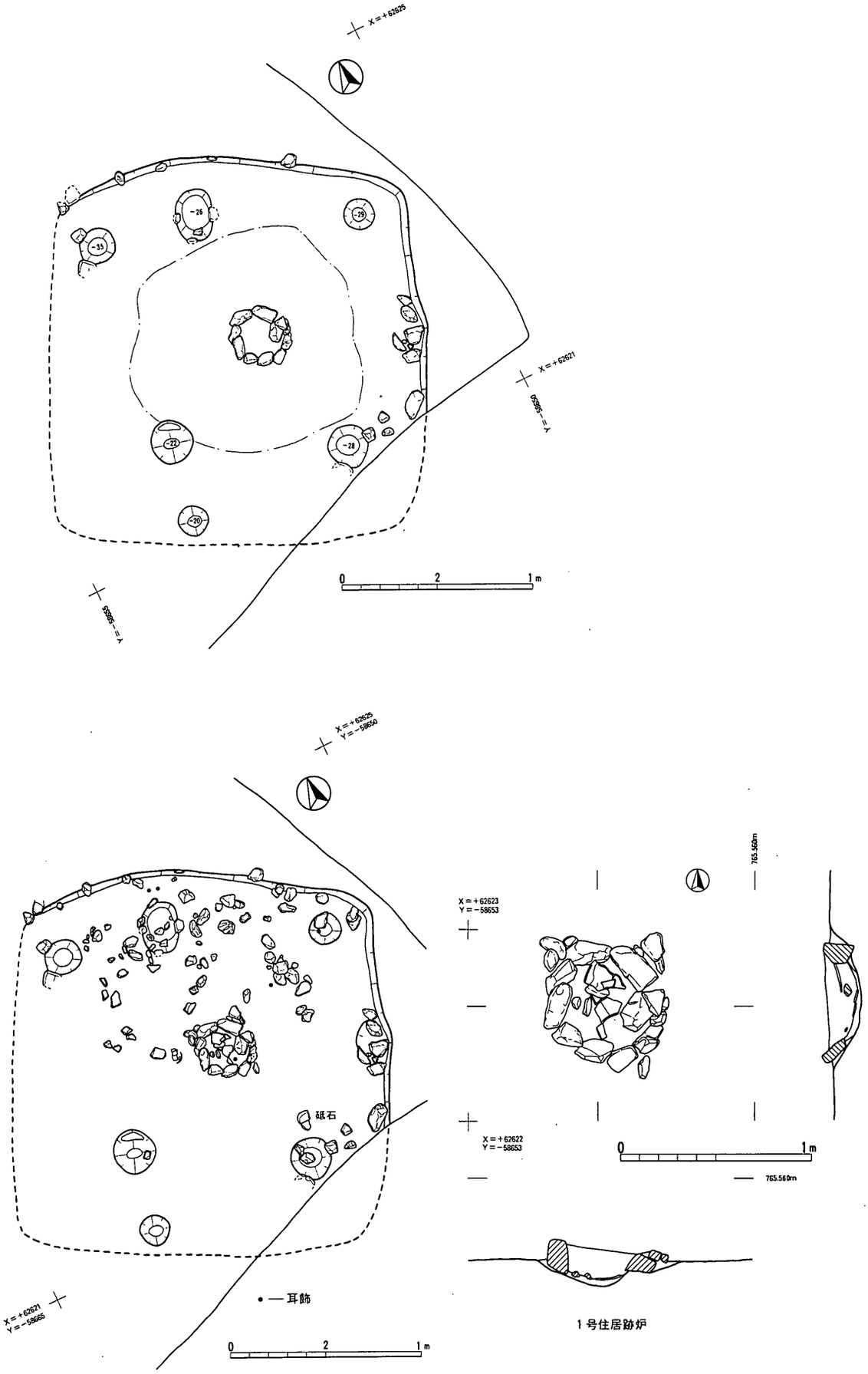


図7　A地区1号住居跡（実測図・遺物出土状況図－1：60・炉－1：30）
（柱穴内数字は床面よりの深さ）

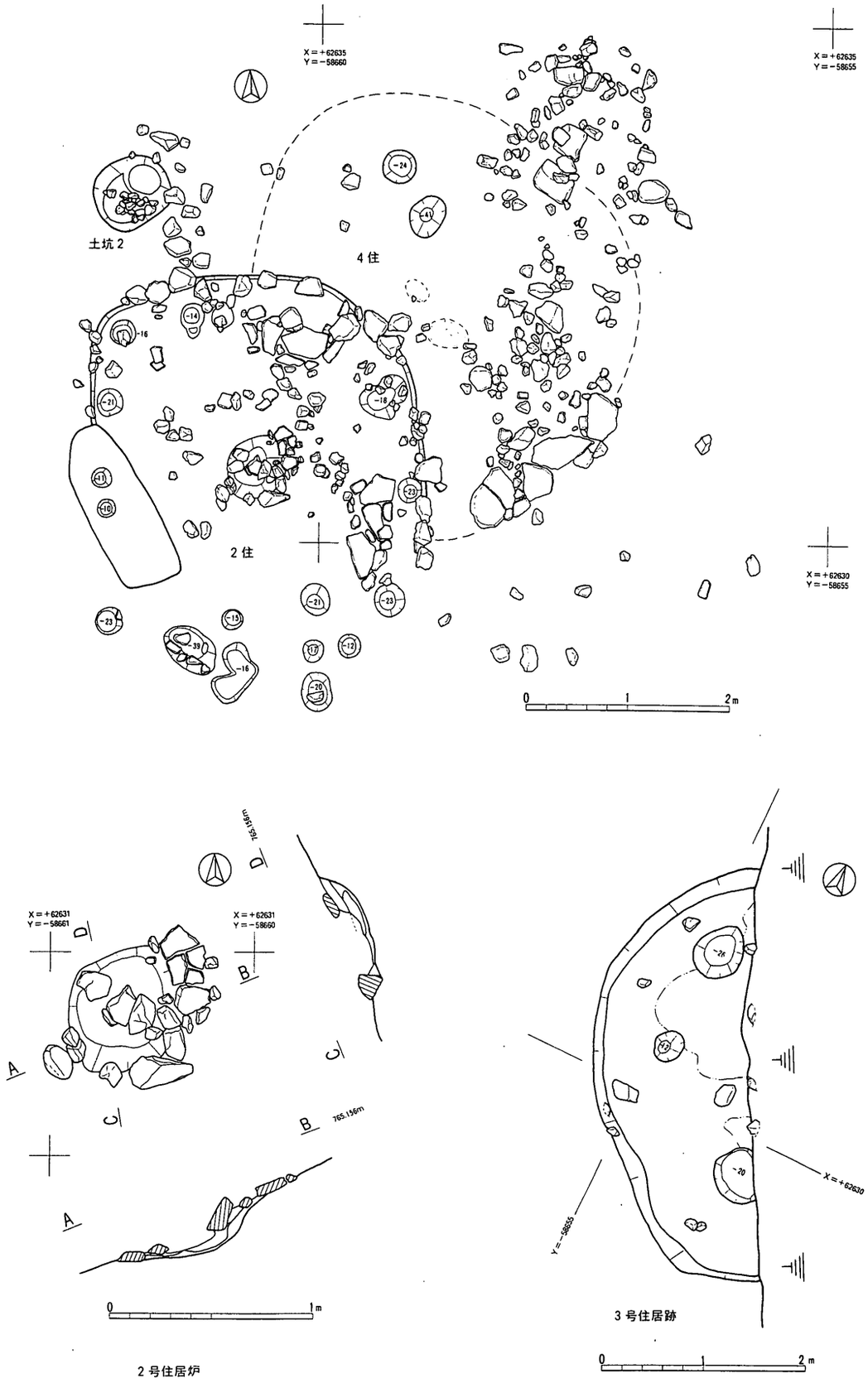
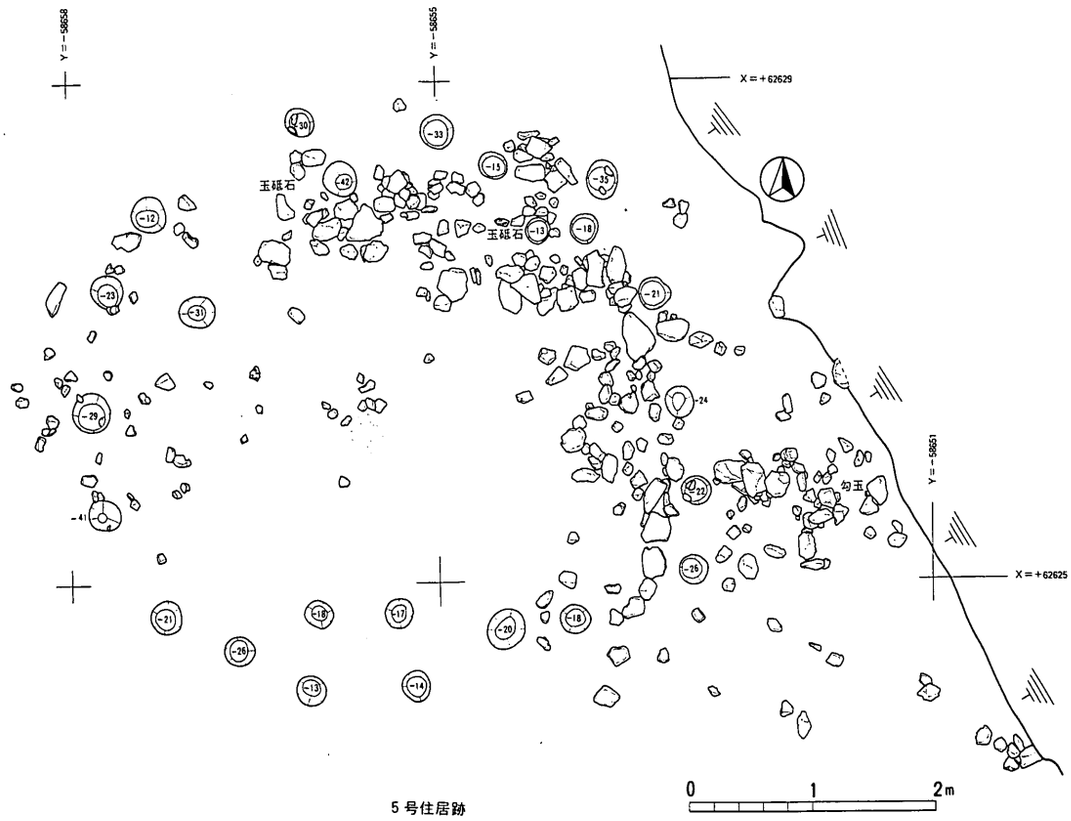


図8　A地区2・3・4号住居跡（1：60）2号住居跡炉（1：30）
（柱穴内数字は床面よりの深さ）



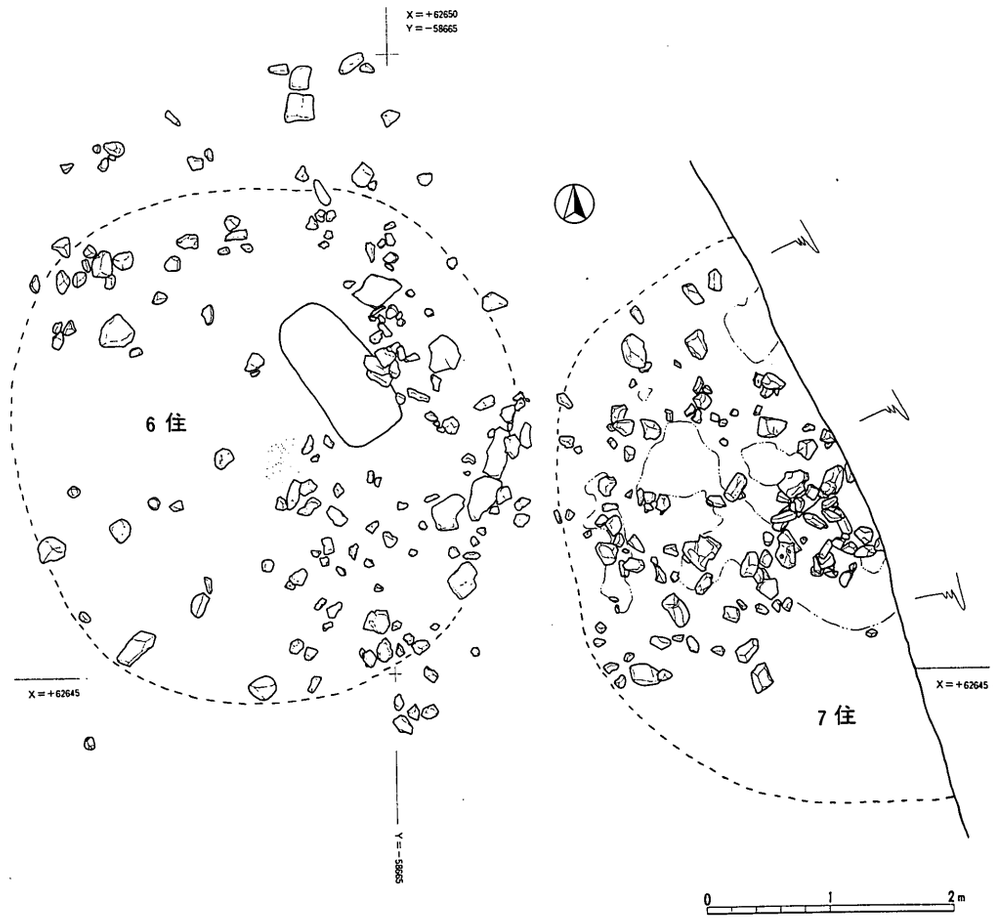


図9　A地区5・6・7号住居跡（1：60）（柱穴内数字は床面よりの深さ）

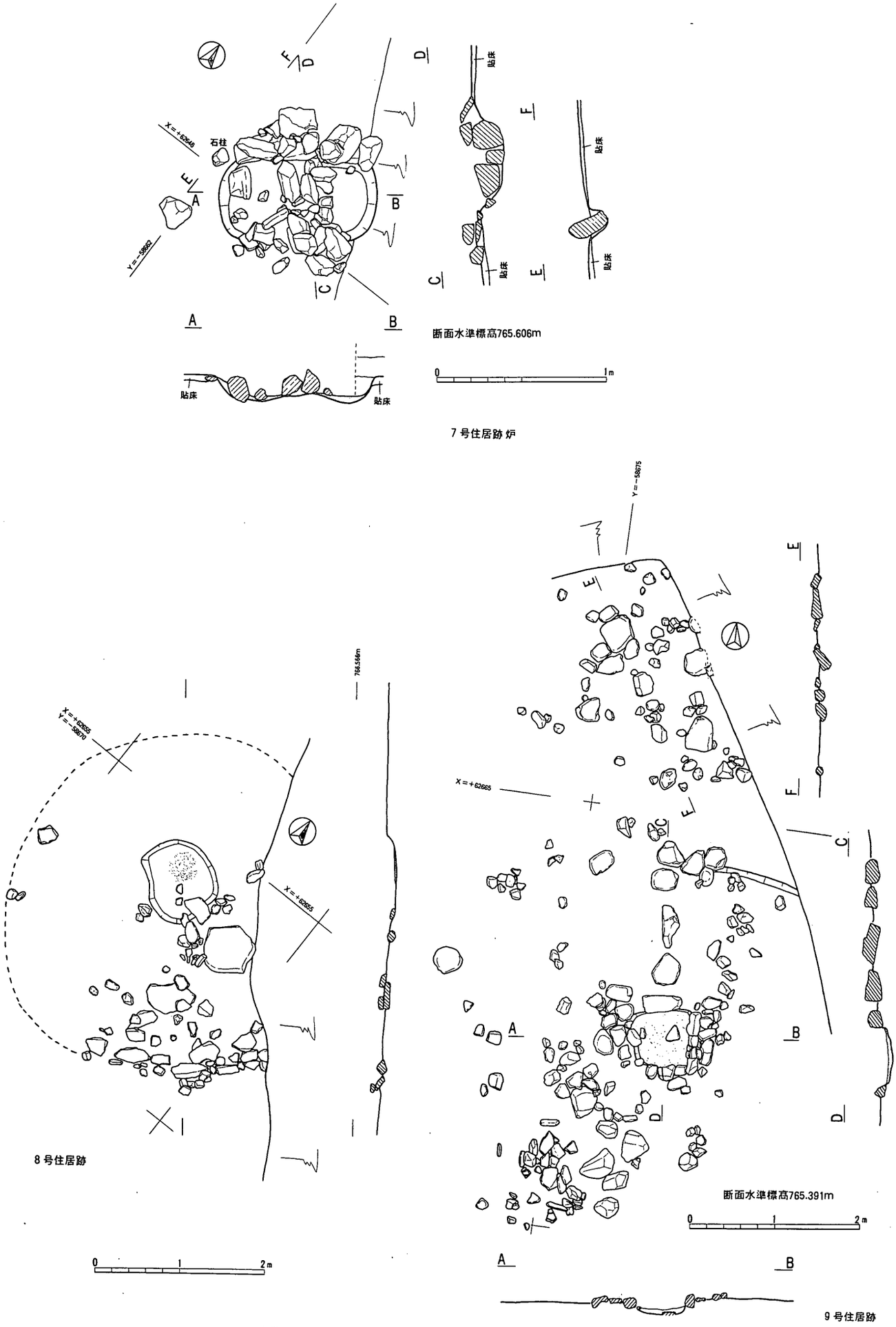


図10　A地区7号住居跡炉（1：30）8・9号住居跡（1：60）

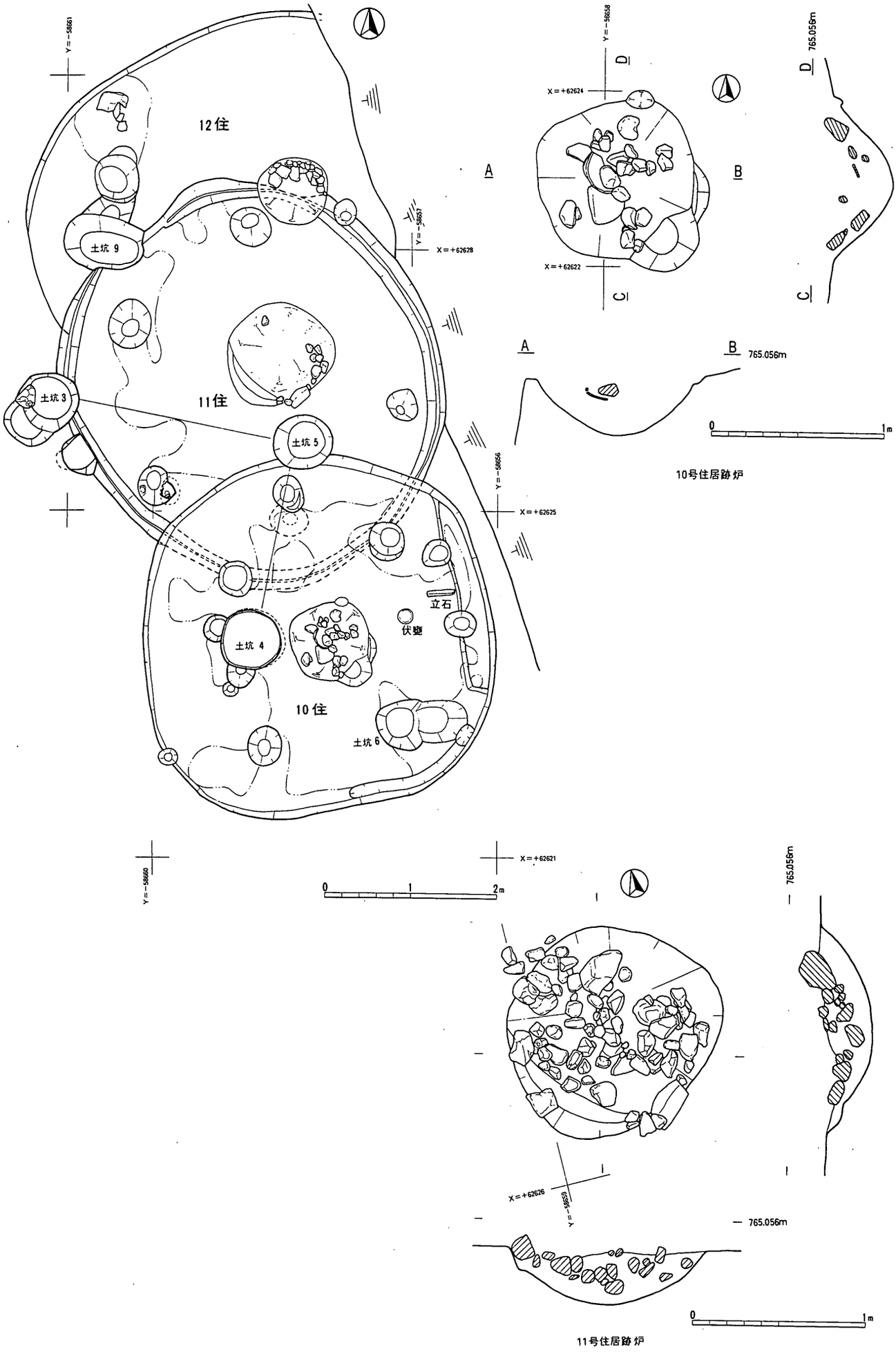


図11　10−12号住居跡（1：60）10•11号住居跡炉（1：30）

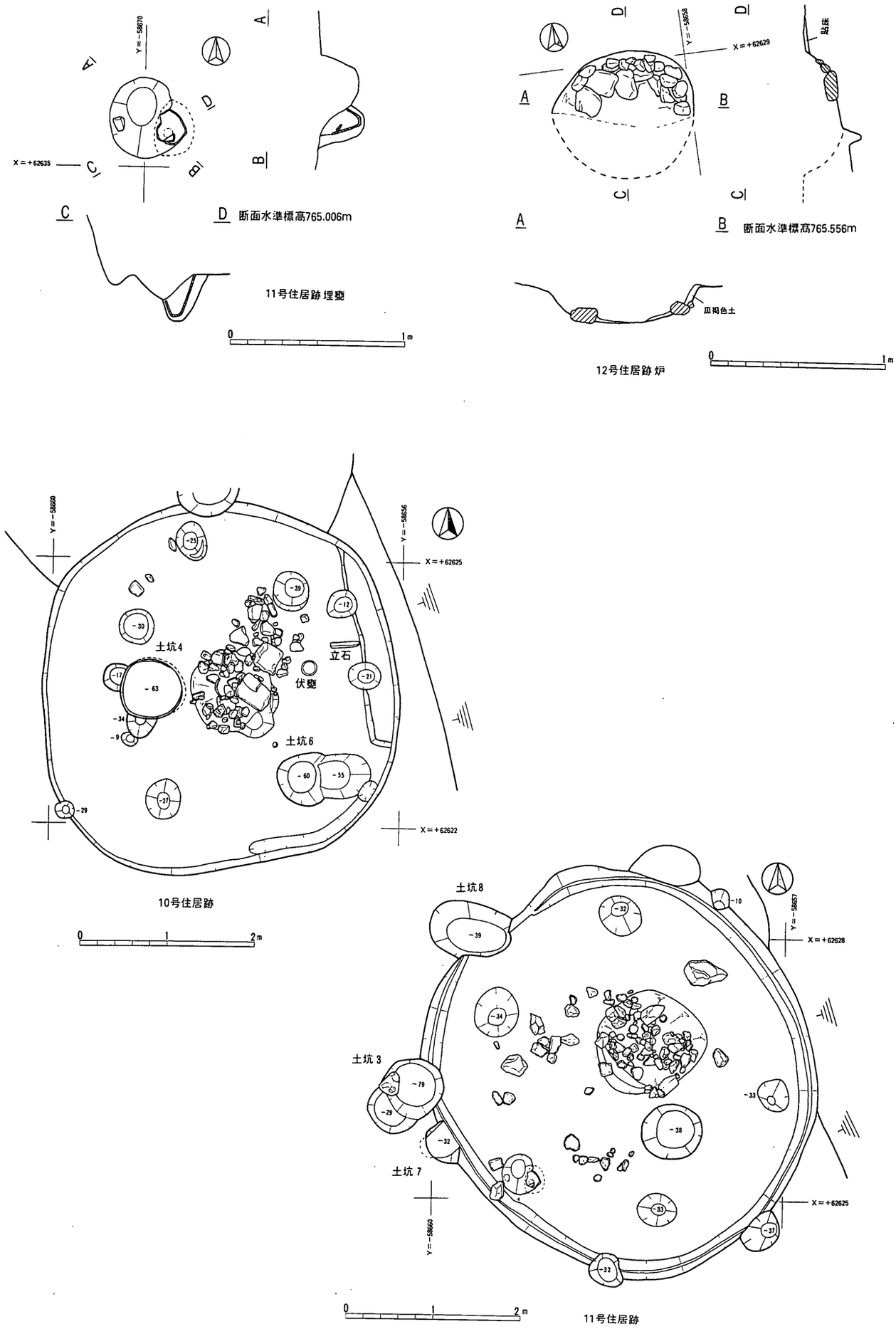


図12　11号住居跡埋甕（1：30）12号住居跡炉（1：30）10･11号住居跡遺物出土状況（1：60）
（柱穴内数字は床面よりの深さ）

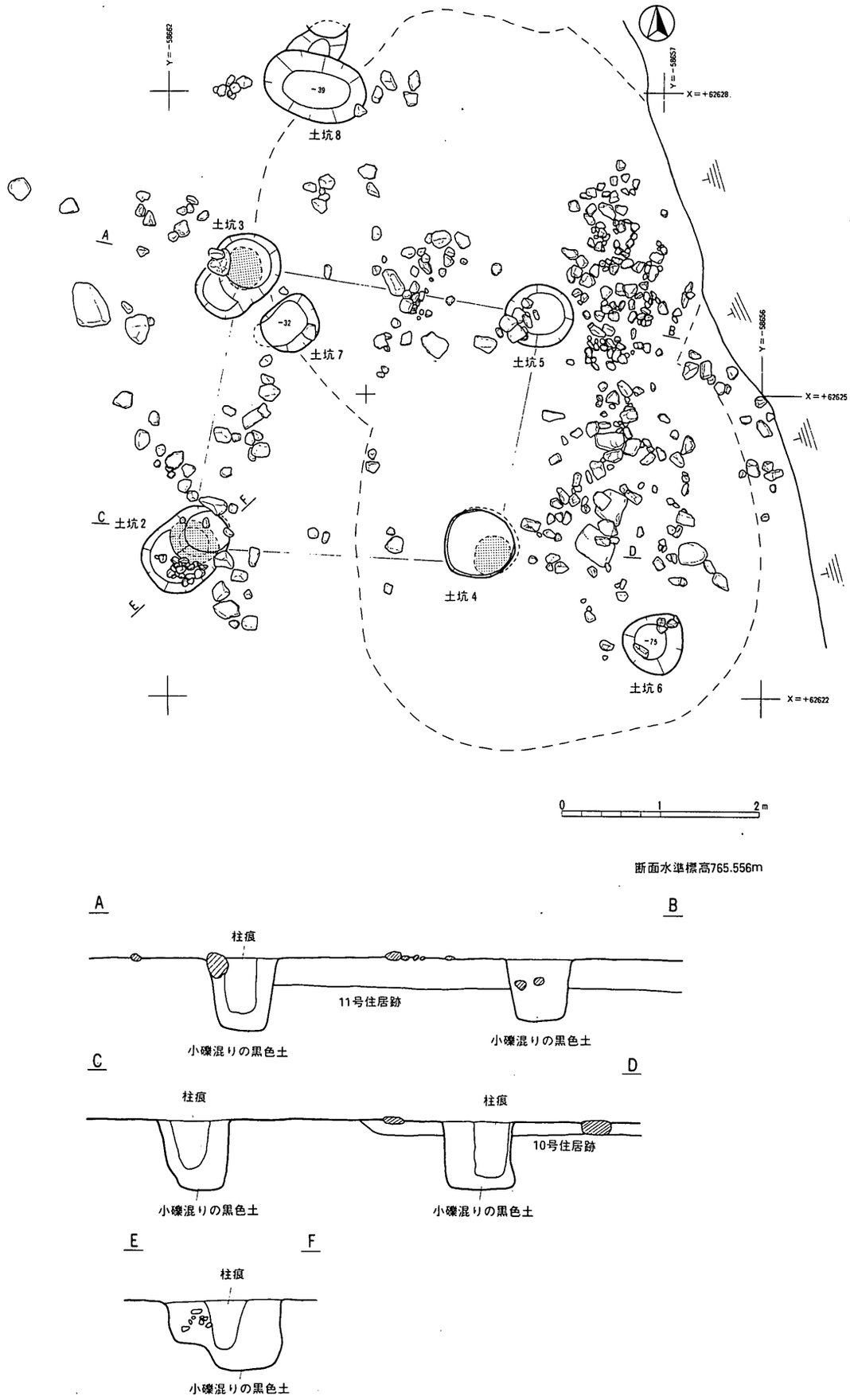


図13　A地区中～下層方形柱列（土坑２～５）・土坑６～８（１：60）

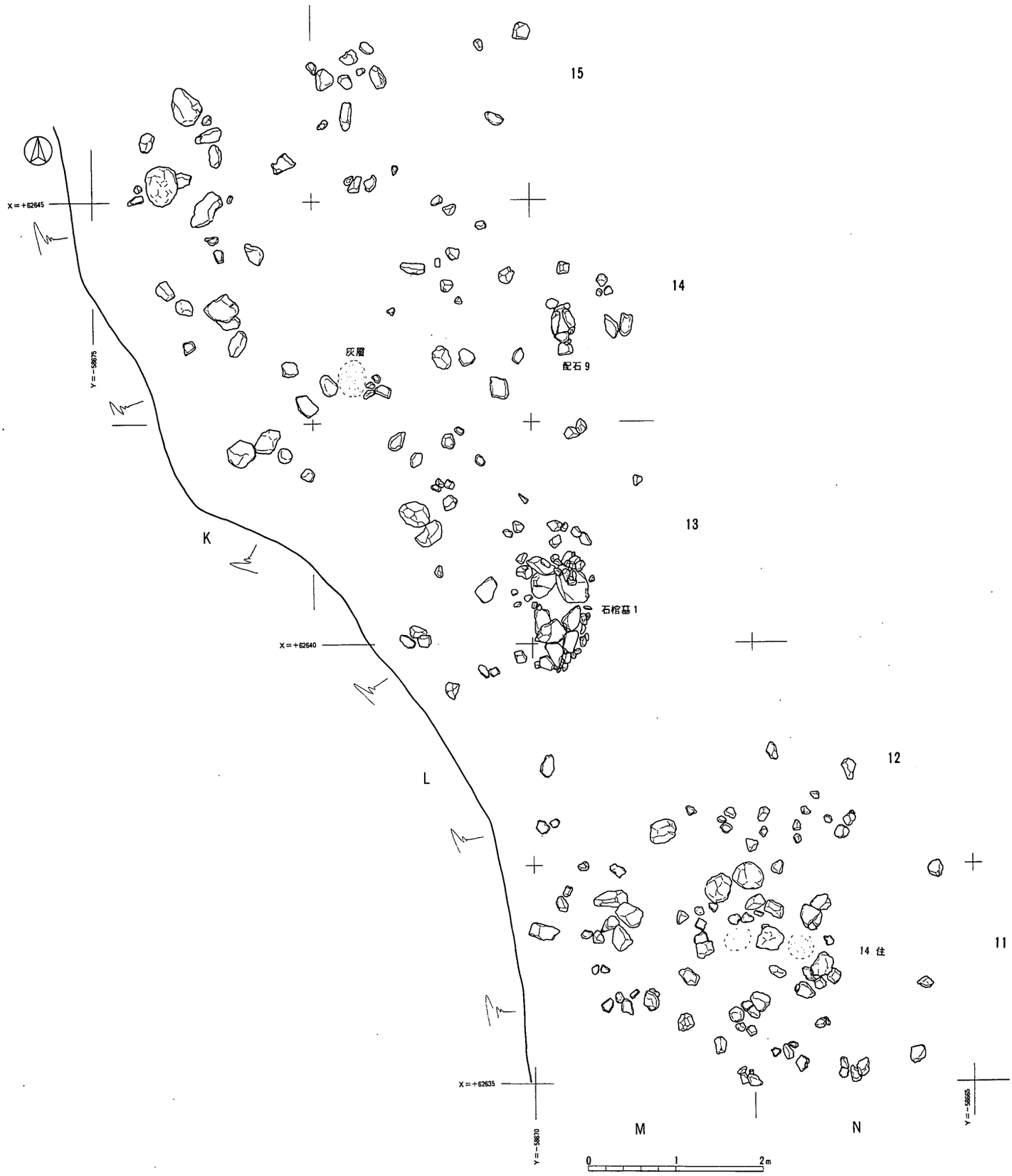


図18　A地区Ⅰ区中央西側上～中層～中層配石・集石全体図（1：60）

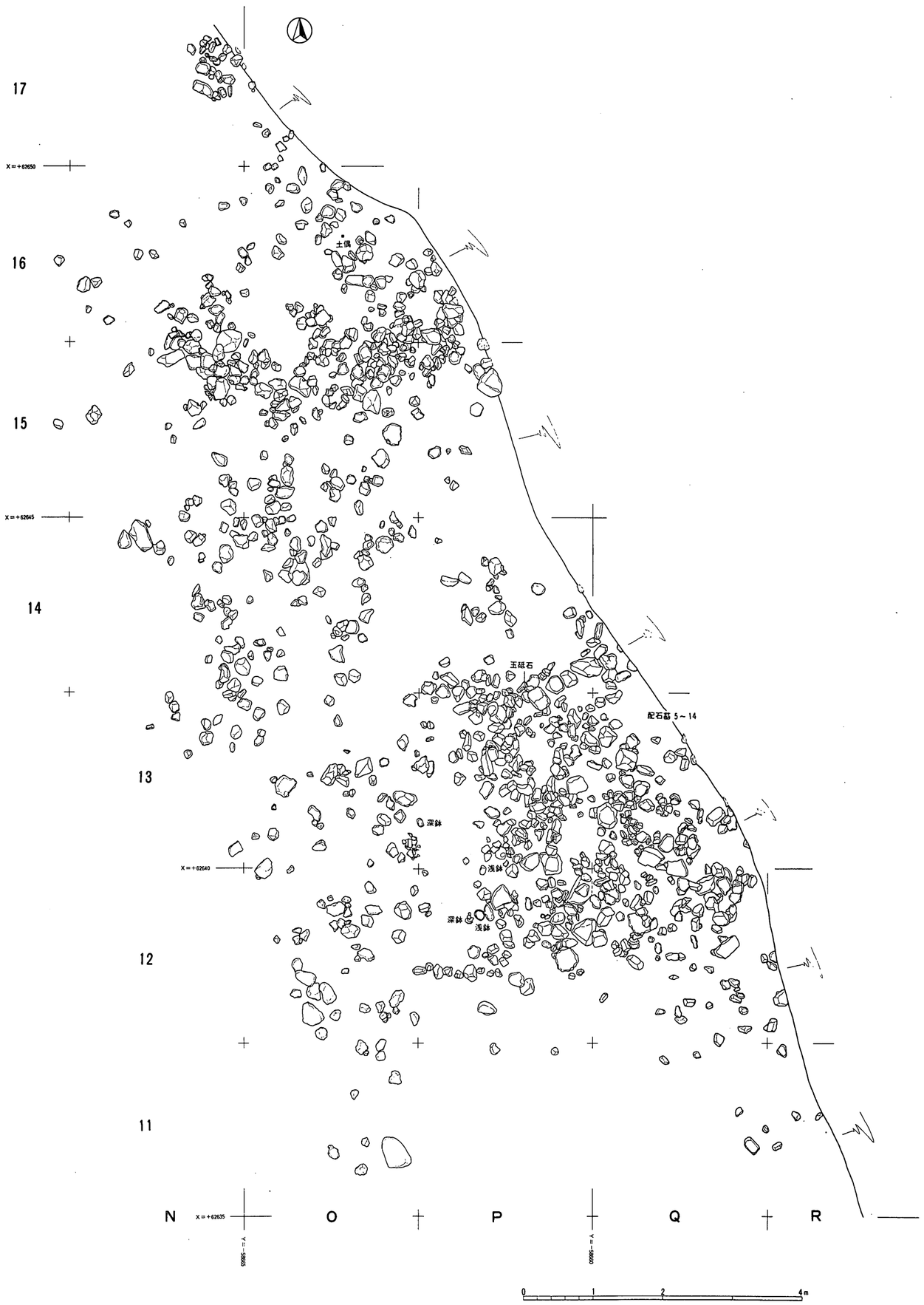


図14　A地区Ⅰ区中央東側上層配石・集石全体図（1：60）

図15　A地区Ⅰ区中央東側上～中層配石・集石全体図（1：60）

図16　A地区Ⅰ区北側上～中層配石・集石全体図（1：60）

図17　A地区Ⅱ区配石・集石全体図（1：60）

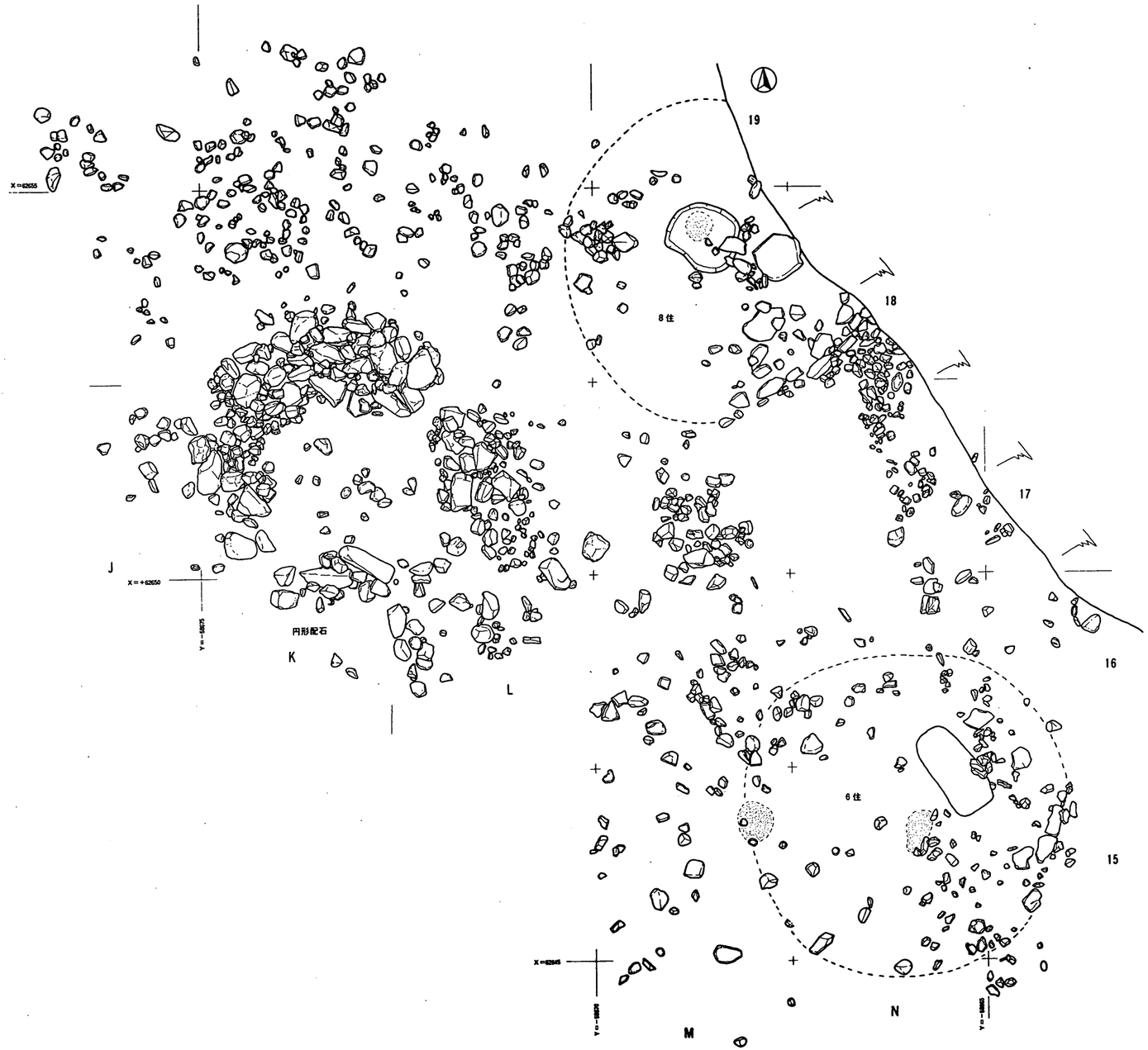


図19　A地区Ⅰ区中央上～中層下部～中層配石全体図（1：60）

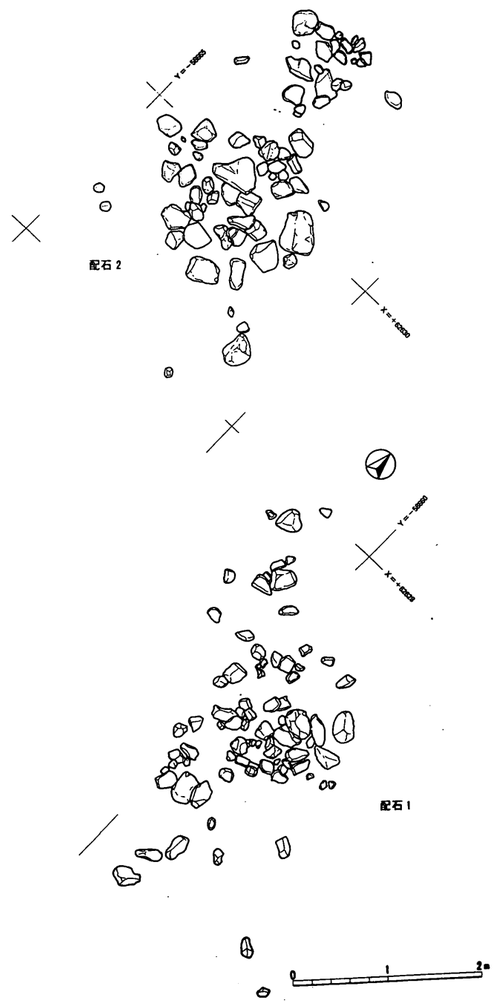


図20　A地区Ⅰ区南側中～中下層配石・集石全体図（1：60）

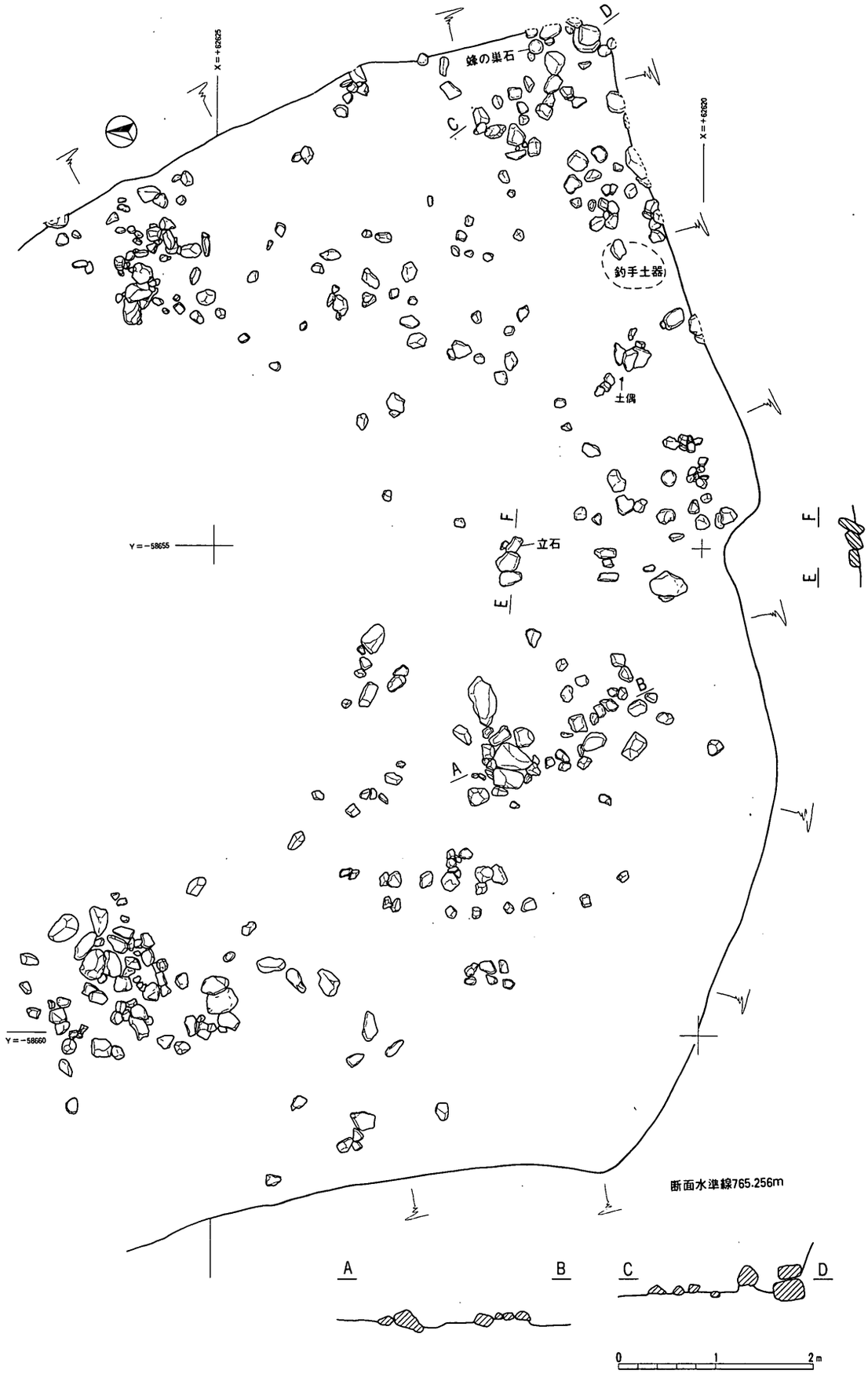


図21　A地区Ⅰ区南側中～下層配石・集石実測図（1：60）

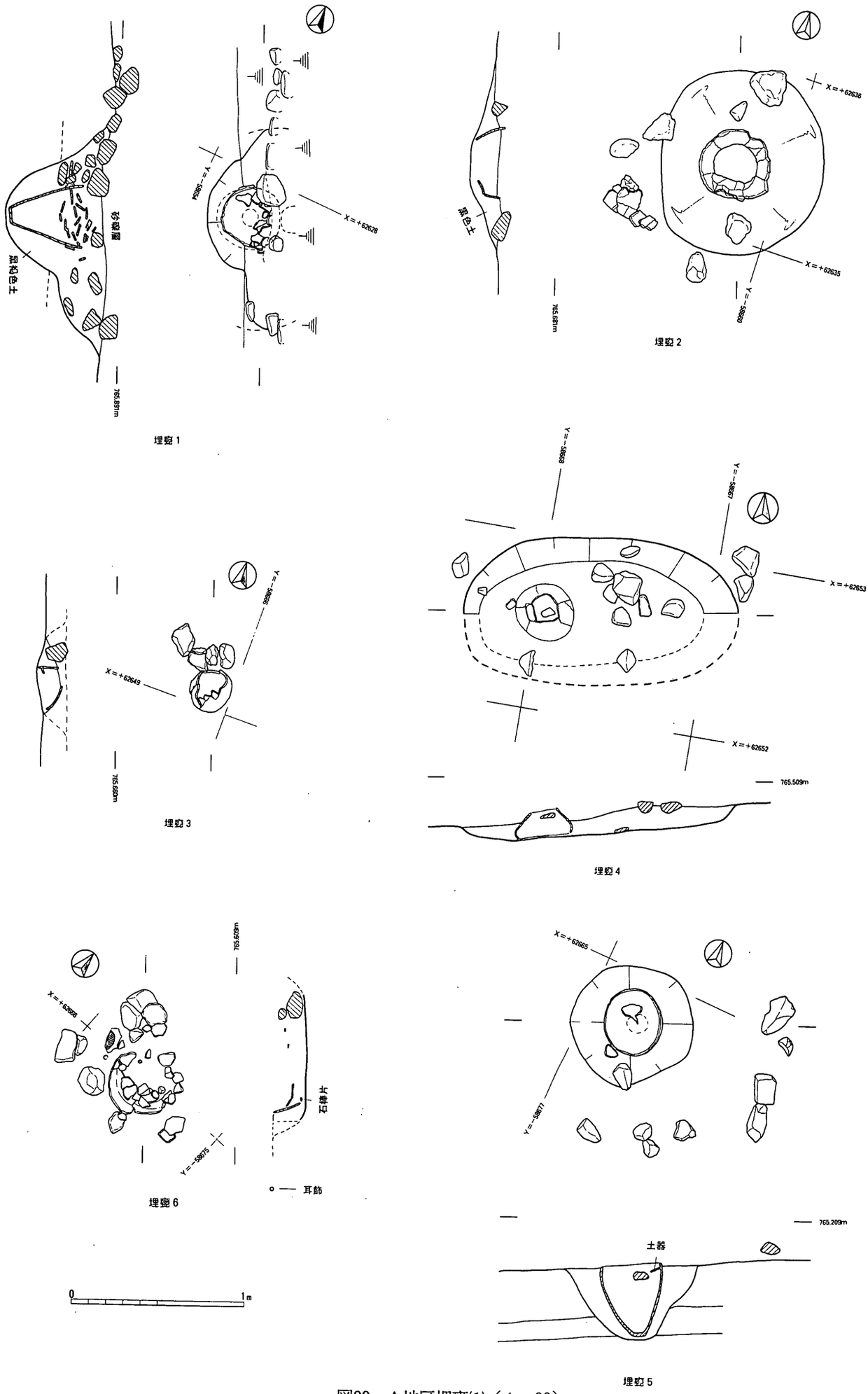
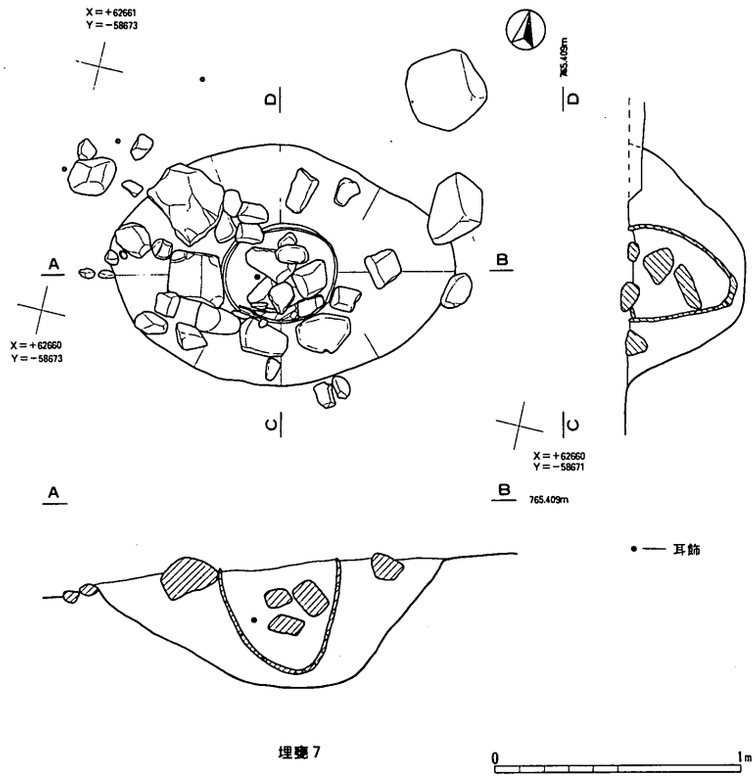


図22　A地区埋甕(1)（1：30）



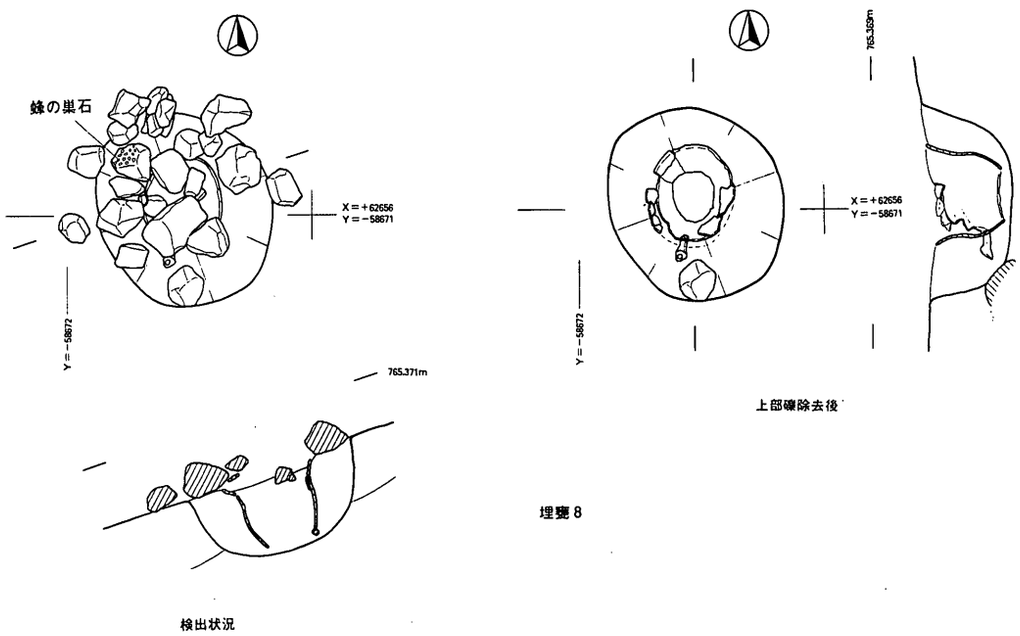


図23　A地区埋甕(2)（1：30）

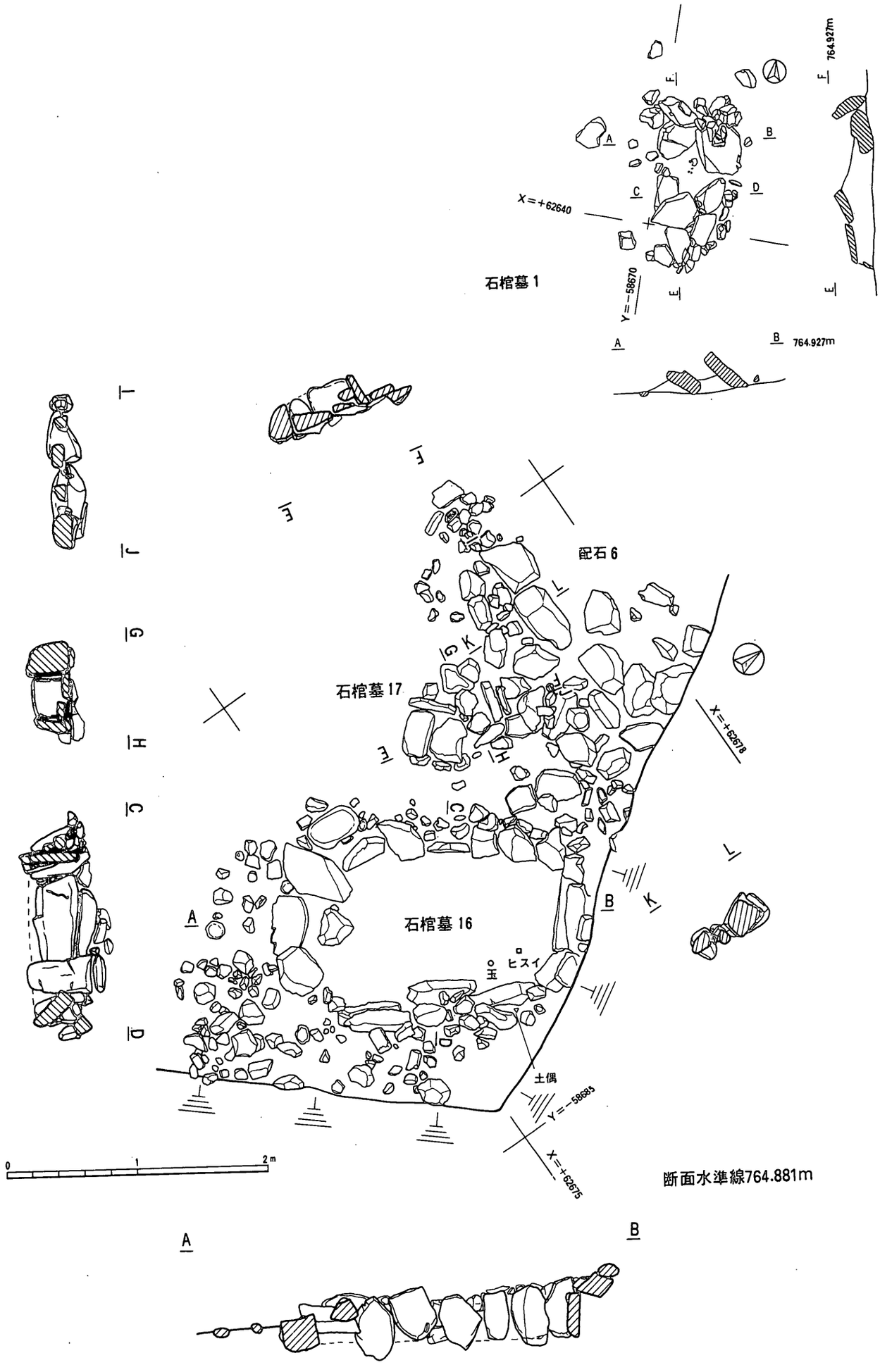


図24　A地区石棺墓1・6・17配石6（1：40）

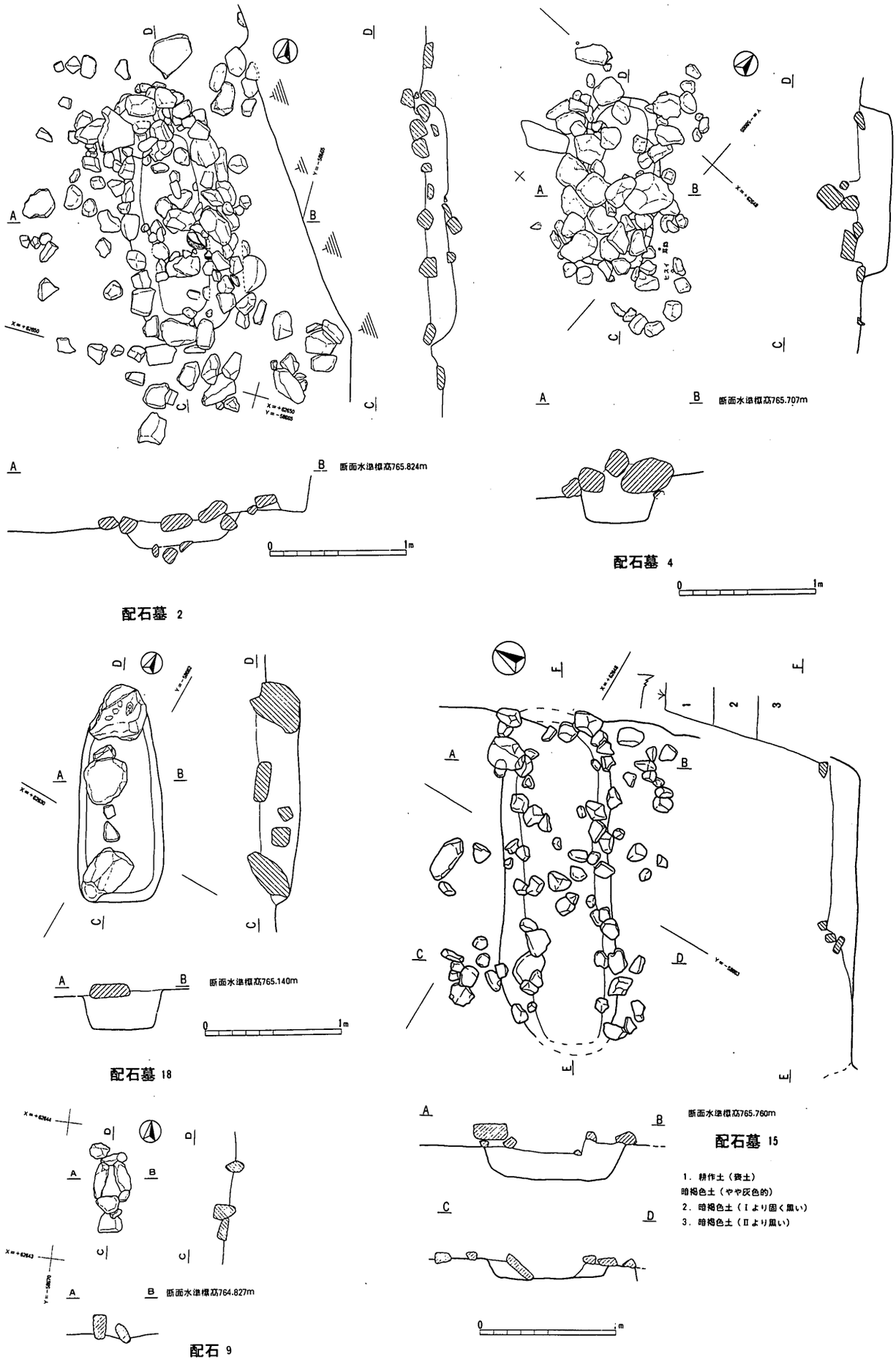


図25　A地区配石墓2・4・15配石9（1：40）

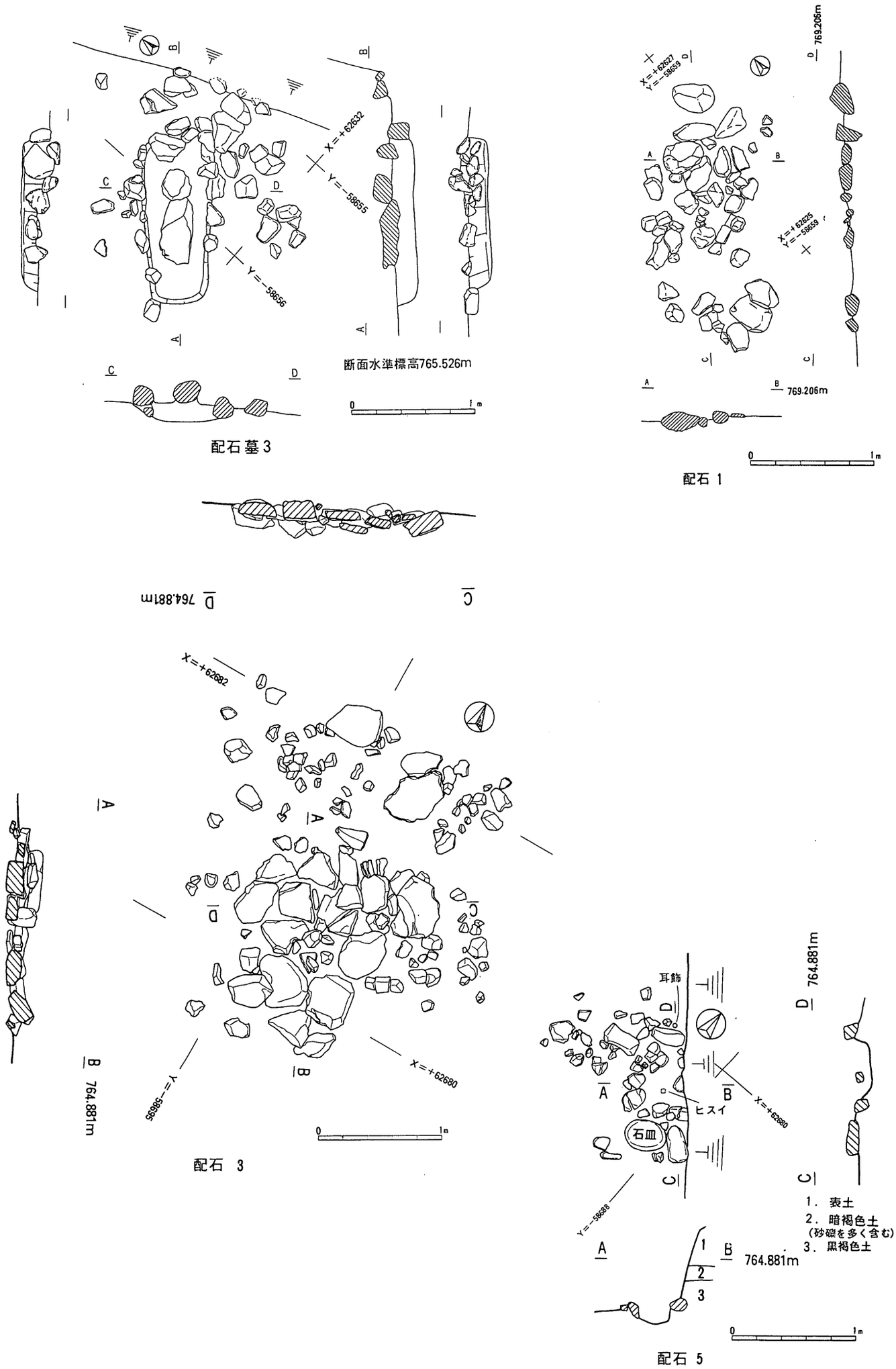


図26　A地区配石墓3配石1・3・5（1：40）

図27　A地区上層配石墓5～14（1：60）（上は上部配石面・下は下部土拡）
（土拡内数字は配石部よりの深さ）

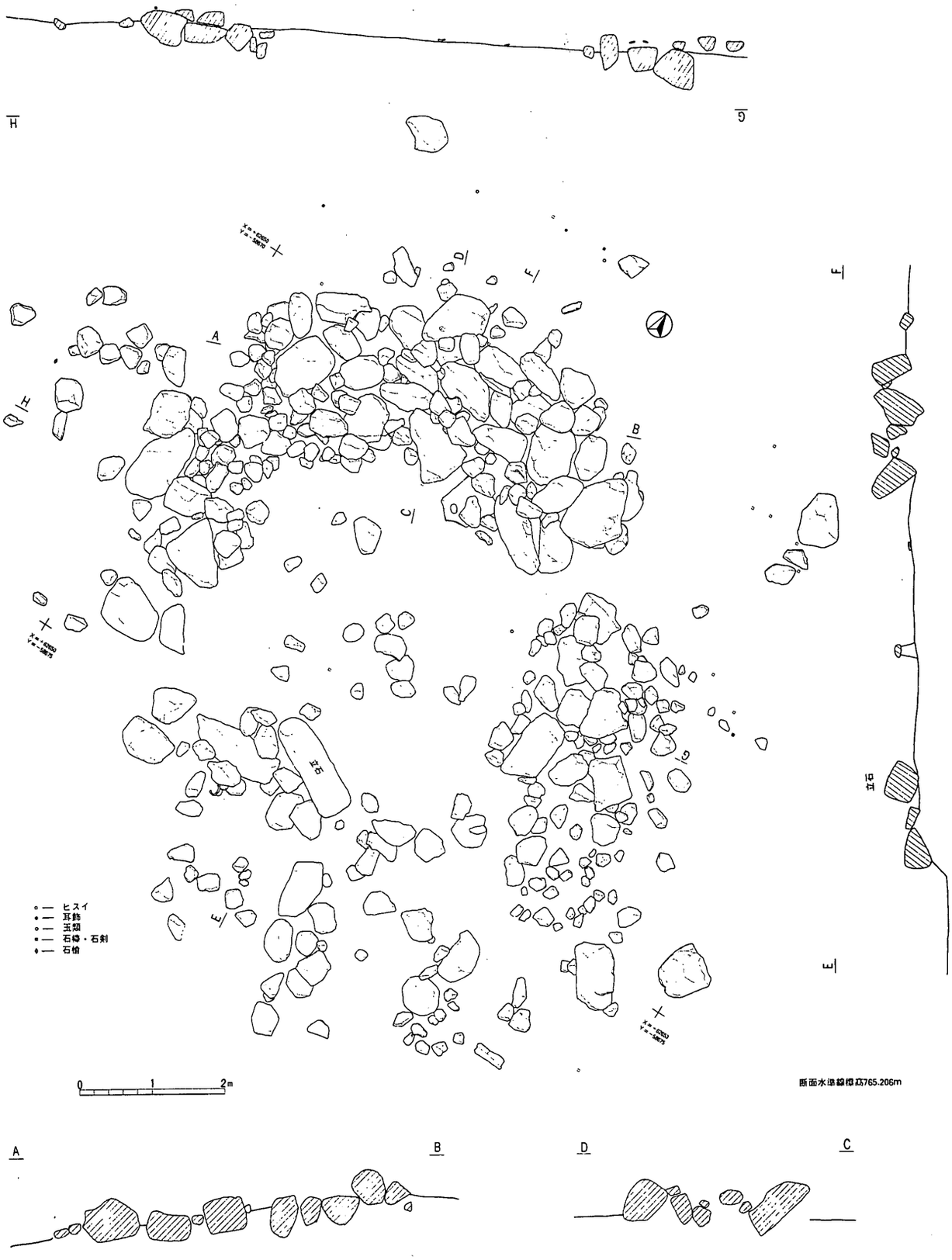
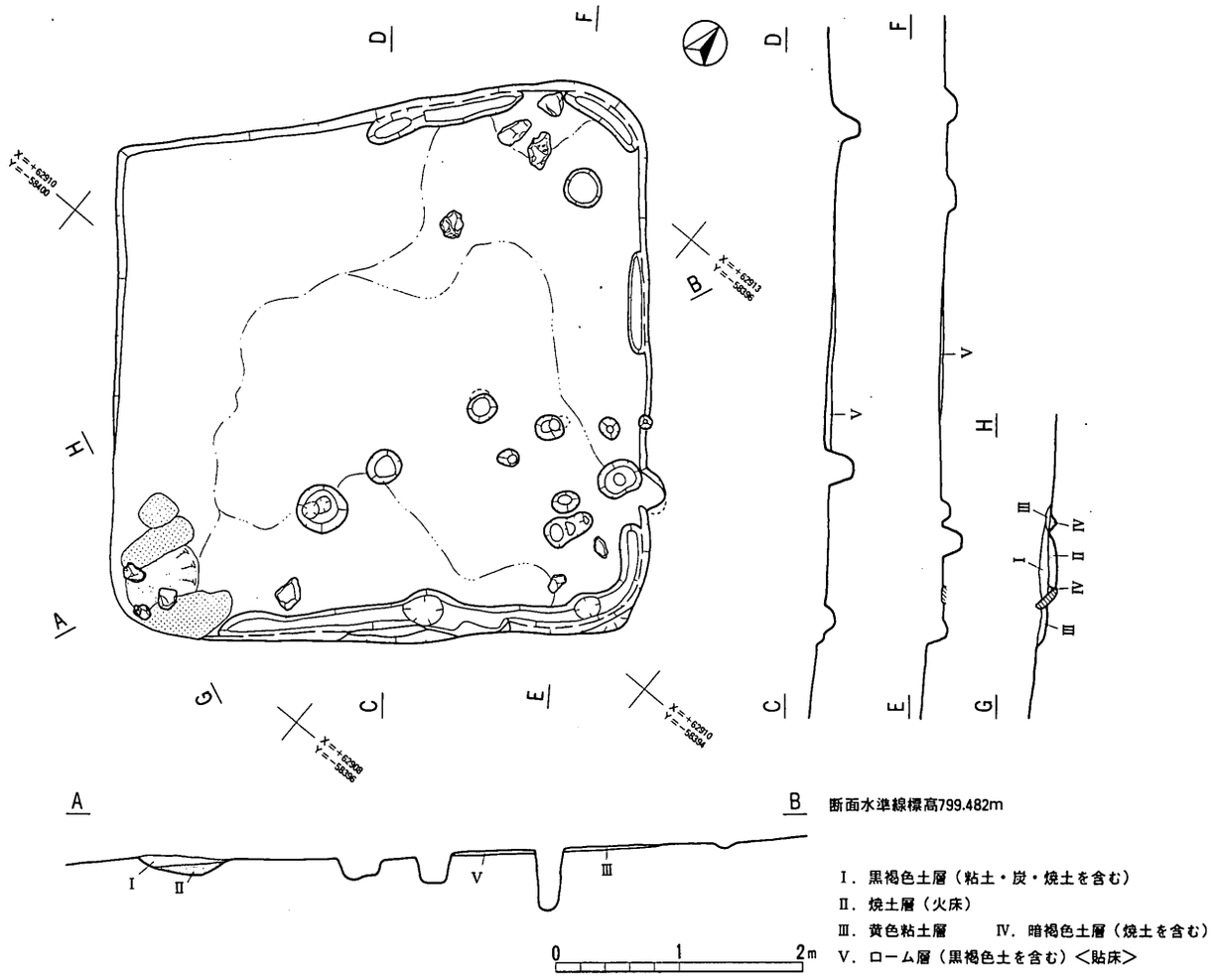


図28　A地区Ⅰ区K・L～17・18上～中層下部～中層・円形配石（1：40）



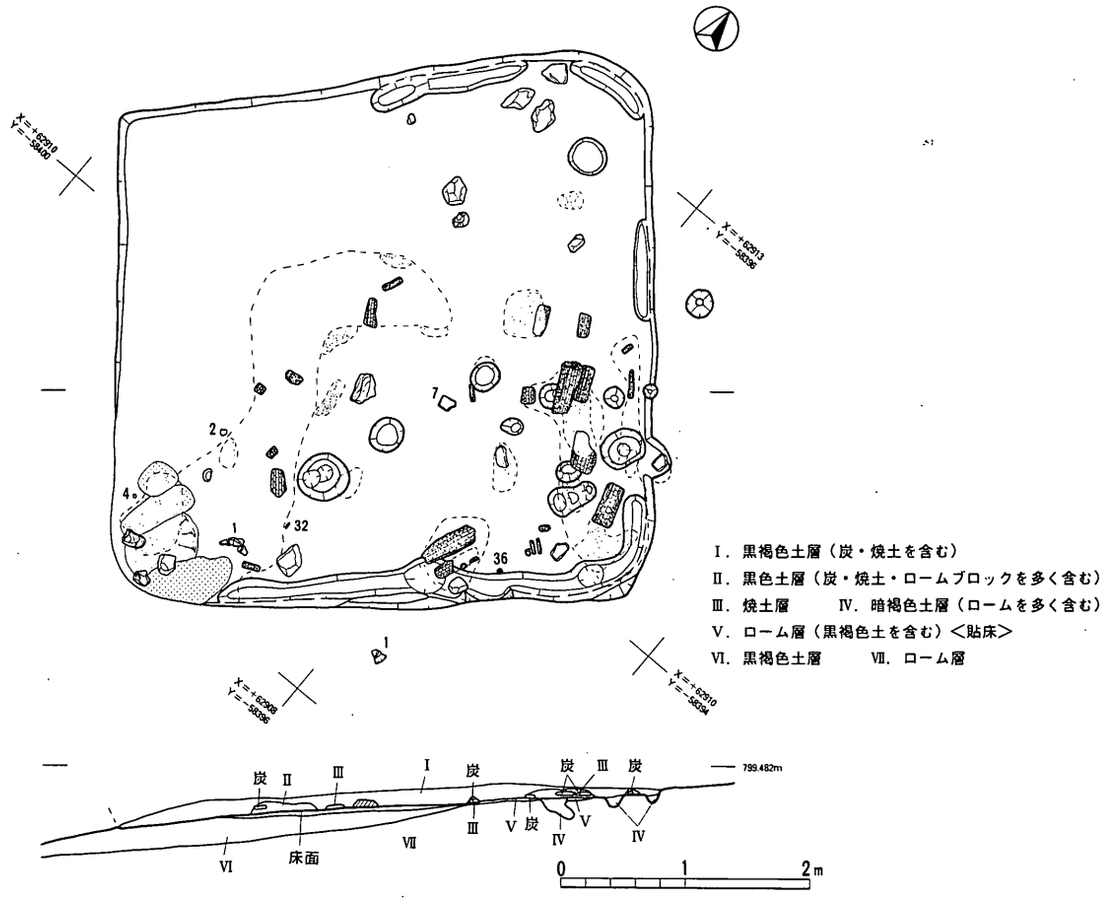


図29　B地区Ⅳ区101号住居跡実測図（上）炭化物・遺物出土状況（下）（1：60）

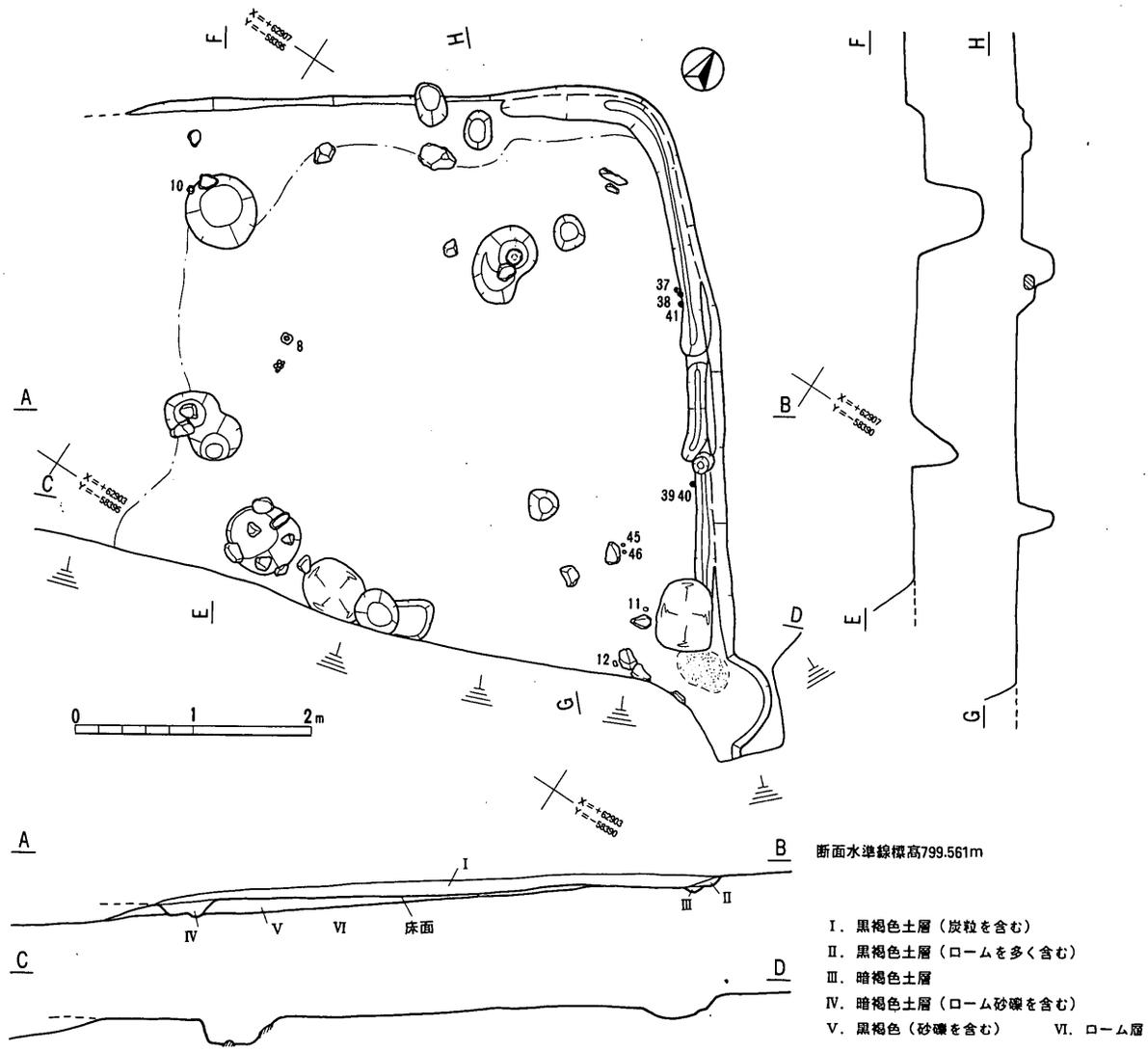


図30　B地区Ⅳ区102号住居跡（1：60）（番号は遺物番号）

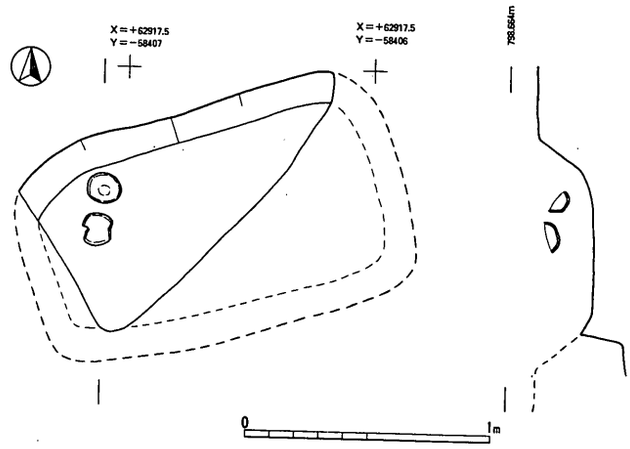


図35　B地区Ⅳ区土拡3（平安時代土拡）（1：30）

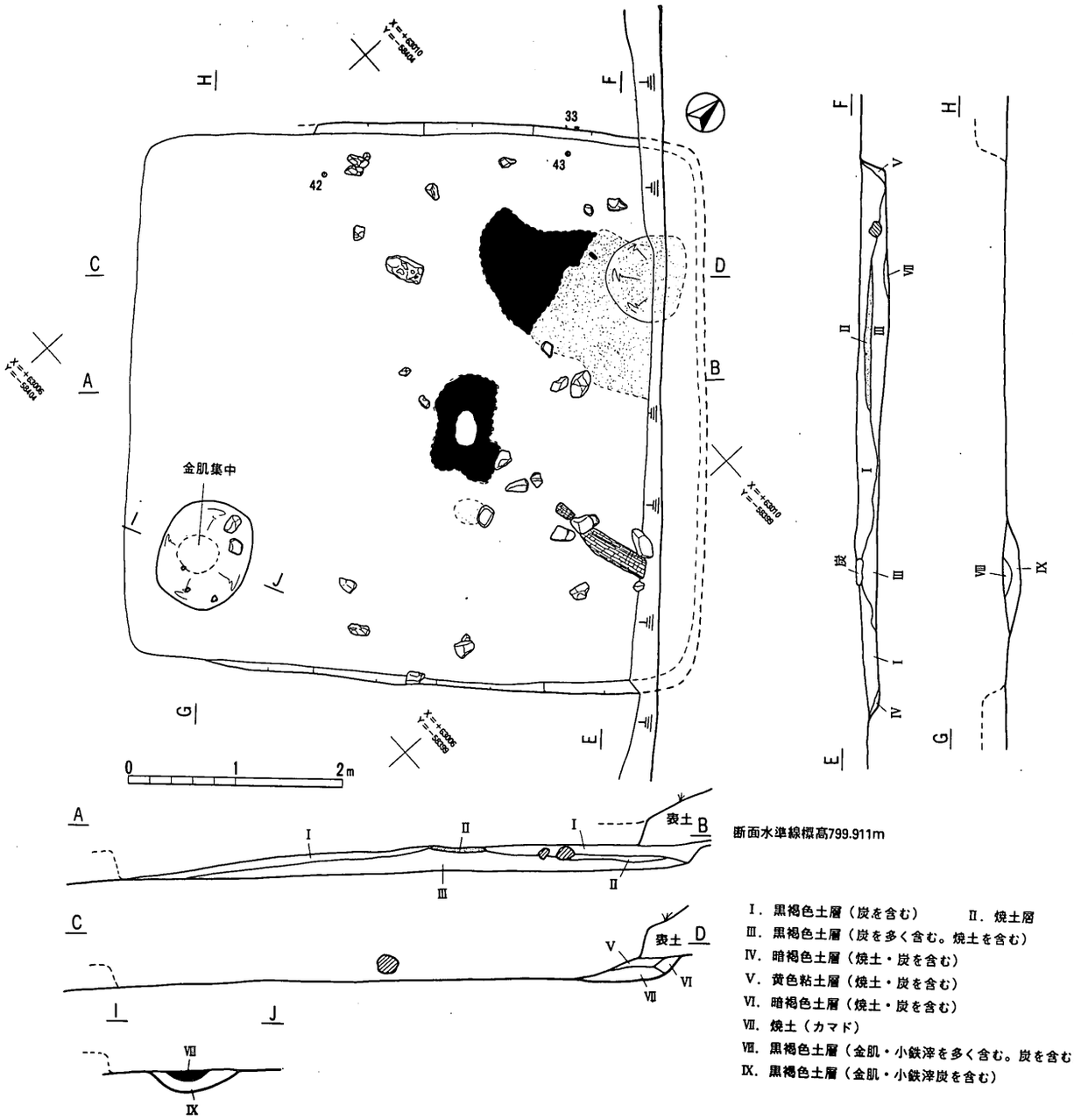


図31　B地区Ⅳ区103号住居跡（1：60）

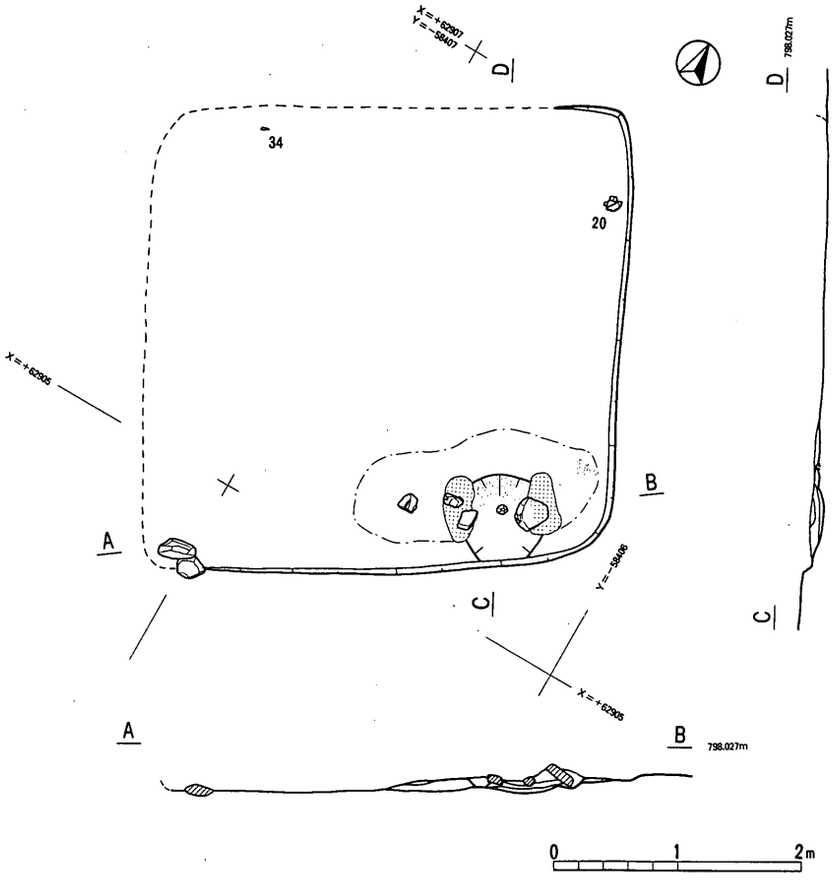


図32　B地区Ⅳ区104号住居跡（1：60）（番号は遺物番号）

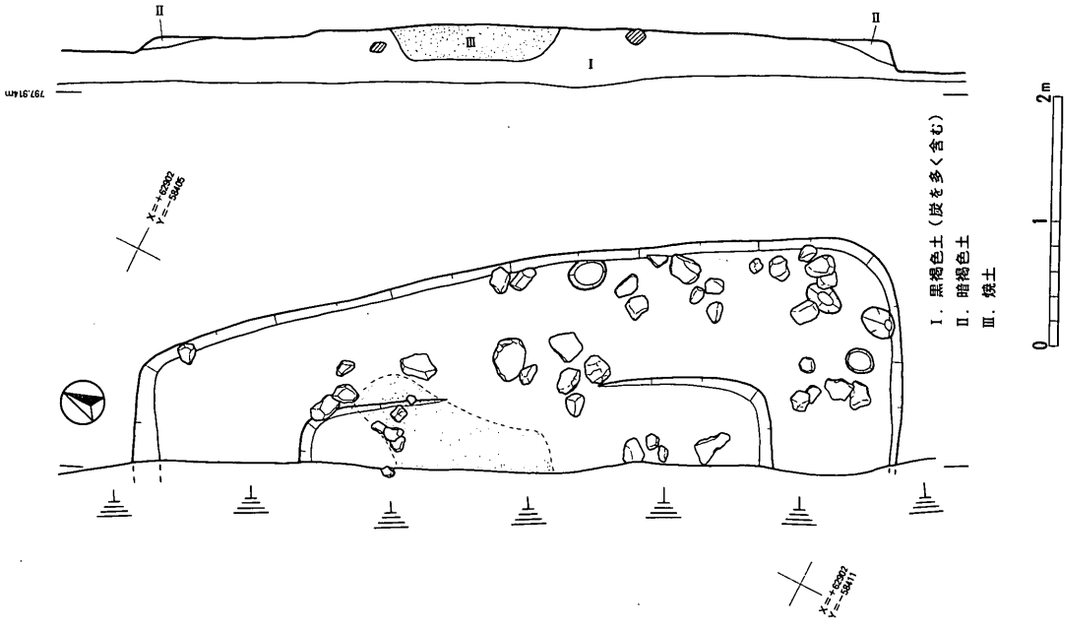


図34　B地区Ⅳ区106住（1：60）
B地区Ⅳ区縄文時代早期後半・前期未集石（1：80）

図33　B地区IV区105・107住居跡（1：60）（上）
105号住居跡カマド（1：30）（下）

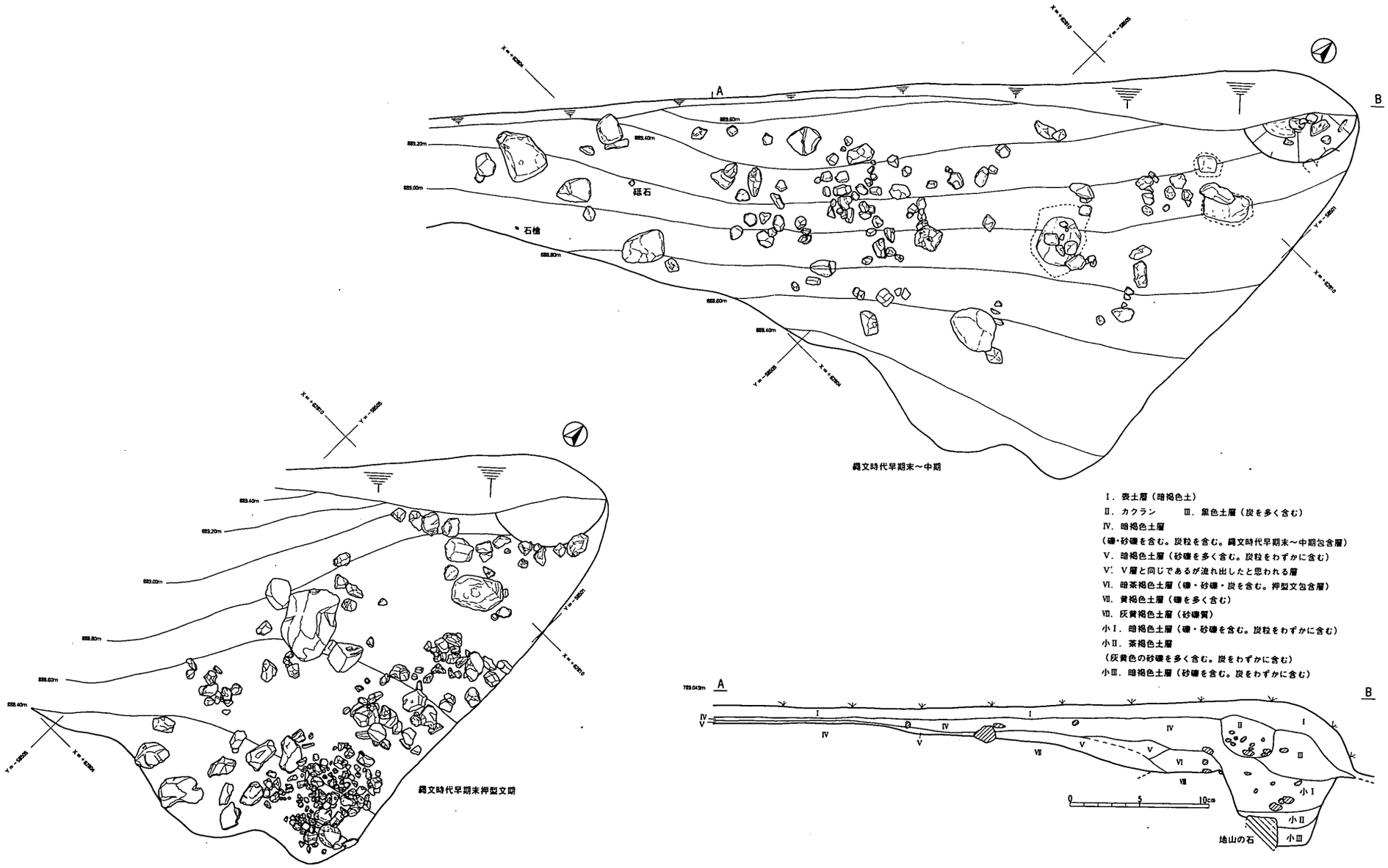


図36　B地区Ⅰ区礫出土状況（1：80）

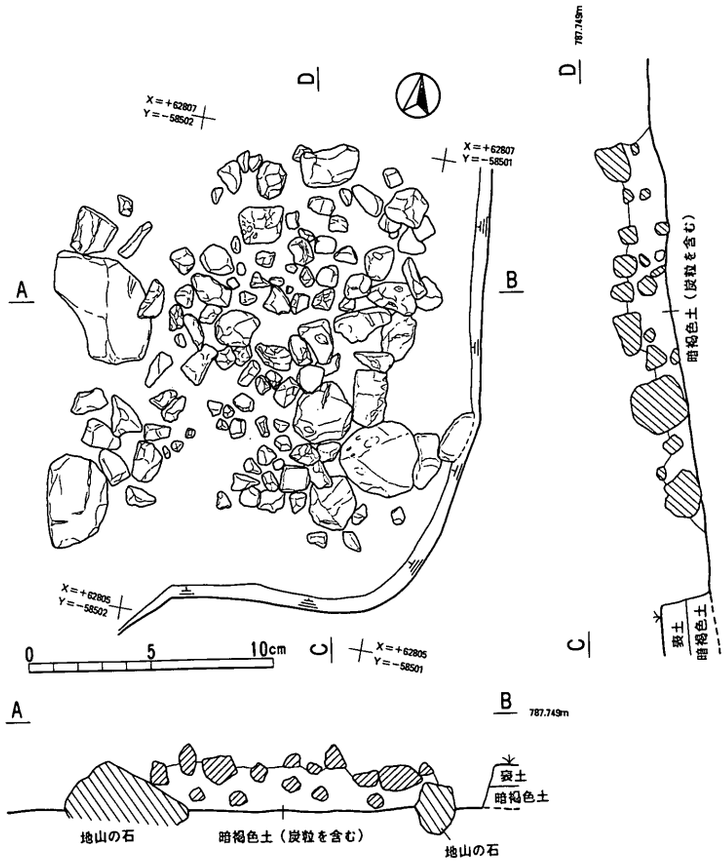


図37　B地区Ⅰ区縄文時代早期（押型文期）集石（1：30）

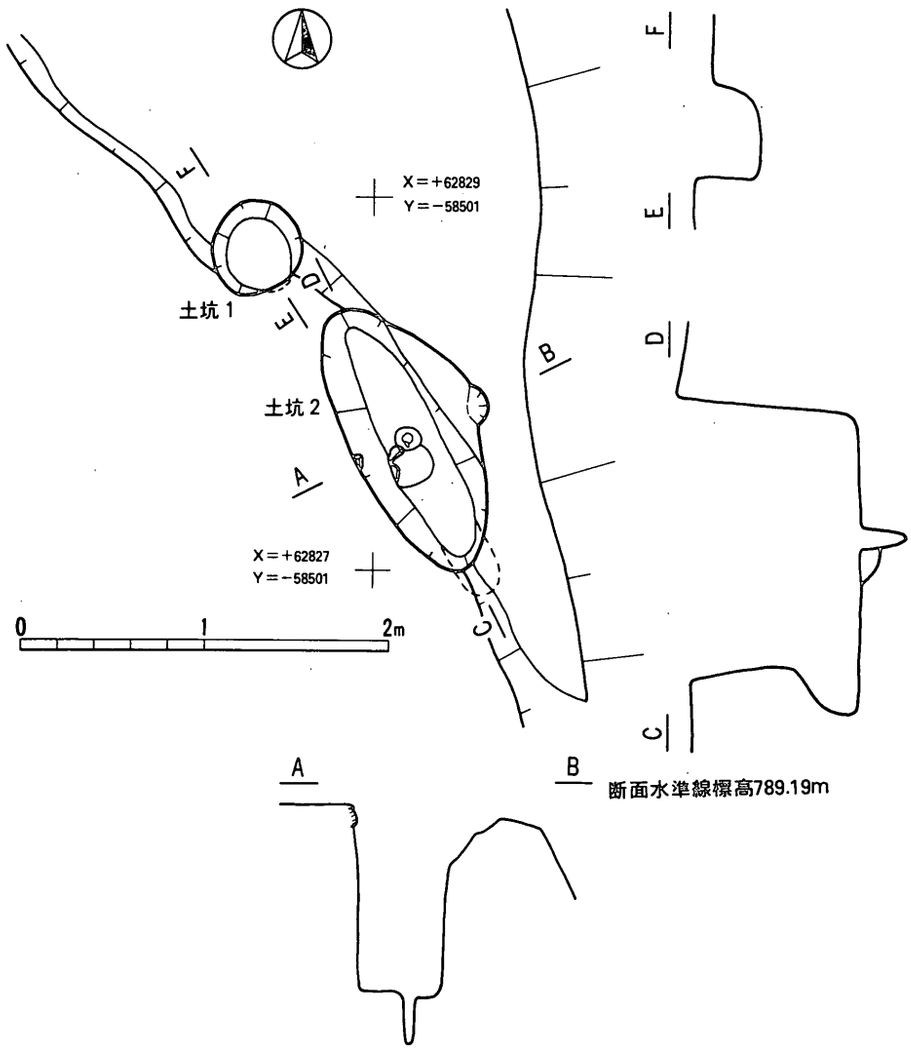


図38　B地区Ⅱ区土坑1、土坑2（1：40）

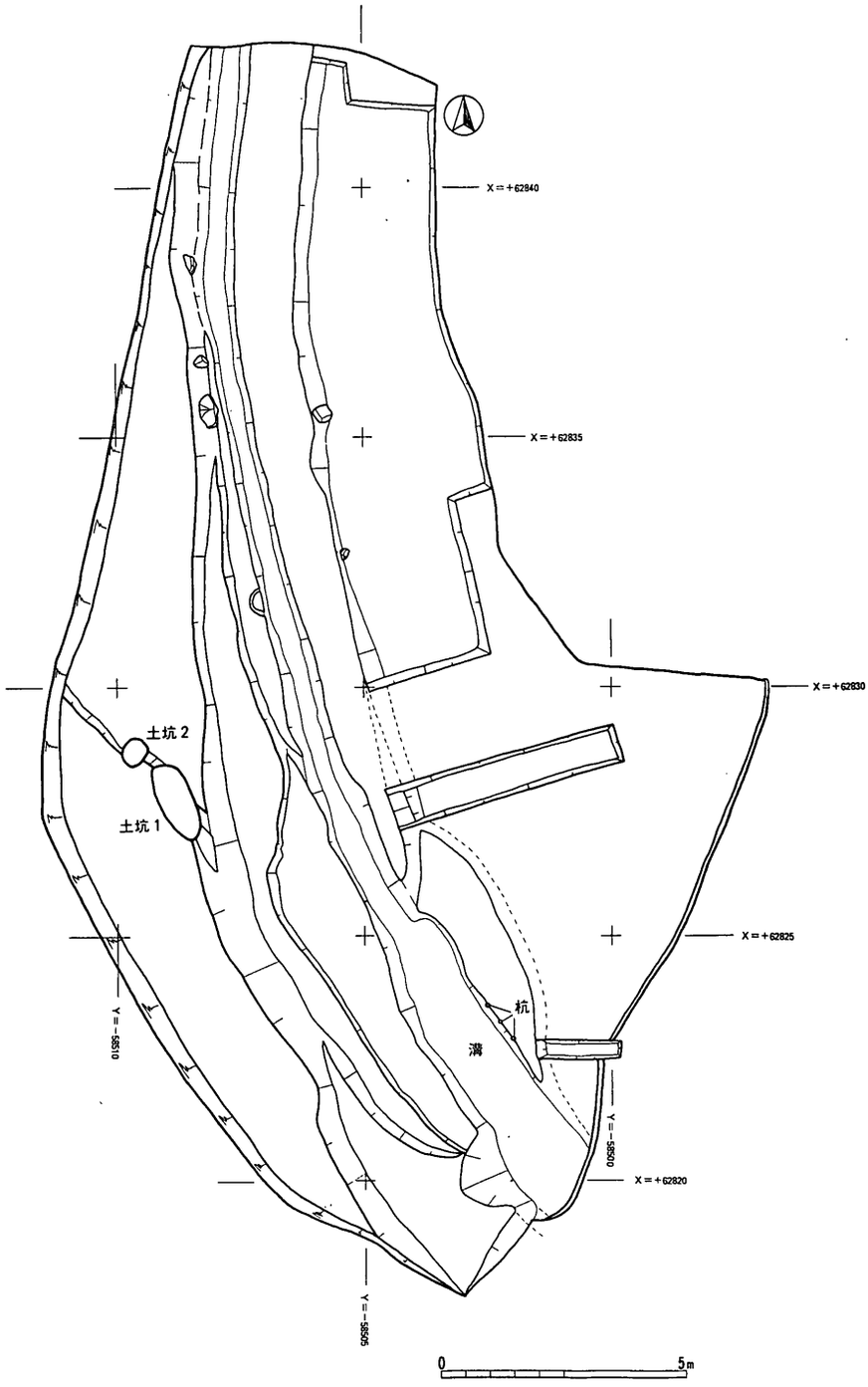


図39　B地区Ⅱ区全体図（1：150）

図40　B地区Ⅳ区縄文時代早期後半・前期末集石（1：80）

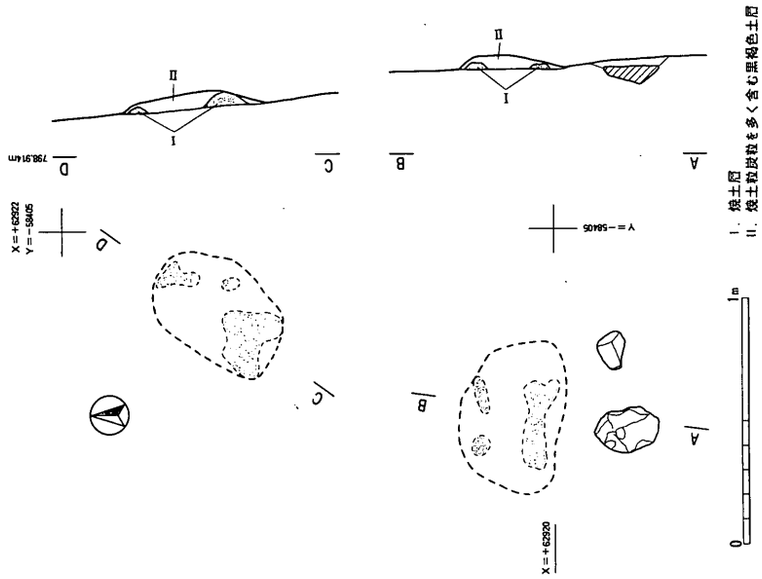


図41　B地区Ⅳ区縄文時代早期（押型文期）焼土（1：60）

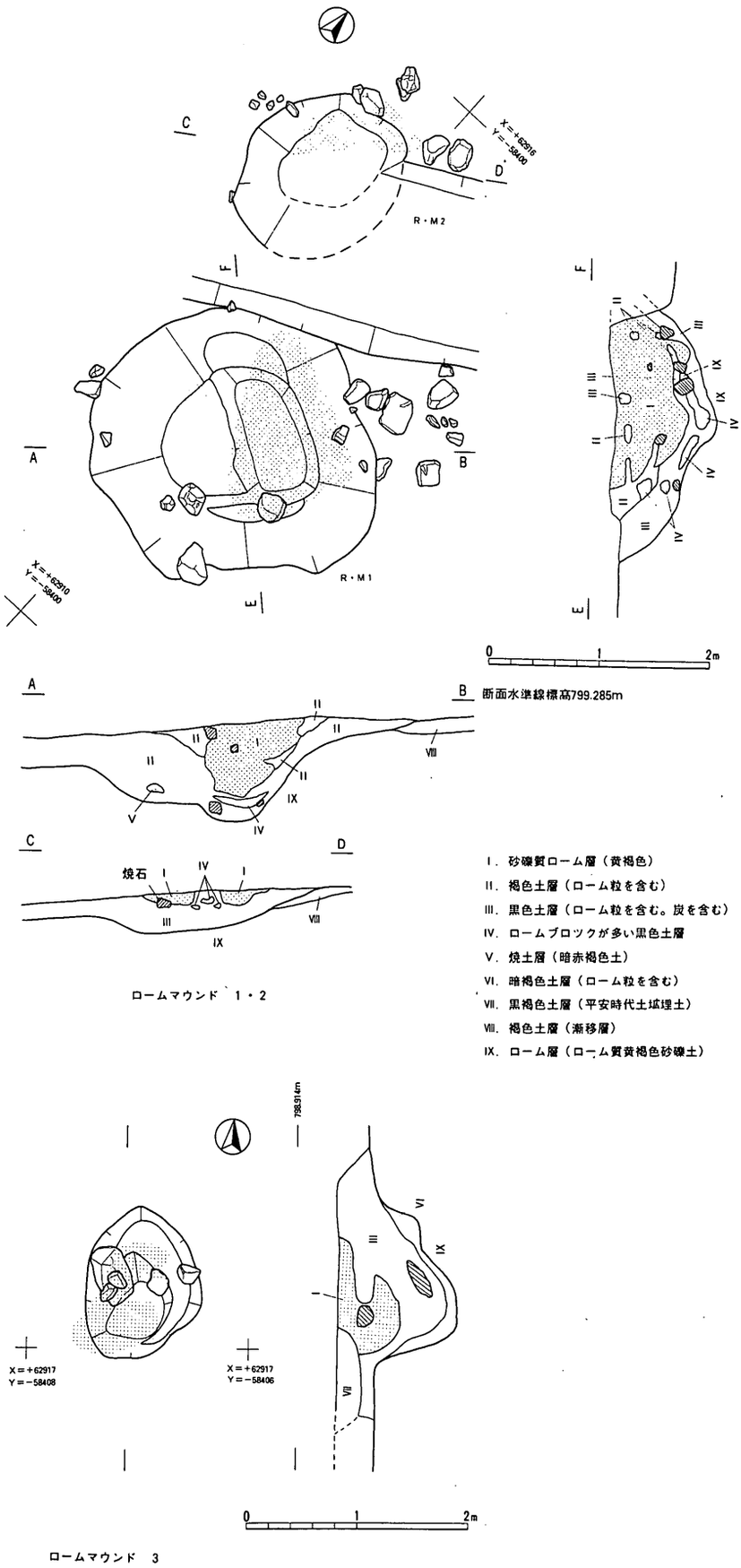
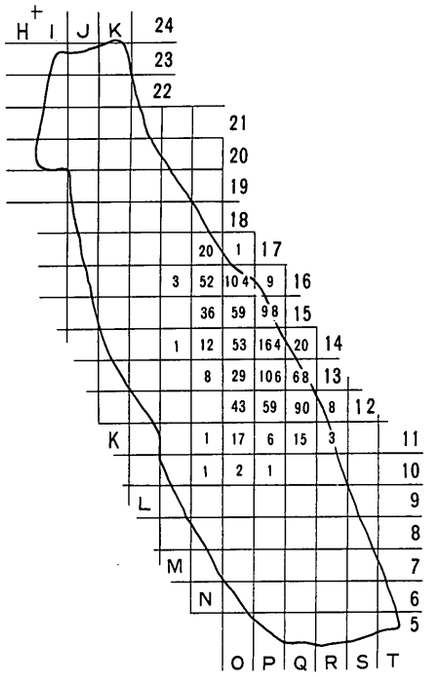
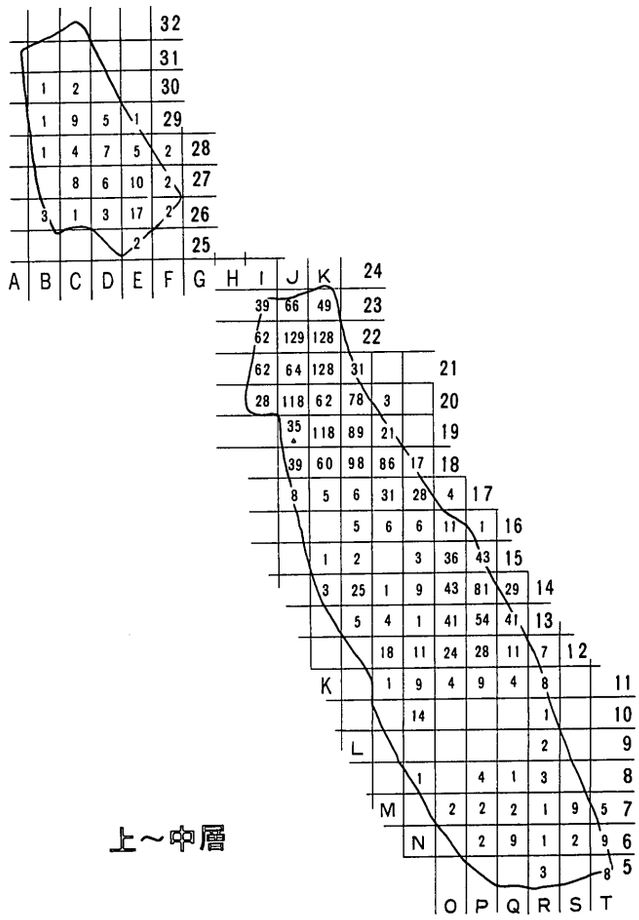


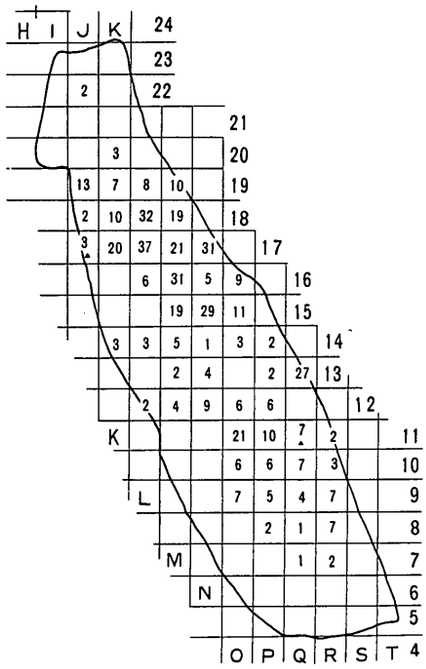
図42　B地区Ⅳ区ロームマウンド（1：60）



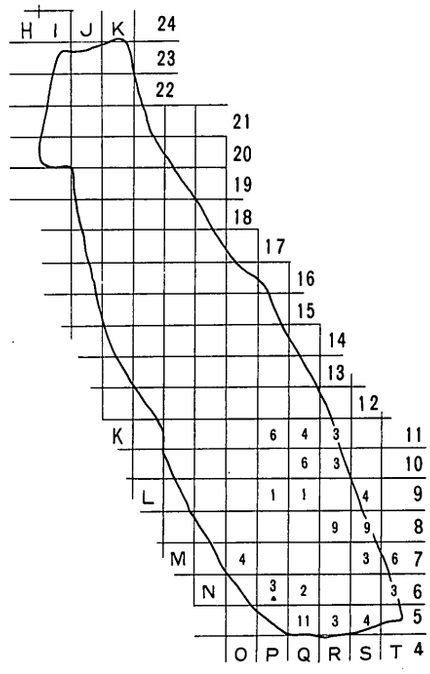
上層



上～中層



中層

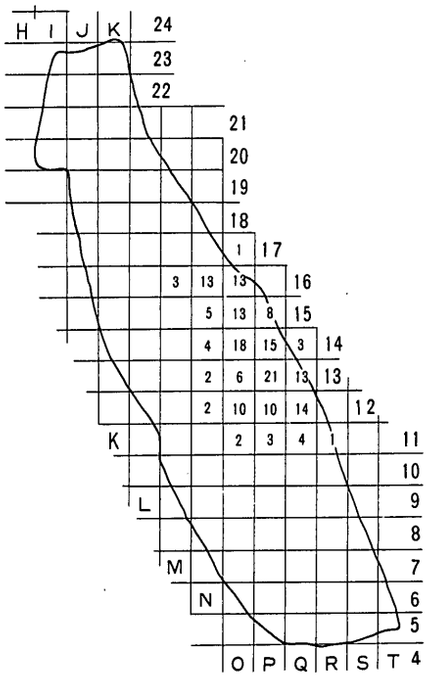


中～下層・下層

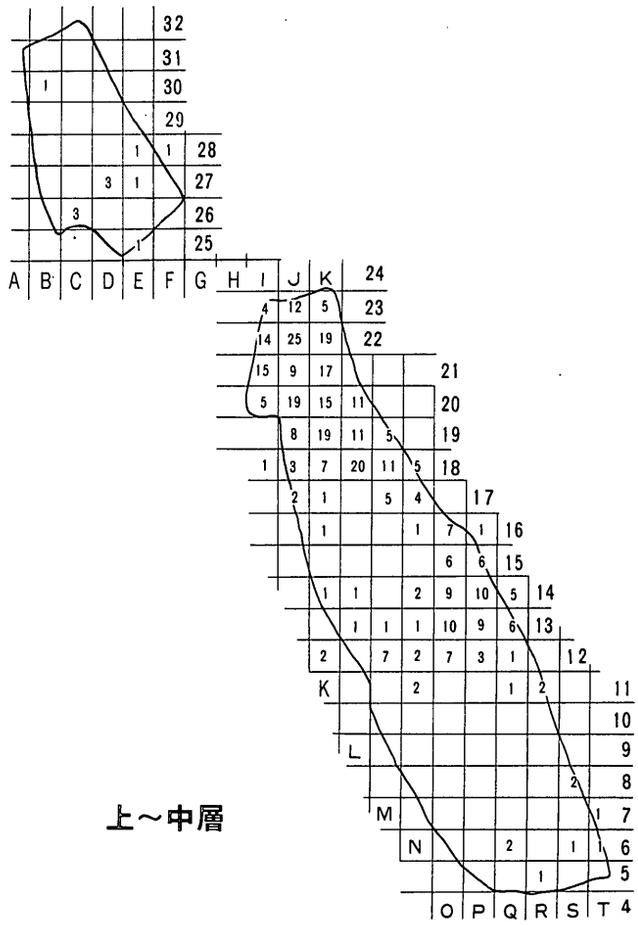
▲— 石槍

単位：個

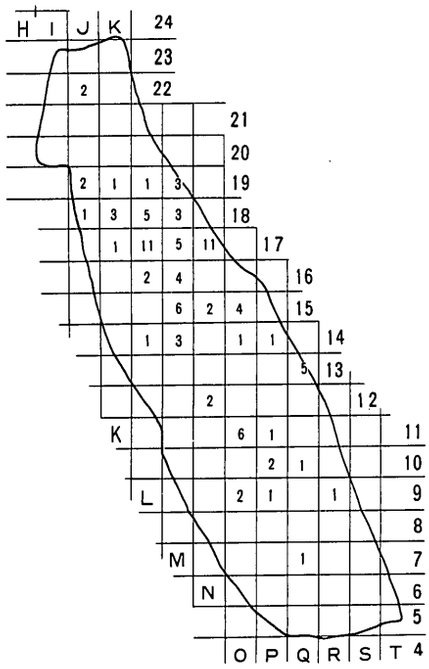
図43　A地区石鏃分布図（1：600）



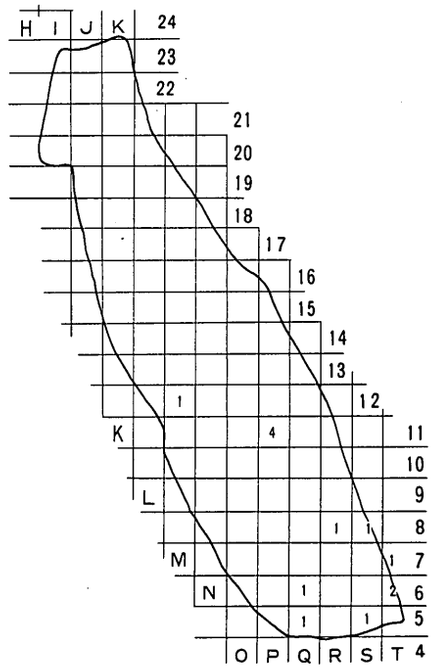
上層



上～中層



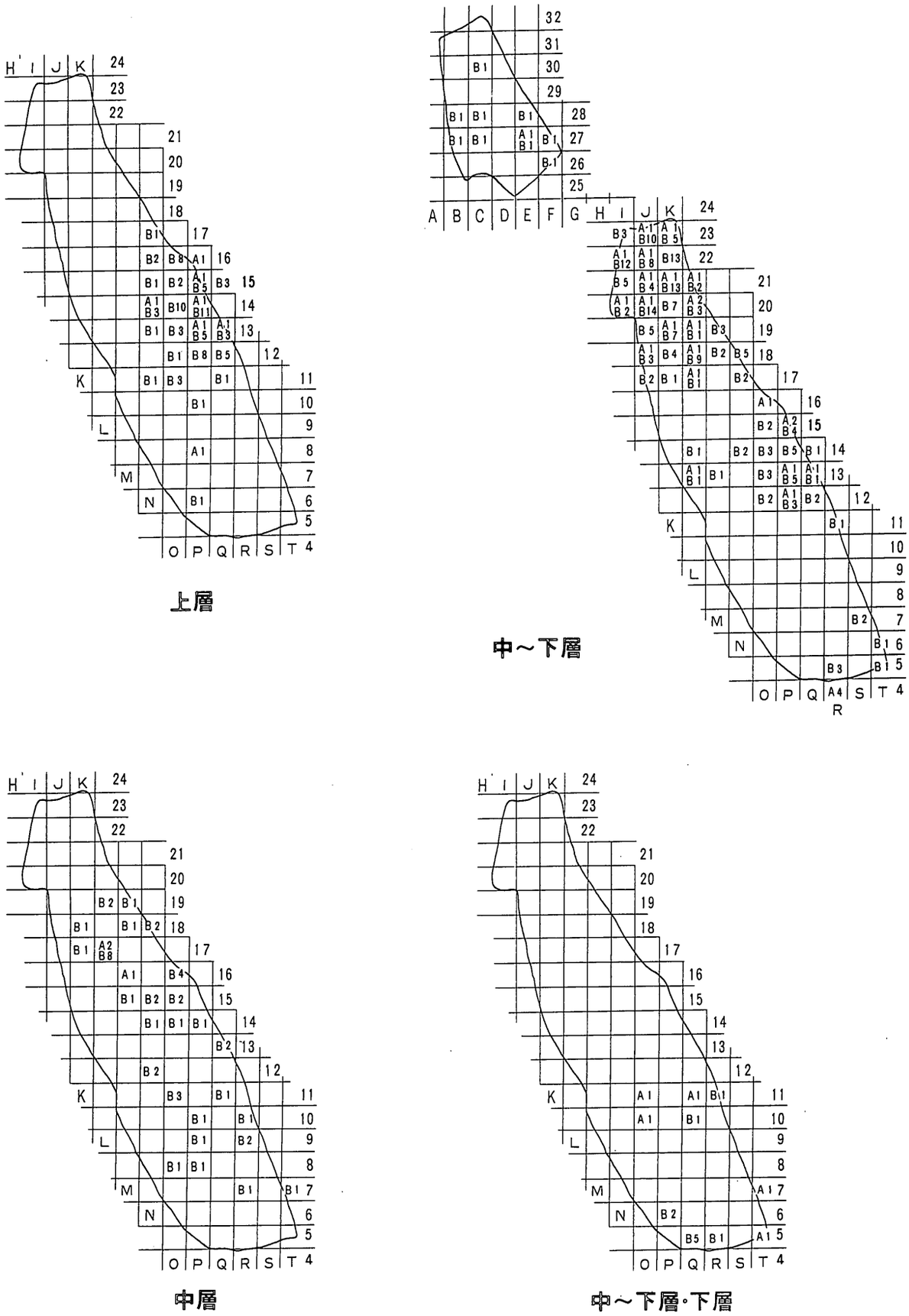
中層



中～下層・下層

単位：個

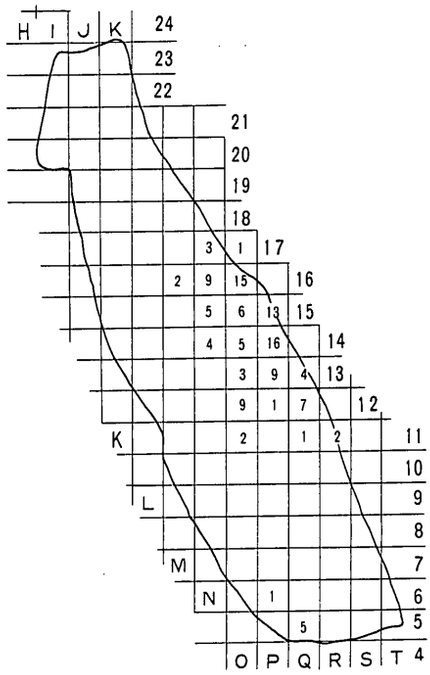
図44　A地区石錐分布図（1：600）



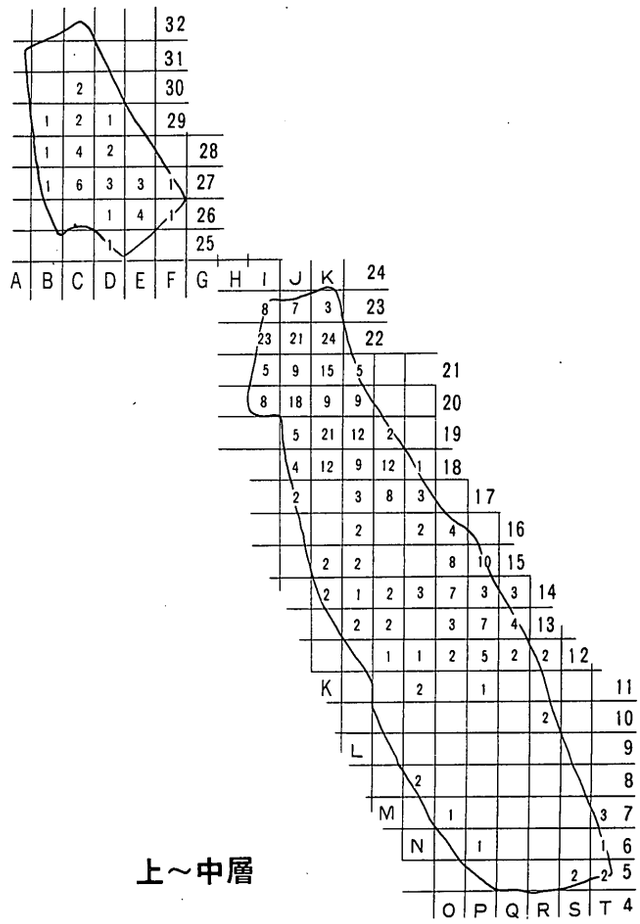
A— 石匙
B— スクレイパー

単位：個

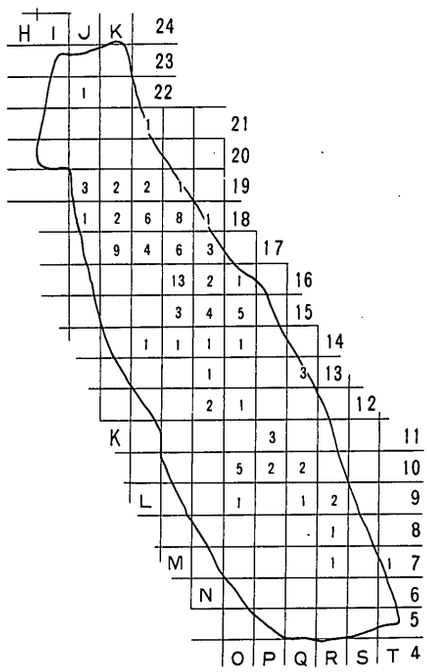
図45　A地区石匙・スクレイパー分布図（1：600）



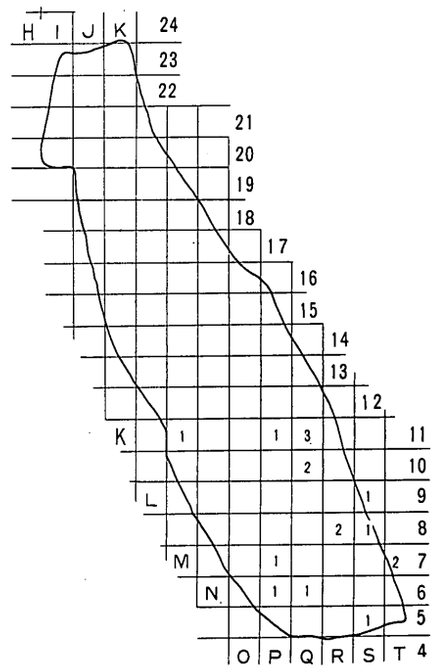
上層



上～中層



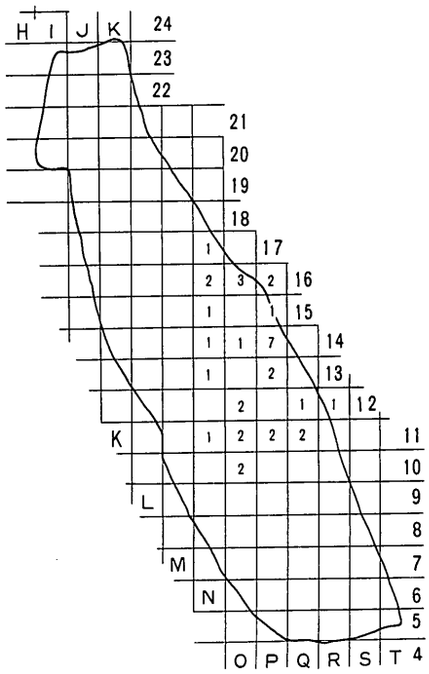
中層



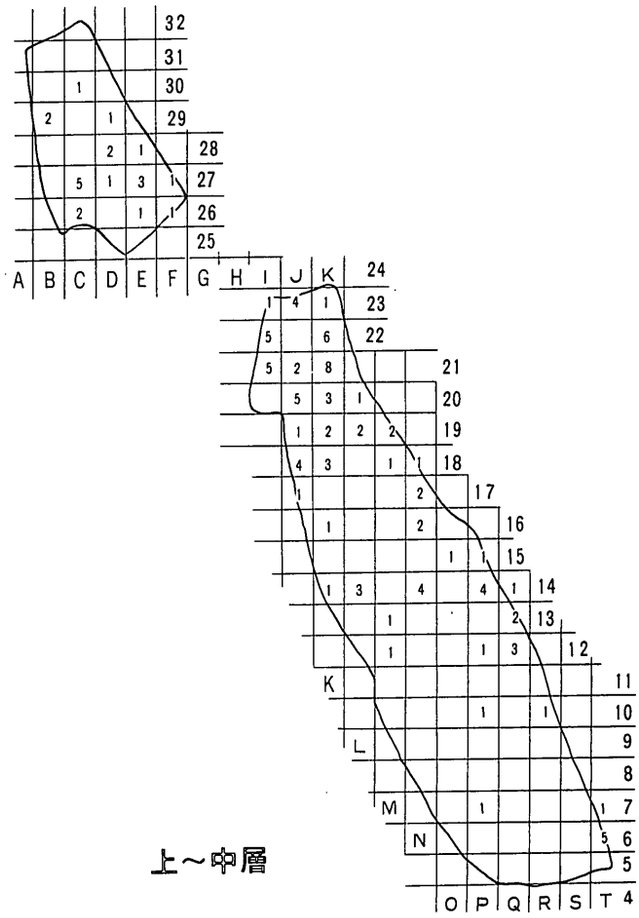
中～下層・下層

単位：個

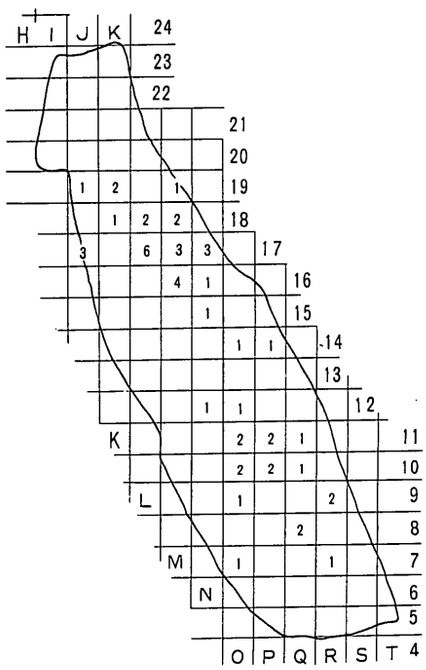
図46　A地区ピエス・エスキーユ（楔形石器）分布図（1：600）



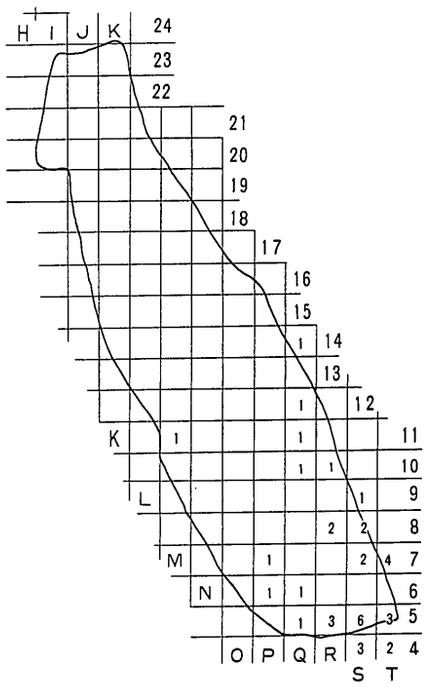
上層



上～中層



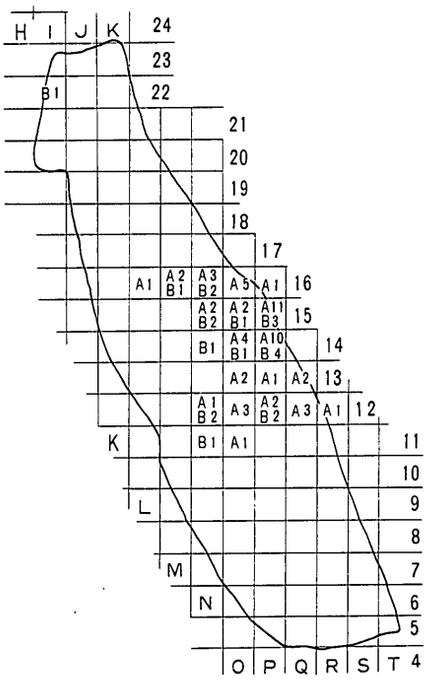
中層



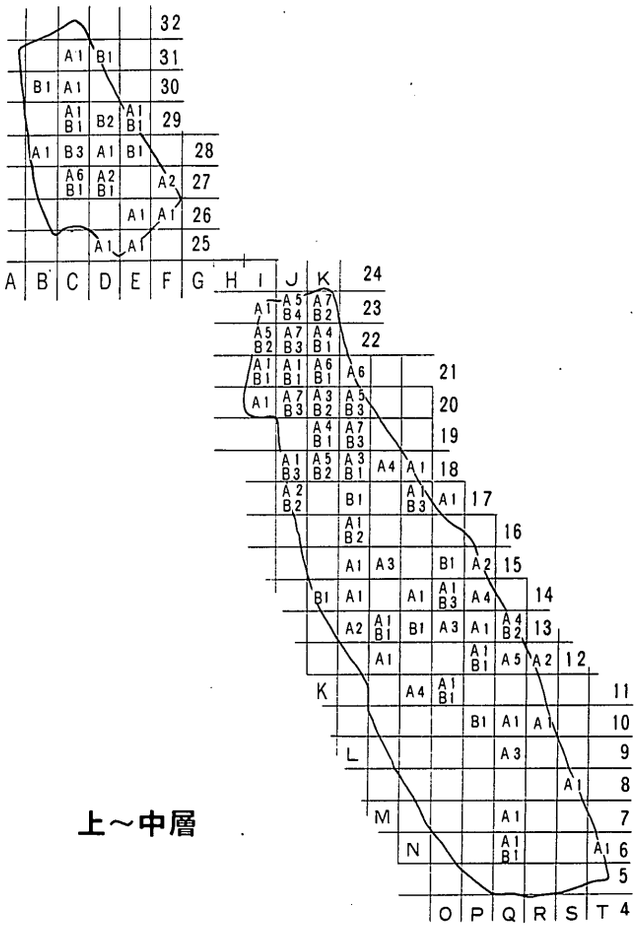
中～下層・下層

単位：個

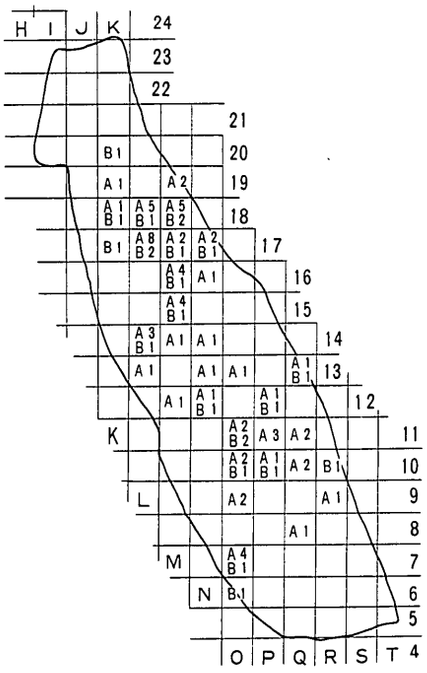
図47　A地区打製石斧分布図（1：600）



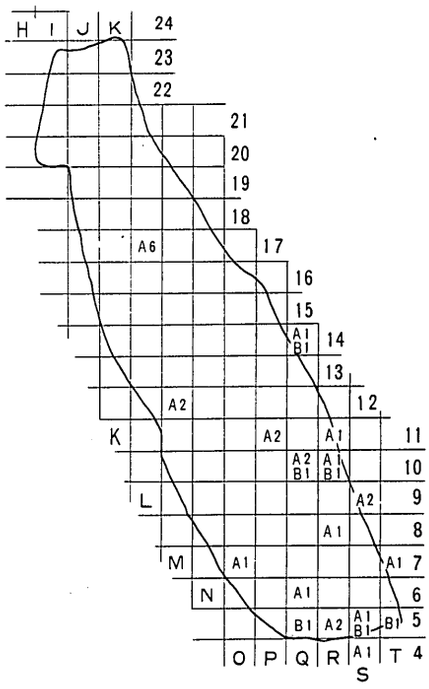
上層



上～中層



中層



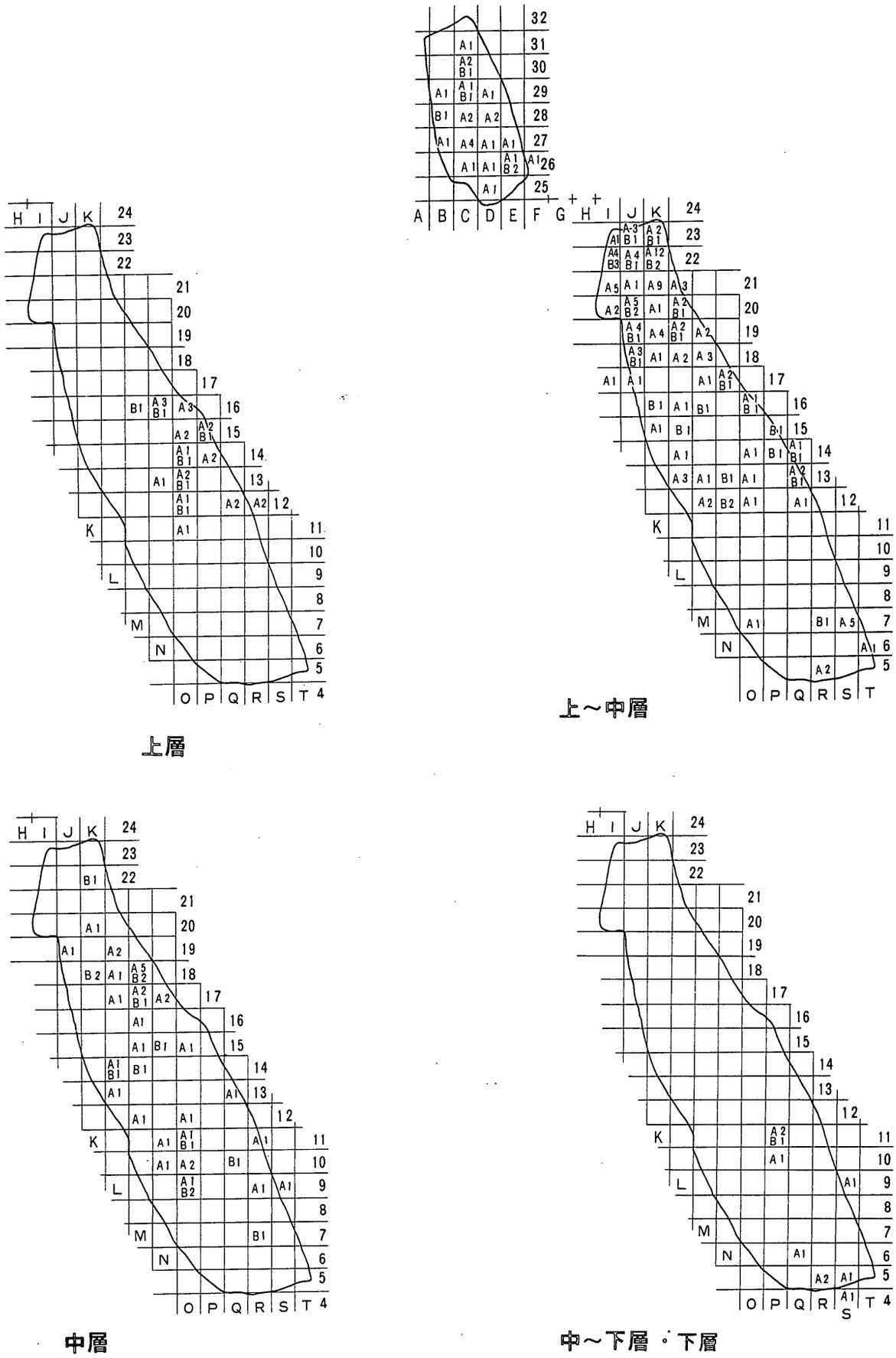
中～下層・下層

A ── 製品

B ── 未製品

単位：個

図48　A地区磨製石斧分布図（1：600）

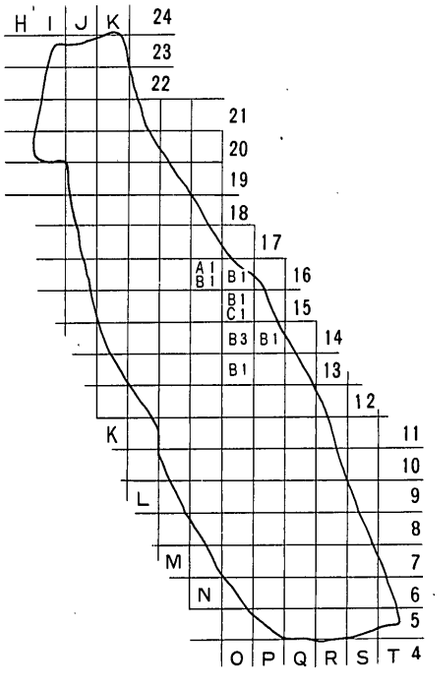


単位：個

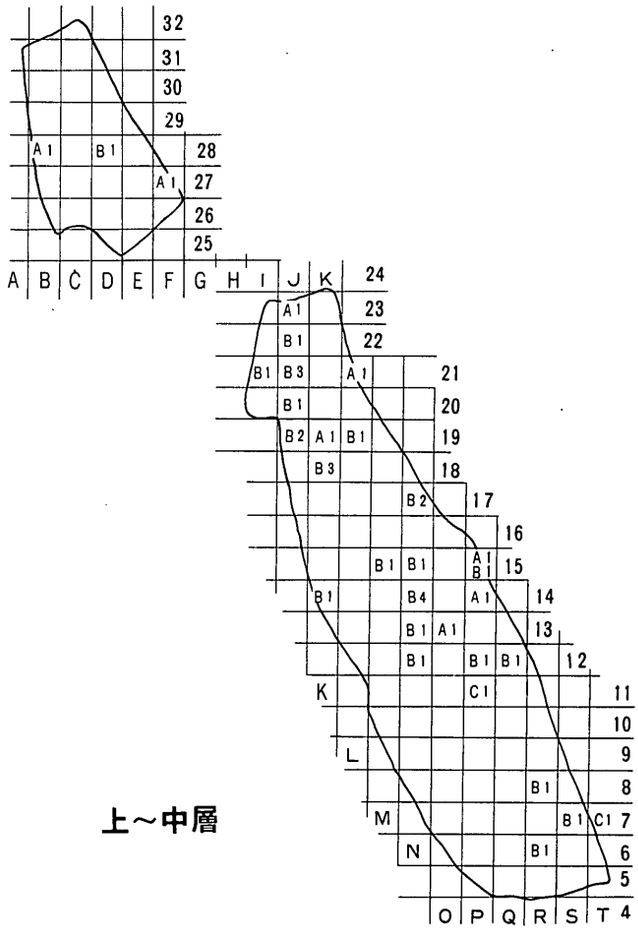
A —— 磨石

B —— 凹石

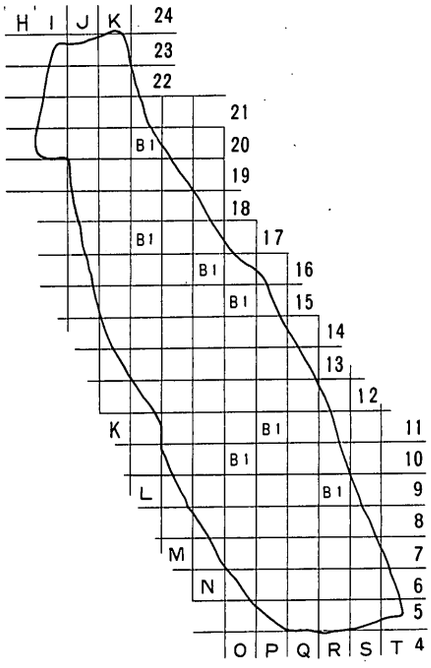
図49　A地区磨石・凹石分布図（1：600）



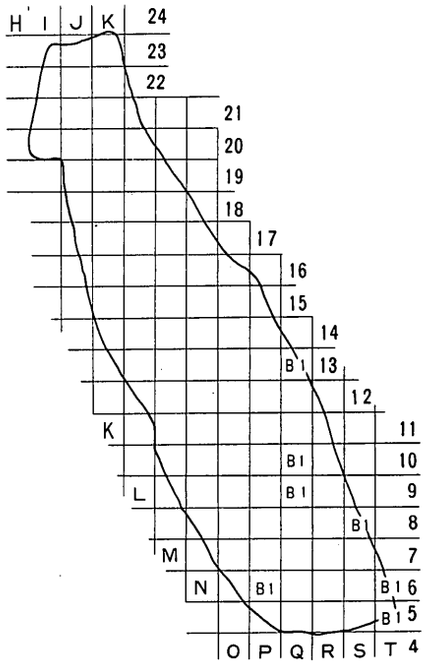
上層



上～中層



中層

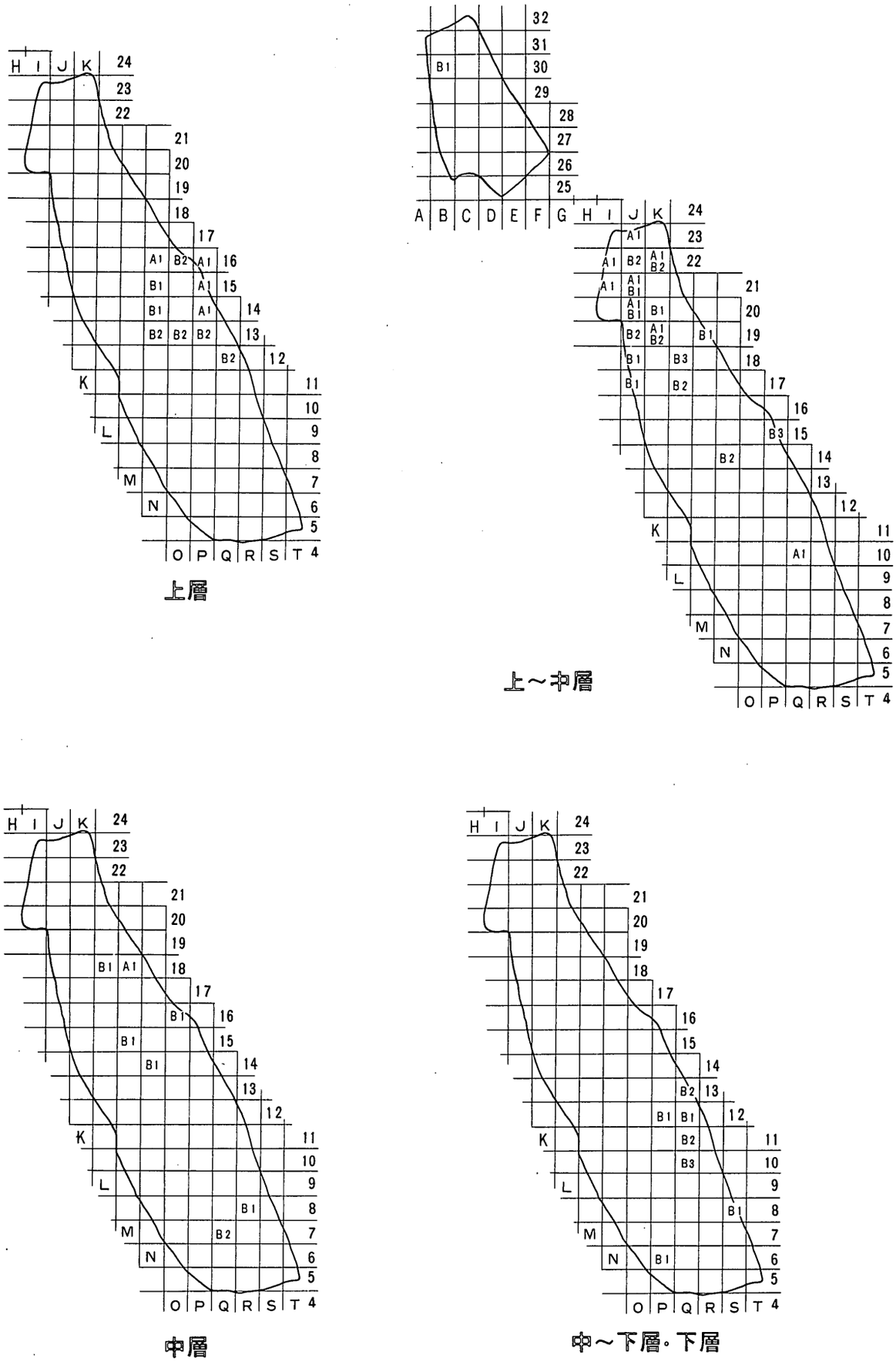


中～下層　下層

単位：個

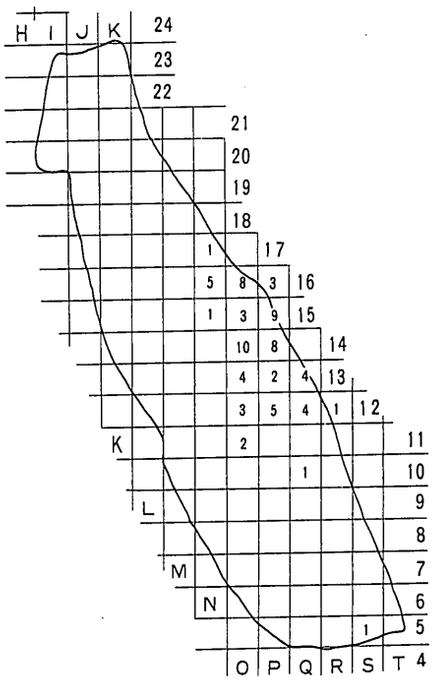
A ― ヒスイ
B ― 滑石

図50　A地区玉製品（ヒスイ・滑石）分布図（1：600）

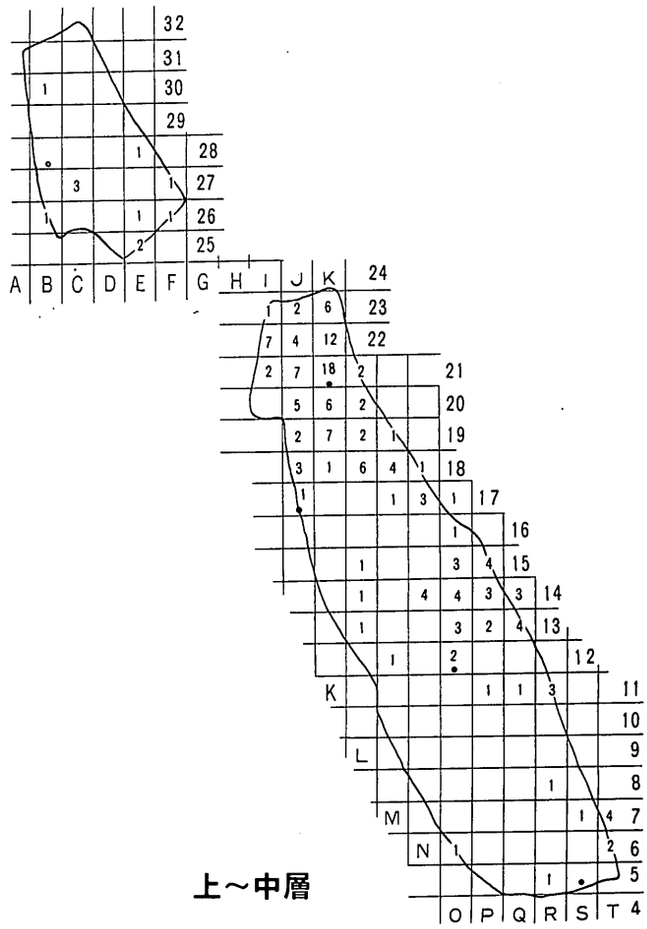


単位：個

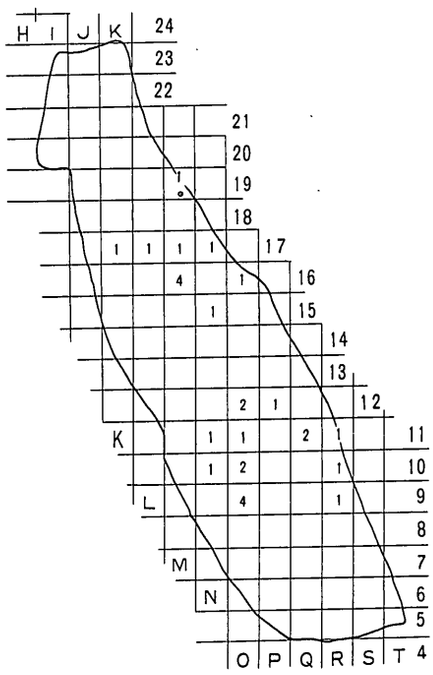
図51　A地区ヒスイ（硬玉）・滑石・玉未製品分布図（1：600）



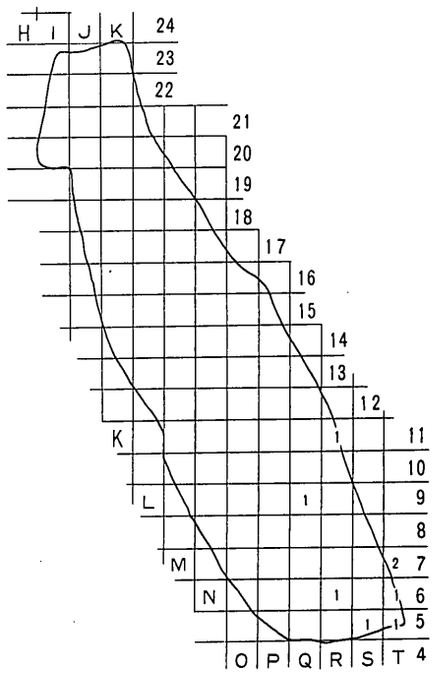
上層



上～中層



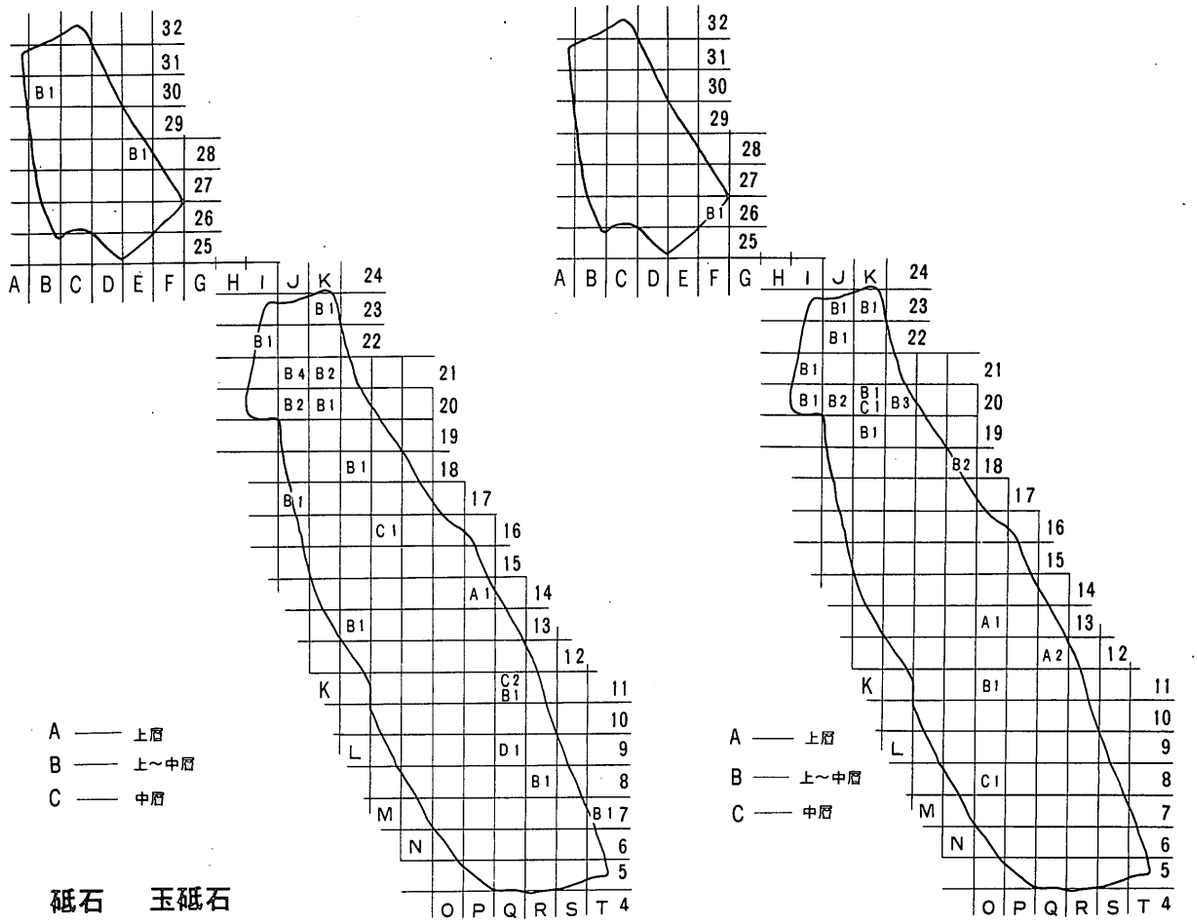
中層



中～下層・下層

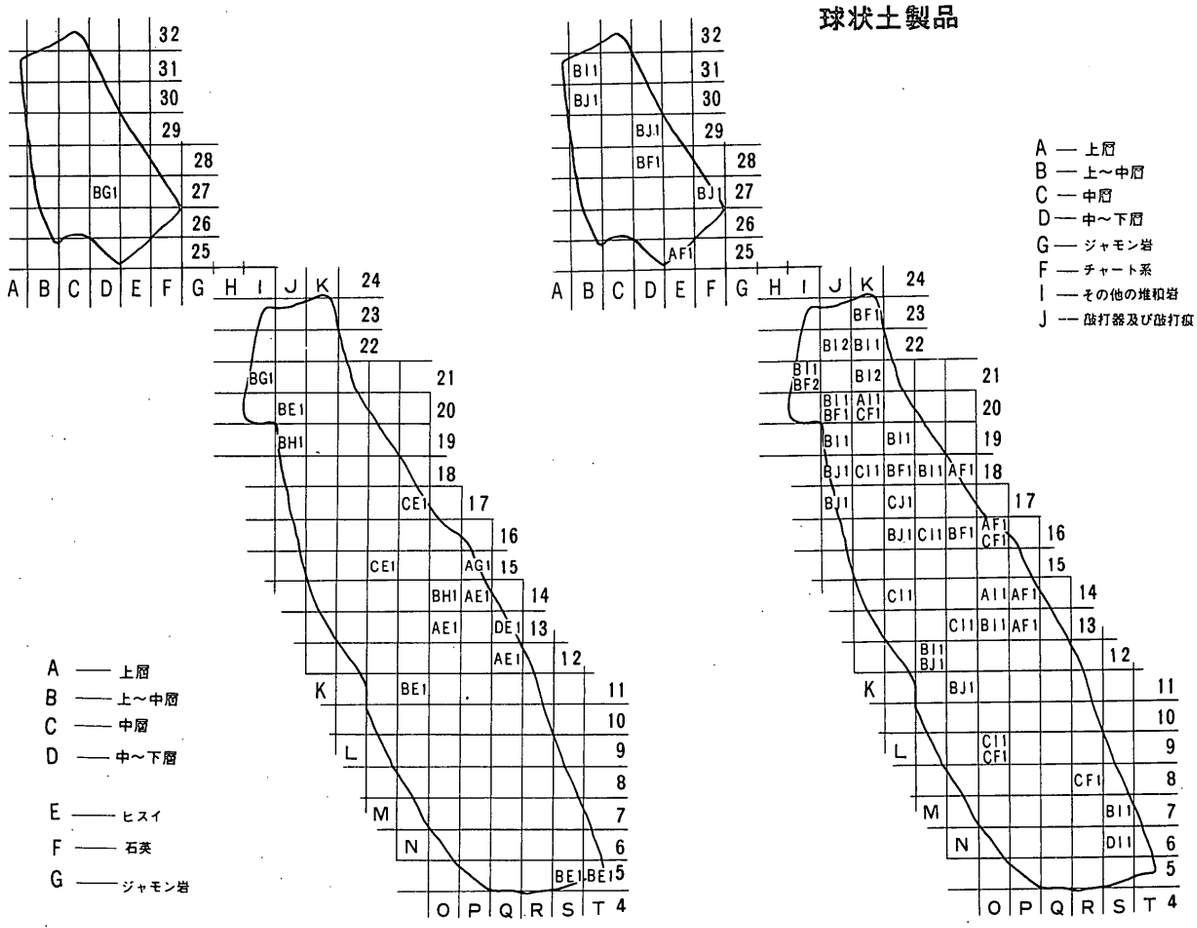
単位：個

図52　A地区砥石分布図（黒丸は擦り切り用砥石出土位置）（1：600）



砥石　玉砥石

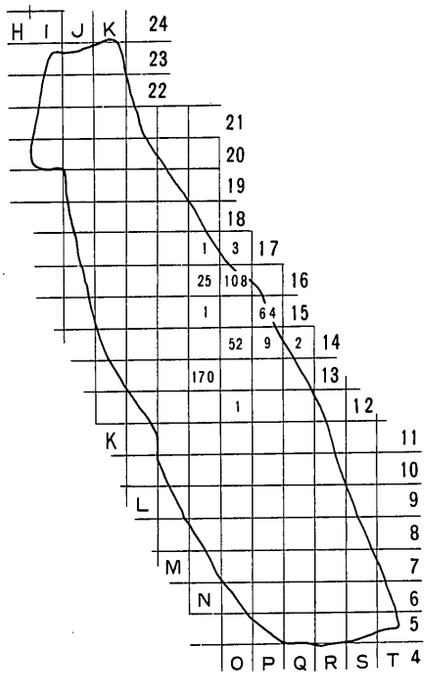
球状土製品



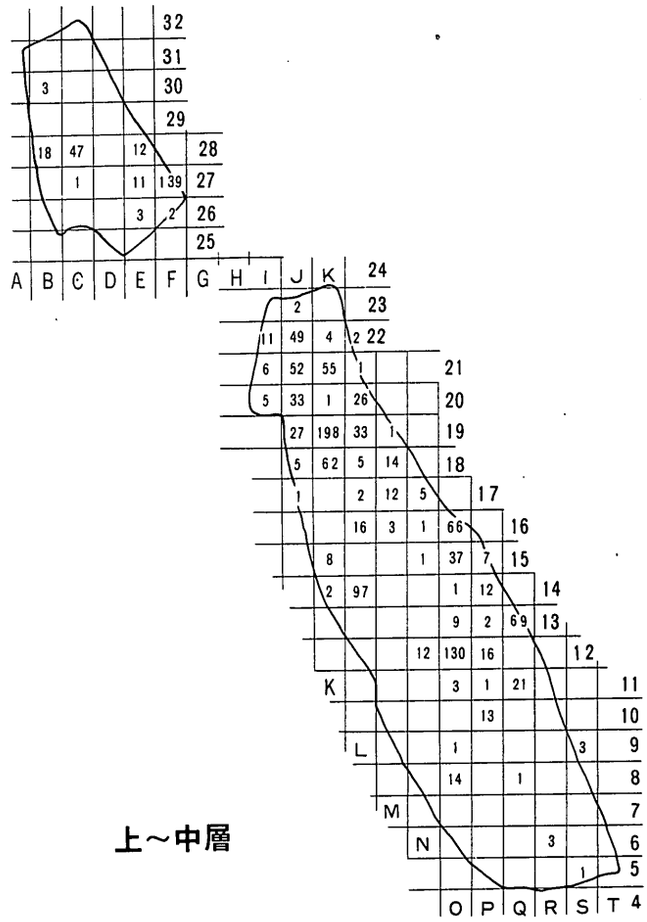
ハンマー

単位：個　　敲打器

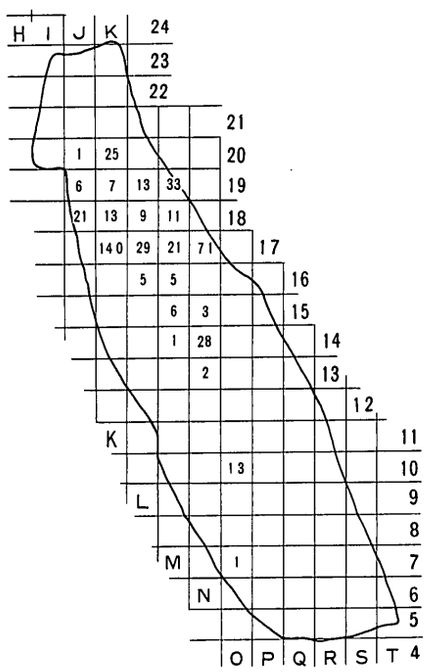
図53　A地区玉砥石・球状土製品・ハンマー・敲打器分布図（1：600）



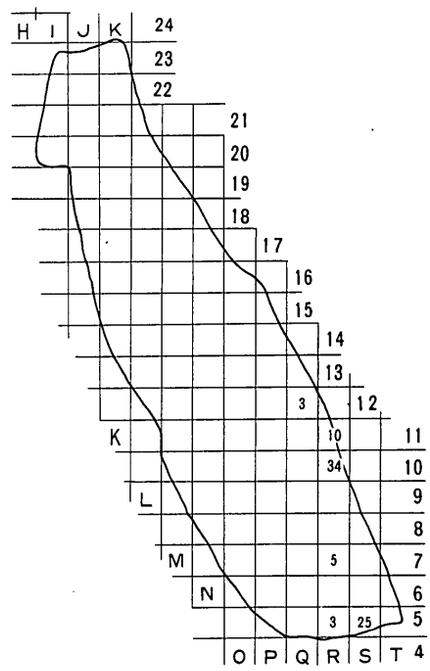
上層



上～中層



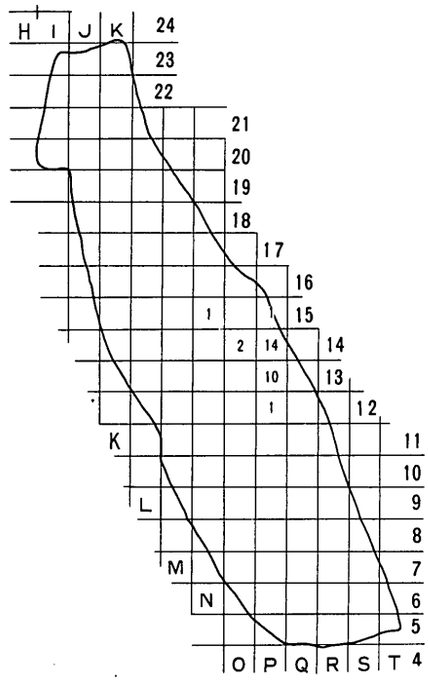
中層

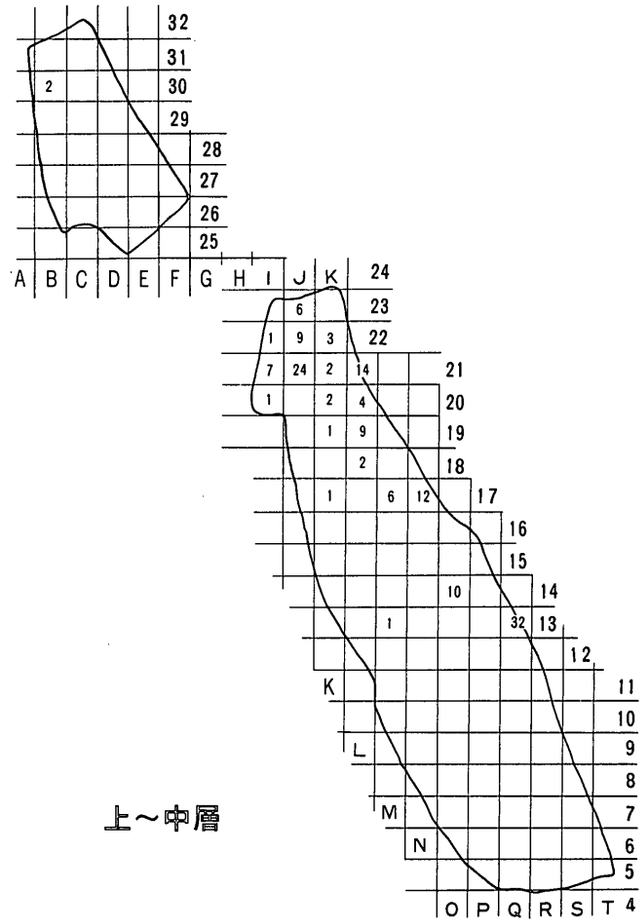


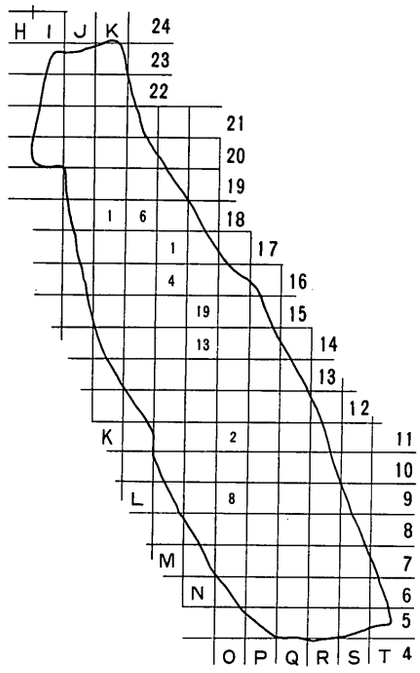
中～下層・下層

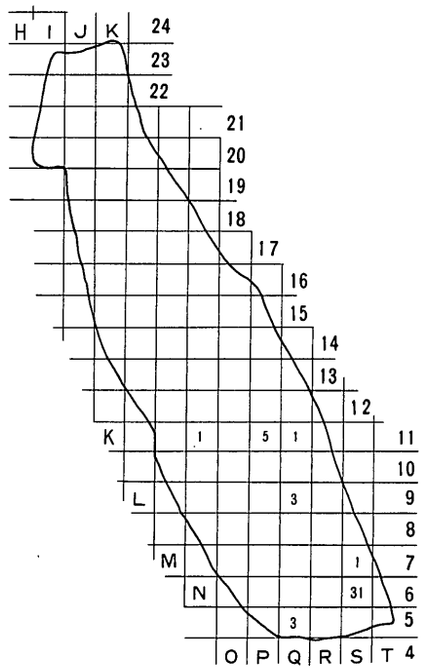
単位：g

図54　A地区ヒスイ（硬玉）剥片原石分布図（1：600）



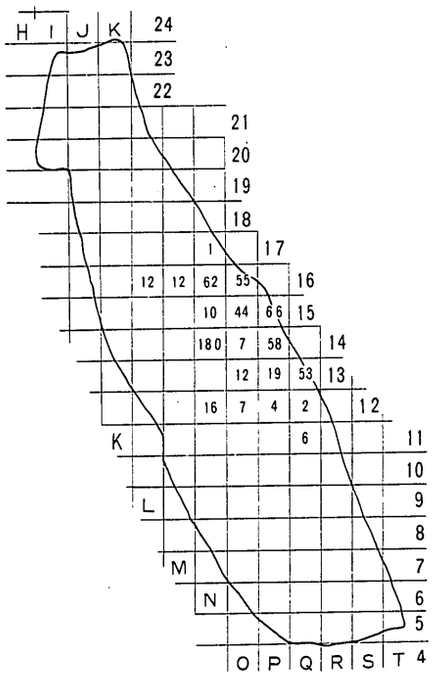




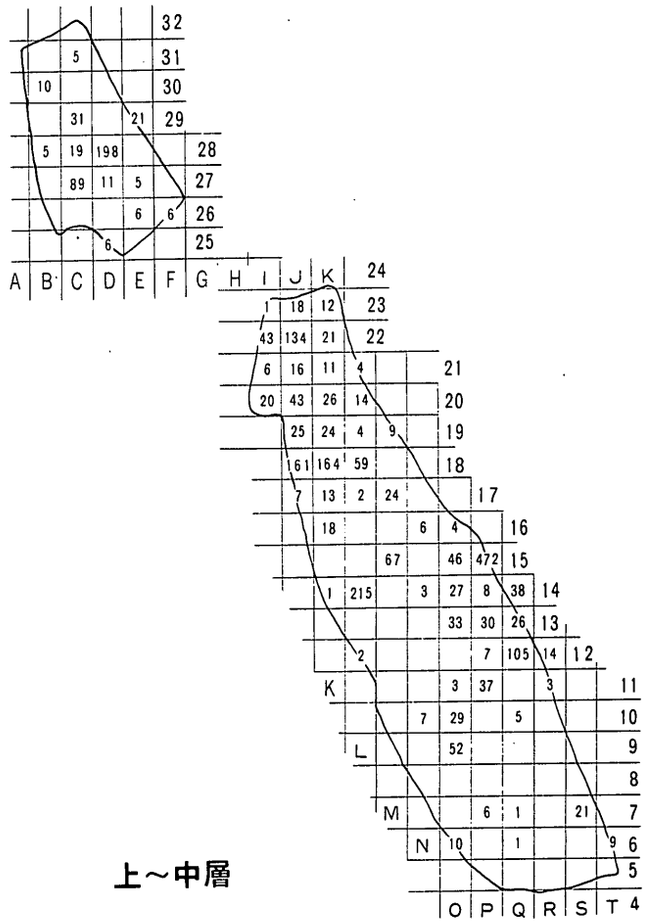


単位：g

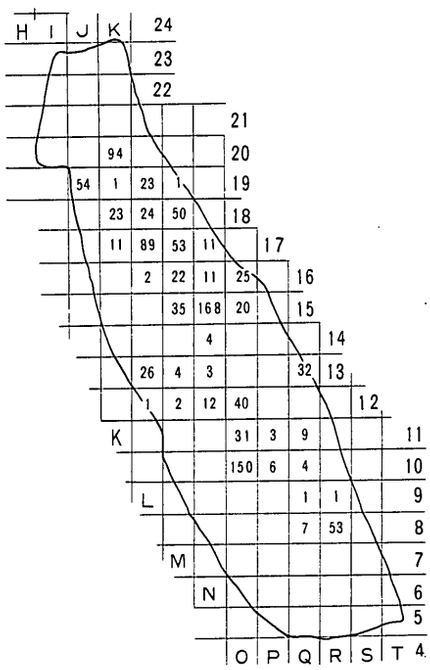
図55　A地区滑石剝片原石分布図（1：600）



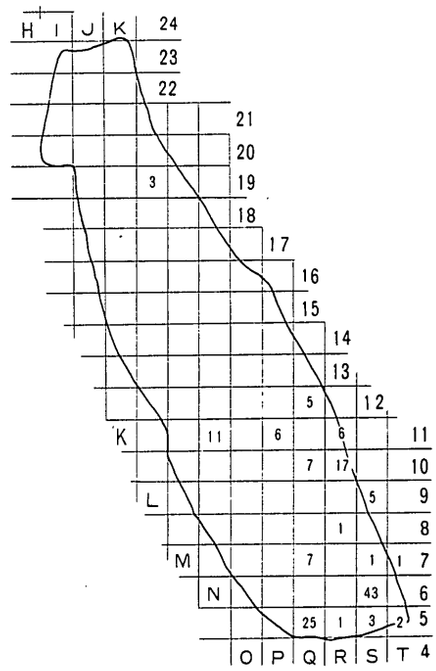
上層



上～中層



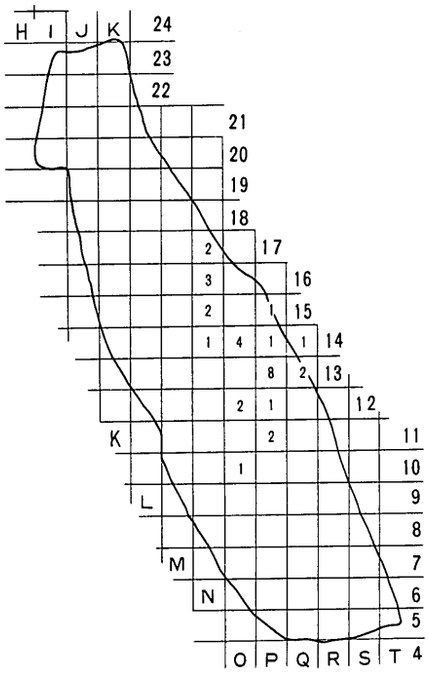
中層



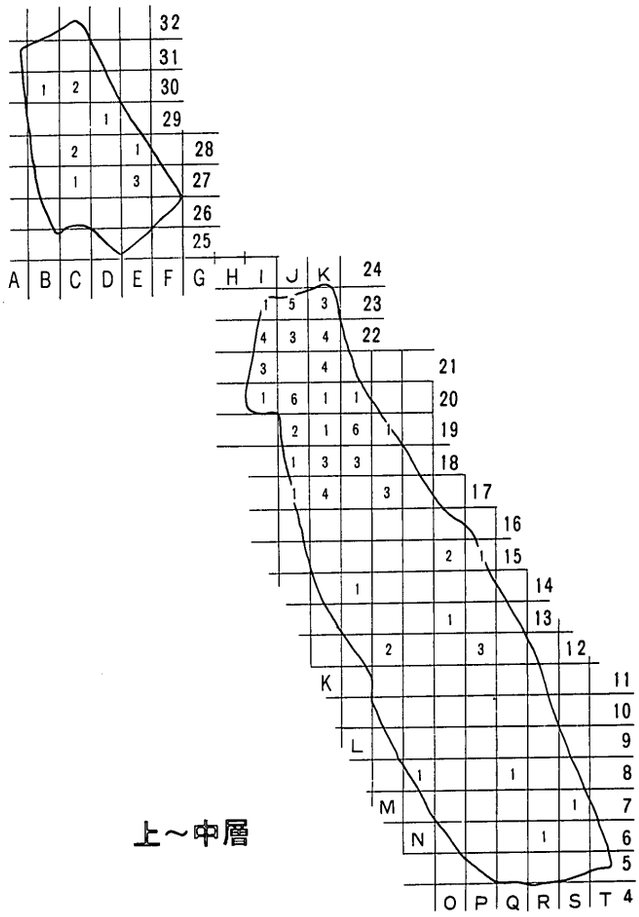
中～下層・下層

単位：g

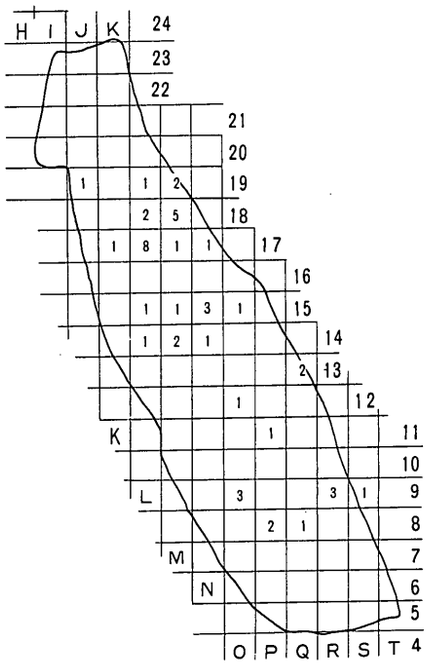
図56　A地区磨製石斧原石剝片（蛇紋岩・軟玉）分布図（1：600）



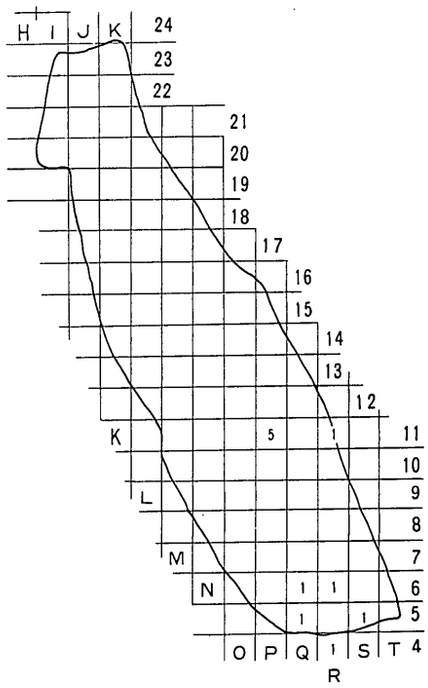
上層



上～中層



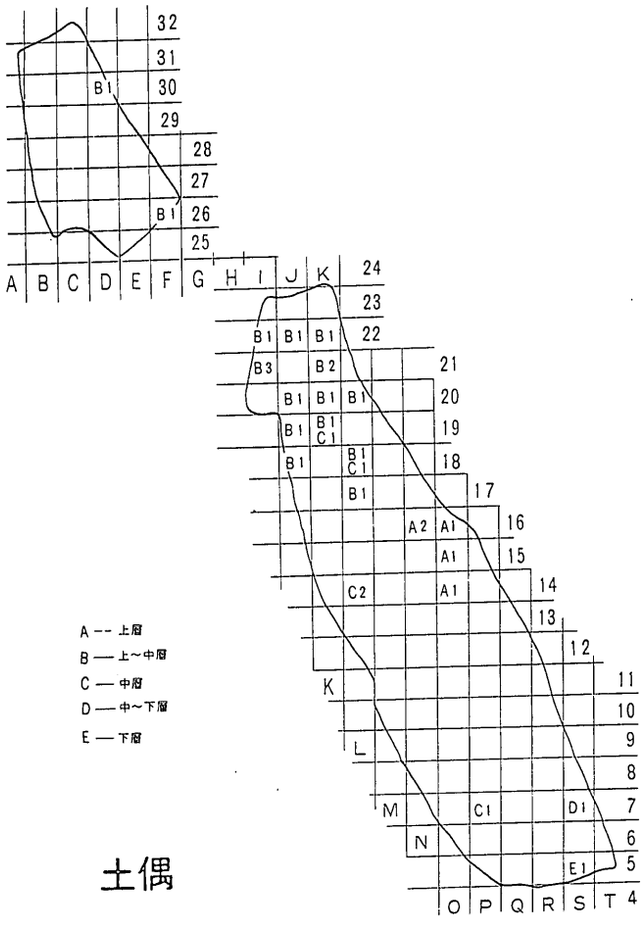
中層



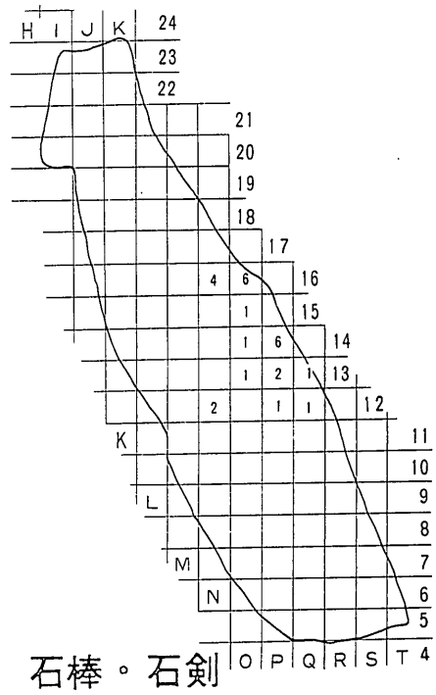
中～下層・下層

単位：個

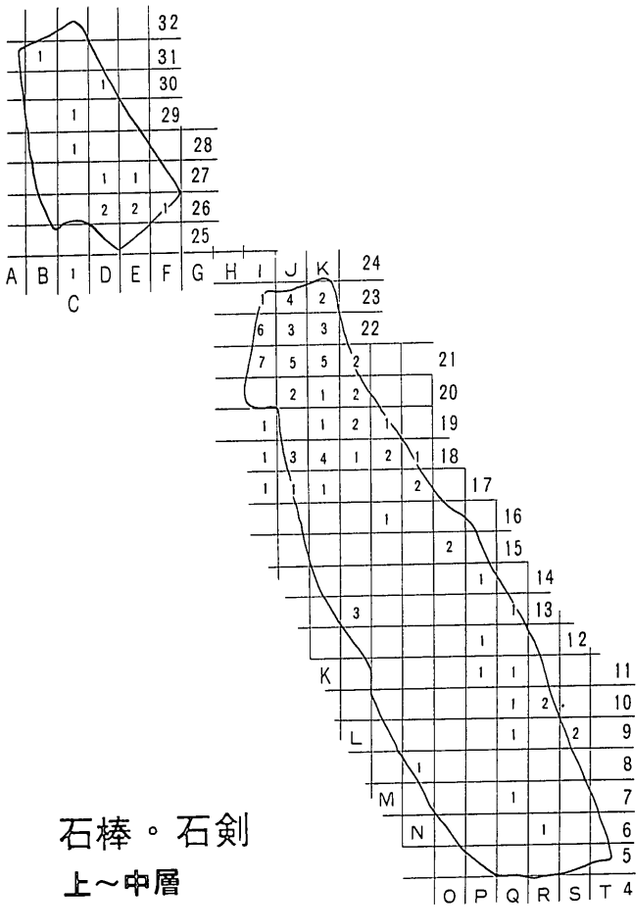
図57　A地区海浜石分布図（1：600）



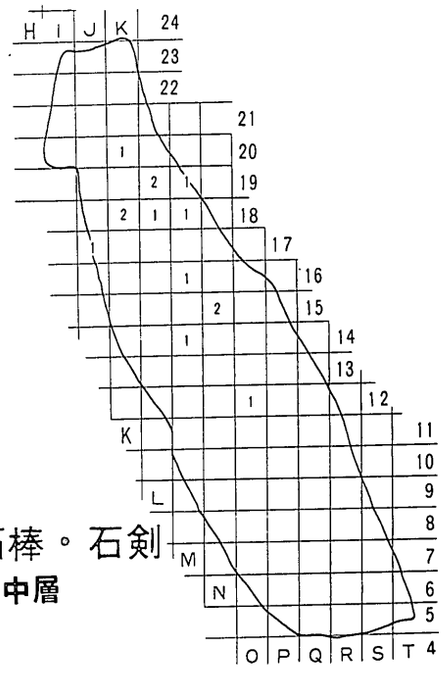
土偶



石棒・石剣
上層



石棒・石剣
上～中層



石棒・石剣
中層

単位：個

図58　A地区土偶・石棒・石剣分布図（1：600）

第２節　遺　　物

１．土　　器

一津遺跡からはＡ地区で、縄文時代前期前半（黒浜式期併行）、中期後半（曽利Ⅰ～Ⅳ式併行。下層及び中～下層下部）、後期前半（称名寺式併行～堀ノ内式併行。中～下層及び中層下部）、後期後半（加曽利Ｂ式併行、中層及び上～中層下部）、晩期前半（晩期初頭型式～佐野Ⅰａ。ｂ、Ⅱ式併行。上～中層）、晩期後半（古い氷式～氷Ⅰ式。上層）土器群が出土した。また、平安時代灰釉陶器片、15世紀頃の青磁１片が表土層より出土している。Ｂ地区からはⅠ、Ⅱ区で縄文時代早期前半（押型文期）、早期後半～前期前葉。前期末。中期初頭の土器群が、Ⅲ区からは前期前半土器片が、Ⅳ区からは、縄文時代早期前半。早期後半。前期末。平安時代後半の土器群が、Ⅴ区からは縄文時代早期後半土器片が、Ⅵ区からは、縄文時代前期末。晩期末の土器群がそれぞれに出土している。

本報告では、すべてを提示したかったが、整理箱（60×44×15cm）に200箱余りに及び、整理時間の関係のこともありそのごく一部のみしか提示はできなかった。ここではＢ地区から出土した押型文期の土器とＡ地区から出土した土器の一部のみを提示した（Ａ地区については晩期の土器を中心とした。また、晩期後半の土器群については設楽博巳氏の玉稿をいただいた）。提示できなかった土器については、別に機会を見て後に発表したいと考えている。

１．縄文時代早期（押型文期）の土器（図59・60）

Ｂ地区Ⅰ、Ⅳ区においてはブロック的に、Ⅱ区においては散在して出土した。ＢⅠ区１～４は格子目状、５は格子目状＋楕円状の組み合わせ、６～35は山形状である。81・82は無文土器で、83は底部である。

ＢⅡ区の84～87は土坑１（陥し穴）内から出土したものである。84、85、88、89は格子目状、90～93は山形状、94～103は楕円状の押型文土器である。87はスダレ状と楕円状の組み合わせ、105は横線状と楕円状の組み合わせの押型文土器である。104は縄文とスダレ状押型文を組み合わせた土器である。106は沈線文系の刺尖文をもつ田戸下層式期併行の土器である。

ＢⅣ区は107～113が楕円状、114・115が異形の押型文である。116は無文の底部でおそらく押型文土器の底部と思われ、底面には擦れた痕が観察される。117～134は沈線文系の田戸下層式併行の土器で、貝殻複縁文が見られる。

ＢⅠ・Ⅱ区のものは樋沢式～細久保式期併行頃のものが多く、ＢⅣ区は押型文期の土器でも比較的新しい部分と考えられる。

２．縄文時代後期前半の土器（図61）

１はＡⅠ区の南端、中～下層の配石、集石面から出土した深鉢でバスケット状の釣手土器である。釣手部は中期末の様相を色濃く残しているが、土器体部の文様はJの字状となる称名寺式期の文様であり、一応、後期前半とした。外面にはススの痕跡が残り、内面にはコゲ付きの痕跡が残り煮沸用の釣手土器である。県内においても何例かあるが、このタイプの釣手土器はおそらくは、ここの土器の使用痕から考えて煮沸用のものと考えられる。

３．縄文時代後期後半の土器（図61・62）

１～５は、加曽利Ｂ式期の精製、半粗製土器である。６～８は、後期末型式の土器で、６は中ノ沢タイプと呼ばれるものに近似する。

４．縄文時代晩期前半の土器（図62～61）

1～4は、埋甕に使用された土器で、晩期初頭型式ないしは、佐野Ⅰ式に併行する粗製深鉢である。5は埋甕8に使用された土器で、晩期初頭型式の土器であり、東海地方の清水天王山式系の土器の影響をもった在地の土器である。7～9・11は晩期初頭型式の土器である。12～36は、佐野Ⅰ式期の土器で、大半は佐野Ⅰb式期のものである。13～16、36は大洞系の土器で、大洞CⅠ式期に併行するものである。32の半粗製深鉢の体部の文様は粗大工字文風であり、粗大工字文の初源期のものと思われる。

37～78は、佐野Ⅱ式期の土器で、粗大工字文の施される土器が多い。42・45・51・53は大洞系の土器で大洞C2式期に併行するものである。この土器群中には、次の晩期後半（氷式）の土器に近似するものもあり、今後のこの土器群の検討により、氷式への変化が捉えられるであろう。今後検討を進めて行きたい。

5．縄文時代晩期後半の土器（図72～81）

氷Ⅰ式期の古い部分～平均な氷式期の土器群である。大洞系、在地系の氷式、東海・北陸の影響を受けたものが見られる。この時期の土器については、後章に設楽博巳氏の玉稿があるのでそれを参考されたい。

6．平安時代の土器（図82）

BⅣ区の住居跡から出土したものが主である。一応の灰釉陶器から見た年代を示しておくと、東濃灰釉陶器型式で、103・104号住居跡・土壙3が光ケ丘・大原段階（9世紀末～10世紀前半）、101、102、106・107号住居跡が大原段階（10世紀前半）、105号住居跡が虎溪山段階（10世紀後半～11世紀初頭）にあたる。

2．石器・土製品・石製品

石器・土製品・石製品については、またの機会を見て詳細を示したいと考えている。

ただ、この遺跡で重要なのは、玉造り遺跡、石器製造遺跡であり、石鏃・磨製石斧、玉類（装飾品）等の数が多いことである。また、磨製石斧に関しては、蛇紋岩、軟玉を主体とした岩石を中心に生産しており、中には、使用できなくなったもの（破損品）を再度加工しているものも見られる。そして、磨製石斧・玉類という「磨く」ことを伴なう生産品であるので、砥石がかなりの量見られることが特徴である。

土製品で注目されるのは、球状土製品で、北陸地方で多いとされているものである。無文の球状土製品は、弥生時代以後出土する土製紡垂車にも近似し、現在、伊勢神宮等で使用される発火具の舞い錐のはずみ車にも近似しており、北陸地方に多いことや当遺跡でも発見されたことから、玉用の穿孔用具として舞い錐法が使用されていたとも推定される。いずれにしても後、晩期の時期にかなりはずみ車の原理が発達したことは明らかであろう。これについてもまたの機会を見て発表したいと考えている。

ＢＩ区

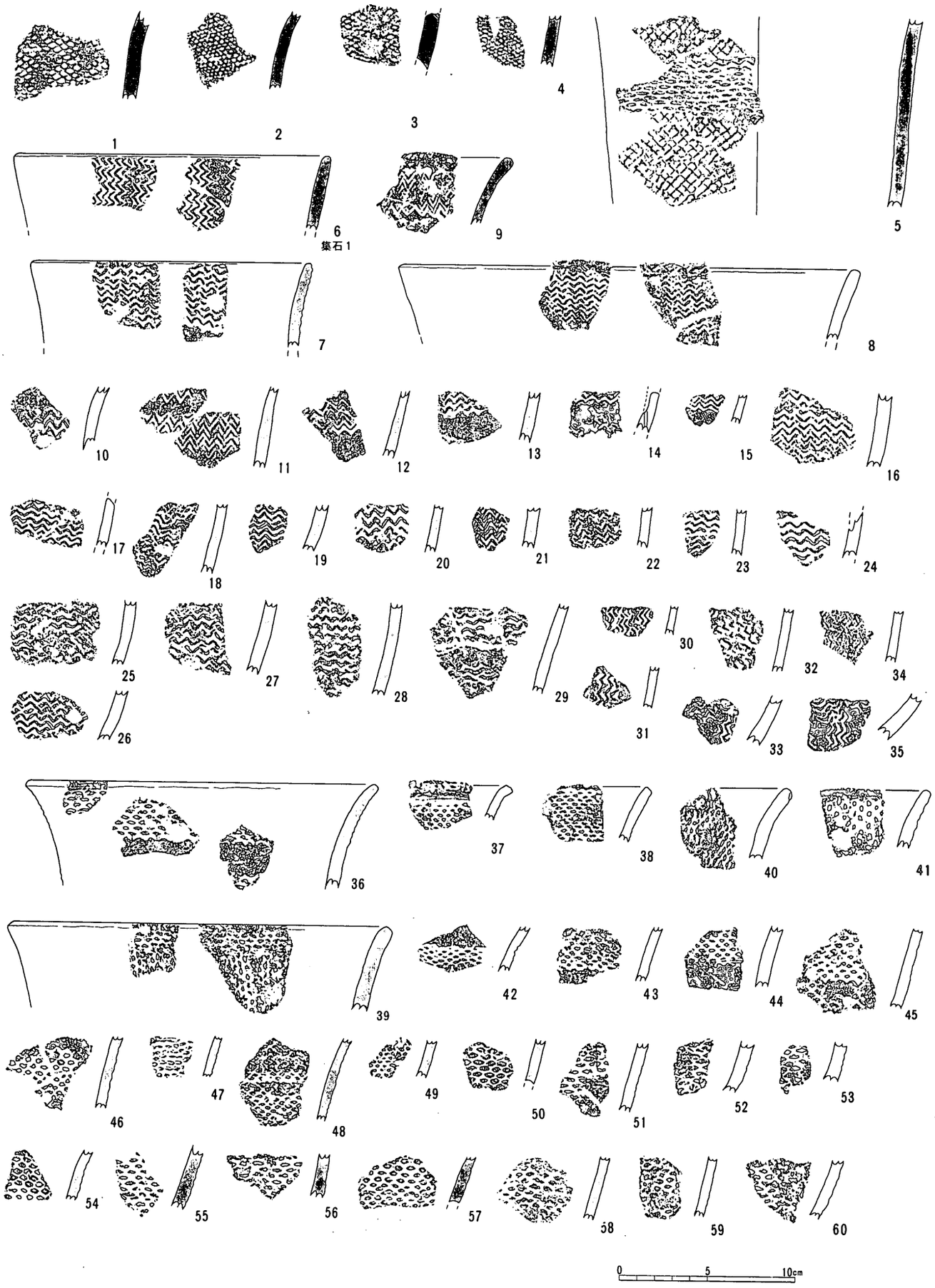


図59　Ｂ地区出土縄文時代早期押型文期土器拓影図(1)（１：３）

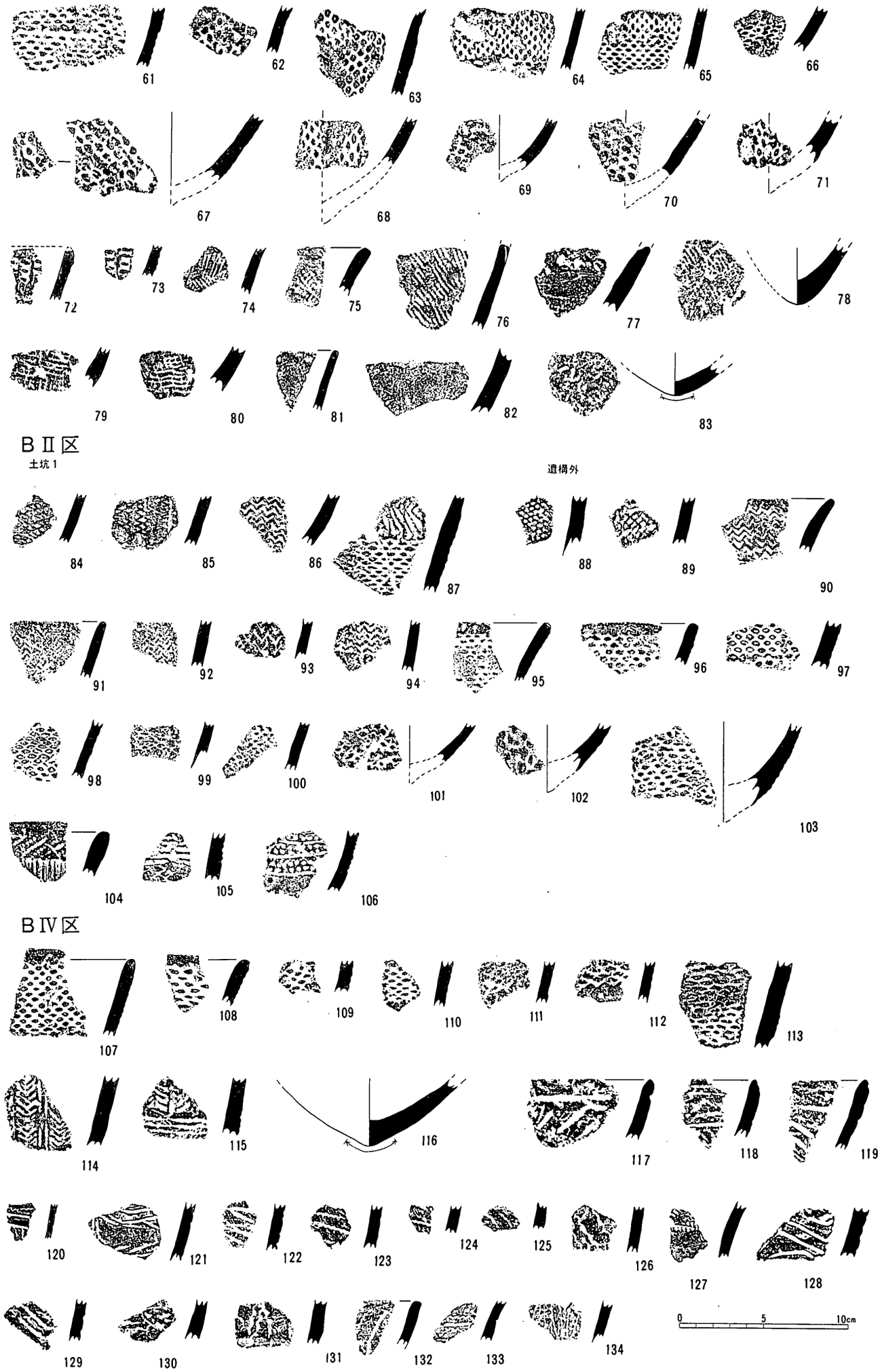


図60　B地区出土縄文時代早期押型文期土器拓影図(2)（1：3）

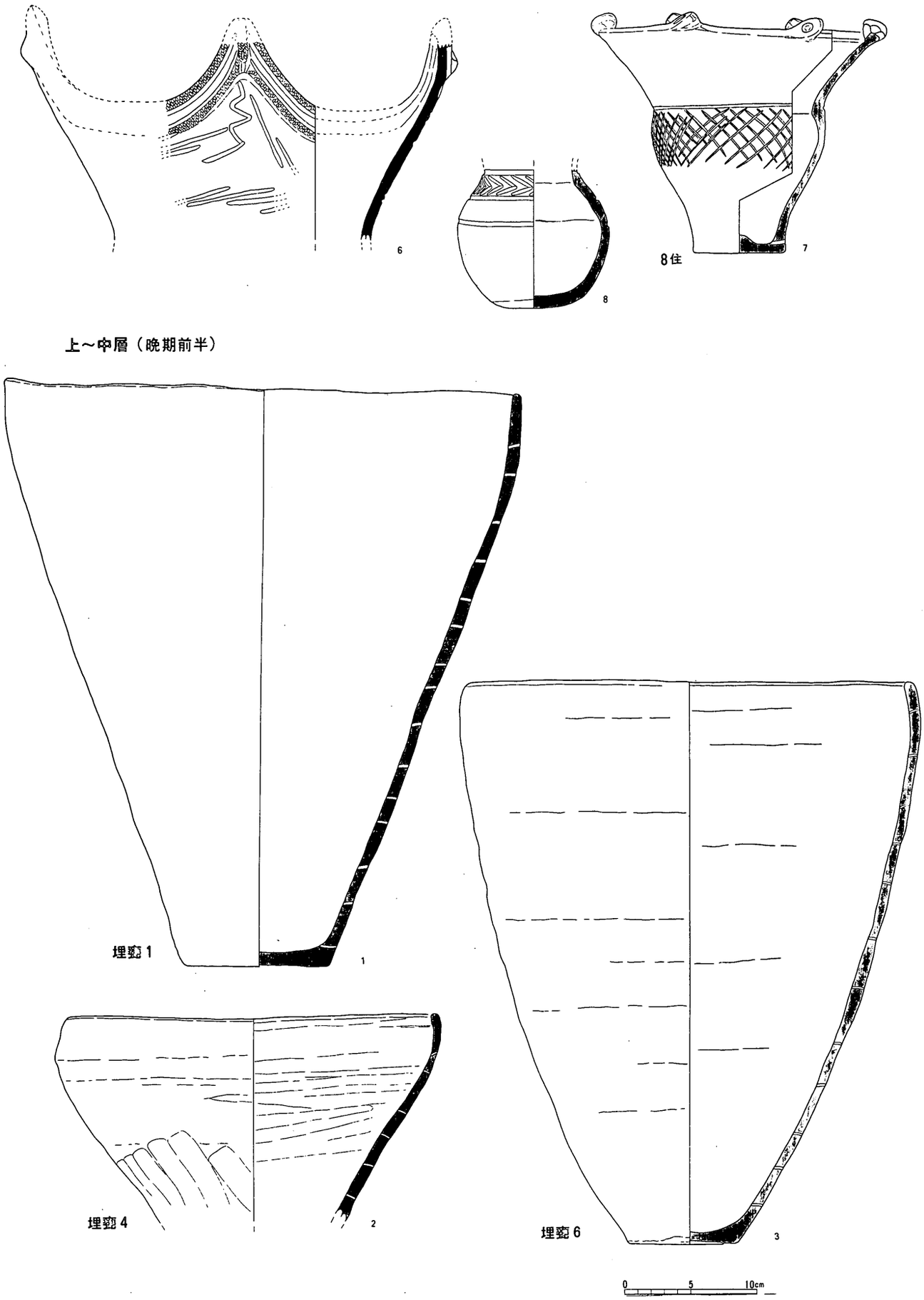


図62　A地区縄文時代後期後半土器実測図・晩期前半土器実測図(1)（1：4）

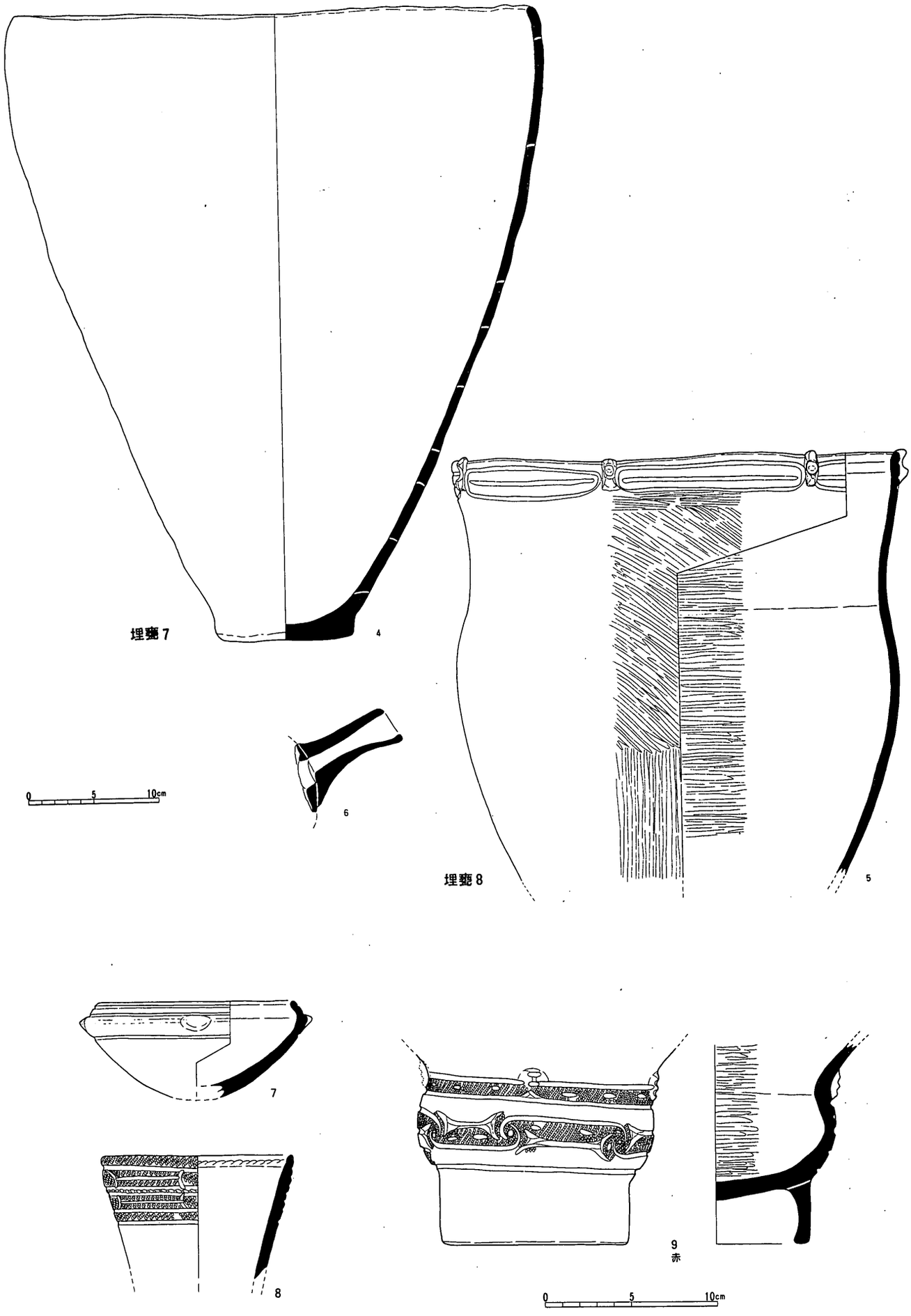


図63　A地区縄文時代晩期前半土器実測図(2)（4 ～6，1：4、7～9，1：3）
（6は埋甕8に接続していた注口土器注口部）

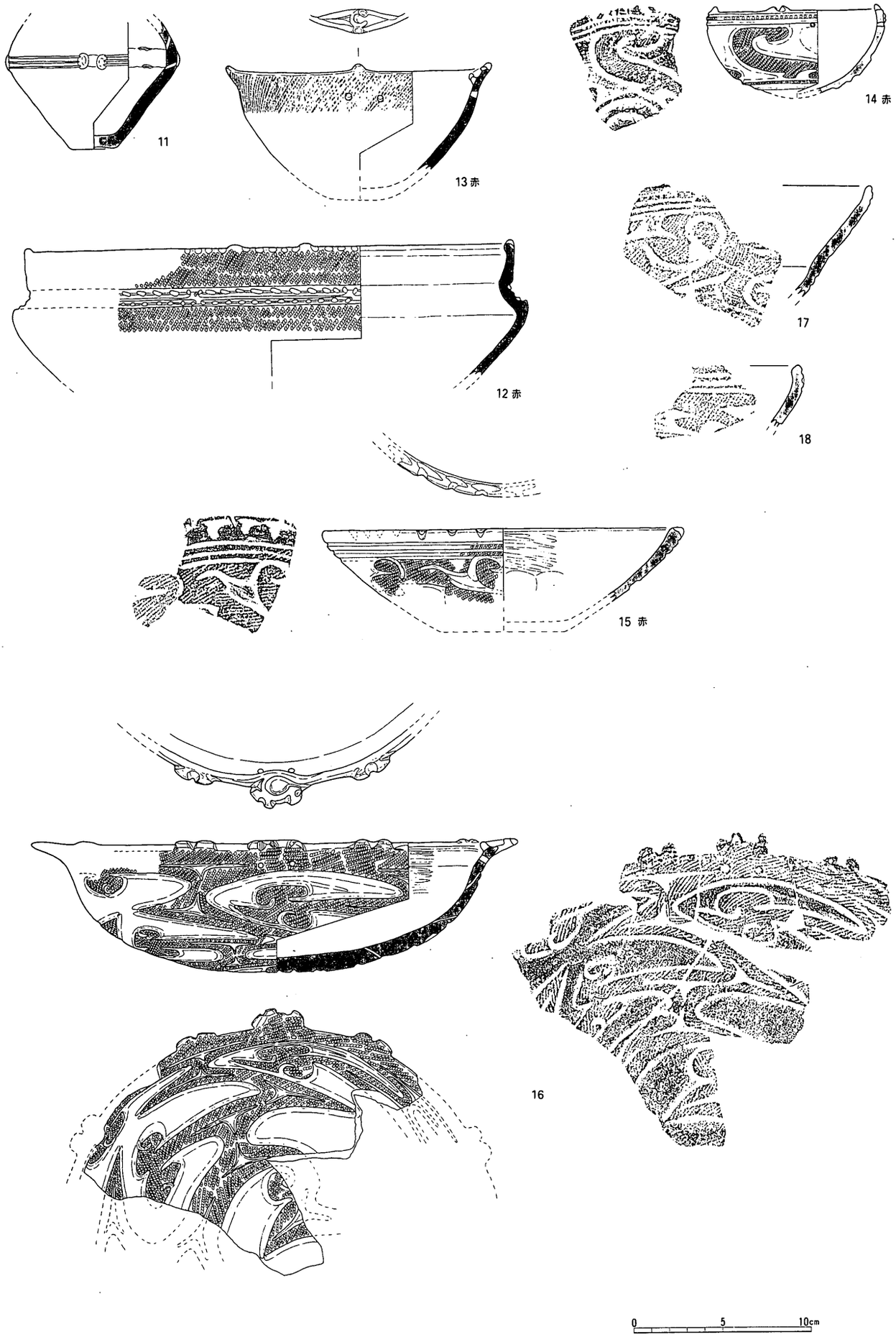


図64　A地区縄文時代晩期前半土器実測図(3)（1：3）（赤は赤色塗彩）＜大洞系土器＞

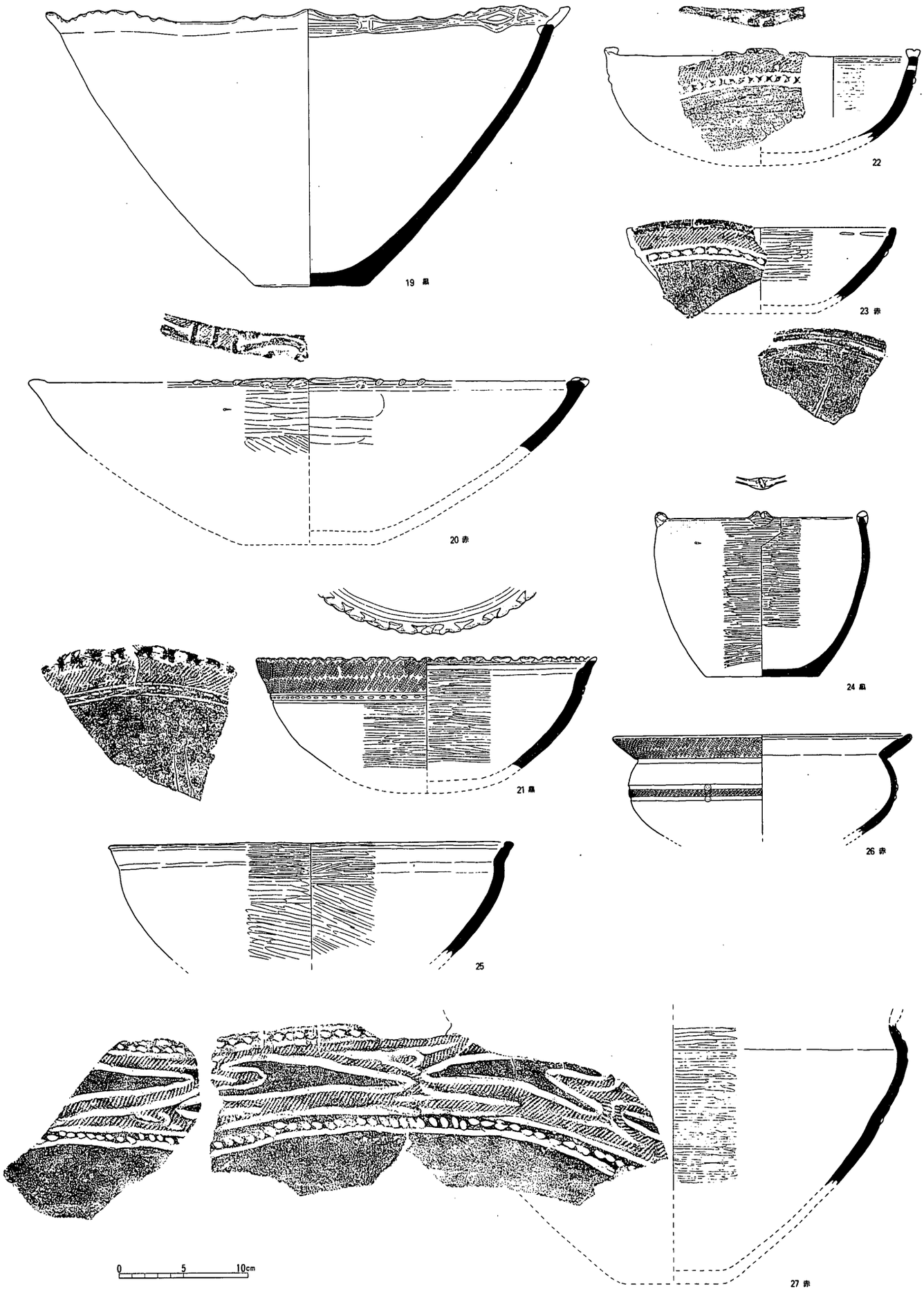


図65　A地区縄文時代晩期前半土器実測図(4)（1：4）（赤は赤色塗彩・黒は黒色塗彩）

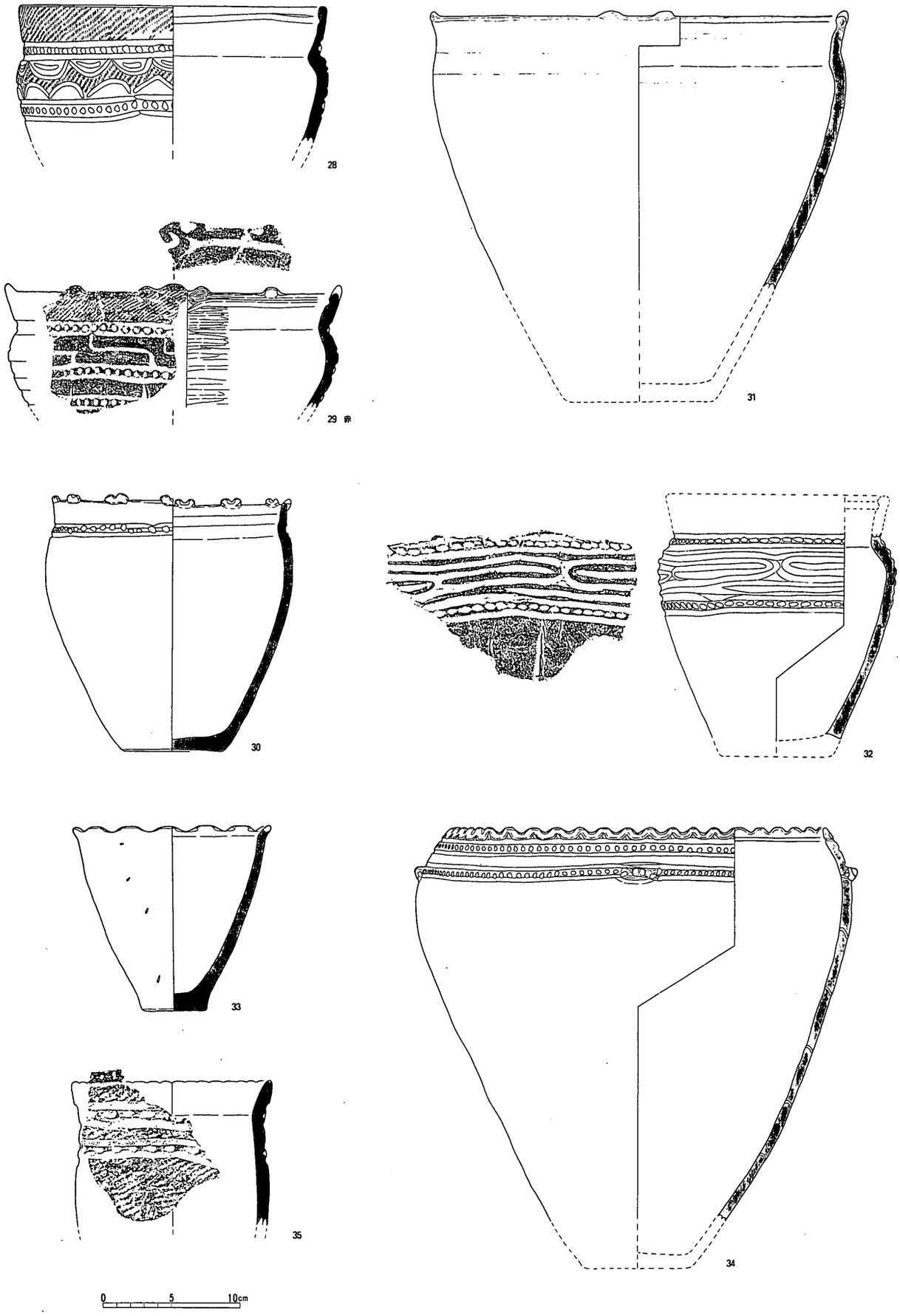


図66　A地区縄文時代晩期前半土器実測図(5)（１：４）（赤は赤色塗彩）

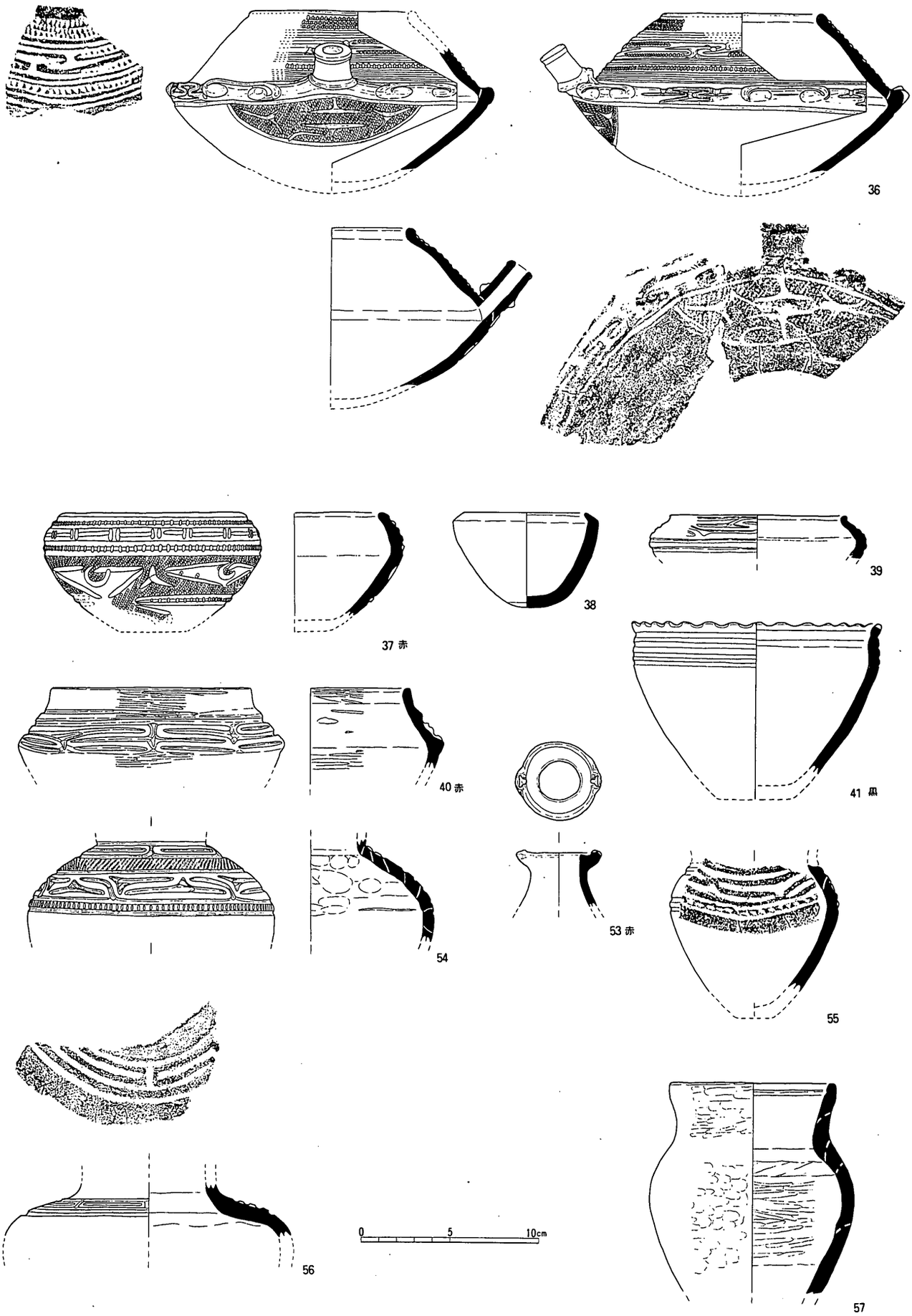


図67　A地区縄文時代晩期前半土器実測図(6)（1：3）（赤は赤色塗彩・黒は黒色塗彩）

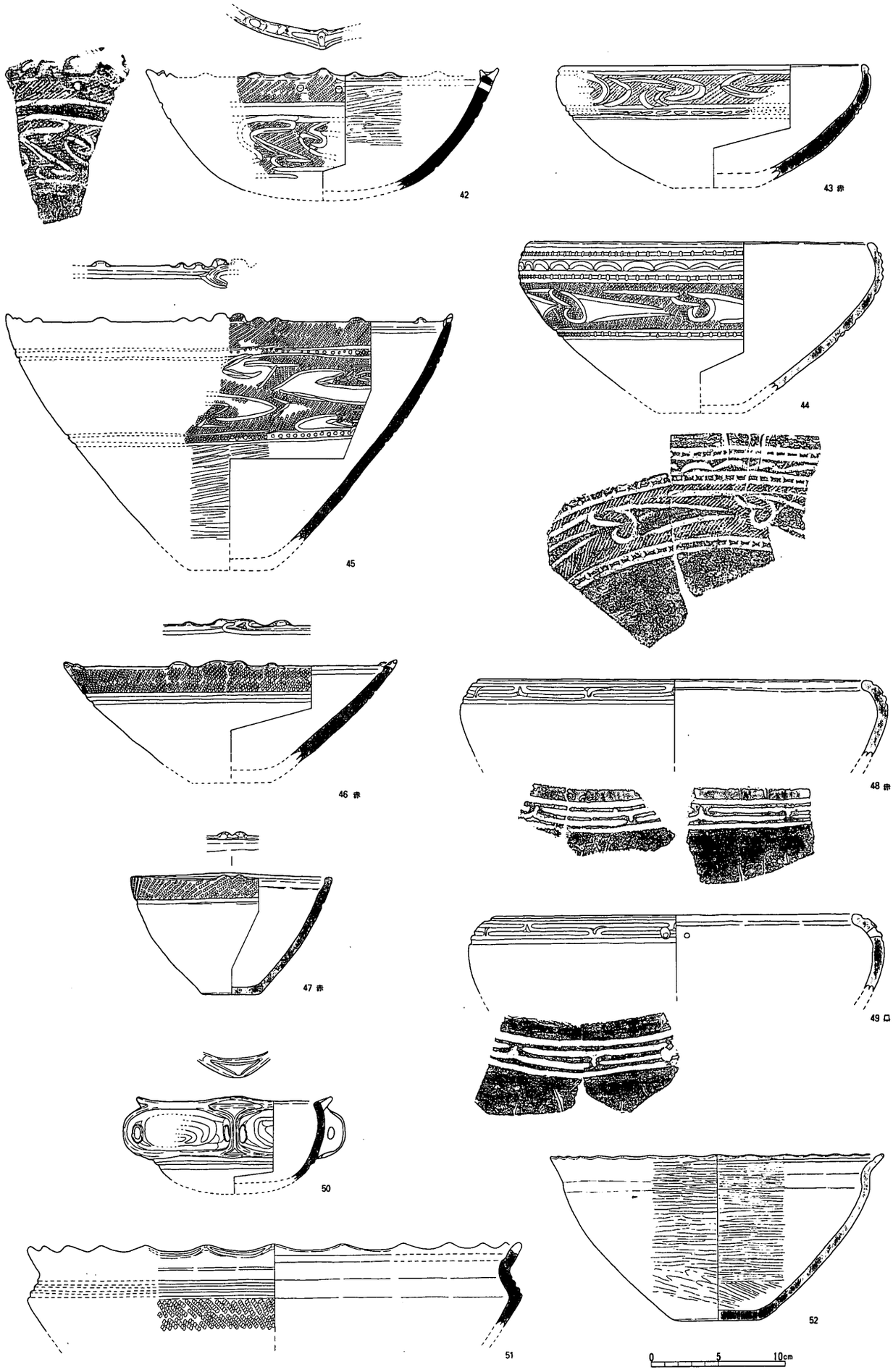


図68　A地区縄文時代晩期前半土器実測図(7)（1：4）（赤は赤色塗彩。黒は黒色塗彩）

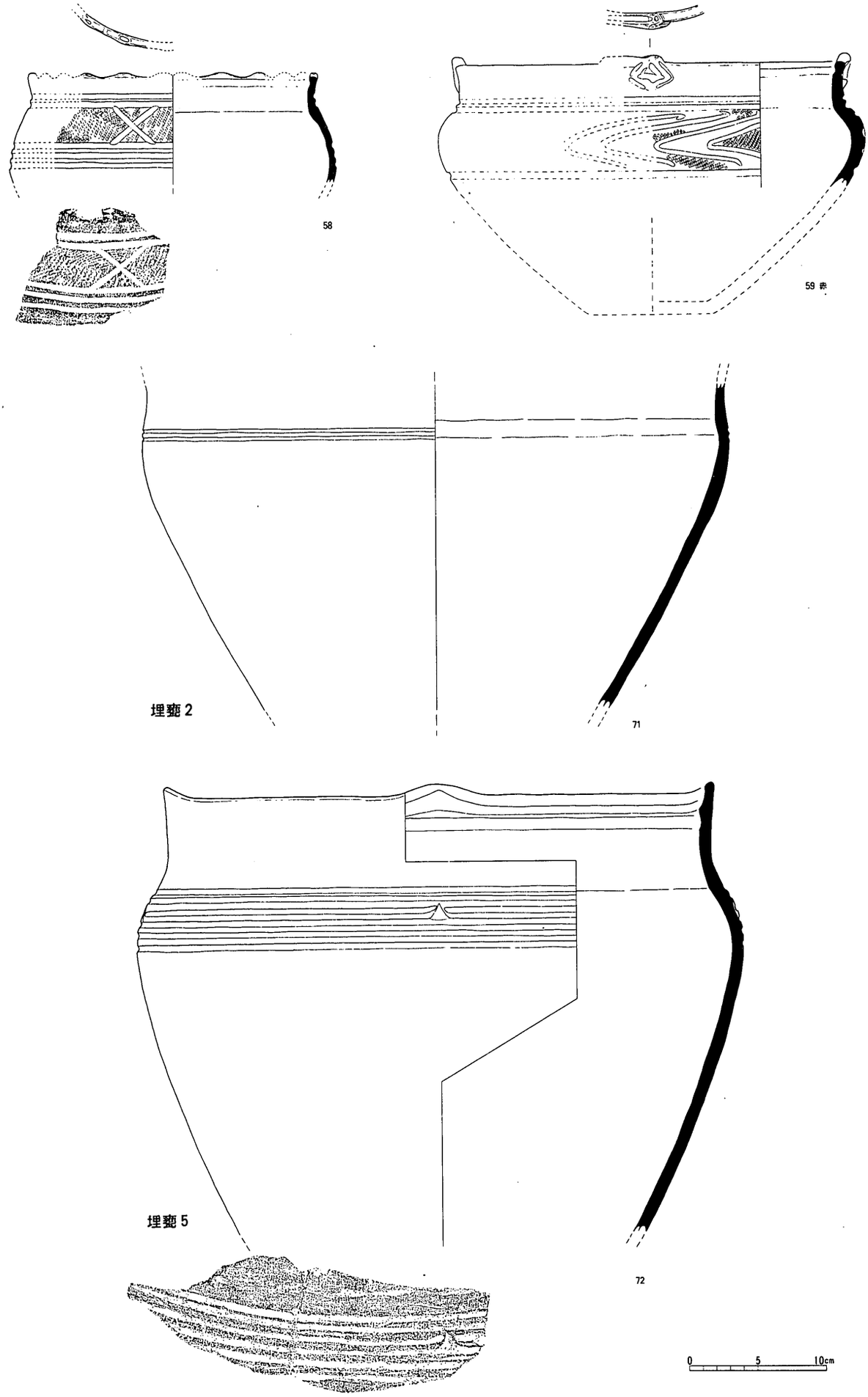


図69　A地区縄文時代晩期前半土器実測図(8)（1：4）（赤は赤色塗彩・黒は黒色塗彩）

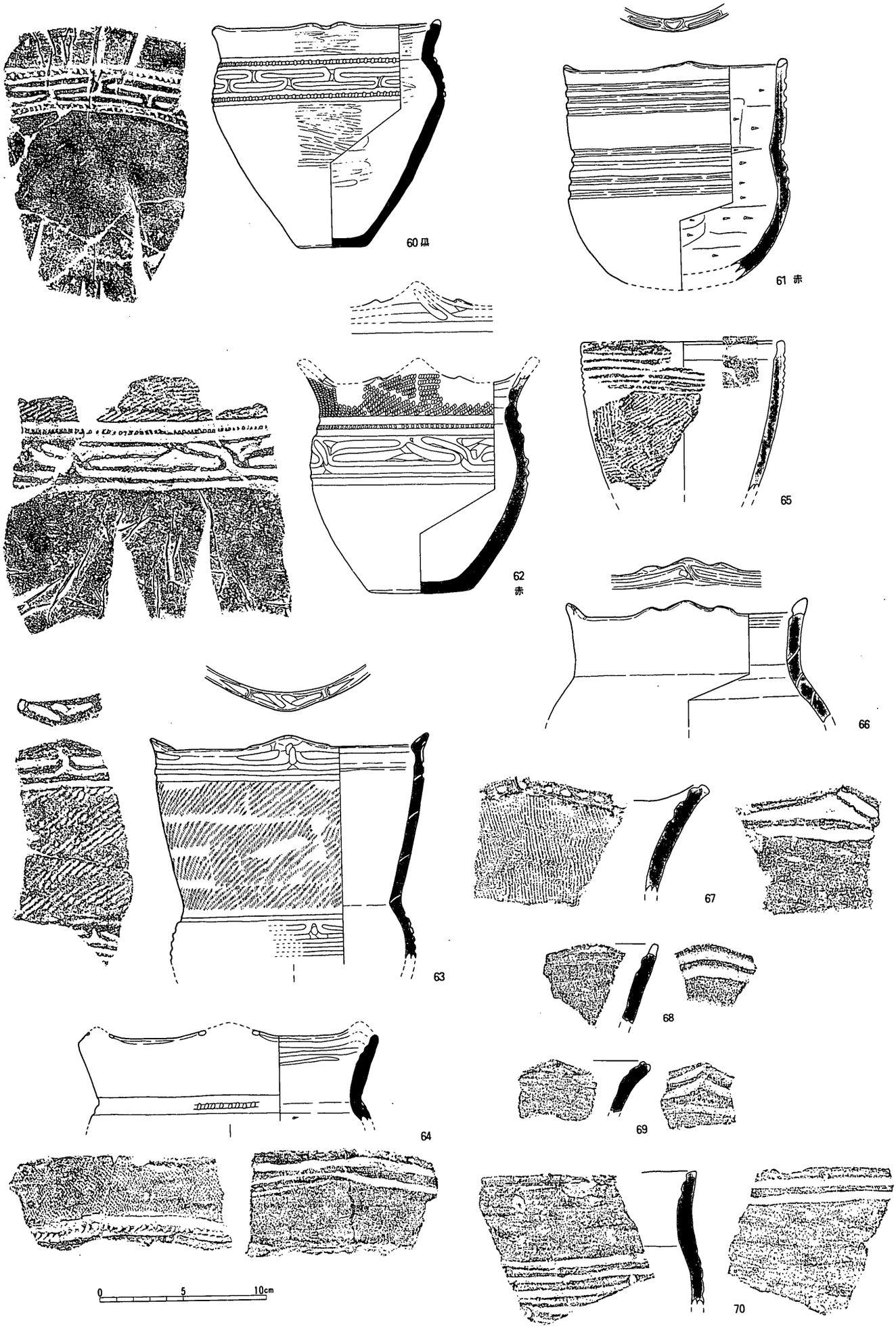


図70　A地区縄文時代晩期前半土器実測図(9)（1：3）（赤は赤色塗彩。黒は黒色塗彩）

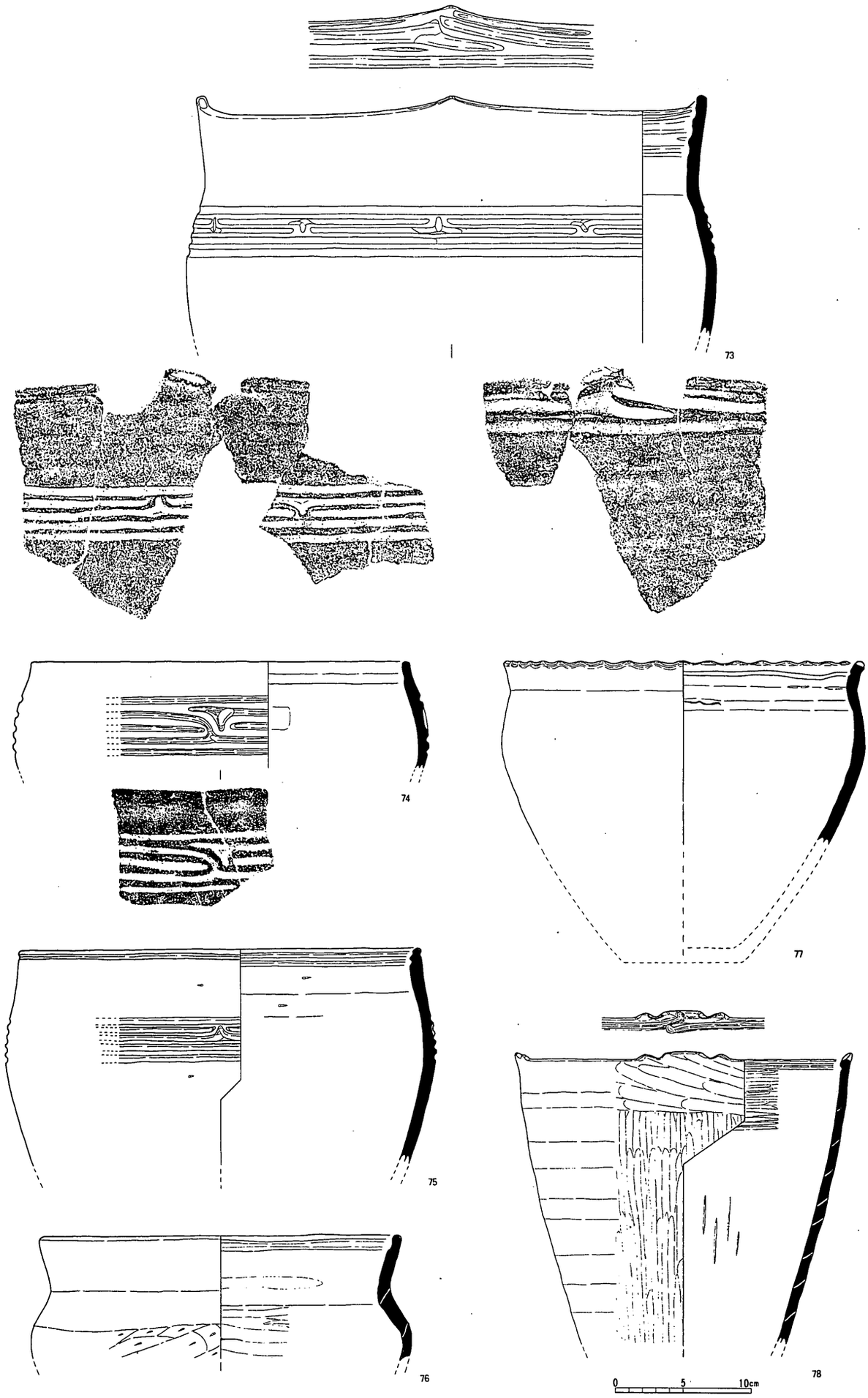


図71　A地区縄文時代晩期前半土器実測図(10)（1：4）

上層（晚期後半）

図72　A地区縄文時代晚期後半土器拓影図(1)（1：3）（赤は赤色塗彩）

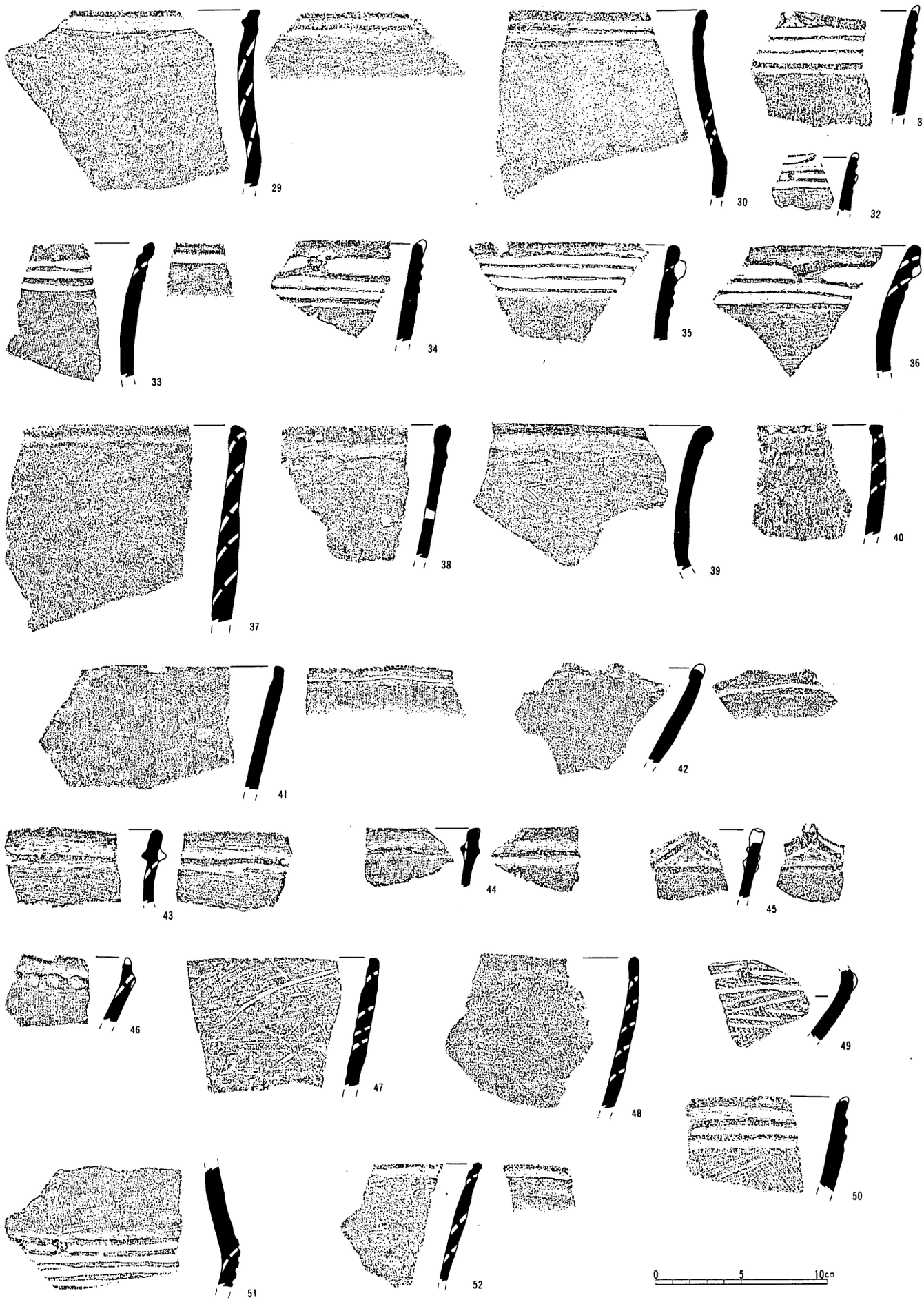


図73　A地区縄文時代晩期後半土器拓影図(2)（1：3）

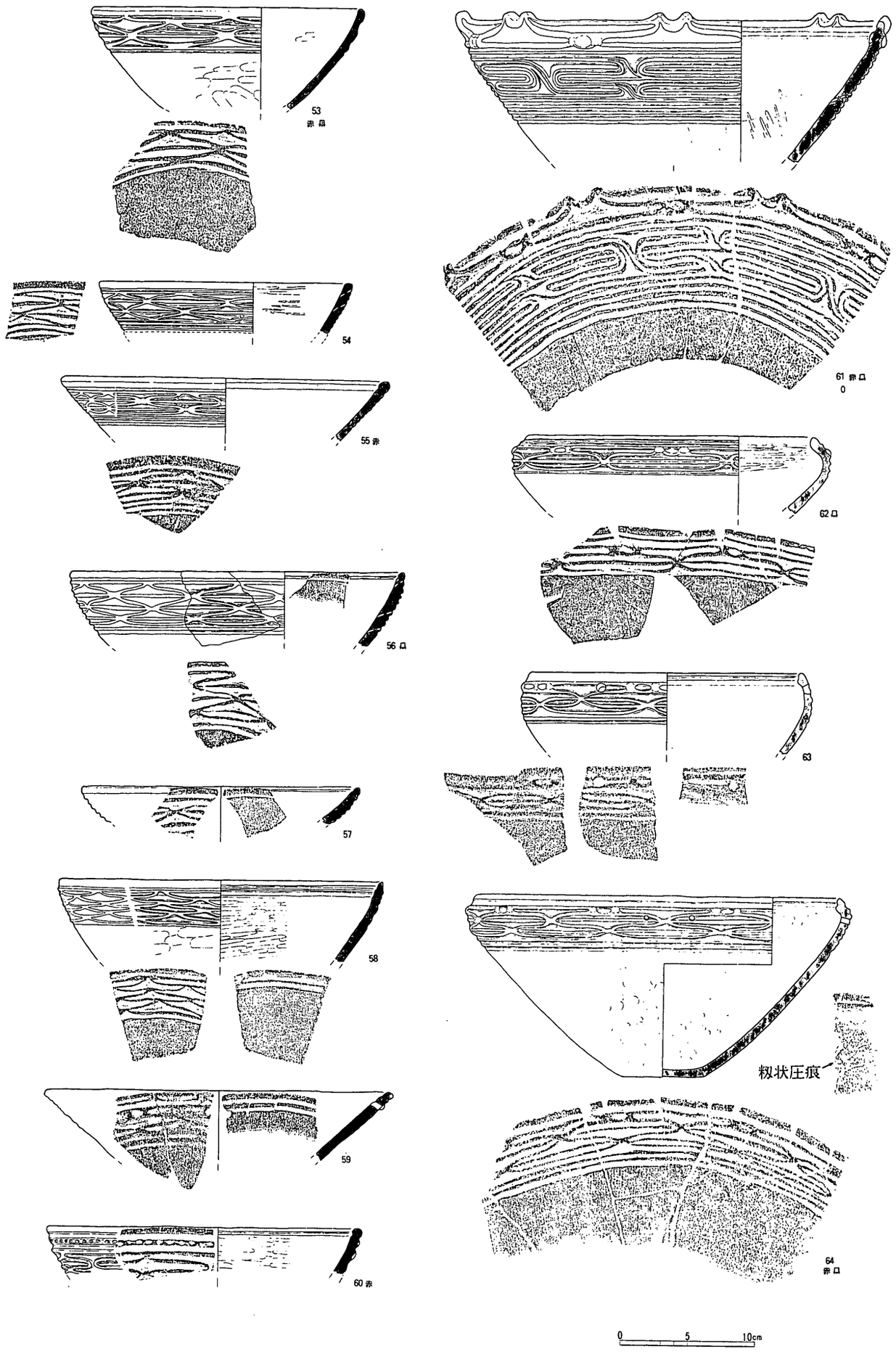


図74　A地区縄文時代晩期後半土器実測図(1)（1：4）（赤は赤色塗彩。黒は黒色塗彩。Oは大洞系）

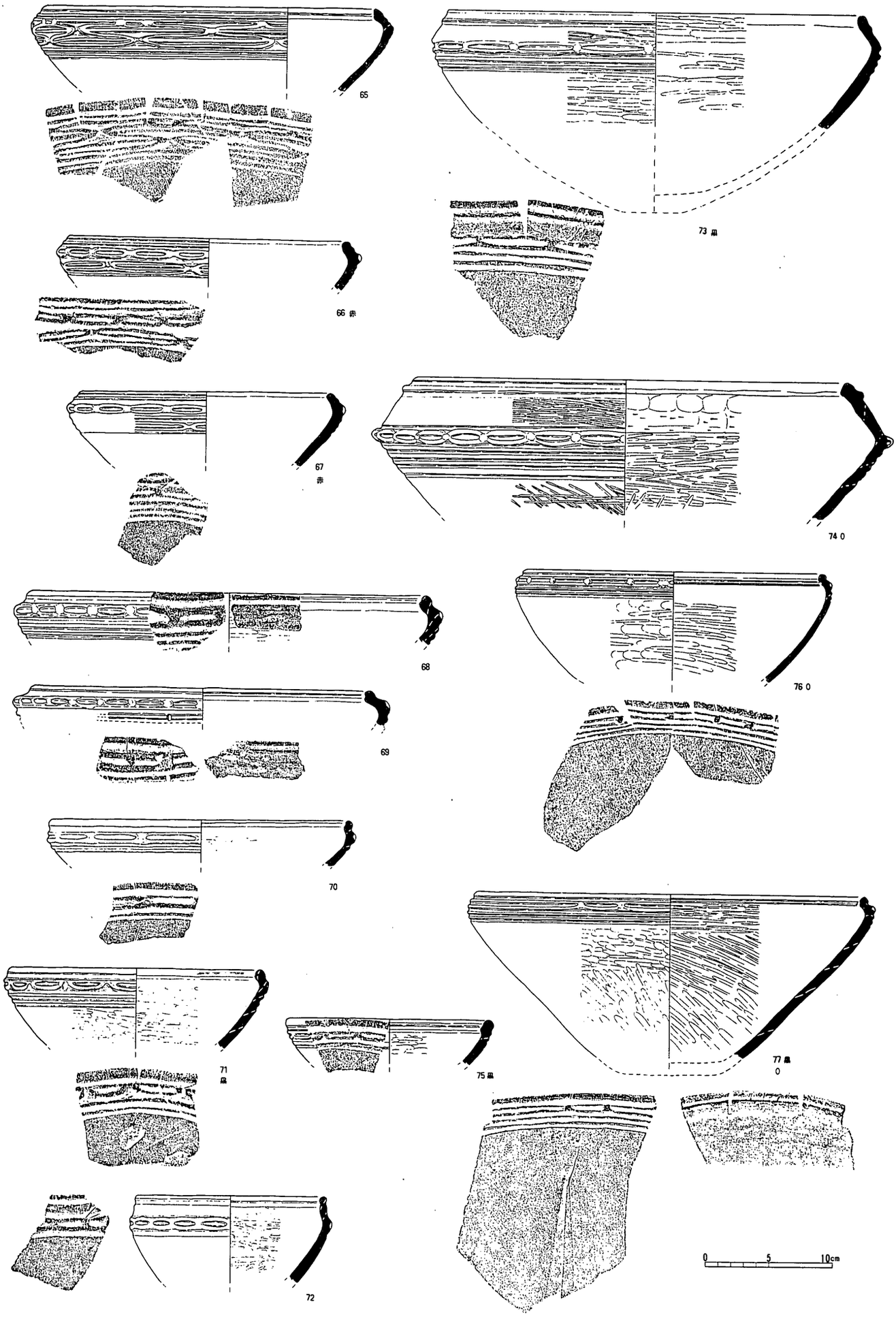


図75　A地区縄文時代後半土器実測図(2)（1：4）（赤は赤色塗彩・黒は黒色塗彩・Oは大洞系）

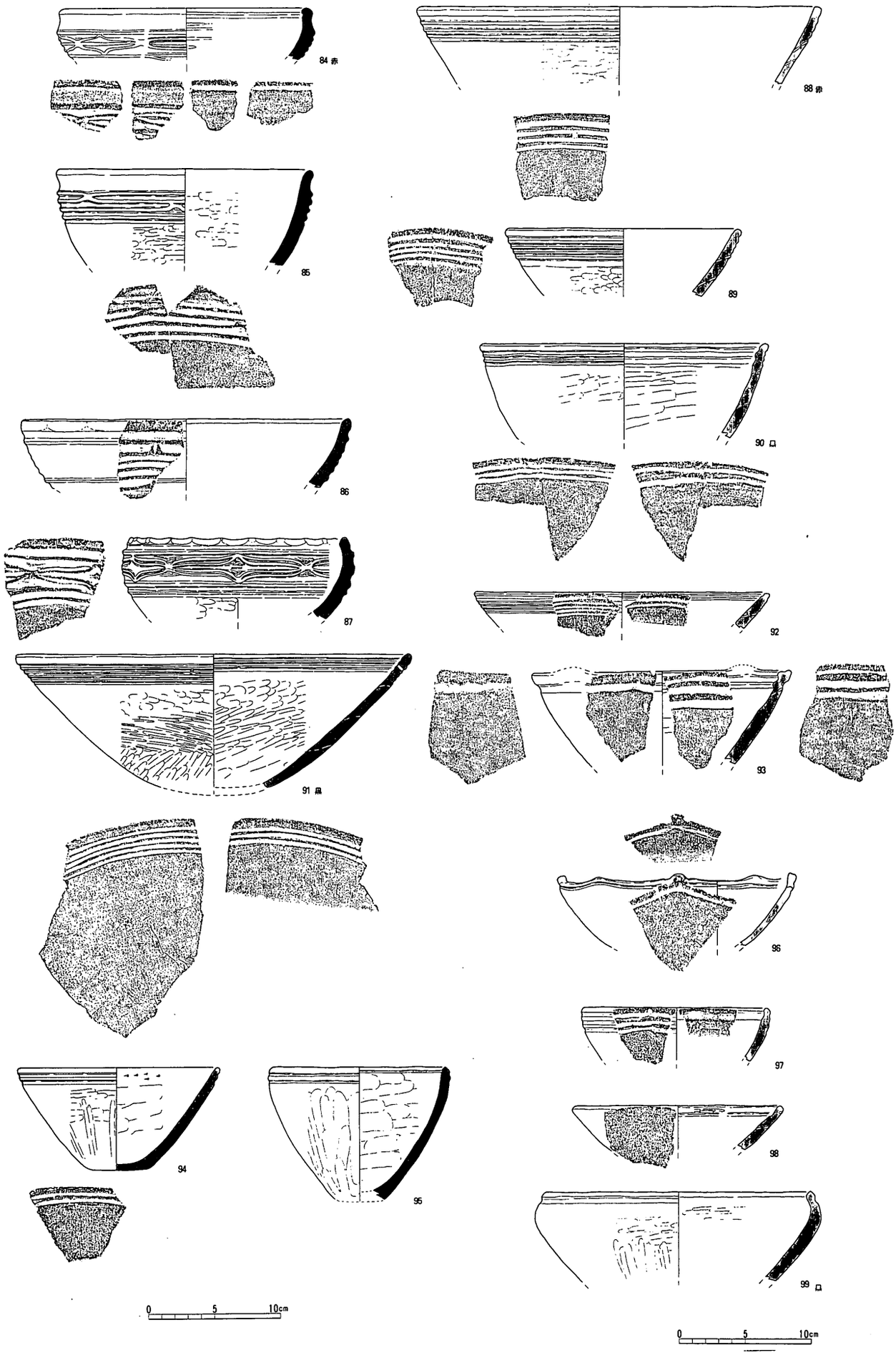


図76　A地区縄文時代晩期後半土器実測図(3)（1：4）（赤は赤色塗彩・黒は黒色塗彩）

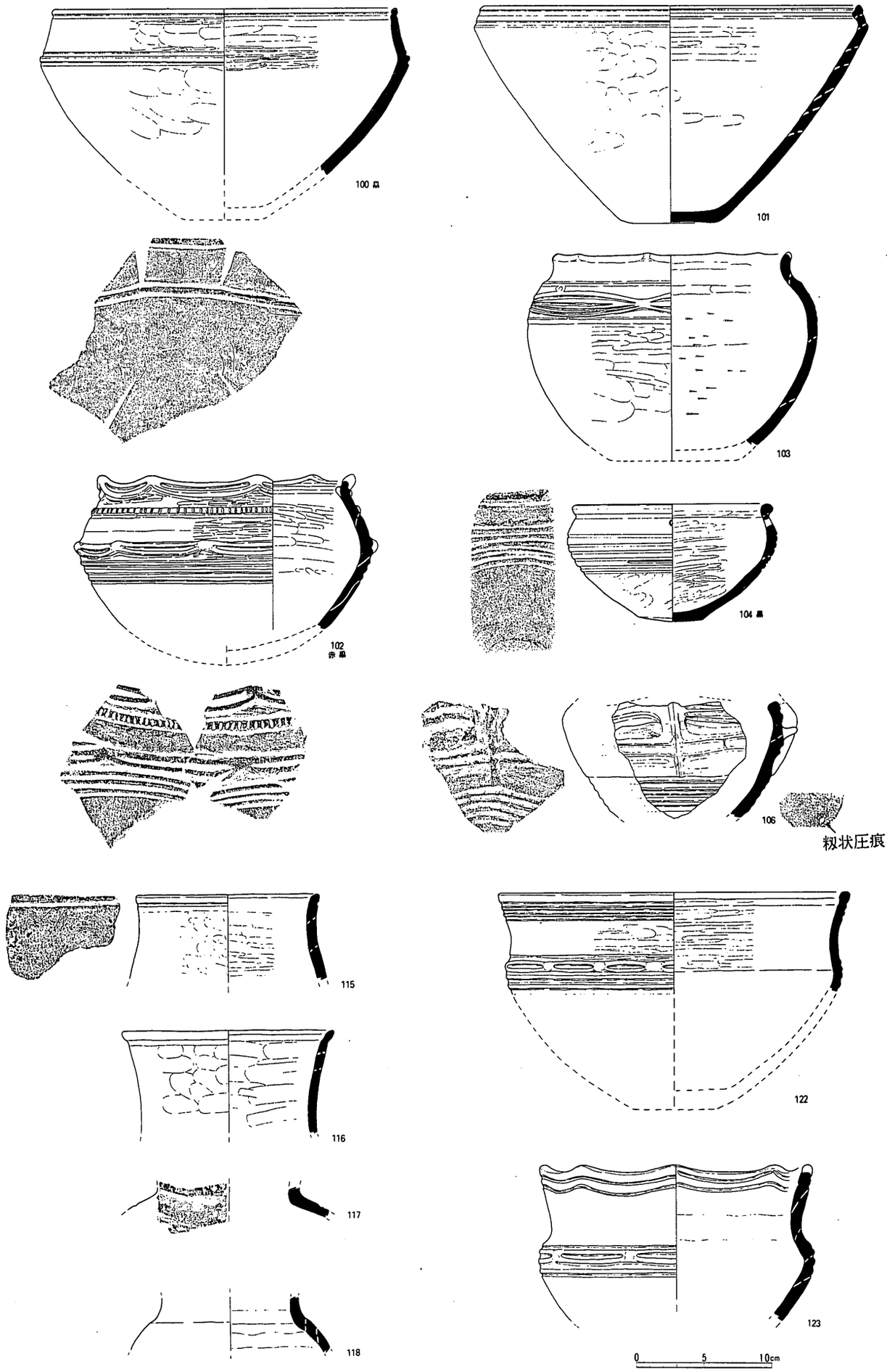


図77　A地区縄文時代晩期後半土器実測図(4)（1：4）（赤は赤色塗彩・黒は黒色塗彩）

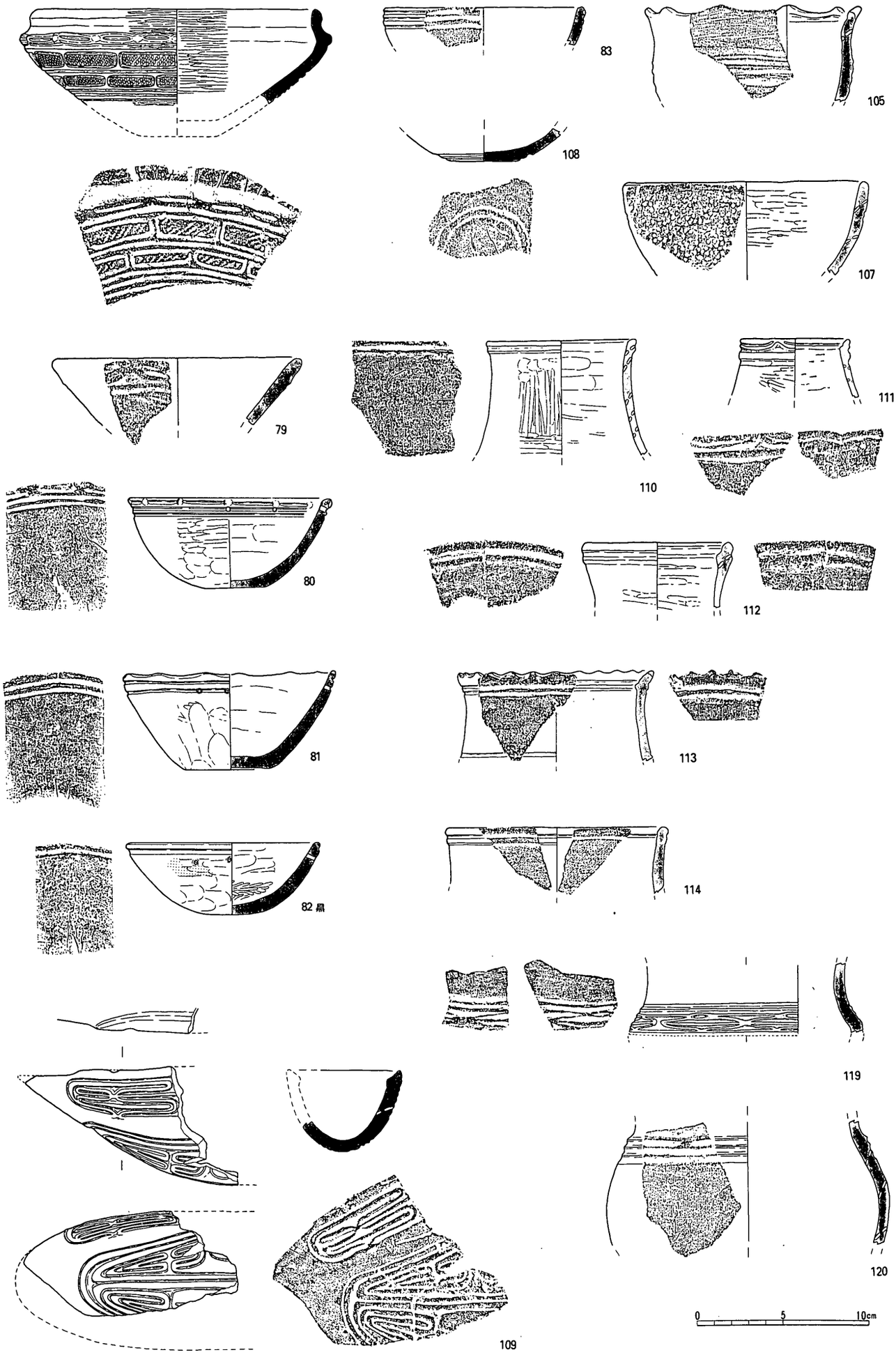


図78　A地区縄文時代晩期後半土器実測図(5)（1：3）（赤は赤色塗彩・黒は黒色塗彩）

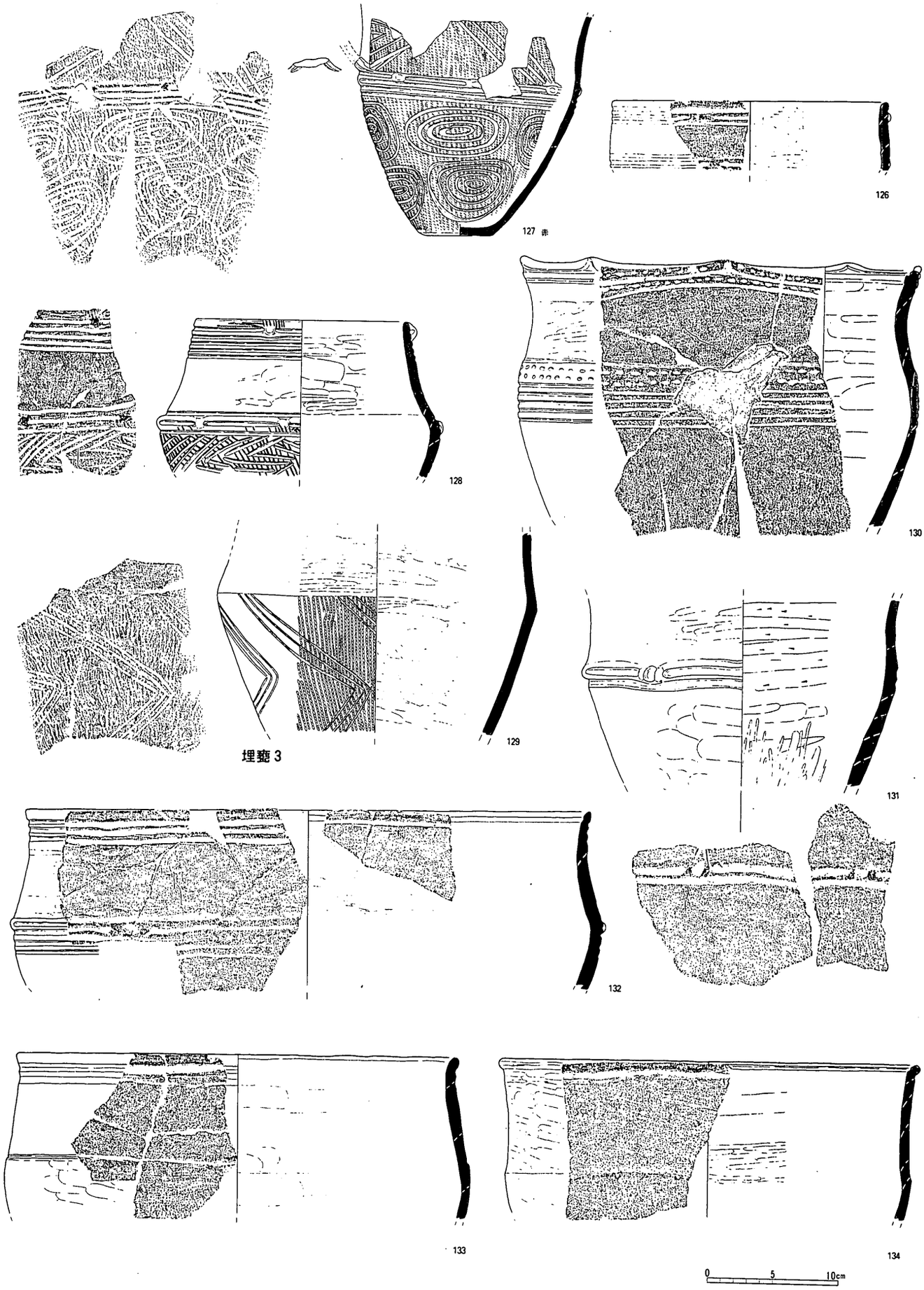


図79　A地区縄文時代晩期後半土器実測図(6)（1：4）（赤は赤色塗彩・黒は黒色塗彩）

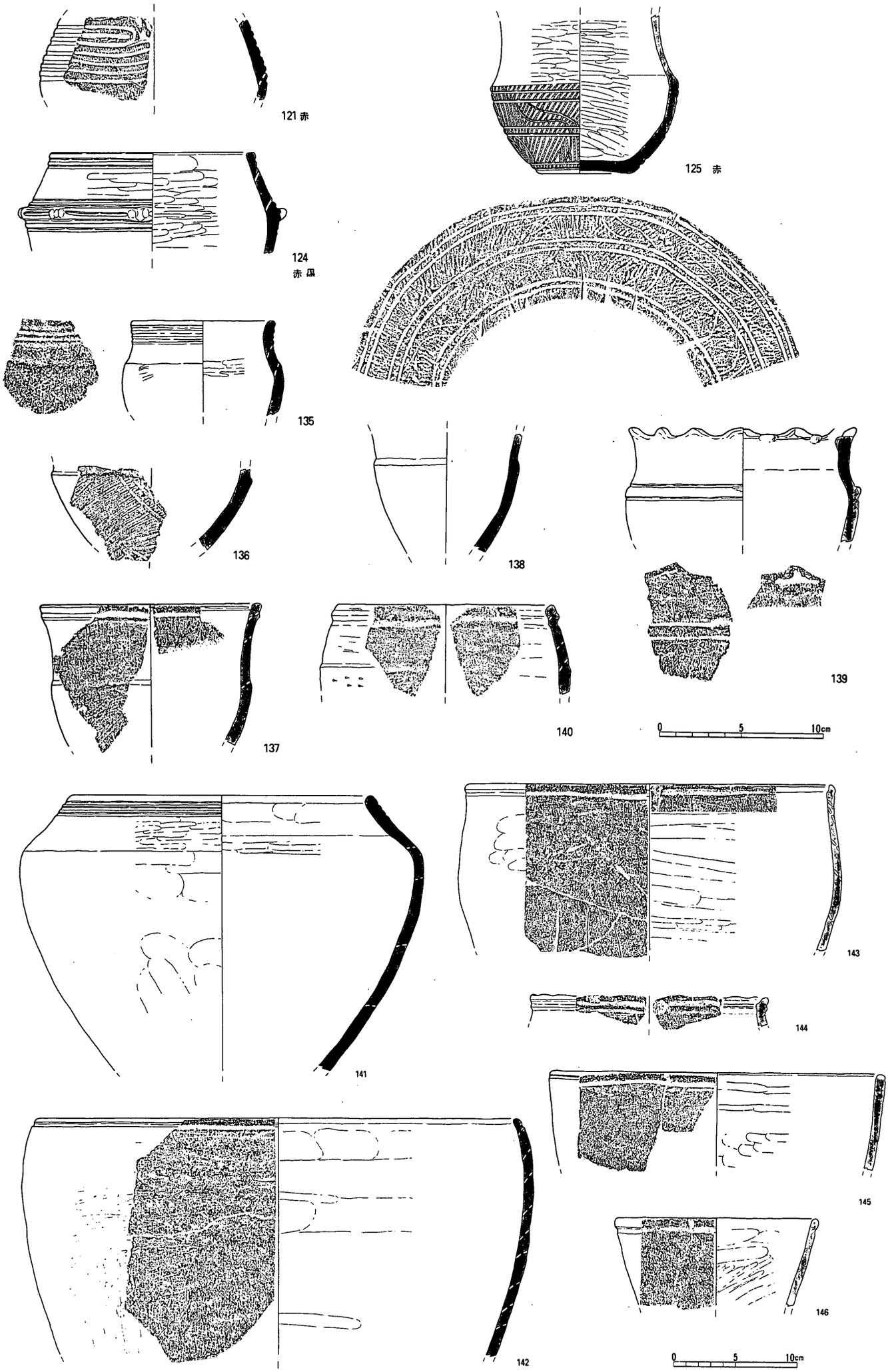


図80　A地区縄文時代晩期後半土器実測図(7)（121.124.125.135～140，1：3、141～146，1：4）
（赤は赤色塗彩。黒は黒色塗彩）

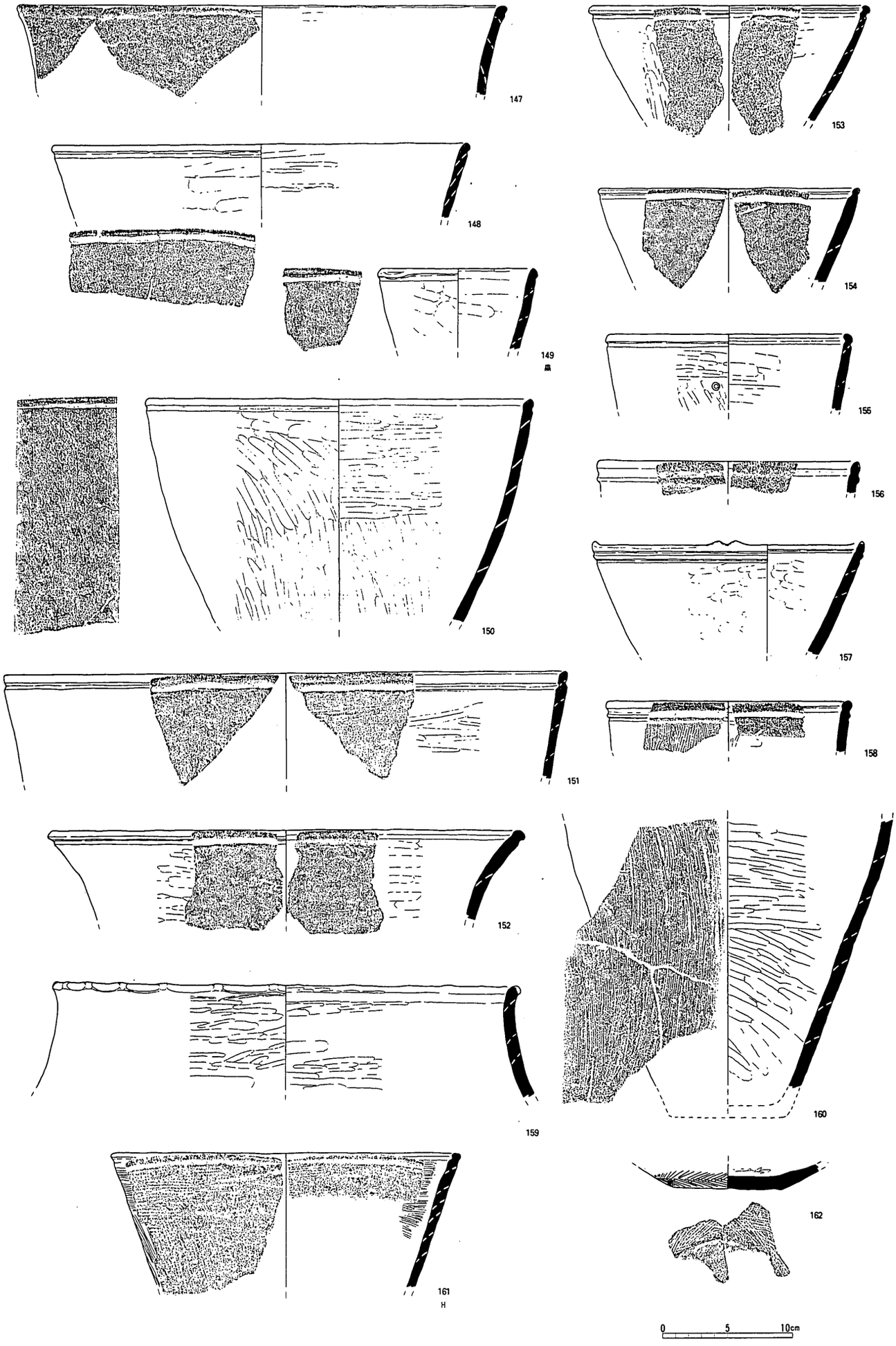


図81　A地区縄文時代晩期後半土器実測図(8)（1：4）（赤は赤色塗彩・黒は黒色塗彩・Hは北陸系）

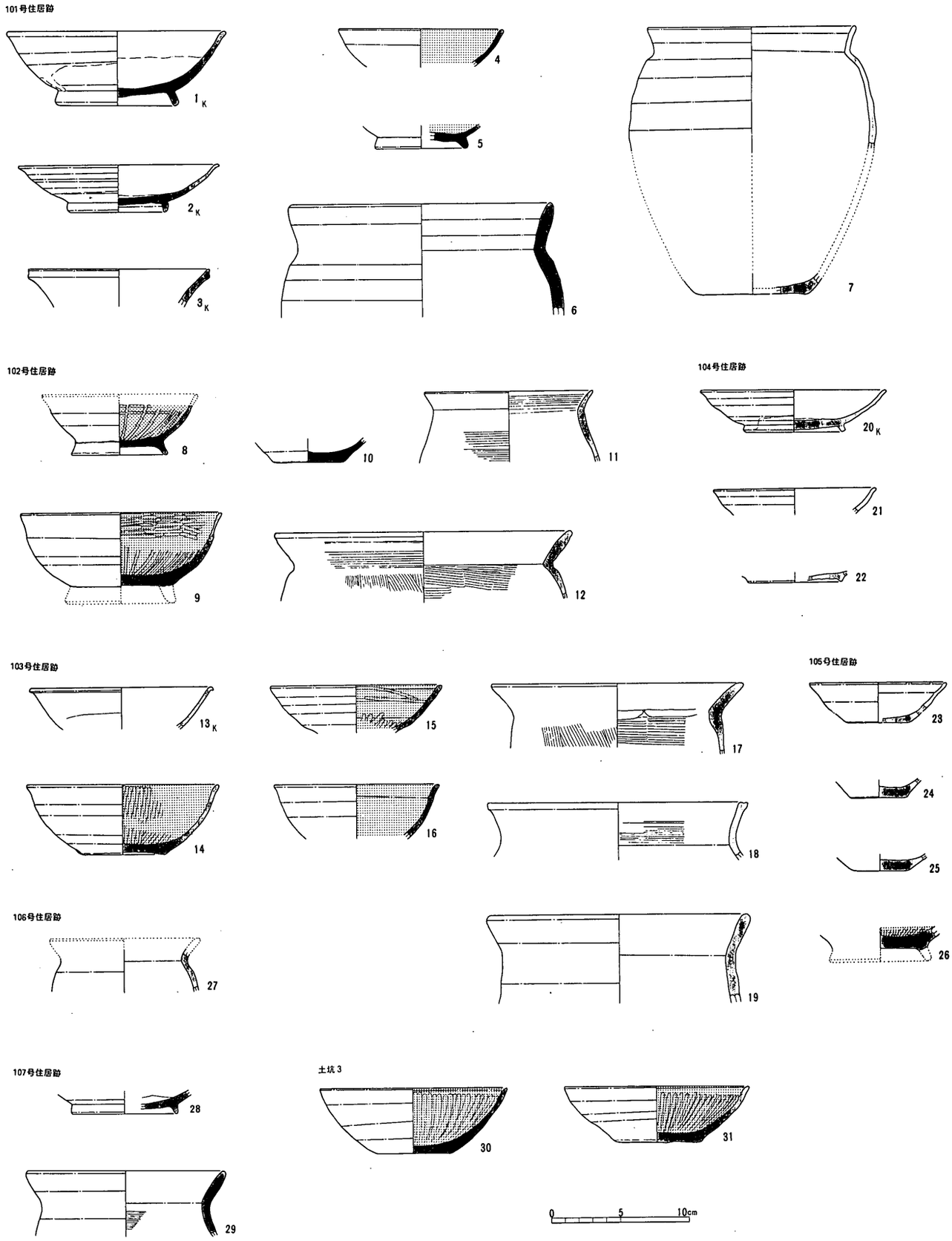


図82　BⅣ区平安時代土器実測図（1：4）（スクリーントーンは黒色土器。Kは灰釉陶器）

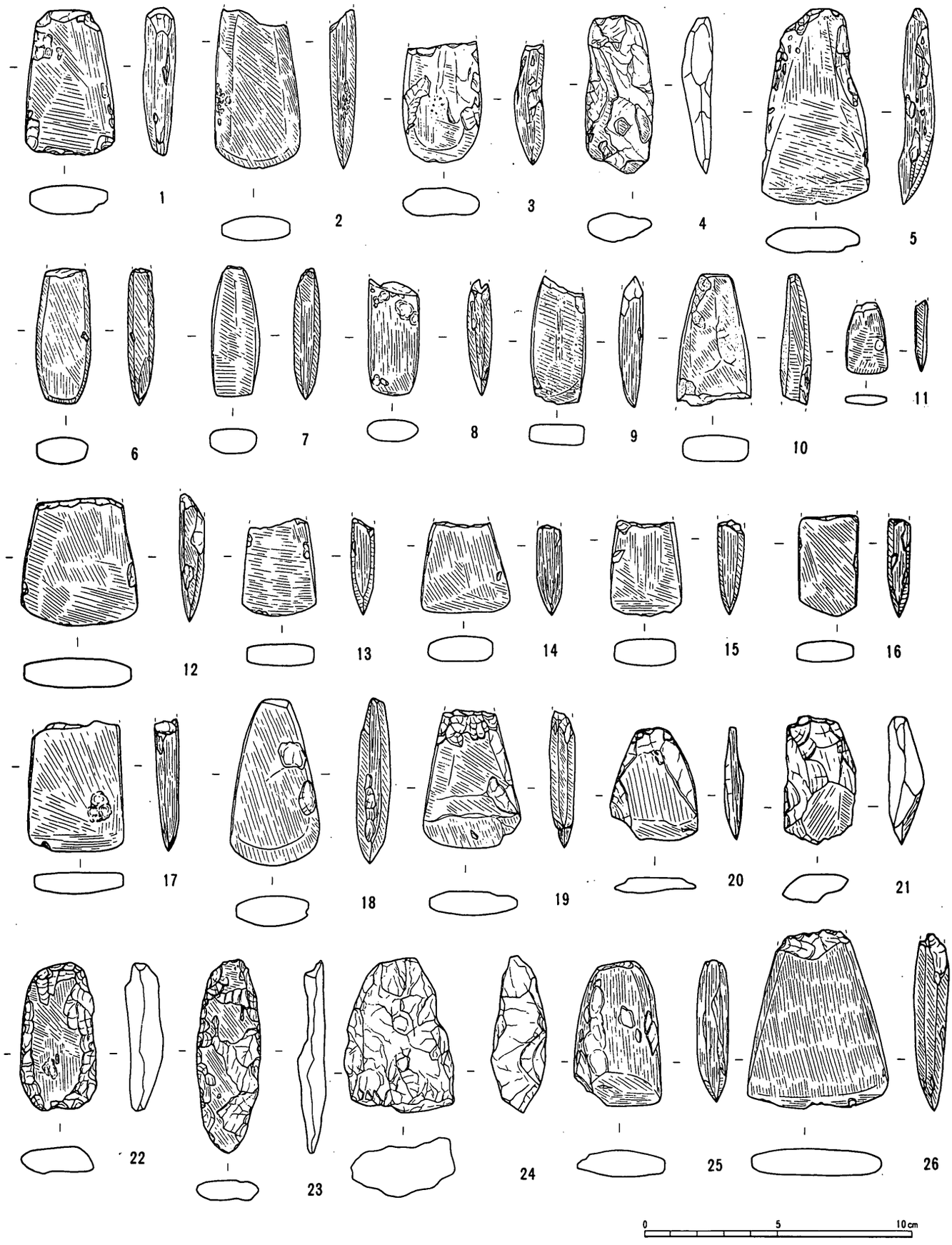


図83　A地区出土磨製石斧実測図(1)（1：2）

（未製品4・21～24その他は製品、上層1～5・16・25・26、上～中層6～15・17～24）

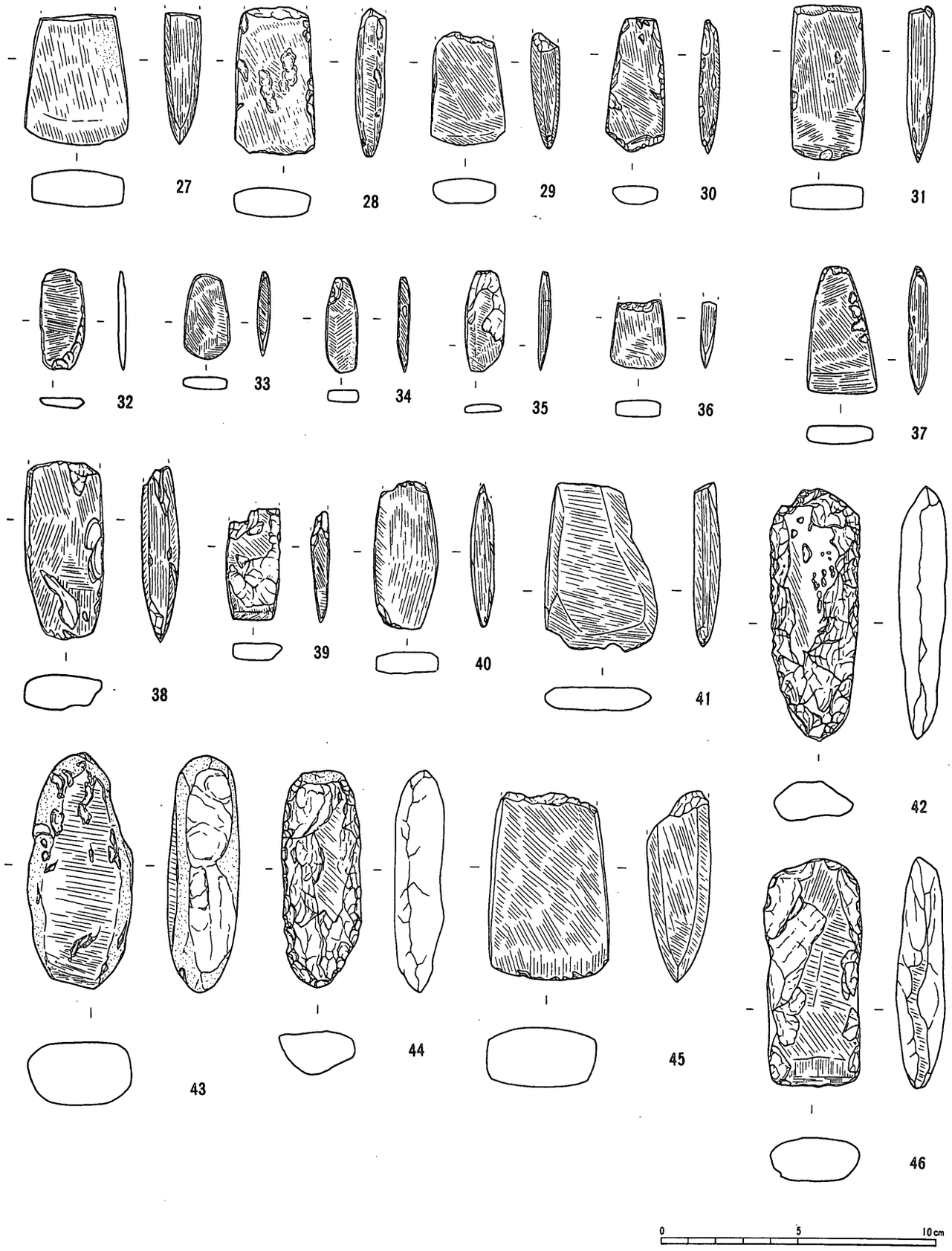


図84　A地区出土磨製石斧実測図(2)（1：2）（42～44・46未製品、その他は製品、44・45上～中層、27～30・32～36・43中層、38・39中～下層、41・46下層、31・5住、37配石墓9土拡内、40・41・46・11住、42・11住床面）

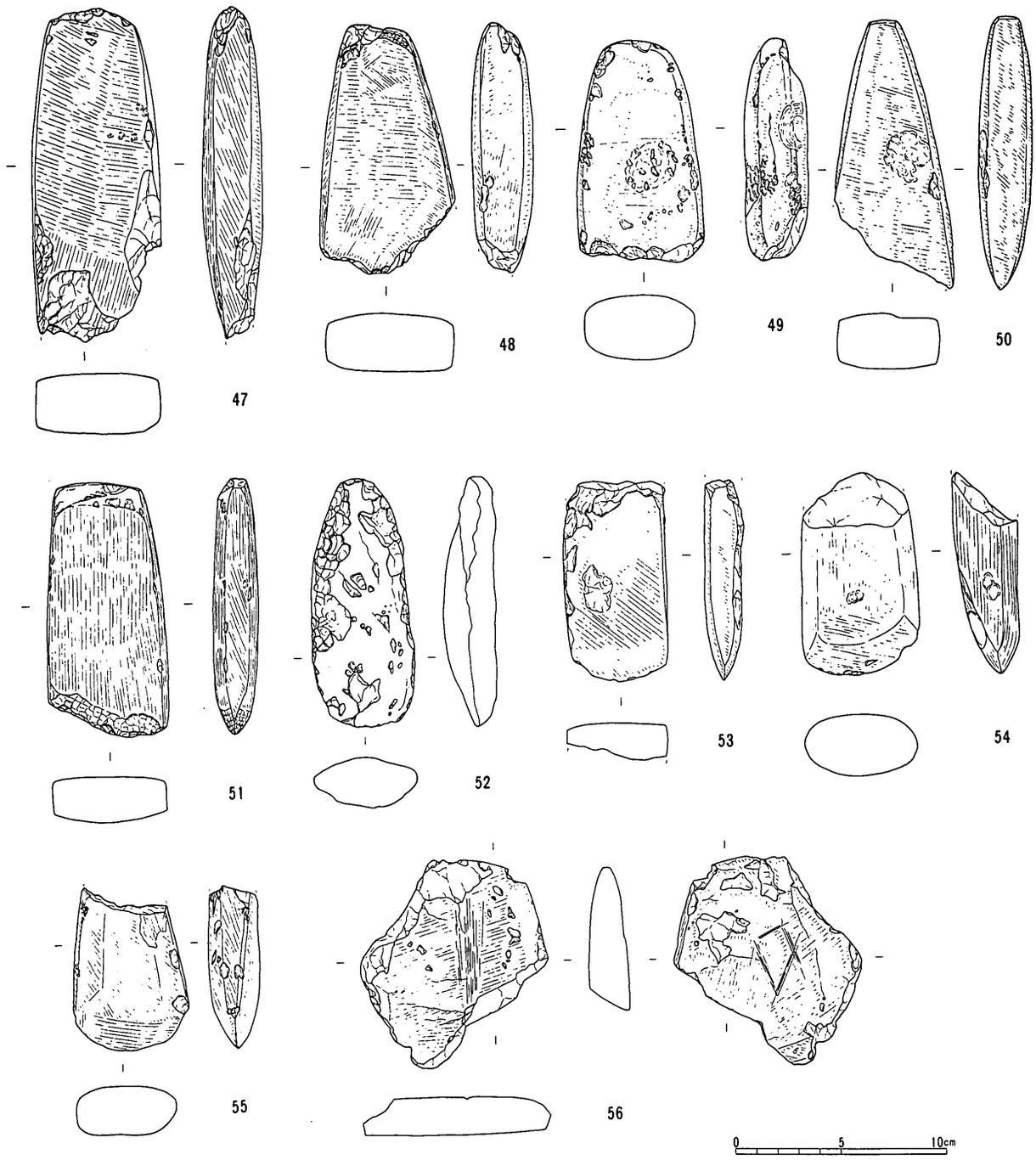


図85　A地区磨製石斧実測図（1：3）

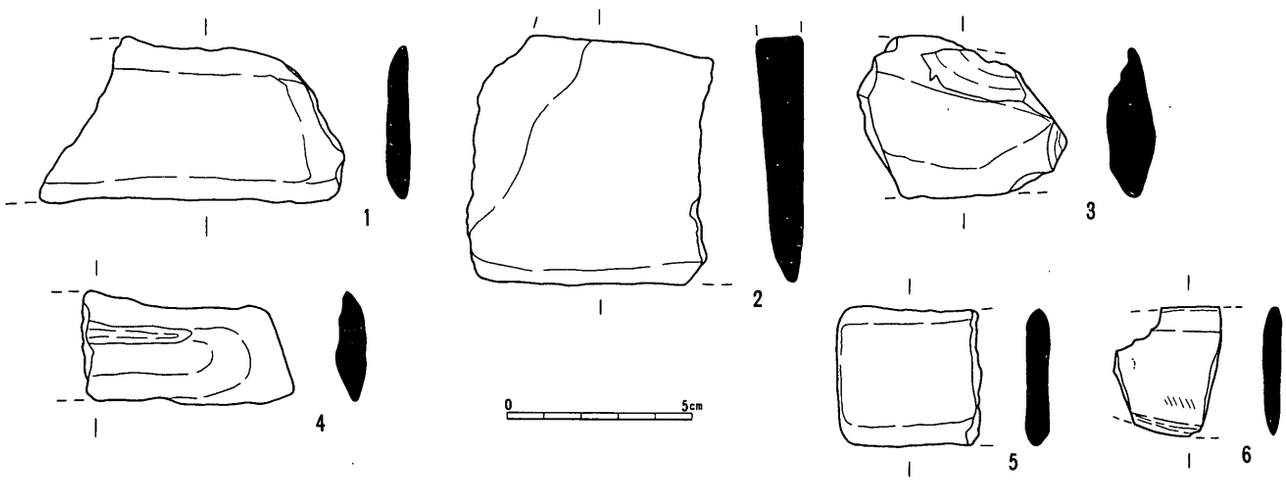


図86　A地区擦り切り用砥石（1：2）

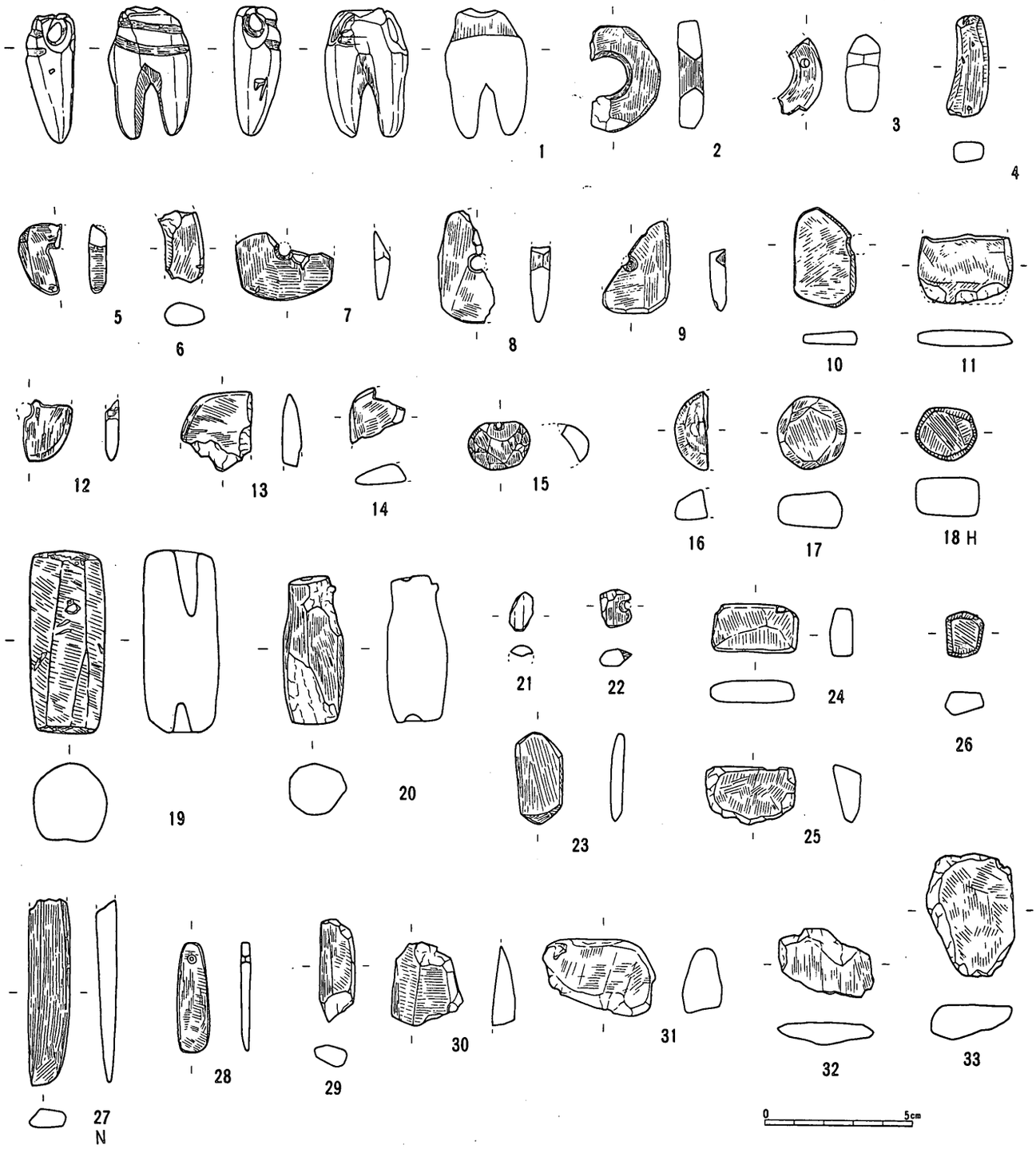


図87　B地区Ⅰ・Ⅱ区出土滑石、軟玉、硬玉製装飾品（1：2）
（Ⅰは岩偶状垂飾、H硬玉、Nは軟玉を示す。1・11はⅠ区、他はⅡ区）

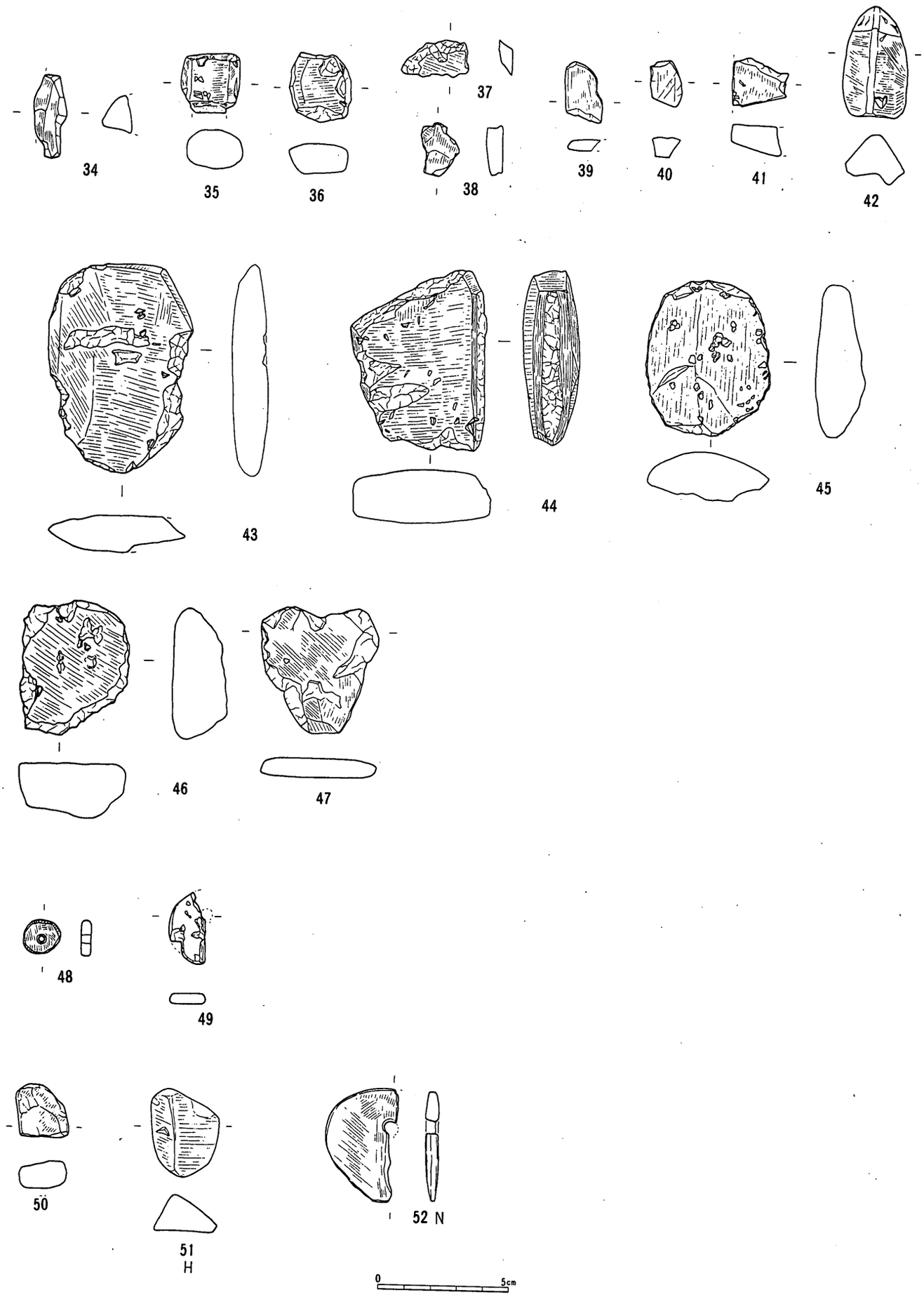


図88　B地区Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ区出土滑石・軟玉・硬玉製装飾品（1：2）
（44・47はⅠ区、48はⅢ区、49はⅥ区、50～52はⅣ区、他はⅡ区）

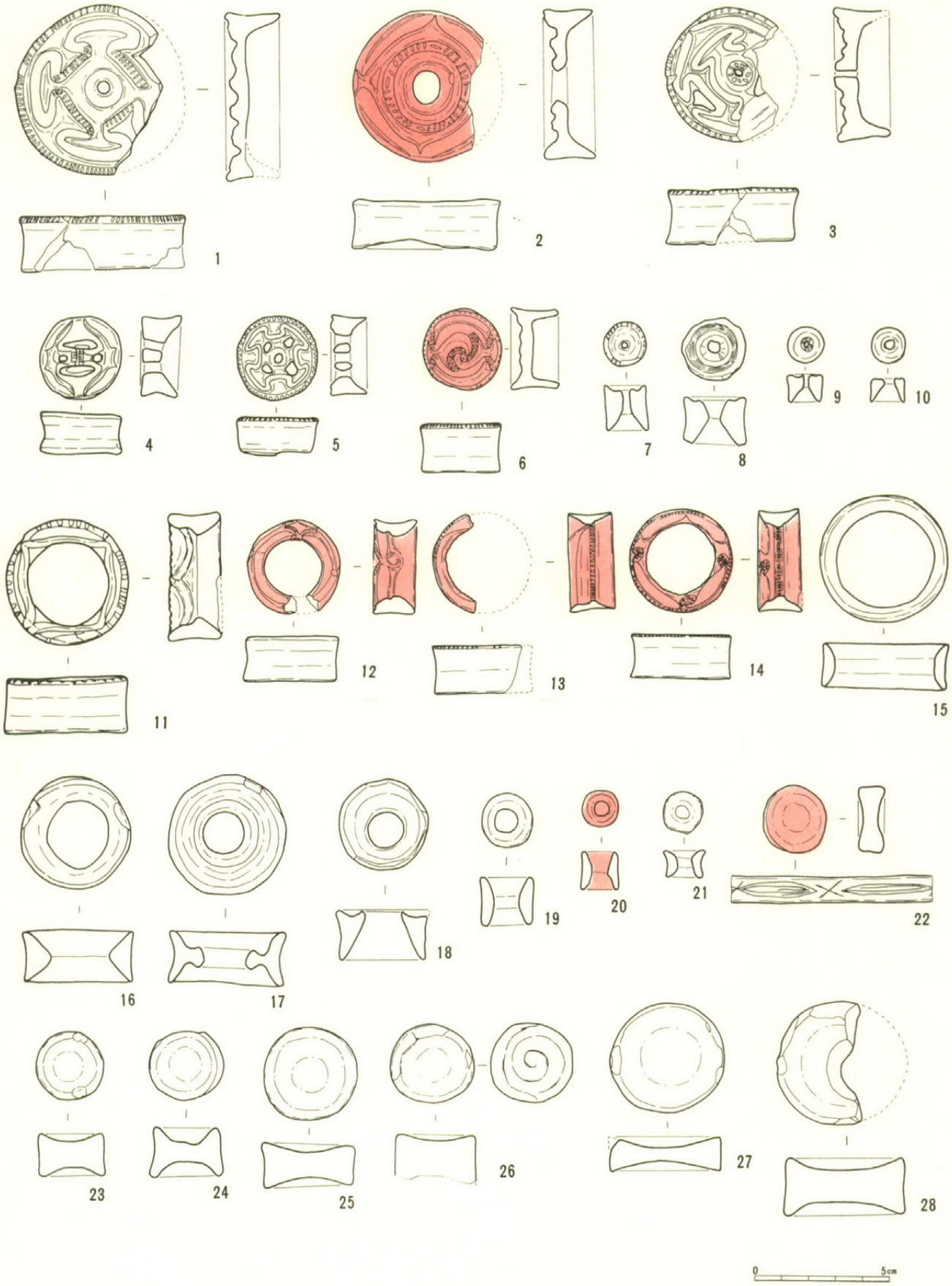


図89　A地区出土土製耳飾（1：2）（7上層、1～6、8・9・11・16～19・21～24・26・28上～中層、25・27中層、9・10配石墓、20埋甕5内、12～15　1住）

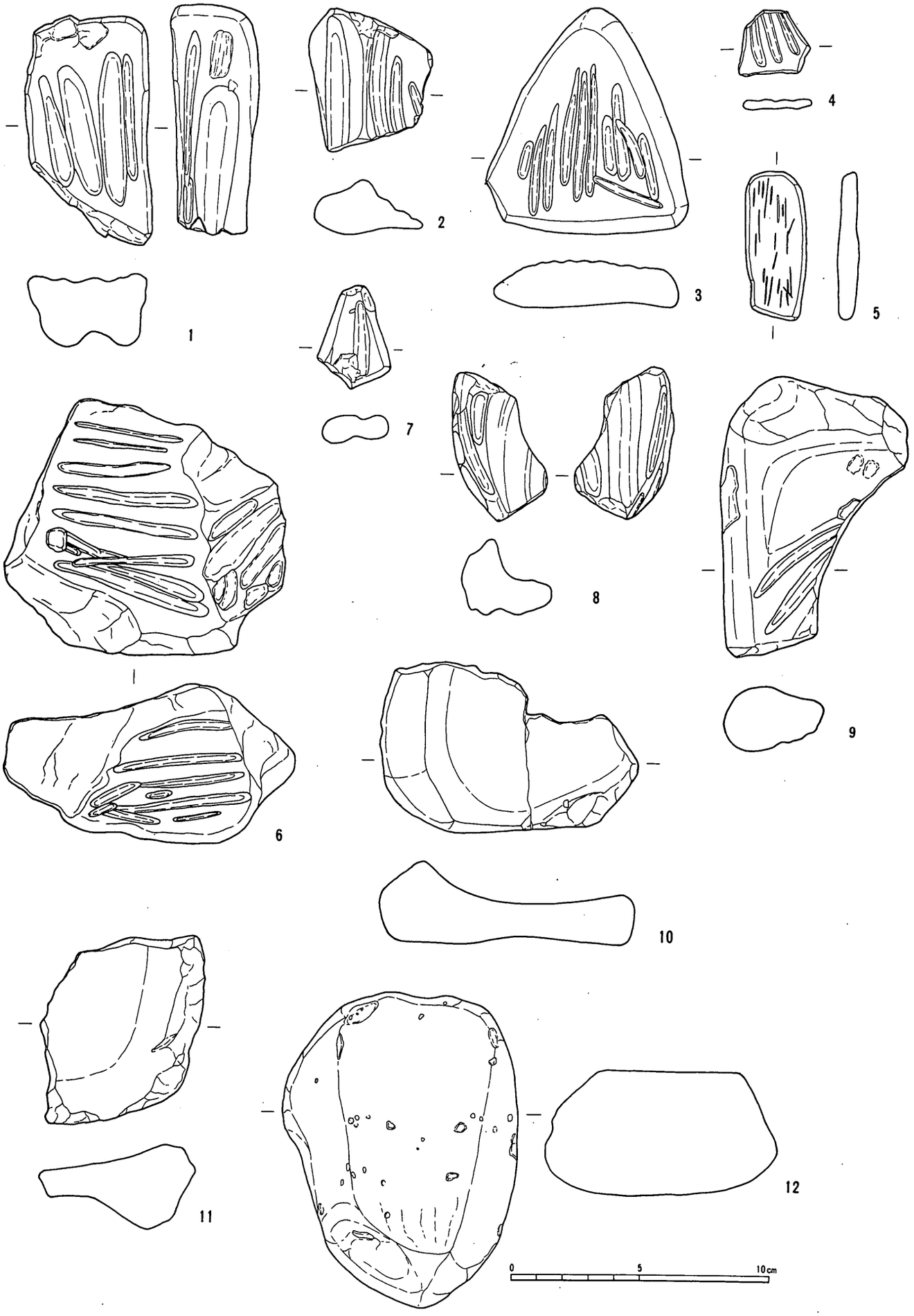


図90　A・B地区出土砥石（1：4）（1～10A地区、11・12B地区、1・7上層、2～6・10上～中層、8・9中～下層
11Ⅰ区、12Ⅱ区）

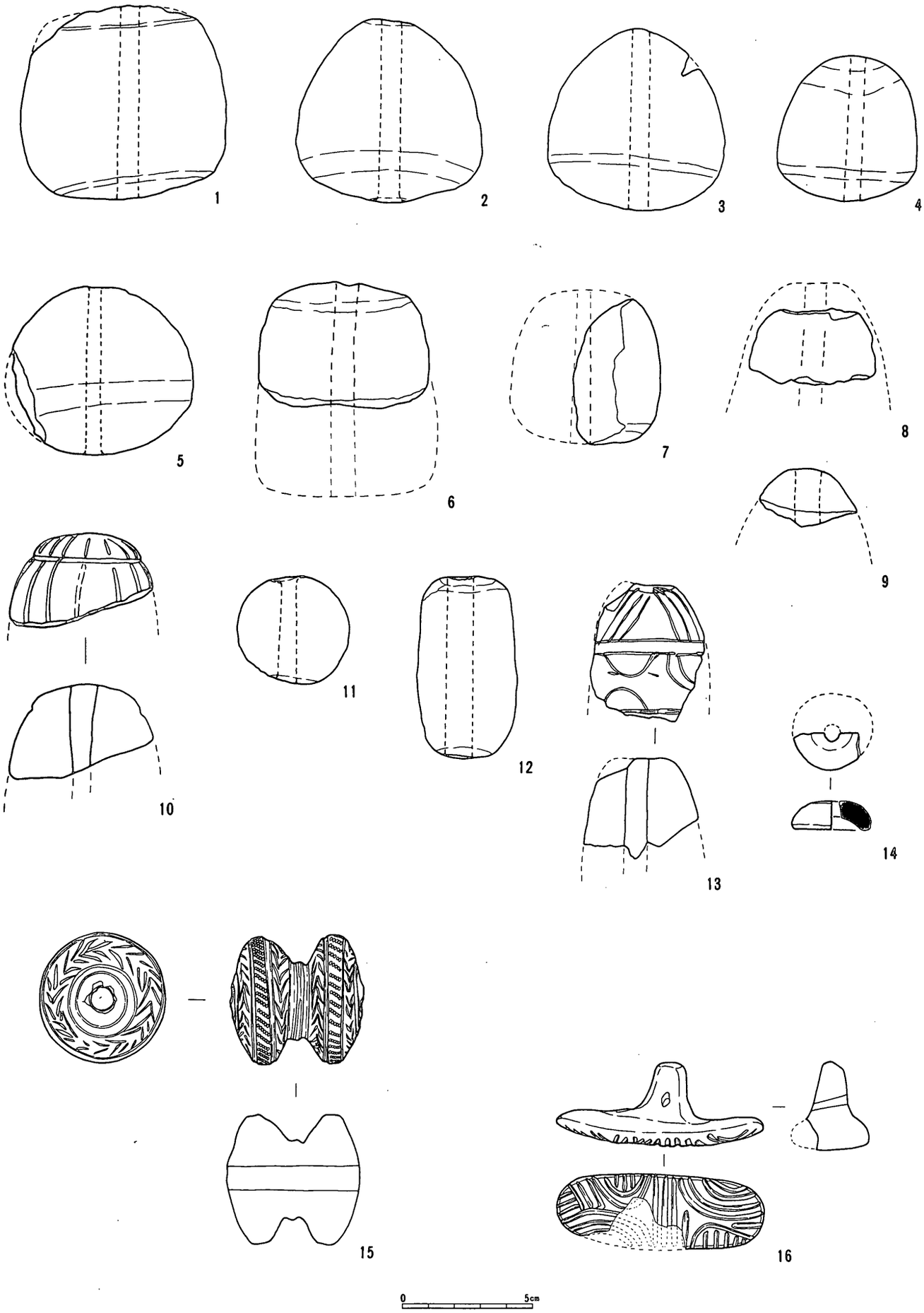


図91　A地区出土球状土製品、スタンプ状土製品（1：2）（10中層、1～9・11・13・14・16上～中層、12・15中層）

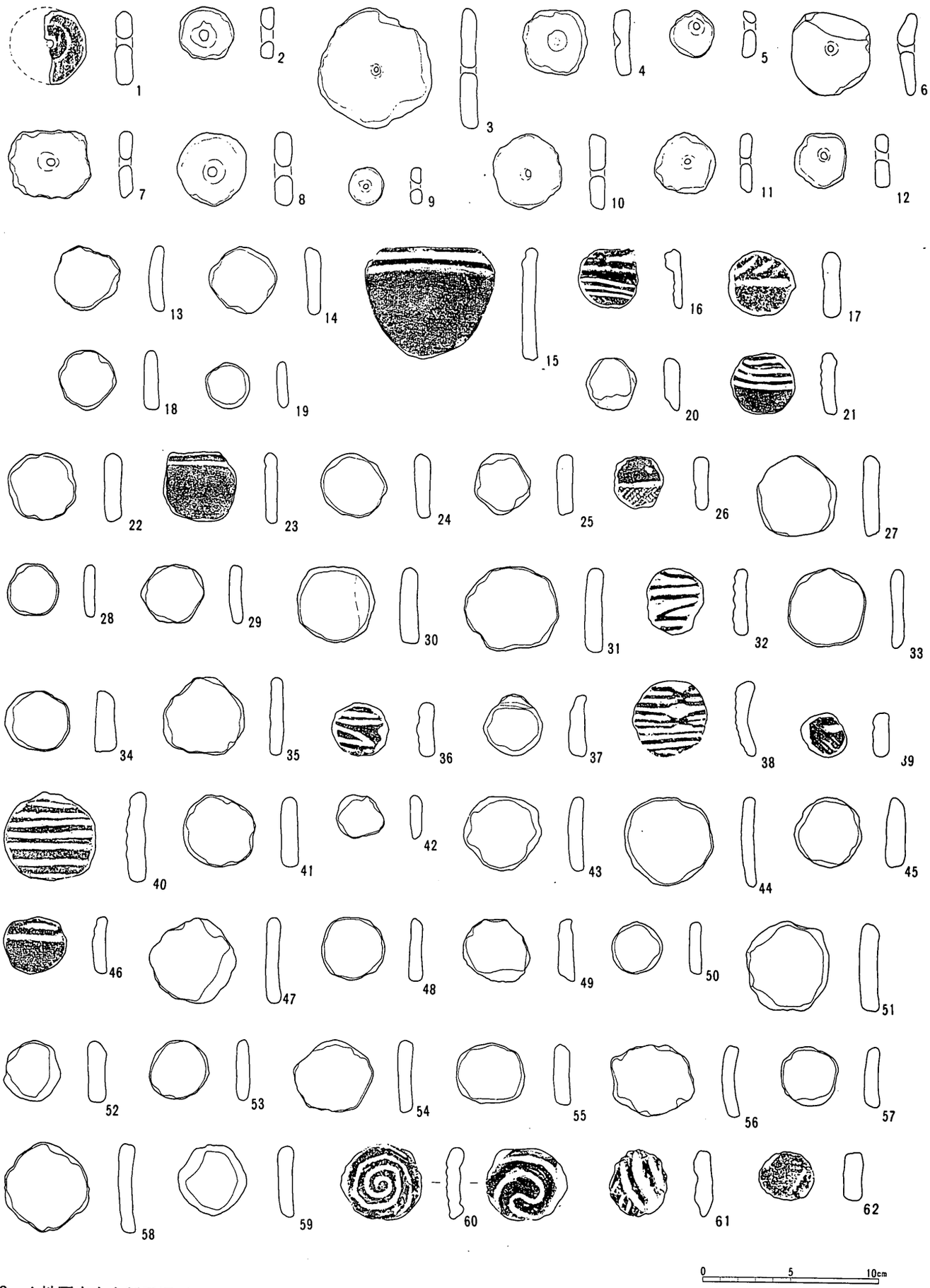


図92　A地区出土土製円板（1：3）（1～5・17～40・上層、6～8・42～51・53～57・上～中層、9～11・52・58・59中層12・60～62・中～下層、13・14配石墓4内、15・16配石墓5内、41埋甕7内）

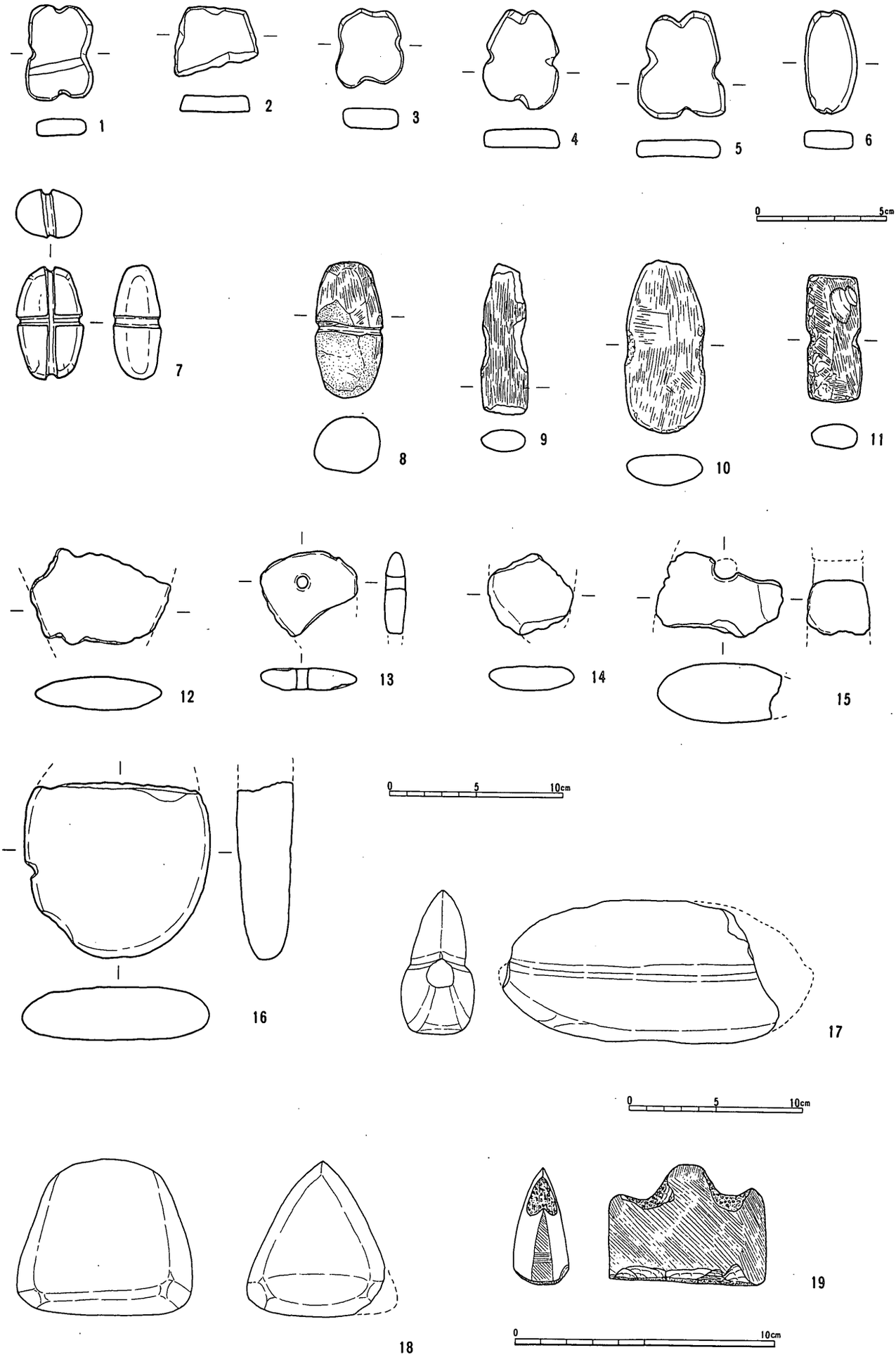


図93　A地区土器片錘・土錘・石錘・石浮・石冠（1～7・18・19，1：3、8～16・17，1：3）
（1～6土器片錘、7土錘、8～11石錘、12～16石浮き、17～19石冠）
（19は磨製石斧の内部を再利用したもの）

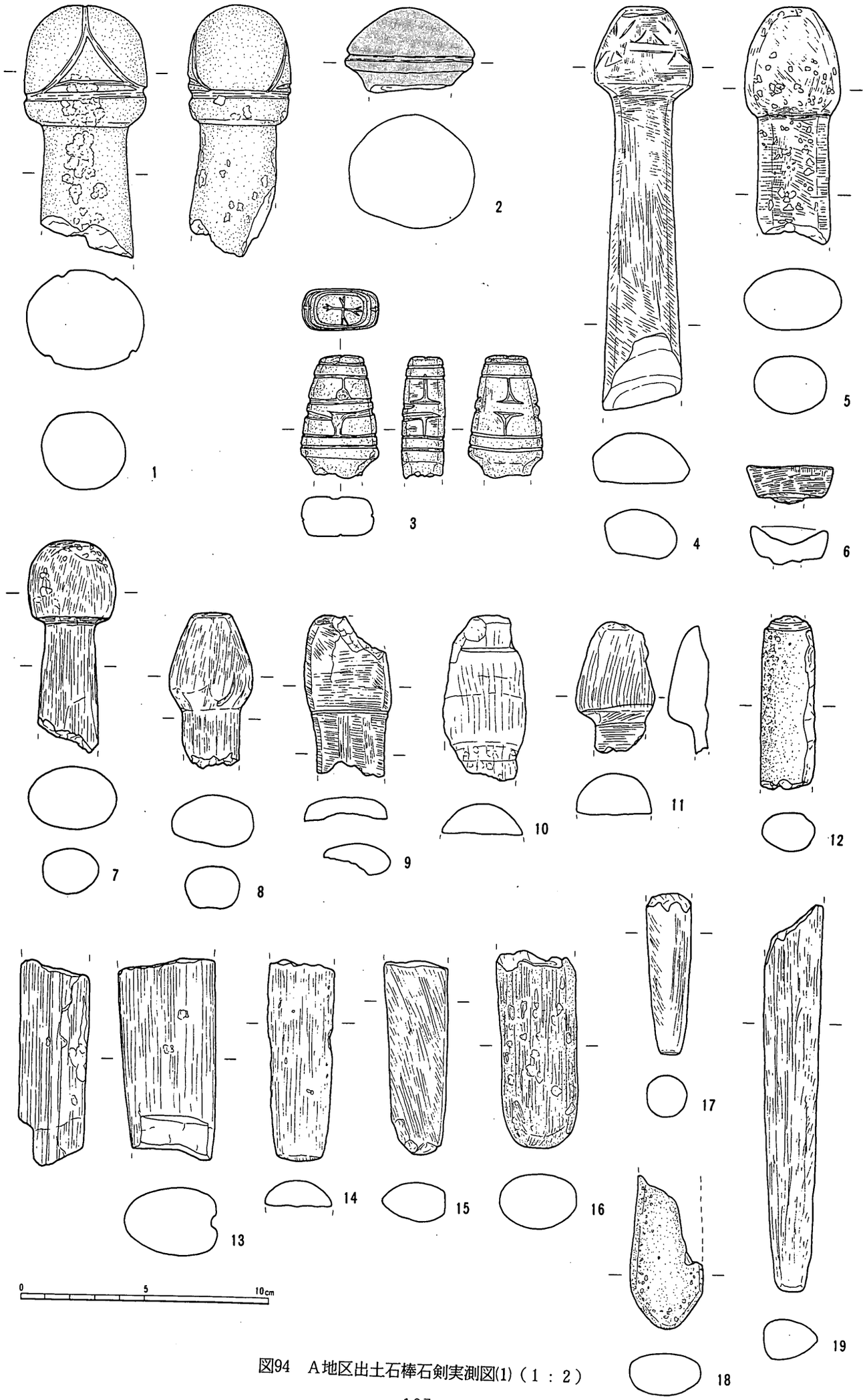


図94　A地区出土石棒石剣実測図(1)（1：2）

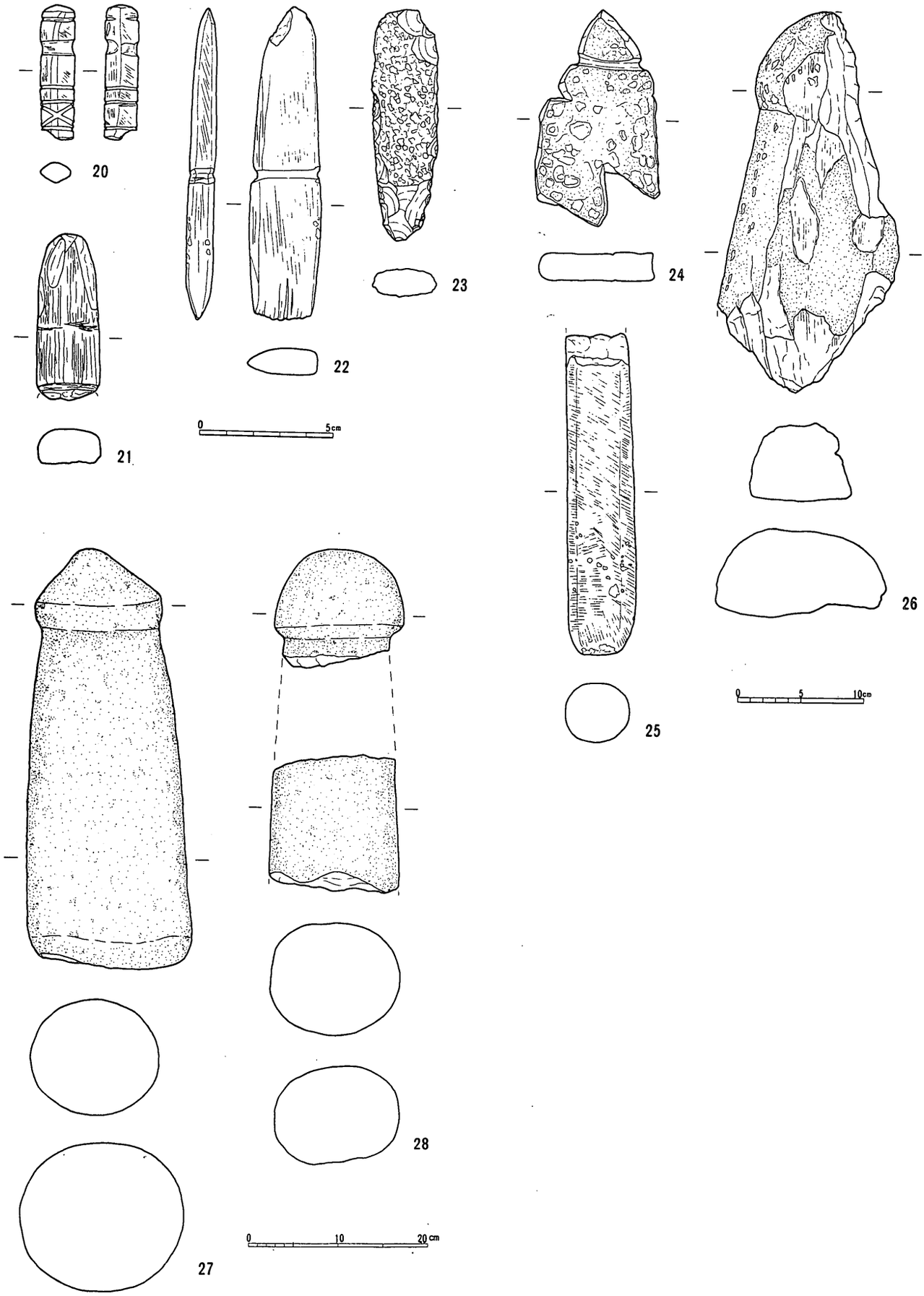
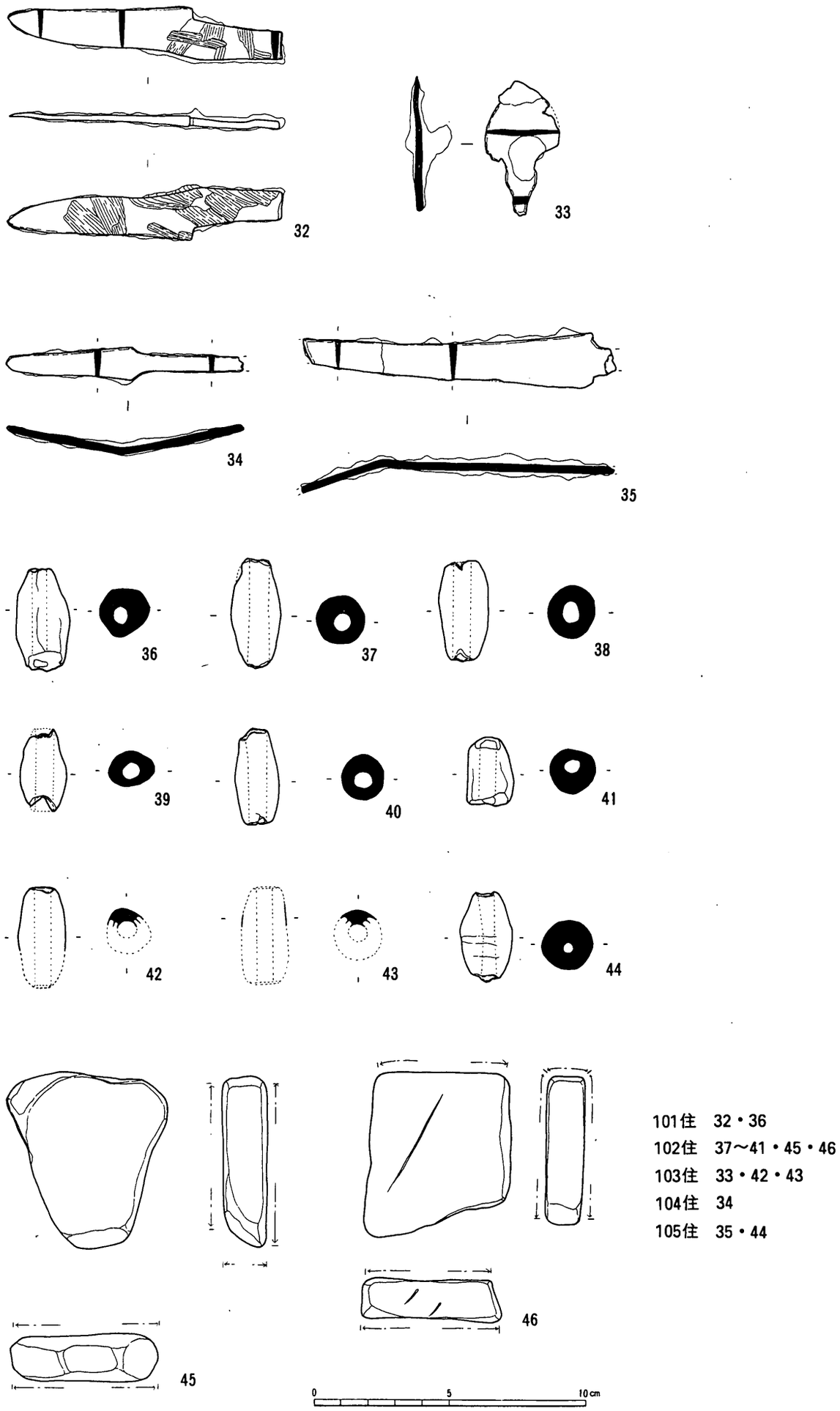


図95　A地区出土石棒石剣実測図(2)（11・18上層、1・2・5～9・12～16・19～21・24上～中層、3・17中層、4・26 5トレ2区、10・配石墓10土拡内、22・配石墓14土拡内、23・配石墓9土拡内、25表採、27・28A地区Ⅱ区）（20～23，1：2、24～26，1：3、27・28，1：6）



101住　32・36
102住　37～41・45・46
103住　33・42・43
104住　34
105住　35・44

図96　B地区Ⅳ区鉄器・土製品・砥石実測図（1：2）

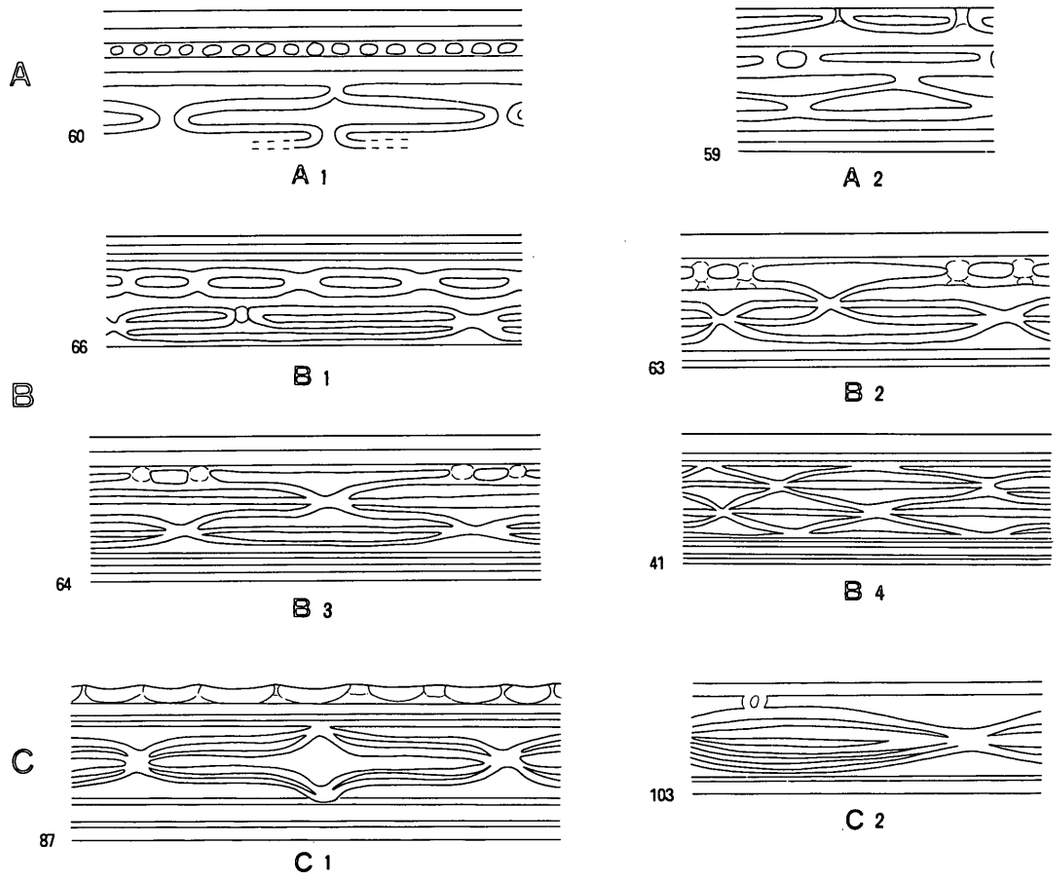


図97　一津遺跡における浮線網状文の分類

縄文時代晩期後半（上層）の土器器種分類表

分類		土　器　番　号
鉢	A	8・18・72・73・74・100
	B	9・66・67・68・69・70・71・75
	C	102・104
	D	15・84・85・103
	E	1・2・3・4・10・12・13・16・17・53・54・55・56・57・58・59・60・61・79・80・81・82・83・86・88・89・90・91・92・94・97・98
	F	109
壺	A	110・111・112
		117・118・119・120
半製甕	A	105・113・123・130・139
	B	32・119・122・126・127
	C	49・124・128
粗製甕	A	20・22・23・24・25・26・27・28・29・31・34・35・36・39・43・44・45・110・134・137・147・151・152・156
	B	30・51・114・115・132・133・135・140・143・144・159
	C	141
		125・129・131・138・160
深鉢	A	157
	B	19・21・37・38・50・95・145・146・148・149・150・153・154・155・158・161
	C	40・47・48・142

中～下層（後期前半）

中層（後期後半）

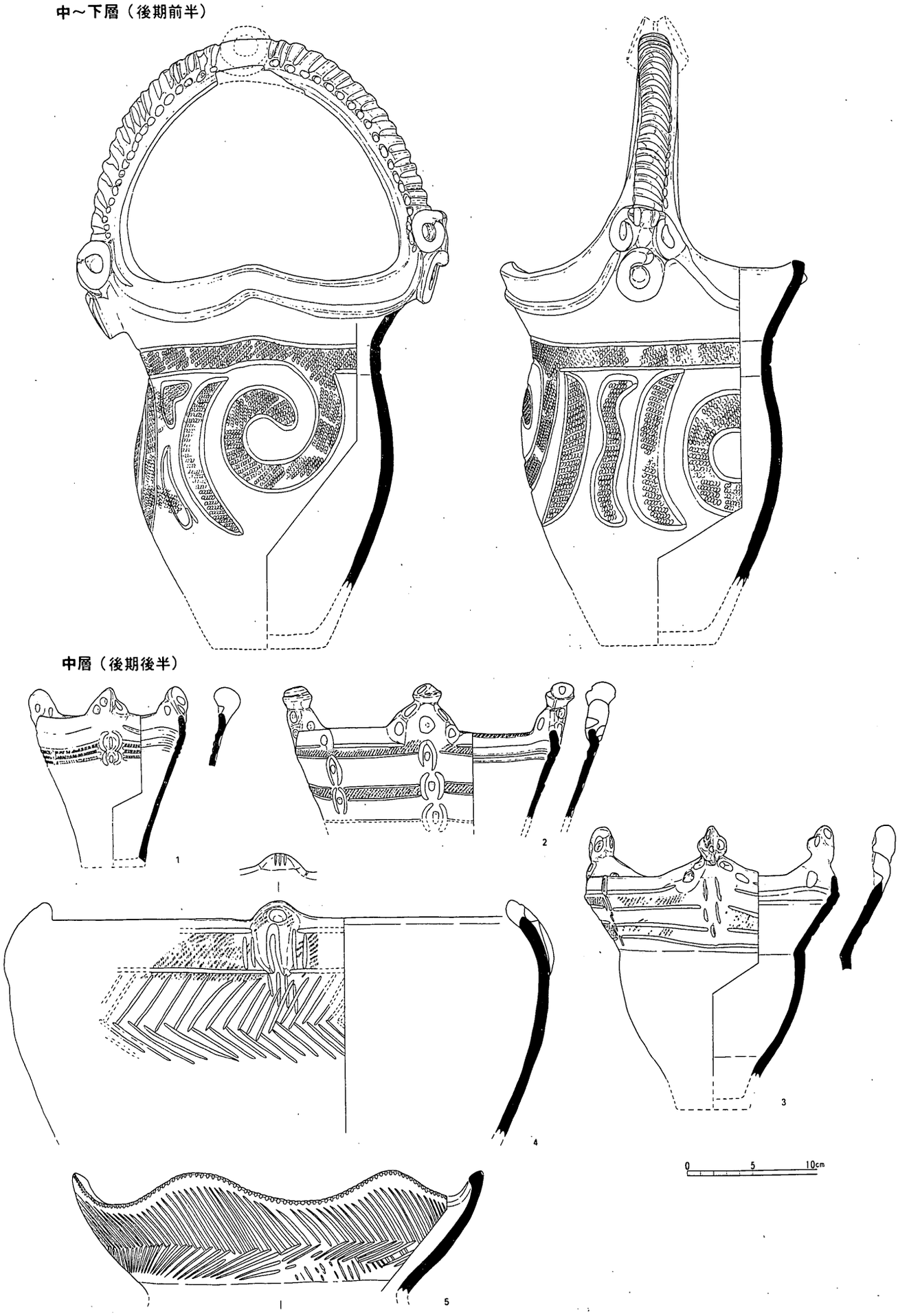


図61　A地区出土縄文時代後期土器実測図（1：4）

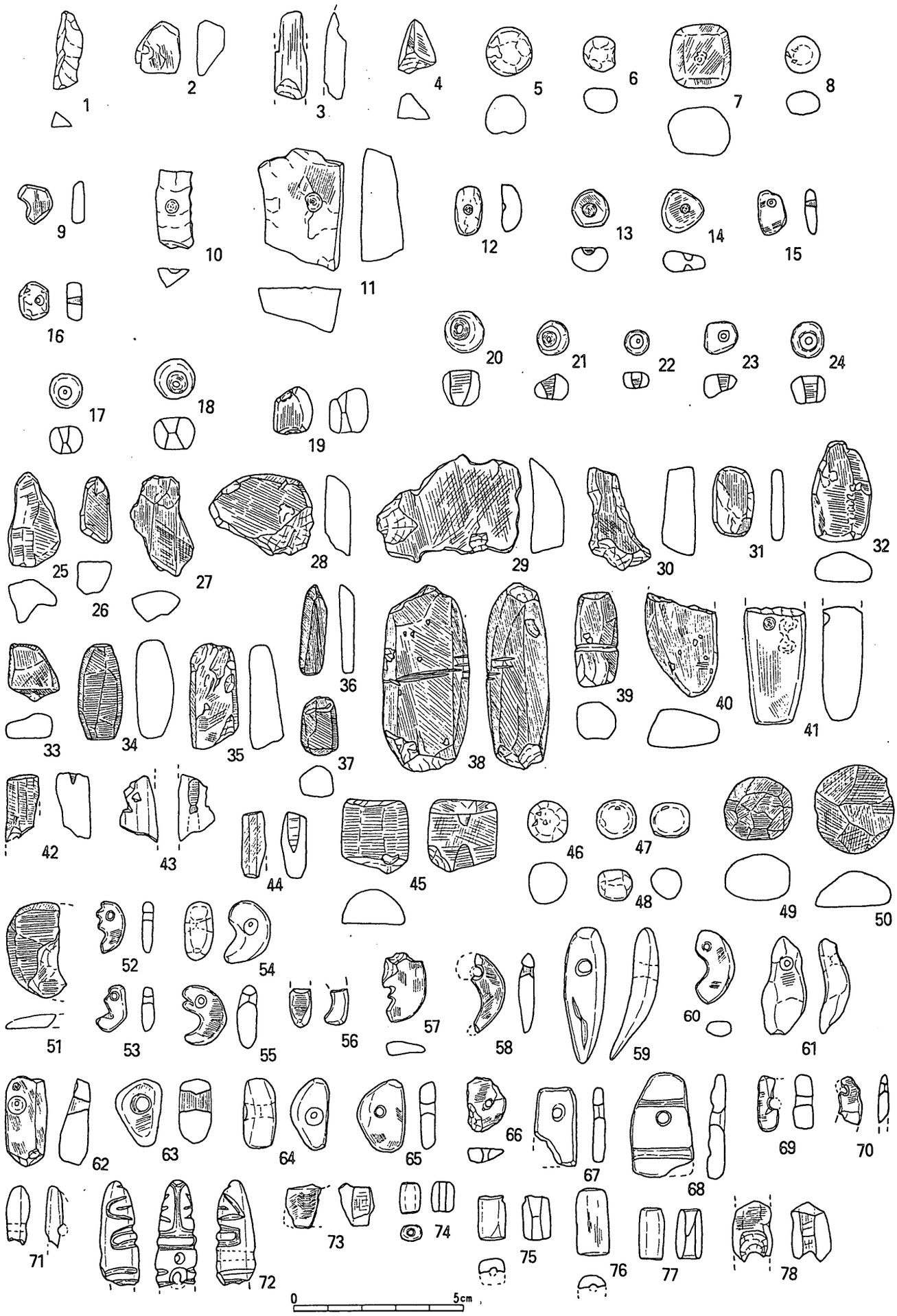


図98　A地区出土石製装飾品(1)（3：2）（1～24ヒスイ（硬玉）、25～78滑石、1～14・25～51未製品、15～24・51～78製品）

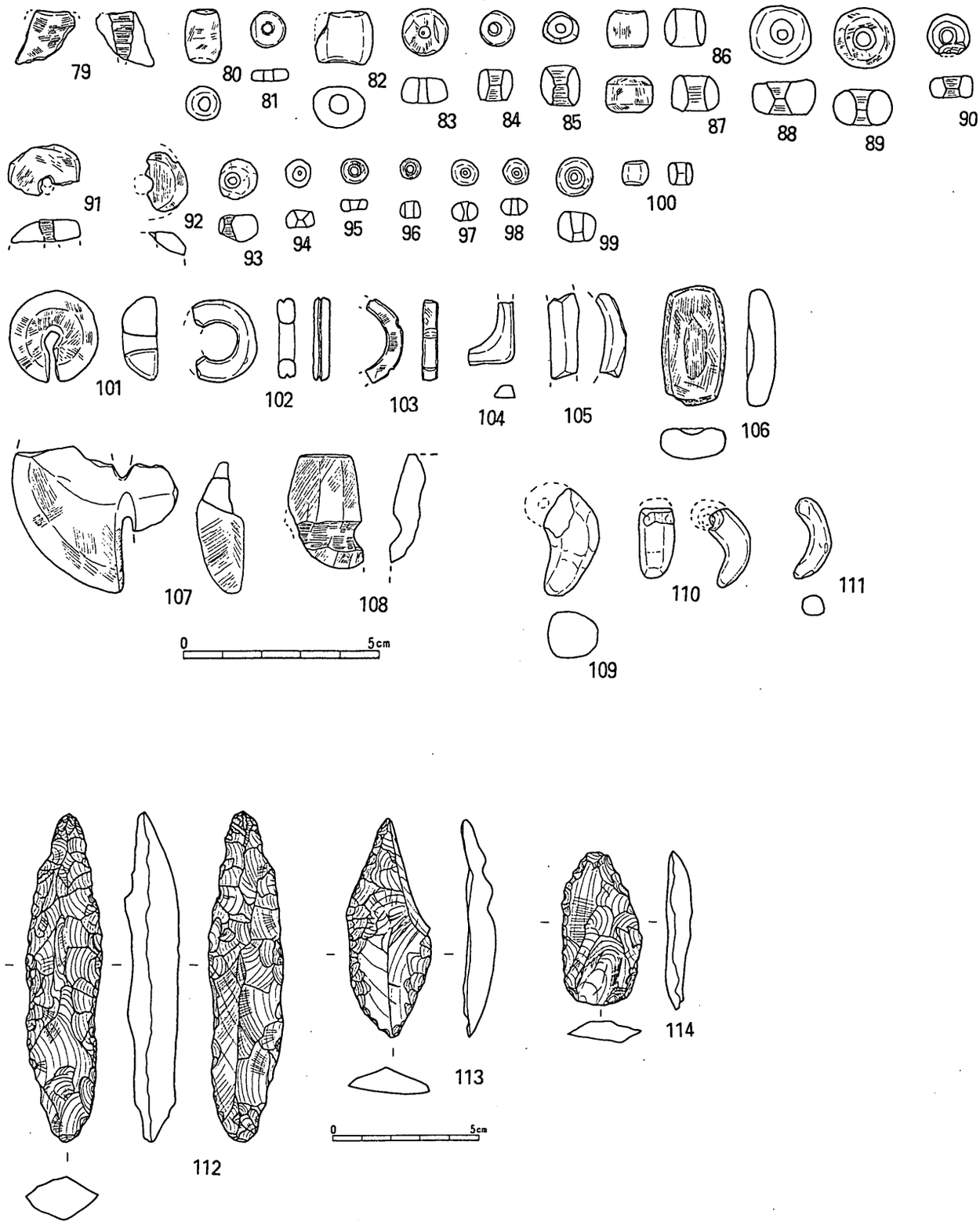


図99　A地区出土石製装飾品(2)、土製装飾品、石槍（79～108滑石・製品、109～111土製勾玉、112～114石槍
<112・113は珪質頁岩、114は黒曜石>）（79～111－3：2、112～114－1：2）

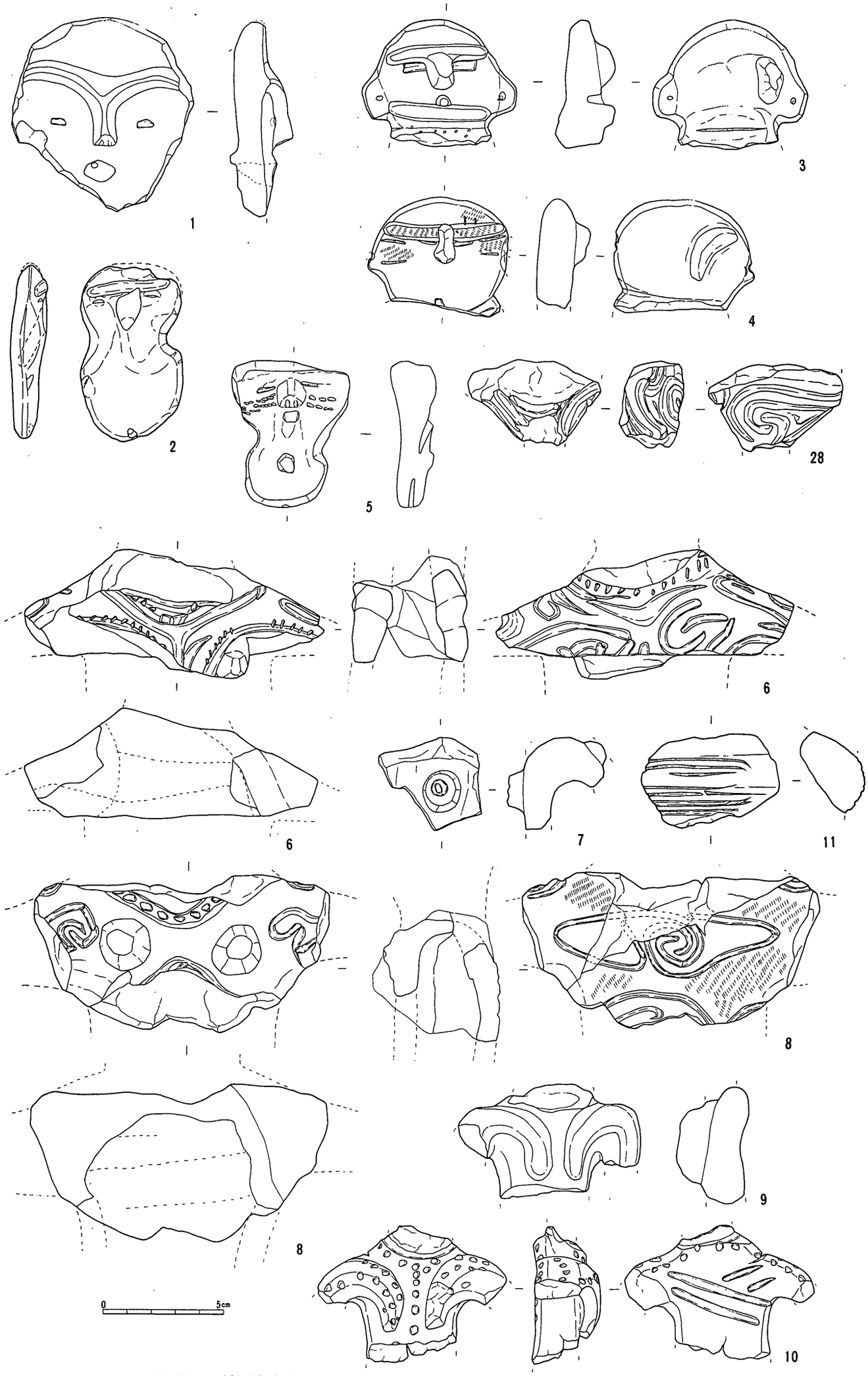


図100　A地区出土土偶(1)（1：2）（1・2－上層、3～11－上～中層、28－下層）

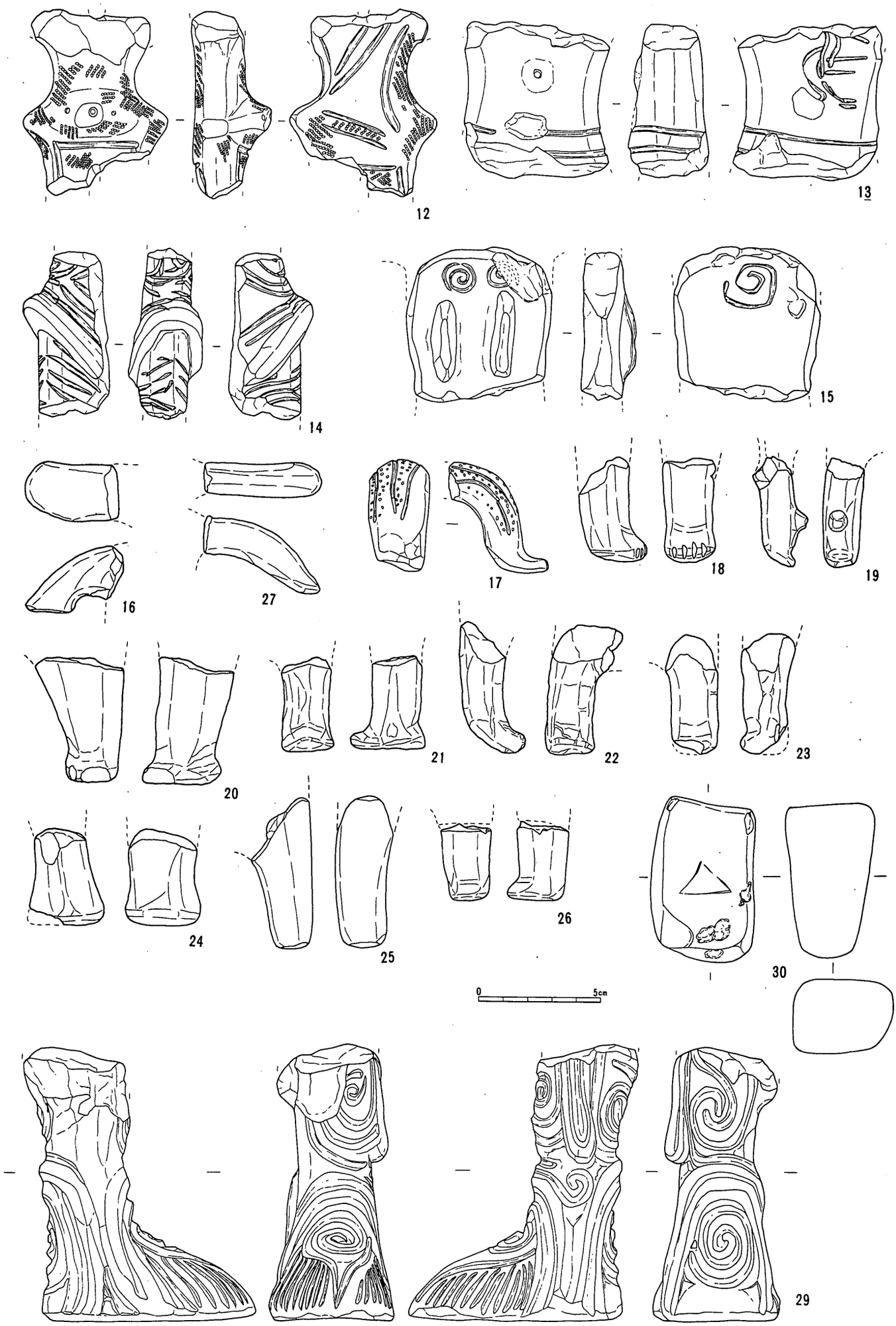


図101　A地区出土土偶(2)・土版（1：2）（12〜16・18〜22・27・30－上〜中層、17・23〜25－中層、26－中〜下層、29－下層、30は土版）

第３節　上層の土器群について

国立歴史民俗博物館　設　楽　博　己

一津遺跡Ａ地区では、縄文中期以前の包含層は未発掘である。したがって、この遺跡の年代がどこまでさかのぼるのかは、明確にしがたい。しかし、少なくとも縄文中期から晩期終末までは、断続的ながらも営々と営まれた集落だといえる。ここでは、このうちの浮線文土器群について述べることにする。

一津遺跡の浮線文土器群は、ＡＩ区の上層を中心に、まとまりをもって検出された。いわゆる粗大な工字文を特徴とする佐野Ⅱ式、あるいはそれ以前の土器群とは、地点、層位において異なる状況を示していたことは、すでにⅢ章１で述べられたとおりである。

さて、浮線文土器群といっても、この中には数階梯の変遷がとらえられる。しかし、層位的には、すべて上層出土として一括され、これら浮線文土器群内における層位的な細別は、一部を除いて不可能である。また、各グリッド出土土器すべてに目をとおし、類別化する作業は終了していないため、新古の相を把握するための地点別の傾向分析は後日を期したい。よってここでは、浮線文土器群全体をまとめて器種ごとに分類し、その中を細別し、他の遺跡の出土資料と比較して、編年の見通しを述べるにとどめたい。

今回報告する土器は、出土土器全体のごく一部である。この全体像の報告や、定量分析に関しても、後日を期したい。

器種別分類に先立ち、浮線網状文の平面形態分類の大枠を、以下に示しておく。（図97）

分類試案

１．鉢（８・18・72〜74・100）：く字形の口縁をもつ鉢。屈曲部から上の口辺部のたち上がりが長い。

Ａ１：肩にレンズ状付帯文を有する鉢。付帯文の下には、１〜数状の平行沈線文がめぐる。大形のａ（73〜74）と小形のｂ（８・72）がある。

Ａ２：口縁と肩に１〜２条の平行沈線文を施した鉢（100）。口縁内面にも沈線がめぐる。

Ａ３：無文の鉢（18）。

２．鉢Ｂ（９・66〜71・75）：口縁がく字形に屈曲したり、丸みをもって内彎する鉢。口肩間には基本的に鉢Ａのような幅の広い無文帯はもたず、凹線、もしくは１条の浮線を有するにとどまる。

Ｂ１（68・70・71・75）：屈曲部にレンズ状付帯をもち、その下に数条の平行沈線文を施した鉢。71・75のレンズ状付帯文は、レンズの上の線は平らで、下の線が垂れ下るようになるなど、すでに鉢Ａとは異なった変化が見られる。口縁内面に沈線文がめぐる。75は鉢Ｄに近い形態である。

Ｂ２（９・66・67・69）：屈曲部にレンズ状付帯文をもち、その下に浮線網状文を有する鉢。網状文にはＢ１タイプが認められる。浮線網状文は結節部分の抉りが固く、しっかりしている。口縁内面に沈線文のあるものとないものがある。

Ｂ３（106）：体部に浮線文と突起をもった鉢。

Ｂ４（14・76・77）：口縁に５条の平行沈線文をめぐらし、上から２本目に貼コブ文、もしくは双粒の貼コブ文を施し、その間をレンズ状に仕上げた鉢。14・76・77ではそれぞれ器形、口縁内面の形態が異なる。口縁内面に沈線文のあるものとないものがある。

Ｂ５（11・62〜64）：肩部以下に浮線網状文を施した鉢。網状文にはＢ２、Ｂ３タイプが認められる。11・63は肩に張りがなく、丸みをおびた形態であり、さらにこの器形のなかでも細別が考えられる。口縁内面に沈線文をもたないものもある。

Ｂ６（87）：Ｂ５―63と同じく丸みをもった体部形態の鉢。口外帯をもち、体上半にＣ１タイプの網状文を施している。口縁内面に沈線はなく、稜線をもつ特徴がある。

Ｂ７（99・101）：口肩間に沈線文のみが施された鉢。

3．鉢Ｃ（102・104）：胴部は丸く、内彎する口縁をもつ鉢。口縁端はやや外反する。口肩間にやや幅の広い無文帯をもつ。

Ｃ１（102）：肩にレンズ状付帯文を有する鉢。口外帯にもレンズ状付帯文をもつ。口肩間に刻目突帯文をめぐらす。

Ｃ２（104）：沈線文をもつ鉢。口縁端部は丸い。胴部に数条の平行沈線文をもつ。

4．鉢Ｄ（15・84・85・103）：口辺が丸みをもって直立ないし内彎する鉢。口肩間に外彎する無文帯をもつ。

Ｄ１（84・85）：口外帯をもたず、体部に浮線網状文を施した鉢。網状文はＡ１、Ｂ３タイプが認められる。84の口縁内面には沈線文がめぐる。

Ｄ２（15・103）：口外帯をもち、体部にＣ２タイプの浮線網状文を施した鉢。文様帯を区画する上下の線と網状文の接点には、特徴的なボタン状の浮文を加える。口縁内面に沈線文を決してもたない。

5．鉢Ｅ（１〜４・10・12・13・16・17・53〜61・79〜83・86・88〜92・94・97・98）：単純な口縁の鉢。直線的に外反するもの、やや内彎ぎみのもの、浅いもの、深いものなど、数種の別がある。

Ｅ１（61）：大形の鉢。幅の広い口縁部文様帯をもつ。そこから派生した２個一対の突起を口縁端に加える。体部文様帯には工字文が展開する。口縁内面には彫刻的な三叉状の抉りを伴う沈線文がめぐる。

Ｅ２（79・80・83）：レンズ状付帯文を口外帯にもつ鉢。体部には１〜数状の平行沈線文を施す。

Ｅ３（60）：体部文様帯の上（おそらく下も）に列点文帯をもち、体部文様帯にＡ１タイプの浮線網状文を施した鉢。口縁内面に沈線文をもつ。

Ｅ４（59）：口外帯をもつ鉢。体部文様帯にはＡ２タイプの浮線網状文を施す。口縁内面に沈線文をもつ。　Ｅ５（10・12・54〜58）：体部文様帯にＡ２、Ｂ２、Ｂ３、Ｂ４タイプの浮線網状文を施した鉢。口縁内面に沈線文をもたないものもある。

Ｅ６（13・16・86）：退化した口外帯をもつ鉢。体部文様帯にＣ２タイプの浮線網状文を施す。口縁端部は内そぎで、内面に稜をもつ。内面に沈線文は決して施さない。

Ｅ７（１〜４・17・81・82・88〜92・94・97・98）：平行沈線文のみを施した鉢。１〜３条の少条のもの、４条以上の多条のものがある。口縁内面に沈線をもたないものもある。また、３のように沈線間を強調することにより、突帯状に仕上げたものがある。この技法を用いたものは、壺、甕にも認められる。

６．鉢Ｆ（109）：船の形をした鉢。体部にはＢ２タイプの浮線網状文が施される。

７．壺Ａ（110〜112）：口縁がわずかに内反、ないし外反する。

Ａ１（111）：レンズ状付帯文の口外帯をもつ。その下には低い突帯がめぐる。口縁内面に沈線文が施される。

Ａ２（110・112）：口縁に低い突帯がめぐる。67は口縁内面に沈線文をもつ。
117〜120は壺の肩部破片である。

８．半精製甕Ａ（105・113・123・130・139）：頸胴界に屈曲をもつ深鉢を、便宜的に甕として呼び分けた。鉢類と同じく、文様施文、調整などが比較的ていねいなものを半精製甕として、粗製甕と区別した。頸胴界に文様をもつものを一般的とする。甕Ａは波状口縁の甕。

Ａ１（105・113・139）：頸胴界に数条の平行沈線文をもつ。113は口縁部にも２条の平行沈線文がめぐる。口縁内面に、三叉状の抉りをもつ沈線や突帯文を施す。

Ａ２（130）：Ａ１の口縁部と肩部に列点文を加える。口縁内面に三叉状の抉りをもつ沈線文をめぐらす。大形の甕。

Ａ３（123）：頸胴界にレンズ状付帯文をもつ。

９．半精製甕Ｂ（32・119：122・126・127）：平口縁の甕。口縁は直立ないし、やや外反する。

Ｂ１（32・122・126）：頸胴界にレンズ状付帯文をもつ。口外帯をもつものもある。

Ｂ２（127）：頸胴界にレンズ状付帯文をもつ。体部全面に地文として撚糸文を施し、頸部、胴部に直線や曲線で文様を描く。

Ｂ３（119）：肩部にＢ３タイプの浮線網状文を施す。

10.半精製甕Ｃ（49・124・128）：平口縁の甕。口縁は内屈する。

Ｃ１（124）：頸胴界にレンズ状付帯文をもつ。口縁に数条の平行沈線文を施す。

Ｃ２（49・128）：頸胴界にレンズ状付帯文をもつ。口縁に数条の平行沈線文を施す。口縁部と胴部に撚糸文を施し、胴部に矢羽根状沈線文をめぐらせる。

11. 粗製甕Ａ（20・22〜29・31・34〜36・39・43〜45・116・134・137・147・151・152・156）：口縁最大径が、胴部最大径と同じか、それを上回るもの。

Ａ１（20・22・23〜25・29・39・116・134・147・151・157）：口縁に１条の沈線をめぐらしたもの22・23・39・116・152の、太い凹線をめぐらした一群のように、この中にも数グループの存在が指摘できる。

Ａ２（43〜45）：口縁の内外に突帯をめぐらしたもの。波状口縁のものもある。

Ａ３（137・156）：口縁に低い突帯をめぐらしたもの。口縁内面に沈線文がめぐる。

Ａ４（26〜28）：口縁に２条以上の沈線文をめぐらしたもの。口縁内面に沈線文をもつ。28は沈線間を突帯状に仕上げている。

Ａ５（31・34〜36）：口縁に数条の沈線文をもつ。沈線間に生じた突帯の先端は尖る。退化した口外帯をもつ。口縁内面に沈線文をもたない。

12. 粗製甕B（30・51・114・115・132・133・135・140・143・144・159）：口縁最大径が胴部最大径を下回るもの。

B 1（114・115・143）：口縁に1条の沈線文をめぐらす。

B 2（140・144）：口縁に低い突帯をめぐらす。口縁内面に沈線文を施す。

B 3（30・51・132・133・135）：口縁に2条以上の沈線文をめぐらす。肩部に平行沈線文による文様帯をもつものもある。

B 4（159）：退化した口外帯をもつもの。

13. 粗製甕C（141）：口辺が著しく内傾した甕。

125・129・131・138・160は、甕形土器の胴部である。撚糸文、細密条痕を地文にもつもの、無文のものがある。

14. 深鉢A（157）：体部に屈曲をもたない深い鉢を深鉢とした。Aは口縁端部に2個一対の突起をもつ外反する口縁の深鉢。口縁部に2条の沈線を、口縁内面に1条の沈線を施す。

15. 深鉢B（19・21・37・38・50・95・145・146・148～150・153～155・158・161）：平口縁の深鉢。口縁は外反する。

B 1（19・21・37・38・95・145・146・148～150・153～155）：口縁に1条の沈線文をめぐらす。内面に沈線文をもつものともたないものがある。体部の調整は、ケズリもしくはナデによる。

B 2（161）：口縁内外に沈線文をめぐらす。体部に二枚貝腹縁による条痕文を施す。

B 3（158）：口縁内外に沈線文をめぐらす。体部に縦方向の細密条痕を施す。

B 4（50）：口縁に数条の沈線文を施す。体部に細密条痕を施す。退化した口外帯をもつ。口縁端部は内そぎで、内側に稜線をもつ。口縁内面に沈線をもたない。

16. 深鉢C（40・47・48・142）：平口縁の深鉢。口縁は内彎する。

C 1（142）：口縁に1条の沈線文をもつ。

C 2（40・47・48）：無文の深鉢。外面に擦痕のついたものもある。

浮線文土器群の分期と一津遺跡の土器群

筆者はかつて、浮線文土器群の細別について述べた際に、松本盆地という限られた地域における、松本市女鳥羽川遺跡、穂高町離山遺跡、大町市トチガ原遺跡の3遺跡の浮線網状文土器群、そのなかでもとくに鉢類に施される浮線文、浮線網状文に、それぞれ相違のあることを指摘した。女鳥羽川遺跡には浮線網状文は発達しておらず、離山遺跡にはB型、トチガ遺跡にはC型の浮線網状文（前回分類したA型とB型）が、それぞれ卓越していることを時期差としてとらえたのである。今回、一津遺跡の土器の整理をおこなった際に、離山遺跡、トチガ原遺跡の出土土器についても瞥見する機会がもてた。瞥見であるため確言はさけたいが、それぞれの遺跡の出土土器全体の様相に違いが認められた。とくに浮線網状文の意匠は、それぞれのタイプが純粋性をもって混じりあうことなく存在しており、この二者が時期差である可能性のつよいことを再確認した。女鳥羽川遺跡の資料については実現していないが、報告書の挿図によるかぎり、離山遺跡との間にはレンズ状付帯文の有無と浮線網状文の発達のしかたに相違があり、これも時期差であることは確かだろう。

そこで便宜的に、女鳥羽川遺跡の段階を浮線文土器群の第１段階、離山遺跡を第２段階、トチガ原遺跡を第３段階として分期しておく。一津遺跡の浮線文土器群は、多量の第１、２段階とわずかな第３段階のものからなる。

第１段階

鉢Ａ１ａは、女鳥羽川遺跡では、退化したものが一片見られるだけであり、それもｂに近いものである。このような在り方からすれば、鉢Ａ１ａは鉢ＢやＣとともに第１段階以前に位置づけられる可能性も含めて分析する必要があろう。鉢Ｂ、Ｃは五貫森式との関連性がつよいものである。鉢Ａ１ｂはａが小形化したり、口肩間が短くなったもので、第１段階に位置づけられる可能性がたかい。

鉢Ｂ１からＢ２にかけて、浮線網状文の出現過程の一端を示す資料が認められる。Ｂ１ではレンズ状付帯文の下に、鉢Ａ１と同じく数状の沈線文しかもたないが、Ｂ２ではそこに浮線網状文が展開している。そのモチーフはＢ１タイプであり、また２本の隆線を縦のスリットで分断して、工字文状に仕上げたものである。ともに女鳥羽川遺跡のなかにもわずかに認められる。この工字文とスリットや浮線網状文は直線的でかたい調子のものであり、鉢Ｂ５に施されたＢ３タイプの流麗なものとは異なり、古相を示す。

鉢Ｂ３は新潟県方面に類例があり、それらと比較して、第１段階に位置づけた。

鉢Ｂ７は沈線文を施しただけのものである。101は五貫森式の影響を受けたものだろうが、とくに口縁内面の形態は在来の鉢Ａ１ｂにちかい。

鉢Ｃ１は鉢Ａ１ａと同じ時期のものであろう。Ｃ２は女鳥羽川遺跡に類例があり、第１段階である。

鉢Ｅ１は大洞Ａ式の古段階のもの。Ｅ３は列点文に佐野Ⅱ式からの系譜がたどれるものであり、浮線網状文もＡ１タイプで古い。

鉢Ｆは第１段階、もしくは第２段階のものである。

壺Ａ１もその文様モチーフから第１段階に位置づけられよう。また、Ａ２の110は五貫森式の影響を強く受けた壺、もしくはそのものである。118の肩部破片も、それと関係をもつものである。

半精製甕Ａ１、Ａ２は第１段階以前の可能性がある。Ａ３、Ｂ１は鉢Ａ１ａと同じ時期のものである。Ｂ２の胴部の重楕円文は大洞Ｃ２式終末の、雲形文が変化したものの流れをくむもので、第１段階に位置づけられる。Ｃ１、Ｃ２は１もしくは第２段階。

粗製甕は、Ａ１～Ａ４は女鳥羽川遺跡の主体的存在であり、Ｂ１、Ｂ２とともに第１段階からのものである。とくにＡ３やＢ２は五貫森式の影響がつよいものと考えられる。

深鉢Ａ１は第１段階、もしくはそれ以前のものである。Ｂ１は女鳥羽川遺跡で主体をしめる一群である。Ｂ２は二枚貝腹縁による条痕文が施されており、五貫森式、あるいは北陸の土器に系譜の求められるものだろう。

第２段階

鉢Ｂ４のうちの76は、大洞Ａ式新段階の影響が強いものであるが、貼りコブが等間隔であったり、沈線が２条多く、すでに東北地方のそれから逸脱している。77は形態もＢ５のそれと同じものである。

鉢Ｂ５は第２段階を代表する土器である。Ｂ３タイプの特徴的な浮線網状文が交互多段に配される。

鉢Ｄ１は、第１段階の鉢Ａ１ｂと第３段階の鉢Ｄ２との間をつなぐ可能性をもつ器種と思われる。30はまだ口縁内面に沈線を施している。

鉢Ｅ４、Ｅ５の大部分も第２段階に特徴的な鉢である。このなかにも、文様帯下部に２条、１条の沈線をもつものと、それを欠いたものがあり、施される文様モチーフもそれぞれ異なる。

鉢Ｅ７では４条以上の多条沈線を施したものが増加する。

半精製甕Ｂ３はＢ４タイプの、第２段階後のモチーフを施したものである。

粗製甕Ａ１の沈線の太いものやＡ２、Ａ３は第２段階には少なくなるが、Ａ４は第２段階でも主体をなす。Ｂ３やＣも第２段階で主体をしめるものであろう。

深鉢Ｂ３は細密条痕が施され、第３段階のＢ４につながるものである。内面には沈線があり、第２段階に位置づけられよう。

第３段階

鉢Ｂ６はケズリによる退化した口外帯をもち、口縁の仕上げや体部文様のモチーフに新しい要素がみられるが、体部文様帯の下部に２状の沈線文がめぐるなど、古い要素もあり、第３段階でも前半に位置づけられるものである。

鉢Ｄ２、Ｅ６は典型的な第３段階の鉢。鉢Ｅ５には、この段階の前半に位置づけられる可能性のあるものを含む。

粗製甕Ａ５、Ｂ４、深鉢Ｂ４が第３段階である。

以上が、今回報告した一津遺跡の浮線文土器の分期である。第３段階の土器はわずかに含まれる程度であり、浮線網状文土器の細別に格好の材料を提供したといえよう。

第１段階は、大洞Ａ式古段階、鳥屋１式、五貫森式のある部分と平行関係をもつものであろう。一津遺跡では地点を違えて佐野Ⅱ式も大量に検出されており、この型式との継続関係の検討も大きな課題の一つである。その際、下野式との関係が問題となろう。北陸地方ではレンズ状付帯文をもつ鉢が豊富で、体部文様帯の磨消縄文である雲形文が退化したり、整理され、平行線化したり、工字文に変化していく過程がよくとらえられる。しかし、当地方ではこの段階の鉢は乏しい。一津遺跡でも状況はあまり変わらないとすれば、この段階をうめる資料を佐野Ⅱ式に求めねばならないのか、あるいは別の考え方が成立するのか、検討する必要があろう。

レンズ状付帯文をもちながらも浮線網状文が施された鉢がまとまって検出された意義は大きい。浮線網状文の成立過程の一端を解明する可能性をもつものだからである。

第２段階は、大洞Ａ式新段階、鳥屋２ａ式、馬見塚式に平行する段階である。浮線網状文が多様に展開する時期であり、一津遺跡でも鉢形土器を中心に大量に資料が得られた。浮線網状文の系統と変化については、今後の整理作業を経て明らかにしていきたい。また、とくに半精製甕、粗製甕や深鉢などに、第１段階と第２段階の識別が困難なものがあった。これらの型式学的な弁別についても今後の課題としたい。

外来系の土器も各種含まれている。大洞Ａ式、五貫森式などであり、一津遺跡の土器群の系統性の理解、広域編年の整備に資するものであろう。また、一津遺跡は長野県でも北部に位置しており、北陸や南東北地方の土器との関連性が強い。さらに、当然のことながら、中信の茅野市御射宮司遺跡などの土器と強い結びつきがうかがえるが、その間には地方色の違いもまた認められる。こうしたさまざまな地域とのかかわりのなかで、一津遺跡を理解する必要があろう。

一津遺跡の終末近く、浮線文土器群の第２段階の時期の土器に稲籾の圧痕が認められた。これはすなわち馬見塚式、口酒井穴森式、沢田式の時期のものである。この事実は、この地方もまた、中国、近畿地方の突帯文段階の稲作の問題と無関係ではありえないことをものがたる。一津遺跡の浮線文土器群にあらわれた各地域との交流の背後に、こうした問題を見据えて、今後の資料整理・検討を進めたい。

第４節　一津遺跡出土の骨類について

信州大学医学部第２解剖学教室　　西　沢　寿　晃

Ⅰ　はじめに

本遺跡出土の骨類は、層位的には下層の縄文中期後半から、上層の縄文晩期後半に細分される各層に包含されるものとされる。これらの骨はすべて火焼により極度に崩壊した微細な骨片ないし骨粉状のもので、焼骨特有の無機質化した堅緻な骨質の故に、腐蝕・浴解から免れ残留したものである。そのため、骨の形態は殆ど残らず、人・獣骨の別や、骨格の部位の多くは不明であるが、わずかな形質の特徴からすべて獣骨であると見なせるものであり、所々の骨の部位はすべてシカに限定される。しかし、長大な管状骨の骨片などは、イノシシ等を含む他の大型動物の混在の可能性もあり、また中・小型動物の骨の存在も明確に指摘できるが、種別の決定までには至らない。

広範に互る多数のグリットからの検出状況としては、殆どが微小細片を小量に残すものであり、一括してやや多量で、大形の破片を僅かに含むものが小数例あり、量的に多寡がみられる。しかし、このような傾向も、捕獲された動物が、直接遺構に関わる場所での解体処理や、放棄された結果とは見做し難い。骨片にみられる一様な崩壊の程度や、磨滅の痕跡などからも、風化作用に加わる移動・散乱の状況を現わすものであろう。

Ⅱ　骨の部位と内容

骨片の中で、骨の部位が判明したものについて記載する。なお、以下はすべてシカの骨で、他動物と指摘できるものは皆無である。

頭蓋骨：脳室を形成する板状骨片が、10数ケ所のグリットから検出されている。いずれも１×１cm、１×２cm、厚さ２mm程度の小片であり、シカ、イノシシ等の大型動物のものと考えられるが、詳細は不明である。歯はエナメル質の微細片がわずかに認められる程度である。

角：シカの角は骨表の凸凹面や髄腔の特徴的な形状から、かなりの小片でも特定でき、また保存にも耐える。各グリットでの検出例は最も多い。しかし、残存するものでは、角坐の部分や、骨幹では長さ６cmの縦割された断片がもっとも大きなもので、先端部分も多いが、概ね小片である。人為的な切痕等は不明である。

肋骨：かなりの断片が残存するが、いずれも体部の細片で、大きさからシカまたはイノシシ等の大型動物のものと、わずかながら小型動物の混在も認められる。

脊椎骨：すべて椎体の破片や、上・下関節の一部のみで、８個程が残存する。

肩甲骨：関節窩の半欠したものや、その小部分で６個程が認められる。

上腕骨：滑車関節（右）がほぼ完形を保つ。他に同部分が複数、骨頭の一部なども残存する。

尺骨・橈骨：尺骨切痕部分が殆ど同程度で５例程残存するが、左右は不明である。橈骨の近・遠位端の一部が約４例、その他、前・後肢の骨幹とみられる破片はかなり多量であろうが、すべて捻転、断裂状態の細片であり、他種の混在も推測される。

寛骨：寛骨臼の破片が２・３例、シカと見なされるが、他の大型動物の可能性もある。

大腿骨：骨頭と遠位関節の一部が数例。

脛骨：近・遠位端の一部のみであるが、大腿骨と共に管状骨片として残るものも多く、他種の混在も推測される。

距骨：やや原形を保つものなど２例が認められる。

中手（足）骨：近・遠位端や骨幹部分が原形を止める破片はないが、シカ特有の形態から比較的見分け易く、検出例も多い。

指骨：基節骨、中節骨、末節骨の特に関節部分が多く残存する。

その他、手根骨、足根骨の関節の一部を残すものなどが複数認められる。

小動物骨：肋骨片や指骨の一部などと、小さな長骨片の混入がみられるが、動物種はすべて不明である。

Ⅲ　各グリットの出土状態

以下の各グリットから骨が出土している。骨粉状で微量に検出されたものから、やや一括して量的に多いグリットまで、多少の相違が現われている。

B—27・30　C—27・30　D—26・28〜30　E—17・26〜28　F—26・27　I—20〜23　J—17〜23　K—14・15・17〜23　L—13・14・16〜21　M—7・14〜20　N—11〜18　O—7〜17　P—6〜16　Q—6・7・9〜14　R—5〜12　T—5〜9・埋がめ、5トレンチ—1・2区　石棺—2〜14。

これら各グリットの中で、部位の判明する骨片を含み、また比較的出土量の多い地点についての内容を略記する。

D—28・30（上〜中層）　シカの角（やや大形片）や中手（足）骨の関節面の一部などが残るが、他の細片は小量。

I—21（上〜中層下部）　シカ上腕骨（右）滑車関節部分がほぼ原形を留める。中程度の残量。

J—19・20（上〜中層下部）　シカの角の先端を含む断片、中手（足）骨遠位端の破片など。

K—15（中層）　シカの角2片。17・18（中層）肋骨片や大・小の管状骨片など比較的量が多い。19（中層）シカの指骨2片、板状骨片など。20（上〜中層下部）脊椎骨、寛骨臼、指骨などが含まれている。

L—14（中層）　シカの未節骨がほぼ完存。17（中層）、18（上〜中層下部）、20（上〜中層）それぞれかなり多量である。これらの中にはシカの角を初め、概ね全身に亙る骨格の小部分が含まれている。やや大形の長骨片も残る。

M—16（中層）　シカの角（長さ5cm）、指骨や管状骨片。17（中層）一括してもっとも多量であるが、部位の判明するものは少ない。ツノの断片、尺骨切痕、橈骨の近位端など。18（上〜中層下部）シカの肩甲骨の関節臼や橈骨の近位端の一部などである。

N—16（上層）　シカと小動物の指骨が認められ、大腿骨々頭？も存在する。17（上〜中層）ツノの断片を含む中程度の量である。

O—13、14、15（上・上〜中層）それぞれ中程度の量で、ツノの断片、シカの中手骨や基節骨などが認められる。

P—13、14、15（上層）　それぞれ細片がやや多い。ツノが4・5片一括されるもの、肩甲骨、尺骨、脛骨、指骨などの小部分が含まれている。

Q—10（下層）　肋骨片や基節骨の一部、小動物の骨片が多少認められる。12（上層集石面）やや多量の骨片中にシカ大腿骨々頭や遠位端、尺骨切痕、指骨の関節部分（3点）などが含まれている。

配石墓—7　角の断片、上腕骨々頭、脛骨遠位端などがやや大形片として残る。特に人骨の存在は察知し得ない。

なお、各グリットとも層位別での出土状態に格別な傾向は指摘できない。

Ⅳ　ま　と　め

多数のグリットから検出された骨類はすべて焼骨で、極めて細かな小片に破砕されている。部位の判明するものは概ねシカであり、他の大型獣の存在は明確に指摘できない。中・小型獣の混在は推定できる。これらの骨片は食料残滓として放棄された通例の焼骨の集積的な残存状態に比して、より崩壊の進んだ一様な骨粉状で、分布も希薄である。各期の遺構（生活址）に関わりながら、長年の地勢の変化に伴なう散乱、移動の結果と推考されるものである。

第Ⅳ章　結　　語

一津遺跡は木崎湖の湖棚に近い位置にあり、すぐ傍を湖に注ぐ一津沢が流れ下っていて、湿地と言ってよいほどのところにあるだけに、発掘調査は湧き出る水や大小の礫との格闘でもあった。

大町市大字平　海の口の一津集落を覆うように縄文遺跡のあることは古くから知られていたが、その大部分が宅地、国道、鉄道線路等になっているために、耕作や小さな工事の折に若干の遺物の出土が見られただけ、もとよりくわしいことも、遺跡の全体像も知られなかった。

このたび圃場整備事業の事前調査が行なわれることになった部分は、広大な遺跡のうち最も湖に寄った西端の部分で、すぐ中心寄りにはJR大糸線が走り、駅のホームや駅舎があるといった場所である。初めの見込みではあまりたいした成果はあるまいということであったが、その反面、中世安曇の支配者仁科氏の出自に関わる、「あべっと」地名に当る所であり、周辺には中世土豪の居館跡らしい地名もあることから、あるいはその裏付けとなる遺構や遺物の出土が見られるのではないか、という期待もないではなかった。しかし発掘調査の結果では、仁科氏関係の遺構遺物はほとんど見ることができなかったが、その代わり縄文早期から平安時代に至る各時代の、多くの新しい知見が得られた。一津遺跡のごく一部分の調査によるものではあるが、その特徴的なことは下記のような点に集約することができるであろう。

その１は縄文時代の墓が何基か検出されたことである。これまでにも墓壙ではないかとみられる土壙は、郡内でもいくつか検出されてはいるものの、墓と確認できるものは見つかっておらず、この遺跡におけるものが初見となった。

その２は縄文後晩期の石棒や土偶などの、信仰や呪術的な遺物が多数出土したことである。これまでも出土した例はこの地方でも少なくはないが、いずれも耕作などで遇然に発見されたものであるため、第一級の資料ではなかった。ここでは多数が集中的に、しかも墓地に近接していることなど、縄文時代の信仰のあり方を考えさせられる。

第３はヒスイの加工場が検出されたことである。ヒスイの玉の完成品の出土は必ずしも珍らしくはなく、また加工途上の未完成品の出土も稀にはあって、ヒスイは日本海沿岸の村の加工場に於て加工され、完成品として内陸部にもたらせられたばかりではなく、原石のまま運んできて、内陸部のどこかの加工場で完成する、そしてその技術をもった人々がいたのではないかという推測はなされていたけれども、その現場が検出されたのは長野県下では初めてではないだろうか。それを証明するのは、一津遺跡では、ヒスイの玉の完成品と未完成品、ヒスイの原石、加工した残りの石屑、工具、研磨用の玉砥石であろう。

その４は、遺跡の東側の端にあたる部分、一津集落の上方で検出された狩猟用の陥し穴である。おそらく穴は複数存在したとみてよいが、検出されたのは１つだけで、その底から出土した土器片によって、縄文早期と知られるのも貴重である。底には中に立ててあった杭の小穴もある。これも大町北安曇地方では初見である。

一津遺跡は発掘面積こそ、さして広いものではなかったが、検出された遺構、出土した遺物の種類と量は、まことに異例な貴重なものであって、この地方の古代史の上に大きな光をあてるものであったといって過言ではない。

末尾ながら大町市教育委員会の文化財係のスタッフの御努力と、発掘に従って下さった皆さん方の御労苦に対して、大きな感謝を捧げるものである。

（団長・篠崎健一郎）

１．遠景
（西より）

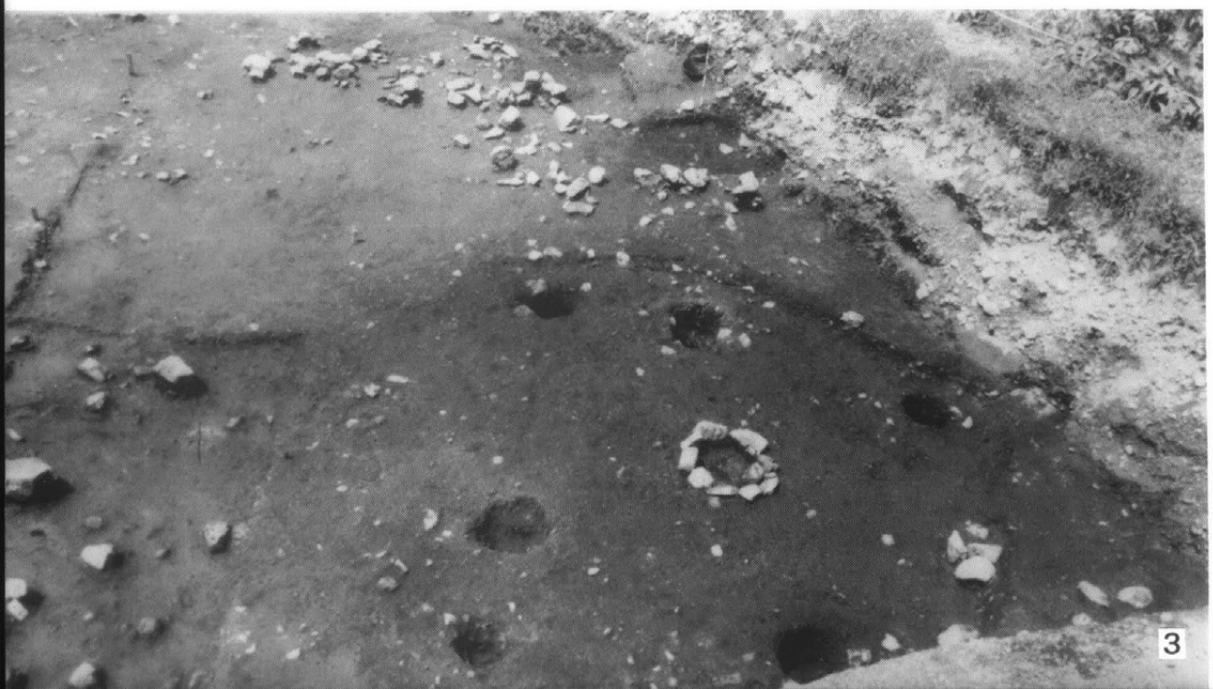
２．Ａ地区遠景
（北より）

３．Ａ地区近景
（西より）

写真 2

1．1号住居跡
検出状況
（南より）

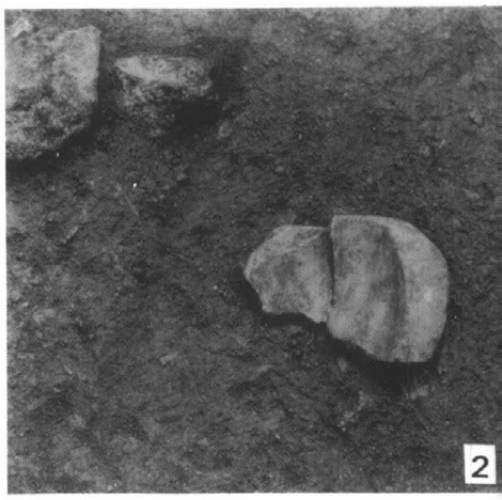
2．1号住居跡
（西より）



3．1号・5号住居跡
（南より）
手前が1号住居跡
奥が5号住居跡

1．1号住居跡炉
（東より）

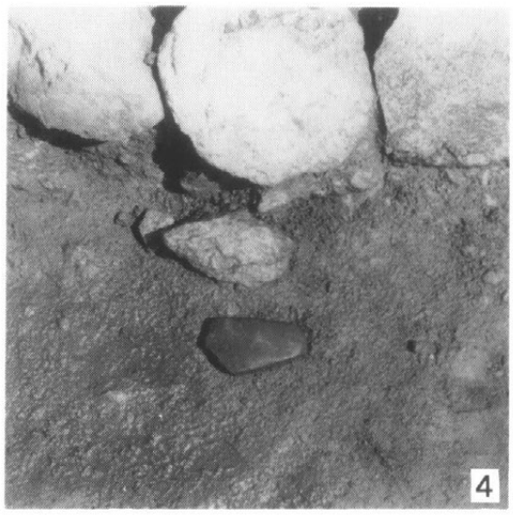
2．1号住居跡床面
出土石斧用砥石



3．2・4号住居跡
検出状況
（南より）
左が2号住居跡
右が4号住居跡

4．2号住居跡
（南より）

写真４



１～４．２号住居跡

１．炉

２．奥壁付近敷石

３・４．磨製石斧出土状況

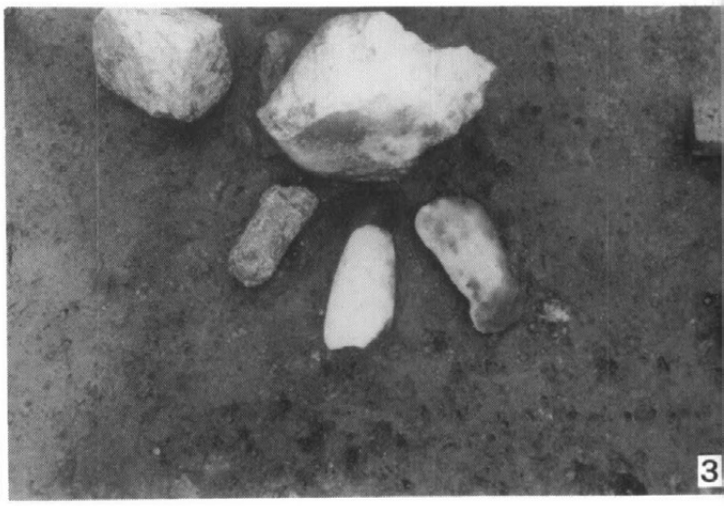
５．４号住居跡（南より）

1．5号住居跡
（南より）

2～4．5号住居跡
出土遺物

2・4．砥石

3．打製石斧・磨製
石斧



5．7号住居跡炉

写真 6

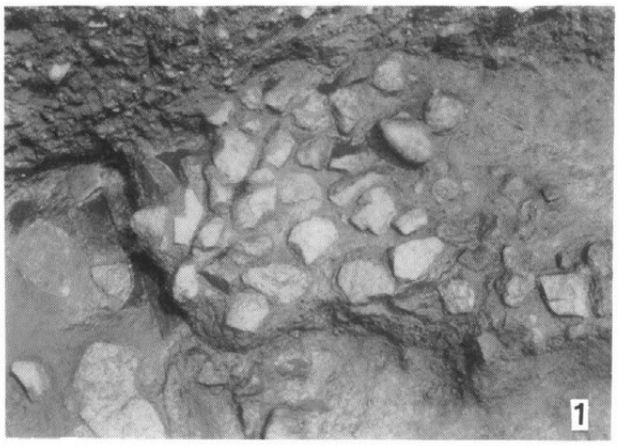
1．6・7号住居跡
（西より）
手前が6号住居跡
奥が7号住居跡

2．7号住居跡（西より）

3．8号住居跡（南より）

1．8号住居跡南壁
上の集石

2．9号住居跡炉

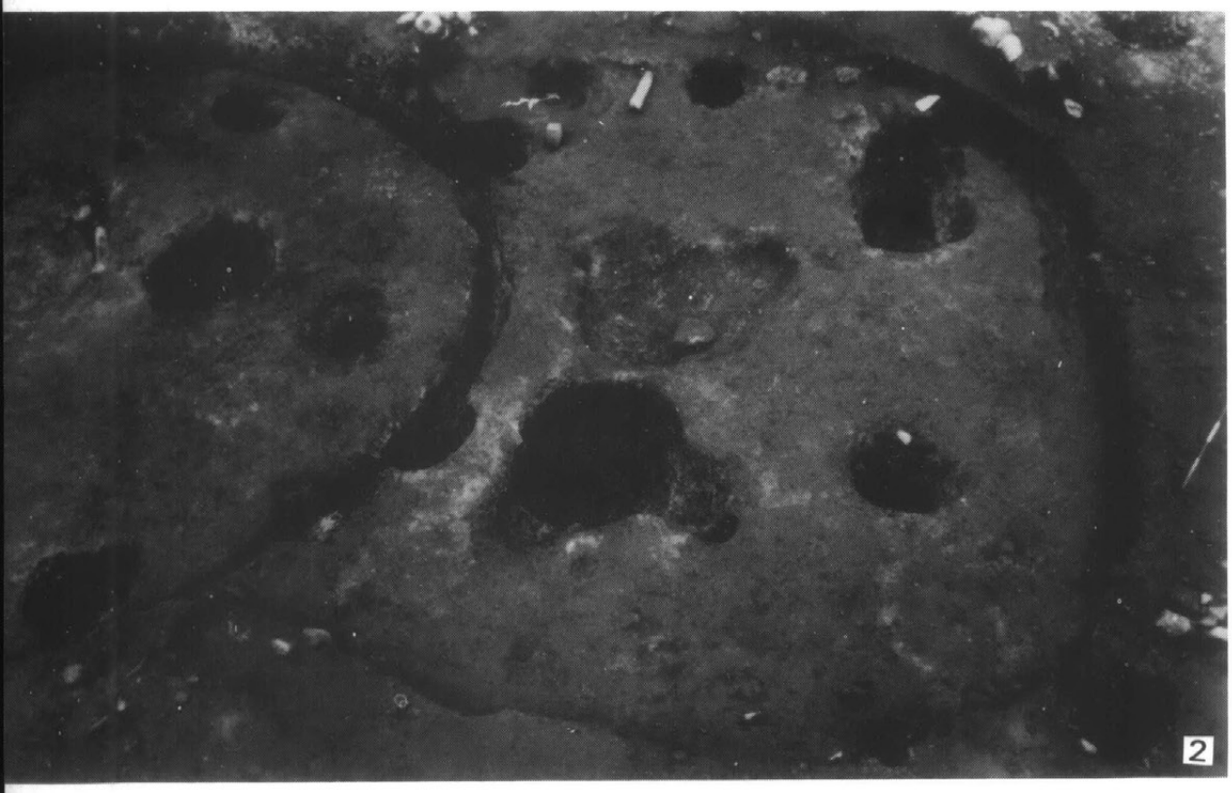


3．9号住居跡（西より）

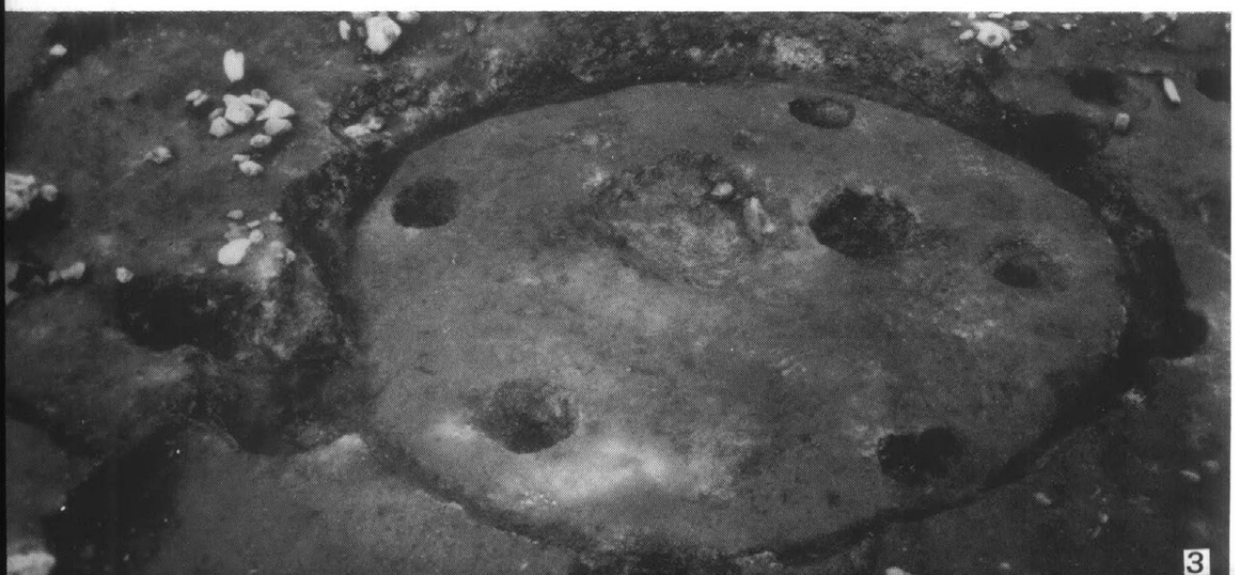
4．9号住居跡（北より）

写真 8

1．10・11・12号住居跡
方形柱列（西より）



2．10号住居跡（西より）



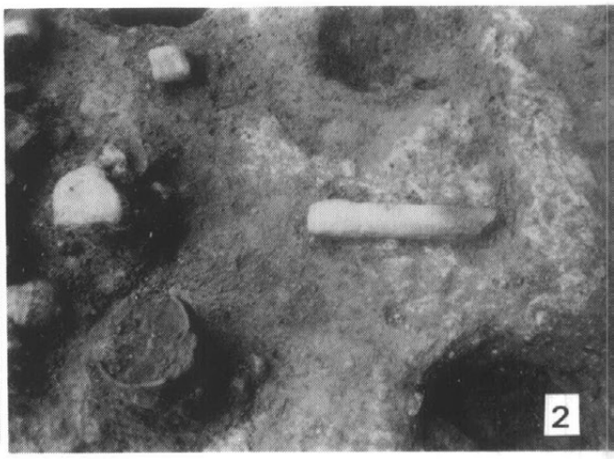
3．11・12号住居跡（西より）

1・2・3．10号住居跡

1．伏甕

2．石柱（右）
伏甕（左下）

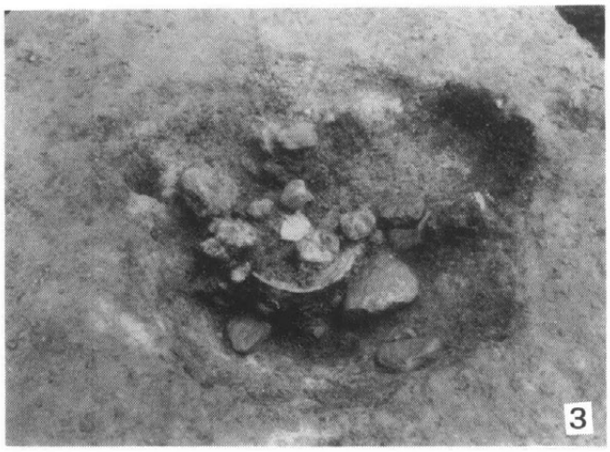
3．炉



4・5．11号住居跡

4．炉

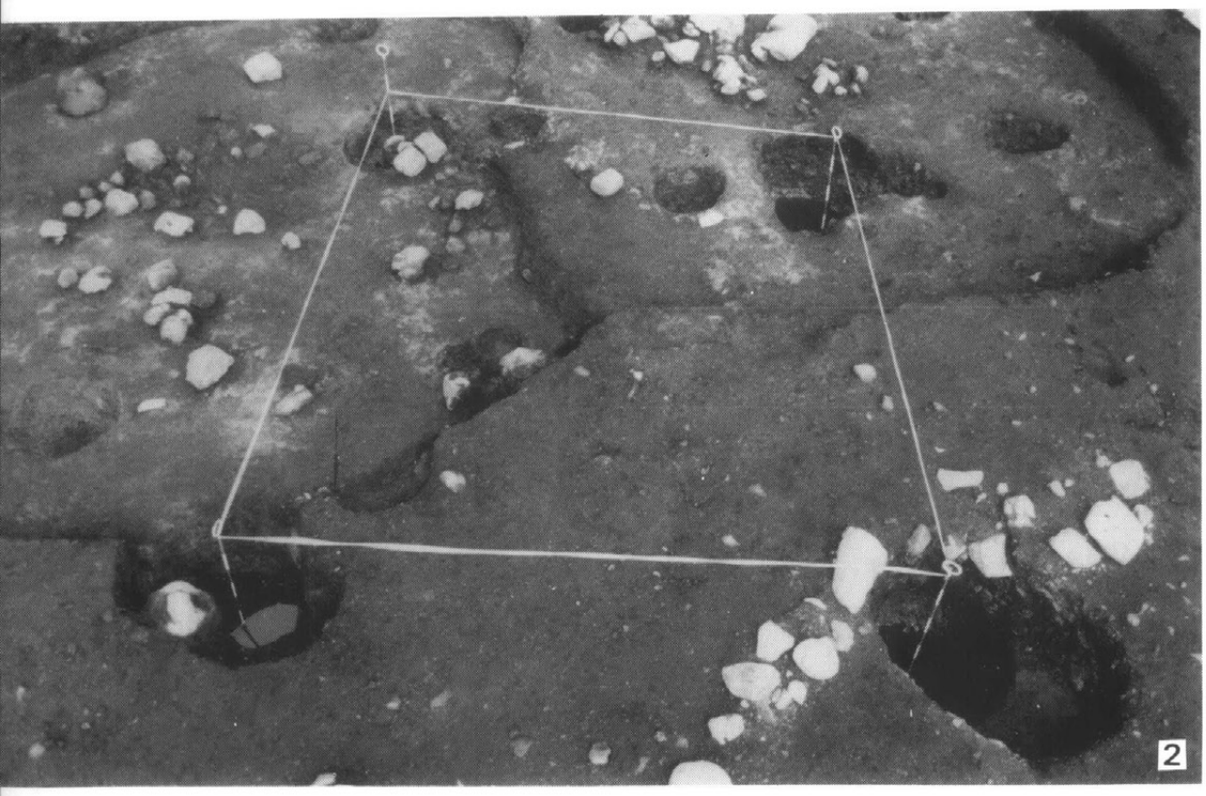
5．埋甕



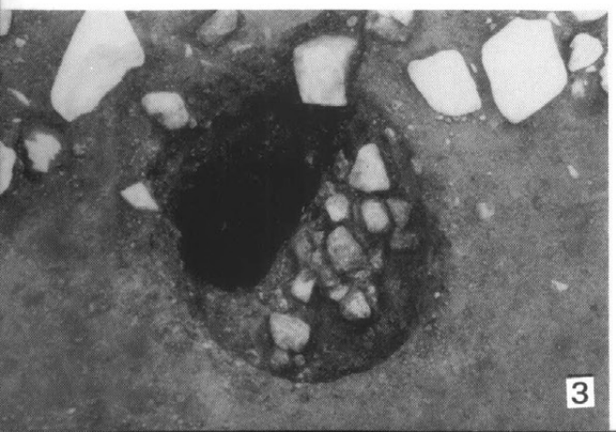
6．12号住居跡炉

7．10・11号住居跡上
の集石（西より）

1．14号住居跡



2．方形柱列（西より）



3・4．方形柱列の土坑

3．土坑　（掘ってある部分が柱痕。礫は柱の詰石）

4．土坑

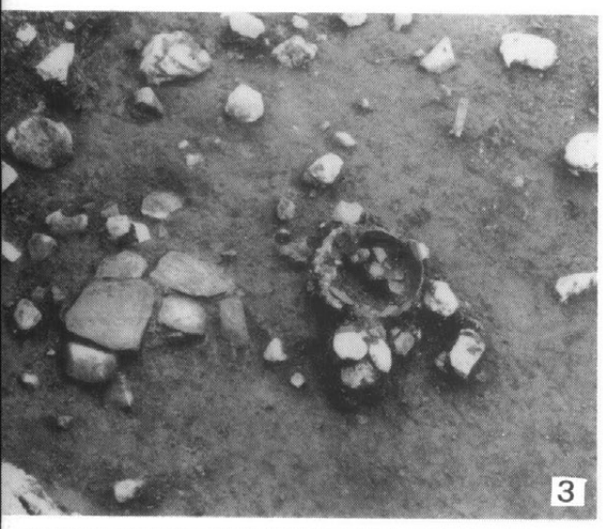
1・2・3．埋甕1

4・5．埋甕2

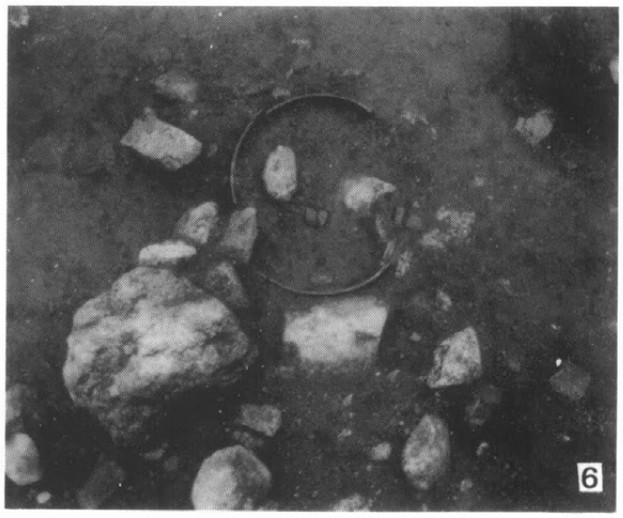
6・7．埋甕3

8．埋甕4

1．埋甕4



2・3．埋甕5



4・5．埋甕6

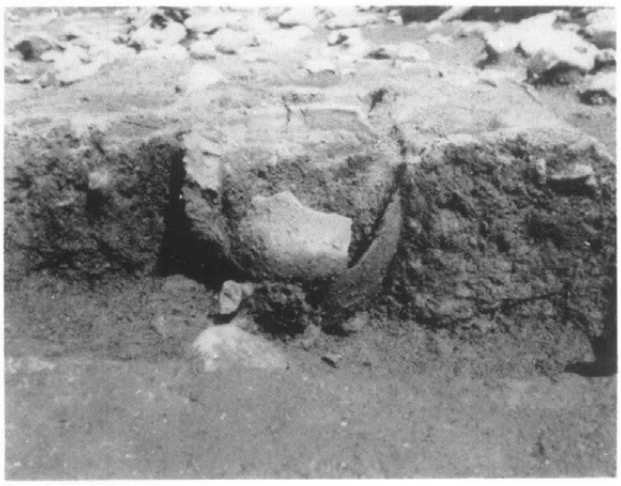
6・7・8．埋甕7

1～8．埋甕8

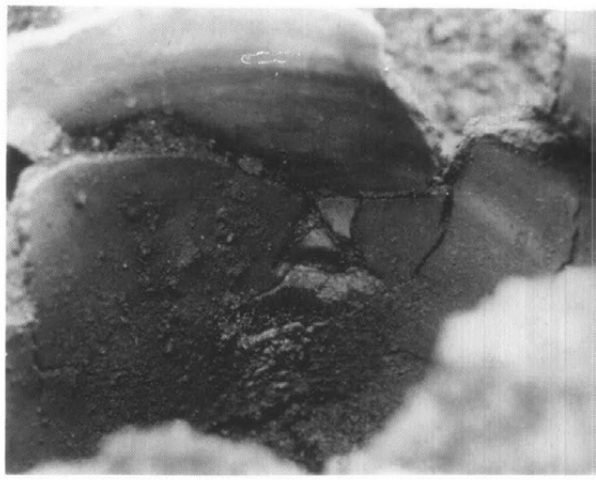
1．上部配石

2．検出状況

3・4．埋設状況
（注口土器の注口部が埋甕胴部に差さった状態）

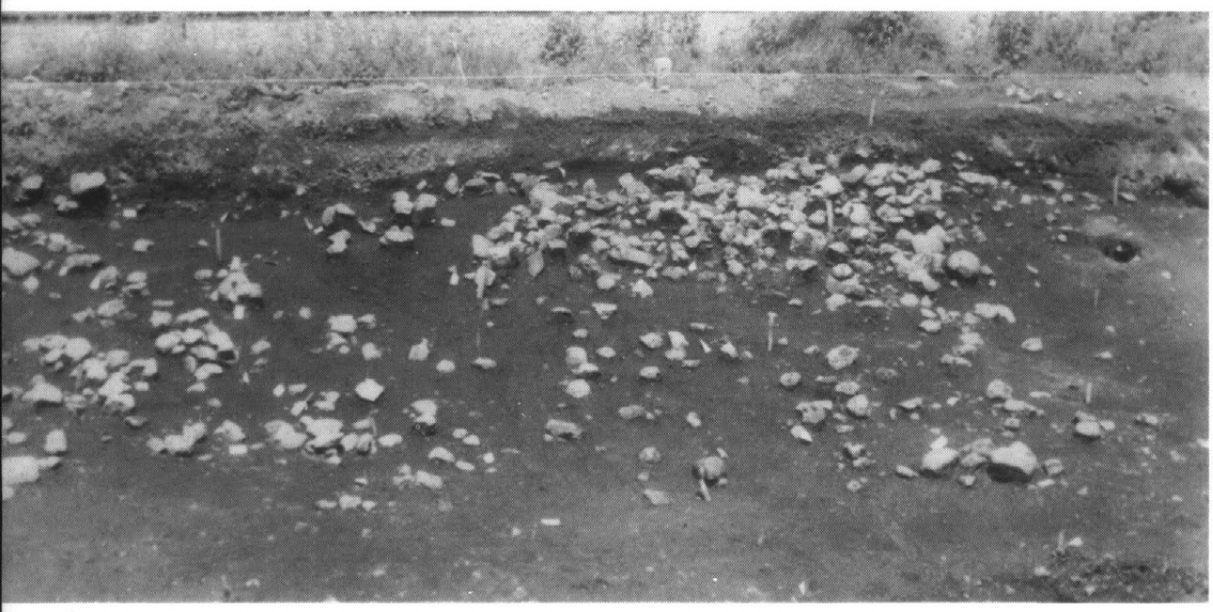


4～6．注口部
検出状況



8．断面

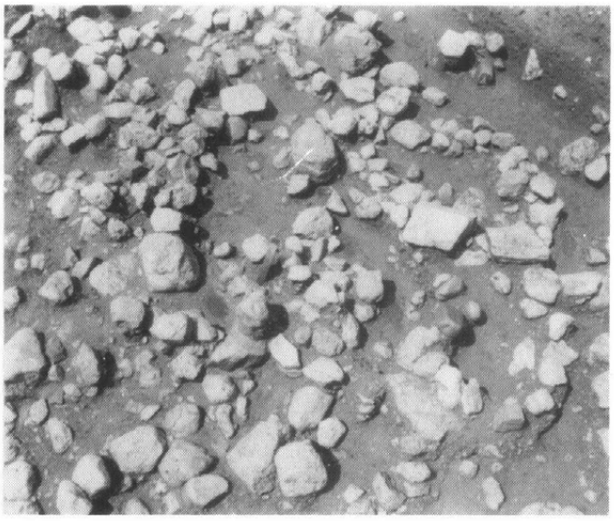
1．A地区Ⅰ区
中央東側上層
集石面（西より）

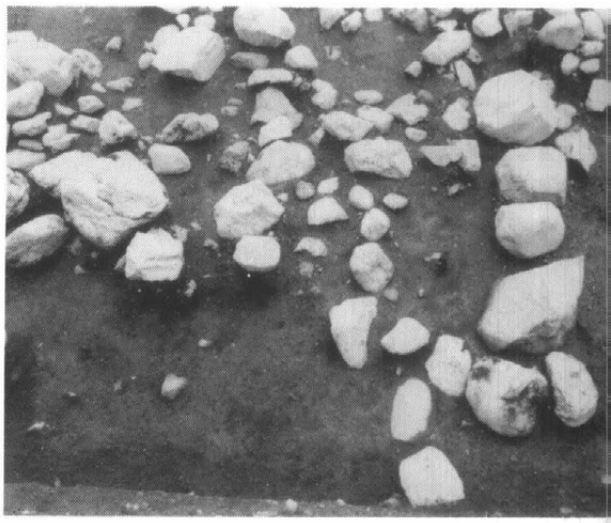


2．A地区Ⅰ区上層
配石墓5～14
配石（西より）

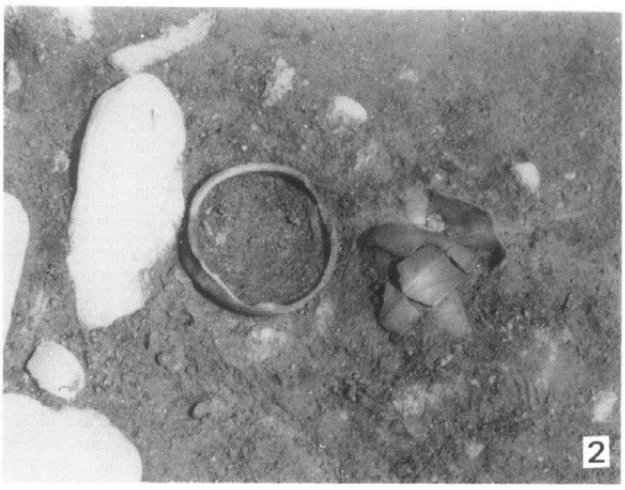
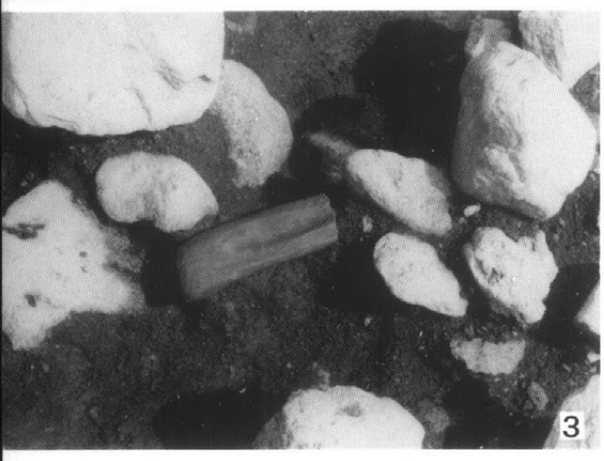
3．A地区Ⅰ区上層
配石墓5～14
配石（東より）

1・2．A地区Ⅰ区
上層配石墓
5～14配石





3・4．A地区Ⅰ区
上層配石墓
5～14下部
土拡
3．（西より）
4．（東より）



1～8．A地区Ⅰ区上層
遺物出土状況